

有明工業高等専門学校紀要

第 2 号

昭和 42 年 3 月

Research Reports
of the
Ariake Technical College

No. 2

March 1967

Published by the Ariake Technical College

Omuta, Japan

目 次

H・Rの指導・経営に関する実践上の問題点	寺本 匡謨	1
新単位“AVON”の提唱（モル概念の明確化と統一）	樋口 大成 佐々木英人	9
Lattice Vibration of Two-Dimensional Triangle Lattice 1.	Tatsuro Nagata	16
換え歯車のための電子計算機のプログラムについて	木村 剛三	21
軟鉄の電気溶接における境界	永田 達郎	25
<i>The pearl</i> の示す正しい意味	井芹 龍成	29
ヒューマニストとしてのコールドウェル	西 誠也	43
鰺 刻・俳書『安楽音』	田中 道雄	86
木山紹宅伝稿 ——太宰府天満宮連歌屋考（上）——	棚町 知弥	112

H・Rの指導・経営に関する実践上の問題点

寺 本 匡 謨

Some Problems of Practising Home Room in Technical College Curriculum

Masaaki Teramoto

In "A Standard of Technical College Curriculum" issued by the Higher Education and Science Bureau of the Education Ministry, Home Room of one hour a week is assigned to the classes of 1st, 2nd and 3rd year as one of the special education activities in general subjects, but its object and contents are not expressed clearly. Professors, however, if they heartily desire to educate students perfectly and to attain the purpose of the college education, should take a serious view of Home Room activity. Therefore, from my experience, I try here to take up and examine some problems that arise when we practise Home Room.

はじめに

工業高等専門学校が、豊かな教養と専門的な技術を身につけた工業に関する有為な中堅技術者を養成することを使命として、誕生して5年になる。その高専の教育課程の標準の一般科目（各学科共通）の、授業科目中に特別教育活動として1、2、3年に毎週1時間の時間が配当されている。又他の各科目には、各々の目標と内容が明示され、広い視野に立った人間教育を行い、社会人として又公民としての基礎的教養と訓練に必要な一般的教養を与えるとしてある。ところが特別教育活動についての目標、内容については全くふれていない。ただ1965年文部省発行の「生徒指導の手びき」中第6章生徒指導と学級担任、ホーム・ルーム担任の教師及び1966年文部省発行「生徒指導の実践上の諸問題とその解明」中Ⅱ学級担任、ホーム・ルーム担任の教師が当面している問題又1961年文部省発行高等学校学習指導要領の一部にそれぞれわずかながら、抽象的に説明してあるにすぎない。折角設けられたH・Rについて本校は勿論各高専はどんなにしてあるのかと考え教務主事と相談した事はたびたびであった。本当にH・Rの経営はまことに大変な仕事であり、困難な事である。併しながら教官が学生の全人教育を目指す限り、よりよい人間的育成を念願する限り、H・Rの経営を等閑視する事は出来ない。特に高専設置の教育目標からしてもH・Rの存在価値が高いのである。以下私の高等学校在職10数年間と、高専在職の経験、

立場から少々両方混同するかも知れないが、H・Rの指導経営に関する実践上の問題点についてふれてみる。

ホーム・ルームの経営には次の3つの分野が考えられる。

- (1) ホーム・ルームの全般的経営
- (2) ホーム・ルームとしての時間（長時、短時）の運営
- (3) ホーム・ルーム内学生の個人的な補導（カウンセリング）。

第1の面は教室の美化整理、出欠や学業成績の問題、いろいろなホームの世話助言、その他もろもろの事務的な注意達示、外形的な仕事とホーム・ルーム学生に対する集団的な指導である。

第2のホーム・ルーム時の運営、指導は、戦後の教育制度の特色といってよい。高校に於ては20年近くの経験によりいろいろの事がなされている。しかし高専に於ては新設のため、又教官自体の編成が高校と異なり、（大学、高校、会社その他よりの出身者）考え方その運営指導の方法や内容に関する実情になると、各人各様で、高専に於けるホーム・ルーム時の運営指導が如何にむづかしいことかを意味するものである。

第3の個人指導も旧教育に見られない特異性である。ホーム・ルーム担任教官は、教科学習の指導校務の遂行、クラブ活動の指導やその他いくつかの指導分野を担当しながら、自分のホーム・ルームの学生については学業、生活指導の全般にわたって面倒を見なけ

ればならない。

(I) H・R運営計画の立て方

1 H・R経営計画立案に関する留意点

- (1) H・Rの経営には、日常不断の凡ゆる時と所を通じて行う面に対する方針と方法並びにH・R時（長時、短時）の運営に関する方針と方法の両分野がある。
- (2) 又H・R内の全人員を集団として取扱う面と、一人一人の個人の補導を行う面との指導方針及び方法を考えねばならない。
- (3) 日常不断の指導方針は担任教師の教育観、人間観、そして人格からにじみ出たものであり、その方法は深く研究されて、情熱と努力と経験によって実践されて行くべきであろう。
- (4) H・R時の運営に関する方針は大きくは学校教育の目標や方針にのっとり、又高専5カ年の中の3カ年を通じて考えられた上に、当該学年に適合するものでなければならない。更に又、そのH・Rの独自性が発揮されるべきものでもあらなければならない。方法としては次のような事項を考慮すべきである。
 - (a) 学生と教官と十分話し合って年間計画をきめる。
 - (b) 毎時の具体的な実践計画を事前に学生と話しあう。
 - (c) 学生が自主的に行えるように考える。
 - (d) 変化をもたせて常に新鮮な興味を感じるようにする。

2 H・R長時の運営計画立案過程に関する私の過去の実践例計画の立案については周到な準備と適正な過程をへて行われねばならない。以下私の過去の例を上げよう。H・R運営委員会は全学年を通ずる一般目標と学年目標を設定する。

(一般目標)

- (イ) 学校管理上に必要な事項（例学生心得の体得、環境整理や美化、教科課程の理解等）
- (ロ) すぐれた社会人として育成するために必要な事項（例校内エチケット、交通道德、就職、会議や討論のしかた等）
- (ハ) 個人補導に必要な事項（悩みの解決、学校生活を楽しませる事等）

(学年目標)

- 1年……学校生活を正しく理解し、本校生としての生活態度の基礎を確立しよう。
- 2年……個人と社会との関連を再認識し、その中における集団生活（学校生活）の意義と

理想と信念に生きよう。

3年……有為な社会人としての出発に十分備えよう。

H・R運営委員会はH・R運営年間計画のサンプル（従前実施されたものや、他校の例参考書による例等を参考としたもの）を作って各H・Rに流す、各H・Rは一般目標、学年目標のワク内で、実践事項及び方法はそれぞれ独自性を発揮するように、年間計画を立案する。各H・Rの年間計画表をH・R運営委員会に提出し、委員会は更にそれ等を集録した一覧表を作って、各H・Rに流し参考の資とする。（以上の措置を4月中に完了）

3 各H・RのH・R長時に関する年間計画のタイプ 前項2の手続きをへて各H・Rはそれぞれ独自の計画を立てるがそれにはいくつかの類型がある。

(イ) 各H・Rの計画立案の方法に関する類型

- (a) 学生と教官が十分相談しながら作ったもの。
此のタイプのものが大多数である。此の場合の学生も代表者（H・R委員）を意味するものとH・R全学生をさすものとの二種類がある。
- (b) 学生が主体で教官が従となったもの。
- (c) 教官が主体で学生が従となったもの。
上の他に学生のみ、或は教官のみによるものが考えられるけれども、之れは数年前までであったが現在は皆無である。

(ロ) 計画の形式に関する類型

- (a) 年間の適時に適当な項目をおり込み、一項目の時間も、適当に多くしたり少くしたりしたもの。
- (b) 毎月（H・R時4回として）の第1週は話し合い、第2週は討議、第3週は芸術鑑賞、第4週はレクリエーションという風に骨組を作って、月毎の具体的内容にかわったものにして行くもの。
- (c) 一時間毎に内容をかえて行くもの。
以上の中で、a、又はaとcの中間的性格のものが大多数である。bは一見機械的のようであるが、実際にはなかなか味のある方法であって、此例の数は少いけれども、運営は大変よく行われている。

(ハ) 計画の内容に関する類型

どのH・Rでも討議。教官の話し（人生観、時事解説、教養、その他）芸術鑑賞。短歌や俳句会。歌唱、スポーツ、ハイキング、フォークダンス等によるレクリエーション読書会とその感想発表。学生の意見発表や反省会。などの各種項目を適宜

に組み合わせて計画されていて、各項目に多少のウェイトは合っても、著しく偏ったものは見うけられない。併し多少のケジメをつけるならばと思う。

(a) 討議や意見発表に重点がおかれたものが約三分の一である。

(b) 次にレクリエーション並びに教官の話しに重点がおかれたものが多い。

以上H・R長時運営計画に関するそれぞれのタイプについて記したが、どのようなものが好ましいかについては一長一短があってなかなか一概にきめにくい。むしろ類型の如何ということよりも運営の実践に対する工夫と努力とが大切な事であって、どんな類型のものにしろH・Rの学生及び担任教官がその実践に意を注ぐならば、それでよいものとなろう。この意味においては各H・Rの自主性を尊重する方が、実践の成果を期する要件ではあるまいか。もっともどのような類型が望ましいかについて、教官相互間で研究し合う事は必要である。

4 H・R短時（毎朝10分間）の運営方法試案毎朝始業前10分間のH・R時は短時間ではあるけれども、之を有効に過すか否かは毎日の事であるから、その結果には大きな差異を生じよう。実施状況を見ると次のタイプに分れる。

(a) 出欠点検、伝達事項、調査等の専ら事務的業務のみに終始するもの。

(b) aのひまひまに担任教官の話し（所感、時事、その他）をするもの。

(c) aのひまひまに学生の意見発表（毎朝1～2人、3分程度）を行うもの。

(d) aのひまひまに生活読本を読み、更に感想を発表し合うもの。

以上の中ではaは殆んどやっているがaとbとの中間的なものが大部分である。之は話の内容をむつかしいものにする、無口な学生は嫌がるので、ごく手近な話題なら何でもよいことにして（例えば「私の昨日のすごし方」とか。「新聞や雑誌を読んで面白かったこと」とか。なるべく体験談にするなどよい。）始めると、案外に成果がある。40人単位のH・Rでも年間を通ずると1人が4～5回話す機会が出来る。之で

(i) 人前で話をするのを嫌がった学生も年度末には馴れる。

(ii) 教官は学生の体験、物の考え方、個性を知ることが出来る。

(iii) 学生相互の心の融和が行われ、ひいてはH・

R長時の討議や意見発表が活発に行われる。

(iv) 更に学生の問題に関連させながら教官自身の意見を随時にさしはさむならば、教官と学生との心の結びつきを高めるのに非常に効果がある。

(II) H・Rにおける討議の指導

討議はホーム・ルーム時だけでなく、学生会活動、クラブ活動や教科学習活動等凡ゆる、機会において行われ、新教育の一つの特色をなすものである。然るにその方法については案外に無関心であり、その指導もおざりにされている。H・Rにおいて討議を正しい方向に活発に行わせるためには、教官として次の事に留意する必要がある。

1 討議方法の研究

(A) 討論会形式

テーマを出来るだけ対立的になるように設定し、予め二派に代表者を所属させて意見を発表させる。

例テーマ「高専生の服装は制服がよい。制服でないがよい。」

制服がよいと主張する側(甲)…3人。

制服でない方がよいと主張する側(乙)…3人。

先ず抽せんにより最初に発言する組をきめて、あとは甲乙交互に意見をのべる。それがすん5分程休み、次に甲、乙より相互に先にのべた反対側の意見に対する駁論、質問などを出して論戦する。最後に審査員（H・Rでは指導教官）が、甲、乙の討論の内容、方法などに関し判定、批判をする。此方法は飽くまで自分の所論を貫くように考え主張する点が大切で、物事を裏と表から深くほり下げて考えるのに役立つ。一寸考えてすぐ結論を下したり、多くの人がそういうからその方に賛成するという附和雷同的傾向を改めるのによい。併しうっかりすると討論のための討論になりたがる点に指導教官の適切なリードの必要がある。又討論の勝負の判定は学生の興味を高め、討論会を活発にさせる点に役立つけれども、聴衆がその結果によって結論づけないように、むしろ物事には必ず一長一短があり、何事にも表があれば裏があることをよく理解するように指導することが大切である。

(私の実践例)

(1) 礼儀を正しくするには相手を敬愛する心が大切であるけれども、それには表現（形式）が適正でなければならないことを理解させるため

に、

(イ) 人におじぎをする時に帽子を冠ったままですることはよいか悪いか。

(ロ) 年賀状は虚礼かそうでないか。

(2) 郷土愛、国家愛についての意義を理解し、而も国際協調心と調和させるにはどうあるべきかを考えるために。

(イ) 親に対して子が自分の必要以外には話をしないのは是か非か。

(ロ) 親の言うことが間違っていると思う時に子供がそれに従うのがよいか従わないがよいのか。

(B) 代表者数名を一般聴衆の前に出して座談会式に意見の発表交換をする方法（パネル法）。

此の方法は多くの機会に行われている。特色は代表に予め十分準備させ、思いつきや枝葉の意見をなくする点にある。この場合司会者は前以て十分に意見発表者の環境、その他を研究しておく必要があり、又代表メンバーの構成が一方にかたよらないよう、凡ゆる方面、分野のものを含むように考慮が払われていなければならない。

(C) 全員から随意に意見を出させたり、討論させたりする方法。

此の方法はホーム・ルームにおいて行われている。全員を活動させる点においてすぐれているけれども、司会者がよくないと、単なる思いつきの意見に終始したり、枝葉末節のあげ足とりに発表したりして、限られた時間内に能率的な運行が出来ず、又ごく皮相な話し合いになってしまったりする恐れがある。

(D) Aの討論会式を多少崩してBに近づけた方法。

(E) BとCとを組み合わせた方法。

(F) 少グループを編成して、各グループ毎に話し合せる方法（バズ法）。

ホーム・ルームでは5～10人程度に机を寄せ集めて数群を作り、設定された議題について各人から意見を出させる。各グループには班長を作ってまとめ役とする。此方法では平素無口な者、多人数、大会場では発言をしたがらない者でも少数の気心安さからよく発言し、全員が議題にとりくむようになって好い結果を得た。

之までの実践結果によると、バズ法のみに終始せず、その後討論会法(A)やパネル法(B)にもちこむがよかった。又(A)や(B)の方法で討議を行わせるための準備段階としてバズ法を行っておく法が、あとの討議に活気が出る点でよかった。

2 討議の準備

討議の内容を正しい方向にむけ、活発な多数の発言を出させ、且時間的に能率化を期するには事前の準備が十分行われねばならない。準備についての留意点は

(イ) 議題及びその主旨の説明を少くとも1週間前に全員に知らせておくこと。

(ロ) 議長（司会者）になる学生の指導をしておくこと。

議長をつとめる事も一つの修練であるから現在各H・Rでは大部分が輪番制に議長の選出を行っているけれども、不馴れのため折角の討議がまことにゴコチなく、又議題のほり下げ不十分な皮相的運行に終わっているものが多い。教官は予め議長となる学生にテーマの主旨、問題点、或は議事進行法などを指導しておかねばならない。

「議長(司会者)はどうあらねばならぬか」について研究するH・R時を設けるなら更によい。

(イ) 全員に関心をもたせ、発言をさせるような方法、措置を講じておくこと。この場合前項のバズ法を採用することがよいようだ。又平素から話の練習、話しの場に対して馴れさせるために、前述朝のホーム・ルーム（短時）を利用することもよい。

3 討議の整理

結論が出る出ないにもかかわらず必ず事後の整理が大切である。

(イ) 学生相互にまとめをすると共に教官は必ず批判を下し、或は自分の意見をのべる必要がある。

(ロ) 討議を討議するだけに終らせないように、更に次のH・R運営事項と関連づけたり、学生の実践行動の練習へもって行ったり、学校行事、教科学習の場にもちこんだりしなければ、口先きだけの指導に終る。

(Ⅲ) H・Rにおけるレクリエーションのあり方

1 H・Rレクリエーションの意義と目的

一般的に言うレクリエーションの意義については種々の考え方があるが、要は個人の心のシコリをはぐし、次の業務に精励出来る素地を作るための行為でなければならない。併しH・Rにおいてレクリエーションを取り上げる場合、それは教育の場と言う点が一般の生産社会等の場と違っているため、必ずしも一般社会におけるレクリエーションとは一致しないであろう。

H・Rにおけるレクリエーションのねらいについては次の事柄があげられる。

(イ) 学生個人の心のシコリをときほぐし、次の学業に精励する素地を作ること。

(ロ) H・R運営に変化をもたらせる。H・Rの行事が、室内ばかりとか、討議ばかりとか一方に偏ることは嫌気と退くつを生じ、好い結果を期し得ない。

(ハ) 学生相互間の心の融和をはかり、又学生と教官との結びつきを高める。

(ニ) レクリエーションそれ自体の意義の認識を深め、社会生活においてレクリエーションの必要性、正しいレクリエーションのあり方、方法等について体得させる。

2 H・Rレクリエーションの内容と方法。

H・Rレクリエーションは、スポーツ（バレー、バスケット、野球、ソフトボール、その他）ハイキング（一時間以内の近くの丘、池畔等へ、昼食携行等）音楽（レコード鑑賞）美術鑑賞、文学（俳句、短歌）等種々あるけれども、最も多いのはスポーツである。

H・Rのレクリエーションとはどんな事をどのようにしたらよいだろうか。

(イ) レクリエーションは学生の心のシコリをときほぐすことを目的とする点では学生の個人個人が興味をもち、心から進んで行うことでなければならない。この意味ではたといスポーツをしてもそれが押しつけであったり、苦痛を伴うものであったりすれば、レクリエーションとは言えなくなるし、又極端な例として討論会を行っても、それが個人個人の興味があり、そのため却って心の和ぎを得るならば、それはレクリエーションだとも言いうる。此処にレクリエーションの内容、方法、程度について考慮すべき問題がある。理想的に言えば文学を好むグループ、スポーツを好むグループ、等と小集団毎にそれぞれの興味ある事を行わせる事がよいように考えられる。

(ロ) 併し、H・Rでは少くとも40人程度の集団であること。或は時間や場所が学校というワクの中にはめられていることから上述のような方法は実施困難である。通例一定時間、一定場所において同じ事柄が行われるのはこのためである。この場合クラス中の何人かは興味をもたない事になる。併し、それは前述のネライの(ニ)或は(ロハ)が目的とされている限り当然そうあって然るべきである。

又学生の興味や好き嫌いをそのままにうける面だけでなく、それを是正し、或は向上させる面が教育の場であるから、H・Rのレクリエーションでは生のままの学生の興味本位に内容や方法が考

えられない部面の存在価値をも認めなければならない。

(ハ) レクリエーションが余暇の善用の一方法とみられる場合H・Rとしては単に長時のみを考えることなく、通常時の休憩時、放課後、或は休日において組中が一緒に楽しみ、遊び合うようにすることにも留意しなければならない。特に学生相互間の心の融和、学生と教官との結びつきをはかりたいと思えば、常時不断にレクリエーションがあって、むしろこの効果の方が大きいことに注目すべきであろう。又組の中に小グループが出来て、それが反目不和の種ともなれば如何なるH・R運営もうまくゆかない事を考えると、H・R運営のコツは正しく、深く考えられたレクリエーションから出発すると言っても過言ではあるまい

(IV) H・Rにおけるしつけについて

1 しつけの意義

しつけを広義に解釈すれば内面的、外面的のいつれについても考えられる。つまり、学生の理非善悪の判断とか徳性一般に関する物の考え方をもしつけの中に含まれる。併し一般的にはもっと狭い意味でのしつけ、つまり礼儀とか作法、勉学の習慣づけ、その他主として行動を伴う場合（外面的なもの）が主体となっている。併し此部面と雖もその根底には内面的なものが基盤になっているので両者を切り離して考えることは出来ない。だから広義においては教育活動のすべてはしつけに通ずるものであると言える。問題は狭義のもの即ち外面的な面を主とするしつけが自主性伸長の教育と調和するかどうかの点にある。

現在一部の教官の中には自主性の伸長、一開放主義の教育を高唱する余り、形式陶冶を主体とするしつけは無用であるとか、むしろしてはいけないと考えている者が少くない。成程形式陶冶に主点を置いたしつけには学生の考え、興味、好悪の感情を抑止して親、教官から与えるとか、押しつけると言う強制作用がはたらきかける。だからこそ新教育ではしつけは考えられないと言うのであろう。併し、果して強制作用が無視されてよいものであろうか。現在学生がもっているのみを土台として行くことは教育でなく放任である。

教育活動ということが学生のよりよい成長と発展とを期する限り、当然未発達段階にある学生の現在の興味、好悪、考えを抑制してもより上のもののよりすぐれたものを与えていくためには強制作用が行われることを認めねばならない。この意味におい

て如何なる教育においても、それが教育と呼ばれる限り、狭義のしつけも行わるべきである。尤もしつけの方法になると極力学生の納得理解をはかり、自ら進んで行動するようにしなければならないことは言うまでもない。だから自主性尊重云々はしつけの方法論に属することであって、しつけが教育活動に必要なか不必要かと言う教育本質論とは話しの立場が違っている。それ故、私が教育には必然的にしつけが伴うと言った事は、決してその方法論において自主性尊重を否定するものではない。

2 しつけに関する問題点

戦後の教育について種々の批判や反省が加えられているが、その中の一つとして道徳教育がありひいてはしつけをどうするかが問題となっている。しつけについては、高専に於ても真剣にとり組まなければならない。併し現状では高専生のしつけについていくつかの問題点がある。

- (1) しつけとはどんな事をどのようにする事か、又学生に対してどんな人間像を画いてしつけをするのか。
- (2) 高専生のしつけにはどのような内容事項があるのか。又どの程度にすべきか。
- (3) 自主性の尊重、自主性伸長の教育としつけとは矛盾しないか。どこで調和させるか。
- (4) しつけについて教官相互間に考え方や指導方法にズレ、ギャップがあるようだが、それをどうするか。
- (5) 学校相互間（小・中・高或は高専相互間）に考え方、方法にズレが大きいのをどうするか又学校と家庭、或は社会との間にズレがあるようだがそれをどうするか。
- (6) 青年心理（例えば誤った英雄心、反抗心等）としつけとの関係をどう調和するか。
- (7) 男女共学の高専では、性別によるしつけの方法に区別があるかどうか。区別があるとすれば実際にはどうすればよいのか。
- (8) 教官の実践行動が学生のしつけをゆがめたり、妨げたりすることがある場合それをどうするか。
- (9) 最後の教育においては意志のたんれんという部面が欠けているが、之をしつけにおいてどのように具現するか。

等があげられる。上の項目の中で、最も問題となり、又今日の教官が戸惑いを感じていることは「しつけとは何か」「新教育でしつけはどの程度にしてよいのか」ということであり、従って又その戸惑いから来た各教官のしつけに対する考え方、方法のズレ、であろう。しつけとは何か。又それが新教育に

おいても、なさるべきものであることについては前項、「しつけの意義」において既にのべた。

此処では教官間のズレ、不統一について考えよう。学校教育が多数の教官の力の総結集によってなされている今日、それが精神陶冶にしる、形式陶冶にしる、同一学校内の各教官の歩調が揃わないことは、確かに大きな欠陥となり、その効果が大きく減殺される。併し乍らしつけ教育の場合、殊に具体的な問題になると、現状では各教官の間に相当大きなズレがあることを認めないわけには行かない。例えば学生が教官に対して挨拶する場合でも帽子をとっておじぎをするのと、帽子を冠ったままおじぎするのとどちらがよいのか悪いのか。冬になって高専生がマフラーを使用するのにに対して禁止するか、許可するか。オーバーの色を黒や紺に統一するかしないか、4年生以上は替ズボン、無帽を許すか、大学生なみにとりあつかうか、等々論議しはじめるとなかなかやかましい。極端に言えば、挨拶の場合帽子を冠ったままであろうと、ポケットに手を入れたままであろうと相手を敬う心さえあれば形はどうでもよいのではないかと言うことになり、そうすると形式陶冶とかしつけと言うことは顧みる必要もないということになる。上の事は一例であるけれどもこれに似たような考え方のズレは到る処に転がって居り、或教官はしつけをやかましく言い、他の教官はルーズにして、間にはさまれた学生は進退居住に迷ったり、更に教官不信の念を抱いたりするようになって不幸なのは学生である。我々が教育効果を期待しようとする限り、此の様な教官間のズレをなくさねばならない。

さてしつけに関して考え方のズレが起るのは主として行動、外形に関する方法なり程度の問題であろう。所で例えば礼儀とか、言葉使いとか、規律とかに関して具体的な行動の基準を定める場合に平均規範と価値規範（九大池田数好教授の話）とがある。平均規範と言うのは、大多数の人が正しいとして行っていることを基準とすることである。例えば葬式の間では高笑いしてはいけないというようなことでも、本質的に言えば会葬者の皆が必ずしも悲しんでいるわけではないかもしれないが、こんな時に悲しい表情をするのが平均規範であって、それに反するのは礼儀でないということになり、そこから一つの基準が出来ているわけである。所謂世間的な礼儀とか公衆道徳とかは、このような統計的な規範の上に立って定められたものが多い。

ポケットに手を入れたままおじぎしたって構わないではないかという考えは、葬式の会場でおかしい

ことがあったら高笑いすることが何が悪いと言うのと同じである。

次に価値規範とは「斯くあるべきである」とそれぞれの立場から定められてくるものである。

「心身の鍛練をするべきである」とか「質素にすべきである」とかいう価値の標準がきめられて来たら、そこから若人にはマフラーはつけさせない方がよいとか、華美ゼイタクを防止するために紺、黒色のオーバーに統一する方がよいというような服装の基準がきめられて来る。この価値規範による場合に特に教育の使命が大きく存在するものであろう。

しつけの具体的方法論に関する教官間の考え方のズレがあると言うのも、つまるところは教官が学生の行動基準について、平均価値両規範によって統一した基準を考えようとしないう所に原因があるのではないだろうか。

(イ) 集団行動規律化のしつけ

学生が学校という集団、ホーム・ルームという集団の中に生活している限り、秩序ある行動をとらねばならないことは言うまでもない。然るに戦後の集団行動は余りにも無秩序不規律であった。私はいつも学生には次の事を言っている。

- (1) 集合に長時間を要したり、整列がうまく出来ないことは、皆がお互に迷惑することであり時間のロスとなる。
- (2) 行動が適確迅速でないことは仕事の能率が上がらないし、又不確実な結果を生む。
- (3) 不慮の災害（例えば学校火災、修学旅行時の交通事故、その他）に出遭った時、規律ある集団行動が出来ていなければ、必要以上に被害を受ける。

(ロ) 勤労に対するしつけ

新しい社会が労働尊重を主張しながら、高専では勤労に関する実践指導は余り行われていない。此点戦前のアルバイトシュールとか、戦時の勤労奉仕作業が目的は別として実践の点でははるかにすぐれていた。近代社会が労働を益々要求して行くのに対して、学校教育ではなぜ等閑視されているのであろうか。

今日の高専における勤労指導と言えば、先ず教室の掃除程度である。それも満足に行われているとは限らない。

(方針)

- (1) 学生に勤労の喜びを感じさせねばならない。

戦時の勤労奉仕のように上からおしつけて、説教的に勤労愛を説いても駄目である。勤労の結果が形にあらわれ、それが学生の身近な場所、

時にはその甲斐があったと喜びを感じる作業をしなければならない。

- (2) 全校生すべてが作業に従事するけれども、ホーム・ルーム単位に作業の内容や、方法を考えること。高学年から卒先すること。

おわりに

高専ホーム・ルームの経営の実施状況は全般的に見て、必ずしも望ましい段階にあるものではないと思う。特に高校に比べると、可成り遜色があるといわれても弁解の余地はないようだ。これは高専の教官が熱意がたらないからであろうか。私は必ずしもそうであるとは思わない。高専教育の特異性に由来するものと思う。はじめに述べた通り教官編成が異なり、高校でもない大学でもない。前に道なく後に道が出来る現状である。高校より出向された教官は経験と努力により一層の成果がある。他教官は経験も指導も日浅きため止むを得ないと思う。しかし学校にある以上ホーム・ルームの担任になったら自分の専門の研究とともに、クラスに情熱を持ち格段の研究実践を行う熱意を持ち好成績を納めたい。

一面の特異性をあげたが勿論これ等が高専教育本来の目的にすべて適うものであるかどうかと言うことは別問題である。現状ではこれ等の特異性のために高専ホーム・ルーム経営に非常にむづかしさがあることを指摘しているのである。しかし困難点があるからと言ってホーム・ルームの経営が軽視されても仕方がないと言う理由にはならない。むしろ幾多の障害があるからこそ、逆に高専ではホーム・ルーム経営、ひいては生活指導に一層の努力がなされねばならないだろう。

ある面で教官の熱意と努力が大きいにも拘わらずホーム・ルームの運営がうまく出来ないことである。特に長時の運営について此の傾向がある。此の場合忘れがちな事はホーム・ルームの学生がホーム・ルームの意義、長時の価値をどれだけ認識しているかと言う点に関する考察と処置とである。新入生に対して中学校でどのような体験をして来たかを調査した所 学校や学級によってまちまちであり、而も案外に放任、無意味なホーム・ルームを体験したものもあった。

最後に教科指導と生活指導との調和は完全に一致されねばならない事は言うまでもないが、両者の調和をどのようにしてはかって行くかが非常に問題としてとり上げられ、実践されて行かなければホーム・ルーム経営の振興も期し難い。記述は抽象的、理論的な問題には触れないで専ら実践方法に関して問題点となる事について、私が高校17年高専4年にわたって研究し実行して来た事柄を中心にまとめたものである。

新単位“AVON”の提唱

(モル概念の明確化と統一)

樋口大成
佐々木英人

New Unit “AVON” instead of Troublesome “MOLE”

Hiroshige Higuchi and Hideto Sasaki

There are similar chemical terms; mole, gram-atom, gram-molecule, gram-ion etc. Do they represent the units of number, or of weight, or of volume or of quantity of electricity? Among these units, is gram-molecule the only synonym for mole? Are gram-icn and gram-atom also the same with or different from mole? To find out the answer to these questions, we made a thorough investigation in many chemistry books published in Japan, Europe and U. S. A. After all, we could not find a solution, but were in a dilemma. It nevertheless makes us anxious that this is very serious both from an educational and from a scientific standpoint. In conclusion, we suppose there is no way for the solution of this confusion but to create a new unit “AVON” as the unit of number in chemistry. That is, one avon equals 6.02252×10^{23} .

1. モル概念の混乱の状態

著者の一人は、かつて、化学教育誌（日本化学会、化学教育委員会編）において、高等学校39年度用、化学Bの教科書に記述されているモル概念を引用して批判したことがある。^① 今、ここにもう一度その中のごく一部を引用して、グラム原子とか、モルという言葉が驚くほど乱れた状態で用いられていることを指摘することからこの論文を書き始めよう。以下、A、B…とあるのは、高等学校検定教科書からの引用である。

①A (40. 41. 42ページ)

化学反応をとり扱うときは、原子や分子の数で表わすのがよいことはあきらかであるが、これらの数そのままでは多すぎる。そこで12個を1ダース、144個を1グロスというように12gの¹²C原子の数N（アボガドロ数、実験によれば 6.02×10^{23} ）を使い、N個の原子、あるいはN個の分子をそれぞれ物質の量を表わす単位とする。すなわち、N個の分子（原子、イオン）からなる物質を1グラム分子（グラム原子、グラムイオン）の物質という。1グラム分子を1モルともいう。

①B (18. 19ページ)

原子量をグラム単位で表わすと、実用上便利である。たとえばHは水素の1gを、Oは酸素の16gを表わすことにする。この量をそれぞれの1g原子とよ

ぶ。イオンの場合にも、Na⁺の23g、あるいはCl⁻の35.5gをそれぞれの1グラムイオンという。同様に、分子量にグラムをつけたものを1グラム分子、式量にグラムをつけたものを1グラム式量という。1グラム分子、または1グラム式量のことを1モルという。

①C (53. 55. 61ページ)

原子量を表わす数値に相当する質量をグラム単位で表わしたものを1グラム原子という。分子量を表わす数値に相当する質量（グラム単位）を1グラム分子という。（中略）各物質の1グラム原子あるいは1グラム分子の中には、それぞれ同数の分子が含まれているが、その数はいくらであろうか。この問題はいろいろな方法によって研究されたが、その結果、概数として 6×10^{23} という数が得られた。（中略）われわれはここで、アヴォガドロ定数 6×10^{23} 個の原子の集団、あるいは分子の集団を1モルとよぶことにする。つまり、1モルは分子については1グラム分子に当たり、原子についてはグラム原子に当たる。（後略）

著者は、以上のような例を8種の教科書から引用し、ここに再び挙げたこの3種からでもうかがえるように、次のようにまとめた。

- | | |
|---------------------|----|
| 1. 1グラム分子を1モルともいうもの | 7種 |
| 1グラム分子と1モルとは違うもの | 1種 |

2. 1 グラム分子や1 グラム原子などが数の単位らしい筆法になっているもの 2 種
質量の単位らしい筆法になっているもの 6 種
3. グラムイオンというのが数の単位であるものが3 種、質量の単位らしいのが5 種。しかし、この中には、グラム原子やグラム分子が質量の単位として使っているのに、同じ教科書でグラムイオンだけは数の単位として使っているものや、この逆の場合のものもある。

著者の論文に対し、やはり化学教育誌で岩崎氏^⑧は、著者の論旨に更に批判を加えられながら、その中で著者が引用しなかった、ある種の化学Bの教科書を引用しておられる。それは次のとおりである。

⑧D (12. 13. 16. 35ページ)

それぞれの元素の原子量にグラムをつけた量を、その元素のグラム原子とよぶ。

ある化合物の分子量または式量にグラムをつけた量をその化合物のグラム分子またはグラム式量という。(脚注として「グラム分子のことをモルともいうが、グラム式量もモルということがある」という記載がある)(後略)

岩崎氏は、著者が引用したものをも含めて10書のうち、これがもっともひどい。モルは化合物にだけ使い、単体には使わないのだろうか、と指摘しておられる。岩崎氏は、同誌において、結局は「モルの dimension は何なのか」と厳しく追求された。

このモルの概念を少例ではあるが欧米に求めてみる。

⑨化学I——アメリカ——

記号 Cu は、単体中と化合物とを問わず、銅元素を表わすのに用いられる。この記号は同時に銅の一定量(中略)その中でも特に、1 グラム原子量 gram-atom すなわち銅の 63.54 g の意味で使うことが多い。同様に化学式 $\text{CuSO}_4 \cdot 5\text{H}_2\text{O}$ は、(中略)その中でも特に、1 グラム化学式量 gram-formula weight 249.69 g の意味で用いられることが多い。

1 モル mole とは、分子量をグラムで表わしたものと等しい物質の量である。もしある物質に対して書いた化学式が正しい化学式であることがわかっているれば、化学式量と分子量とは一致し、モルとグラム化学式量とは一致する。

アボガドロ数 Avogadro's number N は炭素 1 g 原子中の炭素原子数であると定義される。これが同時に、あらゆる元素 1 g 原子中の原子数となり、またあらゆる物質 1 モル中の分子数にあたることはいうまでもない。

電子 1 モル (アボガドロ数個の電子) の電荷の大きさは、96,500 クローンである。(同頁問題解説中の引用——著者——) 電解槽を通る電子 1 モルがナトリウム原子 1 モルをつくる。電子 1 モルは 1 ファラデーであり、ナトリウム原子 1 モルはナトリウム 1 g 原子、すなわち 23.00 g である。

⑩CBA——アメリカ——

化学者は、原子の相対的な数を示すのに、しばしばアボガドロ数個の原子の倍数を用いる。ある物質がアボガドロ数個だけの構造単位を含んでいるとき、その質量をその物質の 1 モルという。(中略) 1 モルとは正確にはかった 32 g の酸素中に含まれている分子数と同数の構造単位を含む物質の質量である。

⑪ケムス化学——アメリカ——

パン屋はビスケットをダースでかぞえる。(中略) 化学者たちはどうしてモルで数えるのだろうか。6.02 $\times 10^{23}$ という変な数をえらんではなぜだろうか。なぜ化学者はもっとわかりやすい数、たとえば 1 億を単位にえらばなかったのだろうか。これには理由がある。化学者は容易に、かつ高い精度で測定しうる量にもとづいて規定する習慣がある。かぞえるべき粒子が非常にたくさんある場合には、数をかぞえるよりも、重量をはかるほうが容易である。それで、化学者はモルを定義するのに、粒子の数でなく、ある適当な重量をえらんで、それを基礎にしたのである。19 世紀の間に化学者は、ちょうど 32 g の酸素中に含まれる分子の数を標準の数にしようとした。したがってこれにもとづいて定義すれば、1 モルとはちょうど酸素 32 g 中に含まれる酸素分子の数である。

モルの意義は、重量よりも、上記の粒子の数と関連づけるのが一番便利である。この数はその後の研究によって 6.02 $\times 10^{23}$ であることが知られ、アボガドロ数とよばれるようになった。(中略)

実的な目的のために、原子 1 モルの重量は重要な値であって、これを原子量という。(中略) 次に化合物について考えてみよう。この場合も、化学者にとって有用な数は、分子 1 モルの重量である。この重量を分子量という。

⑫College Chemistry——アメリカ——

重量が g 単位でその分子量に等しい物質の量は、その物質の 1 グラム分子または 1 モルと呼ばれる。

1 グラム原子、あるいは 1 グラム原子量というのは、原子量単位で表わす原子の重量の数値に g をつけただけの元素の重量である。

⑬初等化学Ⅲ——ソビエト——

ある元素について、その原子量の値と等しいグラム量を 1 グラム原子という。(中略) 物質の分子量と等

しい値のグラム量を、この物質の1グラム分子あるいは1モルという。(中略)すべての気体について、標準状態において1モルが占める体積を、この気体の1グラム分子容という。すべての気体の1グラム分子容は、ほぼ等しく、22.4ℓである。

③無機化学——ドイツ——

原子にはグラム原子を採用する。また化合物にはこれに対応してグラム分子を用い、簡単にはモルという。しかし、分子の存在しない結晶(例 Al_2O_3)などでは分子量ではなく式量とすべきで、これもまた簡単にはモルと表わす。〔著者訳〕

④化学——フランス——

元素であれ、純物質であれ、モルは常に実際の原子、あるいは分子の同数個Nを含んでいる。一般に、ある元素のモル質量(著者註、la masse molaire)をgで表わせば数値的に原子量に等しい。純物質のモル(その化学式で示された)は、この物質のN個の分子の集団を示し、それに対応する質量がモル質量であり、ふつう、Mで表わされる。結論として、モルなる語は、N個の粒子の集団を示す。〔なお二つの例題があるのでこれを示す。著者註〕

例題の1 H_2SO_4 のモル質量Mを計算せよ

答 $M = 1 \times 2 + 32 \times 1 + 16 \times 4 = 98g$

例題の2 Cのg原子量は12.0である。

〔著者訳〕

このように、7書にわたって外国の化学の教科書として用いられているものを挙げてみたが、挙げるほど、読むほどに違い、混乱と、その著者達の我田引水が目についた。特に引用しなかったが、イオンについては、イオンの1モルという表現がいつの間にやら導入されているのがふつうであった。そして、反面グラムイオンという言葉は用いられていないようだ。それに、前の方に、モルはグラム分子の言いかえだ、と説明してありながら、いつの間にか、グラムイオンに相当するものにモルをつけるという責任のなさが目立った。また、それでは、グラム原子をモルと言いかえていいのか悪いのかの疑問も残ったままである。一方、CBAやケムスでは、グラム分子やグラム原子という用語は抹殺されモル一本になっている。それにしても、ケムスのように(これは日本の教科書にもよく見られるが)モルという概念の発生と定義とを一緒に書こうとするため、数の単位なのやら重さの単位なのやら、読んでいてわからなくなるものがある。

とにかく、著者らが、日本の高校の教科書で受けた困惑が、外国の本を見ることによって、いよいよ深みに陥ってしまった。

2. 混乱の集約と、その改善の方向

結局、これらの混乱を要約すれば、次の四点にあるのである。

第一に単位上の混乱である。ある時は質量の、また体積の、または個数の、あるいは電気量の単位として抵抗なく用いられる習慣がついている。たとえば、次の表現に誰でも抵抗を感じないほど不感症になってはいないか?

酸素分子の1モルは 6×10^{23} 個の O_2 分子の集団である。

水素ガスの1モルは2gである。

酸素ガスの1モルは標準状態で22.4ℓである。

電子の1モルは1ファラデーである。(上記文献⑦より引用)

第二に定義上の多義性である。まとめると次のようなことになる。

1. 1モルという語が一義的に1グラム分子の言いかえに限定して用いられている場合。
2. 多義的に1グラム原子、1グラムイオンなどをも原子の1モル、イオンの1モルと使われている場合。および、原子には1モルを使っていない場合。
3. 電子のN個、陽子のN個にも、それぞれの1モルと用いる場合。
4. グラム分子、グラム原子、グラムイオンという言葉ですでに廃止し、モル一本に用いられている場合。

など。

第三に単位上の混乱と、定義上の多義性の間の錯綜がある。たとえば、1モルは数の単位、1グラム分子、1グラム原子は質量の単位として使われている場合などがこれに当たる。

第四に定義の説明にアボガドロ数導入のプロセスを混合したために起る混乱である。

しかも、困ったことに、化学の基礎であり、化学の初心者がはじめて勉強する分野にこの違いがあるところに、教育的に大きな問題があるわけである。

以下、著者らは、この混乱を示す身近な例を四つほど挙げ、上述の不合理がどこに起因するかを指摘してみる。最も多く書かれている定義として「1グラム分子のことを1モルともいう」式の教科書を持っている学生の身になってみよう。

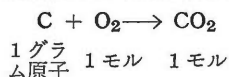
(A) 大学の教授が次のような入試問題を出すことに、何らの抵抗は感じないのは当然であるが、

過マンガン酸カリウム1グラム分子によってちょうど酸化される第一鉄イオンのモル数はいくらか

(37年九州大学)

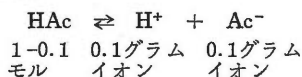
これなど、第一鉄イオンのグラムイオン数としなければ教科書流の説明に反するわけで、教科書流でいえば、過マンガン酸カリウムの方をこそ優先的に1モルと言ってもらわないと、マジメな高校生が困惑するのである。

(B) 化学反応式中の化学式の係数は反応し合うモル数比を示す、としてふつう説明されている。しかし、炭素の燃焼のような場合には



となるから、上の説明は不備になる。これは、この文を読んで下さる方々から見れば、ささいな挙げ足とりと思われるかも知れないが、学生の身になり、また、その教科書を持って授業している教師にとっては、無用な苦勞をすることである。

(C) 1価の弱酸 HAc が、ある濃度、温度において、電離度0.1であるとすれば、この弱酸の1モル/l溶液1 l中にある全粒子数をどう表現すればよいか考えてみよう。



上式より、合計「0.9モルと0.2グラムイオン」と答えることがこの場合正確になる。これは、ふつう1.1モルと言い、かつそう言わないと、凝固点降下のときなどの問題では繁雑この上もない。

(D) もう一つ重要な問題がある。次のようなアイマイな表現が平然と通用してはいないだろうか。

硫酸は2塩基酸だから $\frac{98}{2}=49g$ が1グラム当量である。一般に1モルを当量数で割れば1グラム当量になる。一方、硫酸の1モルは2グラム当量である。一般に、1モルに当量数を乗ずればそのグラム当量数になる。

一体、当量数をかけるのか、割るのか？

これらの混乱は、教師や学生にとって、わからせにくく、わかりにくい、というだけでは済まされない。単に教育的でないばかりでなく、学問的にも、同一用語が単位上および定義上混乱していることは許容できるものではない。ここで、著者らは、これらのすべての混乱を一挙に整理統一することができないものかと考えて、次の二点に注目した。

(1) 単位として、数の単位なのか、質量の単位なのか、体積の単位なのか、電気量の単位なのかを明確にすべきものを用いること。

(2) 定義の多義性をなくすために、グラム原子、グラム分子、グラムイオン等の用語の一切を廃止

し、さらに、特に強調したいことは、分子を想像させるような紛らわしい「モル」という用語も思い切って抹殺し、全く別の単位を用いること。

この立場より、全く新しい単位をここに提唱するものである。

3. 新単位“AVON”の提唱

(1) 数の単位 12個をもって1ダース、144個をもって1グロスというように、その対象のいかんを問わず、純粋に数の単位として、 6.02252×10^{23} 個をもって**1 Avon(アボン)**と称する。これは Avogadro's number を記念して採ったものである。鉛筆の1 Avon, 星の1 Avon, 分子の1 Avon という数え方をし単位として **A** の記号を用いる。

(2) 質量の単位 炭素原子が1Aだけ集合すれば約12gになり、酸素分子、硫酸イオンが1Aだけ集合すれば、それぞれ32g、96gになる。これらの質量は、各粒子の1Aの集合体の質量だから、それぞれの**1 Avon mass (アボン質量)**と称し、単位として **AM** の記号を用いる。

〔例〕炭素原子の1AMは12g、2AMは24g

酸素原子の1AMは16g、2AMは32g

酸素分子の1AMは32g

硫酸イオンの1AMは96g

(3) 体積の単位 アボガドロの法則によれば、気体(理想気体)は何であれ、1Aの分子が集合すれば標準状態で22.4lになる。この1Aが占める気体分子の体積については**1 Avon volume (アボン容)**と称し、単位として **AV** の記号を用いる。

〔例〕気体の1AVは標準状態で22.4lであり、2AVは0°C、2気圧で22.4lである。

(4) 電気量の単位 電子、陽子、1価の陽イオン、1価の陰イオンが1Aだけ集合したときに有する電気量を**1 Avon quantity of electricity (アボン電気量)**と称し、単位として **AQ** の記号を用いる。

〔例〕電子の1AQは1ファラデーである。

陽子の1AQは1ファラデーである。

Ag⁺の1AQは1ファラデーである。

Cu²⁺の1AQは2ファラデーである。

Al³⁺の1AQは3ファラデーである。

このように定義すれば、さきにあげた(A)……(D)の場合の繁雑さは一挙に解決される。すなわち

(A) KMnO₄の1Aは、Fe²⁺の5Aを酸化する。

(B) 反応式の係数は、反応し合う Avon 数比を示す、われわれは、各物質の1A、2Aを、1AMや1AVに換算するのは容易で、反応量の計算はこれによってできる。

表 1. 物質 1A に関する諸量

物質名	化学式	原子量 分子 イオンの式量	1 AM	1 AV (0°C_{10} 1 気圧)	1 A に関する諸量 $1\text{ A}=(6.02252\pm0.00028)\times10^{23}$
酸素原子	O	16	16 g	—	1 A の O 原子、8 A の電子と 8 A の陽子
酸素イオン	O ²⁻	16	16 g	—	O 原子より 2 A だけ電子が多く、1 AQ は 2 Faraday
酸素分子	O ₂	32	32 g	22.4 ℓ	1 A の分子は 2 A の原子よりなる
二酸化炭素	CO ₂	44	44 g	22.4 ℓ	1 A の C 原子、2 A の O 原子よりなる
ナトリウムイオン	Na ⁺	23	23 g	—	1 A の Na ⁺ 、1 AQ は 1 Faraday
ナトリウム原子	Na	23	23 g	—	1 A の Na 原子
塩化ナトリウム	NaCl	58.5	58.5 g	—	1 A の Na ⁺ と 1 A の Cl ⁻ よりなるイオン結晶
硫酸ナトリウム	Na ₂ SO ₄	142	142 g	—	2 A の Na ⁺ と 1 A の SO ₄ ²⁻
陽子	p	1	1 g	—	1 A の p、1 AQ は 1 Faraday
電子	e ⁻	$\frac{1}{1840}$	$\frac{1}{1840}\text{ g}$	—	1 A の e ⁻ 、1 AQ は 1 Faraday
中性子	n	1	1 g	—	1 A の n.
エチレン	C ₂ H ₄	28	28 g	22.4 ℓ	2 A の C、4 A の H 原子よりなり、1 A の C=C を含む
ブタジエン	C ₄ H ₆	54	54 g	22.4 ℓ	4 A の C、6 A の H 原子よりなり、2 A の C=C を含む

(C) 粒子数は 1.1A

(D) さきの文で「1 モルを当量数で割れば」といったときの 1 モルは 1 AM を指している。「1 AM を当量数で割れば」と単位を明らかにすれば解決する。また「1 モルに当量数を乗ずれば」といったときの 1 モルは従来のモル数、すなわち Avon mass(es) の数を指している。

4. “AVON” の導入にともなう、従前の諸単位の整理と、新提案

4.1 グラム当量の改善

グラム当量という語も、単位がはっきりしないまま用いられてきた。われわれが不用意に「1 モルの半分が 1 グラム当量だ」というときには、ともに質量につ

いていっている。また「1 モルは 2 グラム当量だ」というときには、モル数、グラム当量数を指している。

そこで、1 モルの有する質量のことを 1 Avon mass と改めたように、従来の 1 グラム当量の有する質量のことを **1 Equivalent mass** (当量質量) と称し、単位として **eqM** を用いることを提唱する。また、当量数を **eqNo** として示すならば、これによって「2 価の酸では 1 モルの半分が 1 グラム当量だ」というアイマイな表現にかわって「eqNo=2 の酸では 1 AM の半分が 1 eqM だ」となり単位が明確になる。

$$\text{eqNo}=2 \text{ のとき、} 1 \text{ eqM}=\frac{1 \text{ AM}}{2}$$

$$\text{または } 1 \text{ AM}=2 \text{ eqM}$$

$$\text{硫酸では } 1 \text{ eqM}=\frac{98}{2}=49 \text{ g} \text{ または } 98 \text{ g}=2\times49 \text{ g}$$

表 2. AM と eqM の関係

物質	例	1 AM	反 応	eq No	1 eqM
元素	S	32 g	$\text{S}+\text{O}_2\longrightarrow\text{SO}_2$	4	8 g
元素	S	32 g	$2 \text{ S}+3 \text{ O}_2\longrightarrow 2 \text{ SO}_3$	6	5.3 g
酸	H ₃ PO ₄	98 g	$\text{H}_3\text{PO}_4\rightleftharpoons 3 \text{ H}^++\text{PO}_4^{3-}$	3	33 g
塩基	Ca(OH) ₂	74 g	$\text{Ca}(\text{OH})_2\rightleftharpoons \text{Ca}^{2+}+2 \text{ OH}^-$	2	37 g
塩	Na ₃ PO ₄	164 g	$\text{Na}_3\text{PO}_4\rightleftharpoons 3 \text{ Na}^++\text{PO}_4^{3-}$	3	55 g
電極析出物	Cu ²⁺	63.5 g	$\text{Cu}^{2+}+2 \text{ e}^-\longrightarrow\text{Cu}$	2	31.75 g
酸化剤	KMnO ₄	158 g	$\text{MnO}_4^-+8 \text{ H}^++5 \text{ e}^-\longrightarrow\text{Mn}^{2+}+4 \text{ H}_2\text{O}$	5	31.6 g
還元剤	SnCl ₂	190 g	$\text{Sn}^{2+}\longrightarrow\text{Sn}^{4+}+2 \text{ e}^-$	2	95 g

4.2 モル濃度および規定度についての新解釈

Avon mass および Equivalent mass 導入にしたがって、従来のモル濃度および規定度も当然次のように改められるべき部分を生ずる。

- (1) モル濃度は **Avon 濃度 (アボン濃度)** とすべきであり、容量モル濃度に対しては **volume Avonity (容量アボニティ)**、重量モル濃度に対しては **weight Avonity (重量アボニティ)** を用い、従来の Molarity および Molality は廃止する。

容量アボニティの定義は「溶液 1 ℓ 当りに含まれる溶質の **Avon masses の数**」、重量アボニティの定義は「溶媒 1 Kg に溶かされている溶質の **Avon masses の数**」である。さらに、従来の習慣のように、単に Avonity といえば、容量アボニティを指してもよいであろう。

- (2) 規定度は従来どうり Normality を用いるが、「溶液 1 ℓ 当りに含まれる溶質の **Equivalent masses の数**」をもって規定度とする。

※

ついでながら、規定度に関する量記号と単位記号についての混乱を指摘する。他の量に関しては、わりあい一定していて、たとえば、体積は V 、 v 、その単位は ℓ、ml、cc など、また重量は W 、 w 、その単位は g 、 Kg 、 t など、長さは L 、 l 、その単位は m、cm などであり、 $Vℓ$ 、 Wg 、 Lcm と表わす。それに対し、規定度の量記号に n 、 N 、また単位記号にも n 、 N が用いられている。しかもひどいことに、一つの本（同一著者）の中に「……を N 規定と定義する」と書かれたそのすぐあとに「 $6N$ 塩酸を用い……」と書いてある式のものが大へん多く目立つのである。これでは、 Lcm の形で表わすならば NN になってしまうではないか。また $L=6cm$ 式に表現しようとするときは $N=6N$ になる。これでは目の錯覚を起し、両辺から N を消去して、 $1=6$ になりかねない。

しかし、習慣として、規定度の量記号にも、単位記号にも n または N をそのまま使うのが望ましいならば

規定度の量記号は n

規定度の単位記号は N

などをもって、万国統一すべきであると思う。

※

今著者らは、容量アボニティの量記号については c 、または $[]$ を用い、その単位記号を AM/l とし、重量アボニティの量記号については m を用い、その単位記号を $AM/Kg\ solvent$ とすべきだという考えをもっている。できるだけ従来の習慣を保存したいのである。が、従来の容量モル濃度の単位記号の M は、

この際廃止しなければならない。また、規定度の量記号は n 、単位記号は N 、または eqM/l がよいと考えている。

それで、たとえば、 H_2SO_4 を $98g$ 含んでいる希硫酸 1 ℓ の濃度は次のような表わし方がある。

$$\begin{aligned} c_{H_2SO_4} &= 1\ AM/l \\ [H_2SO_4] &= 1\ AM/l \\ n_{H_2SO_4} &= 2\ N \\ n_{H_2SO_4} &= 2\ eqM/l \end{aligned}$$

4.3 その他の用語への影響

以上に関連し、従来モルや当量を用いて表現していた諸事項に影響を与えることはたくさんあるわけであるが、すべてよい方向に改善されると考えられる。一例として、「分子熱」などという言葉がある。これは比熱に分子量をかけたものである。すなわち、物質の 1 アボン（従来いう 1 モル）を $1^\circ C$ だけ上げるのに必要な熱量をいうが、分子熱という言葉はこの意味がよく通じない。まして、この分子熱の単位は $cal/deg, mole$ であることが通じにくい。これに対し、分子熱をアボン熱と変えれば大へんはつきりしてくると思う。このように変える用語を列挙すれば

定 容 分 子 熱 → 定容アボン熱

定 圧 分 子 熱 → 定圧アボン熱

モル凝固点降下 → アボン凝固点降下

モル沸点上昇 → アボン沸点上昇

モ ル 分 率 → アボン分率

当 量 導 電 率 → 当量質量導電率

これらの用語を見ると、アボン、すなわち、粒子の数に支配されている点が極めて明確ではないか。従来のモルの単位が不明確のまま用いられていたのに対し、アボンは、数の単位以外の何物でもないのである。束一的性質の表現には極めて都合よく、いささかのアイマイさをも残さない。

以上、従来大へん混乱しているモル概念の、単位上、定義上の整理と統一を目標とした試案として新単位「Avon」を提案したが、化学教育界ならびに化学工業界諸賢の御批判、御検討を切に望んでやまないしだいである。

引 用 文 献

- ① 樋口大成〔化学教育〕11, № 3, p. 353 (1963)
- ② " p. 354
- ③ " p. 354
- ④ " p. 355
- ⑤ 岩崎精治〔化学教育〕12, № 1, p. 101 (1964)
- ⑥ " p. 103

- ⑦ L. Pauling [College Chemistry (1964)
同訳、金関義則、三田達、小沢丈夫〔化学Ⅰ〕
p. 101, 157, 222(1965)
- ⑧ Chemical systems by Chemical Bond Approach
Project (1964)
同訳、玉虫文一〔CBA化学〕p. 55, 56(1964)
- ⑨ Chemical Education Material Study (1965)
同訳、奥野久輝、白井俊明、塩見賢吾、大木道則
〔ケムス化学〕p. 31, 32(1965)
- ⑩ H. Siler, C. Vanderwerf, A. Davidson [College
Chemistry] p. 62, 71(1963)
- ⑪ スルミノフ〔初等化学Ⅲ・周期律と原子構造〕
同訳、大竹三郎 p. 22, 24, 27(1965)
- ⑫ W. Klemm [Anorganische Chemie] p. 48(1964)
- ⑬ A. Malevergne, J. Malevergne [Chimie] p. 47
(1965)

Lattice Vibration of Two-Dimensional Triangle Lattice 1.

Tatsuro Nagata

Exact solutions for particular cases of the two-dimensional lattice have been given by Montroll and by Bowers and Rosenstock. We adopt the two-dimensional lattice, and the force constants for nearest and next-nearest neighbors are α and γ , respectively. We assume that there are only central forces acting between the particles. The equation of lattice are proposed and shown. The distribution function of frequency will show in next paper.

1. Introduction

The heat transport by lattice waves in solids is governed by the anharmonicities of the lattice forces (which are also responsible for thermal expansion), by the various imperfections of the crystal lattice, and by the external boundaries.¹⁾ Moreover, in the case of metallic and semimetallic solids, the lattice component of thermal conduction is also governed by the free electrons. Not only may many different factors influence the thermal conductivity, but the processes which provide the principal sources of thermal resistance may vary from one material to another. In fact they may vary in different temperature regions in any one material. Thus the phenomenon of thermal conduction by lattice waves offers great diversity and provides an interesting field of study, both from a fundamental point of view, in which one desires to attain agreement between observation and the theoretical concepts.

The lattice thermal conductivity of metals is known to vary rapidly with impurity content at low temperatures. For these phenomena, we have the theory developed by Pippard²⁾ for the dependence of the electron-phonon interaction on the electronic mean free path.

The theory has been used previously by Zimmerman³⁾ to describe the lattice conductivity of silver alloys with high residual resistivities. He made the assumption that the interaction of the transverse modes with the conduction electrons is the same as that of the longitudinal modes. Lindenzfeld and Pennnebaker⁴⁾ assumed instead that the transverse and longitudinal modes interact with the electrons nearly independently of one another. They obtained good agreement between theory and experiment, leading to the conclusion that in the purer specimens the conductivity is predominantly due to the transverse modes.

A knowledge of the phonon frequency distribution $g(\nu)$ of crystals is of fundamental importance in determining many of their thermal and electrical properties. The experimental determination of $g(\nu)$ is rather difficult and has been carried out only for a few metals like vanadium and nickel by the incoherent thermal neutron scattering experiments. Most of the theoretical calculations of $g(\nu)$ have been done using the force-constant models of lattice dynamics and the most general one is the "tensor-force model" due to Born and Begbie⁵⁾ and Born and Huang.⁶⁾

Jacobsen⁷⁾ and Walker⁸⁾ have made a detailed study of the diffuse scattering of X-rays by single crystals of copper and aluminum, respectively, and have obtained the dispersion curves along the three high-symmetry directions $[100]$, $[110]$, and $[111]$ in the reciprocal crystal space.

Peierls⁹⁾ treated the effect of terms anharmonic in the interchange of energy between lattice waves, and, by quantizing the lattice waves, extended the theory to low temperatures. He derived that processes arising from the anharmonicity and not conserving quasi-momentum, namely the "umklapp" processes, contribute a term to the thermal resistance which is proportional to T at high temperatures, but which decreases exponentially at low temperatures.

2. Normal Modes of a Lattice

The atoms in a crystal vibrate about equilibrium positions which are arranged in a regular lattice. However, the atoms are not bound to their equilibrium sites, but to the neighboring atoms. Consequently, individual atoms do not vibrate independently, their vibrations are strongly coupled. The formulation and solution of this dynamical problem has been fully reviewed elsewhere (see, for example, Born and Geoppert-Mayer,¹⁰ Born and Hung,¹¹ or Blackman¹²). A solution can be found in terms of traveling waves, which are the normal modes of vibration of a crystal lattice, provided the lattice is perfect and provided the forces are harmonic, that is provided the forces acting between pairs of atoms are proportional to their relative displacement. Real crystals are not perfect. If the deviations are small, they can be treated by perturbation theory.

The force most commonly used is the "central force". This is assumed to act only along the line joining two neighbors, and is, in this sense, a "radial force". The mechanical analogy is a spring whose restoring force is proportional to the change in length of the spring and is independent of the angular deviation of the spring from the line connecting the two atoms. A second type of force is one which depends on the angle which the line joining the moving atoms makes with the equilibrium position of the line. A third type of force is a so-called "volume force", which arises from the elasticity of the free electron gas.

The particle, whose equations of motion we wish to formulate, is located at the origin of coordinates. We can shift the origin of coordinates to any particle we wish. We now calculate the restoring force on particle 0 when there is a relative displacement between it and a neighbor with index n . Let the unit vector which indicates the direction of the equilibrium line joining the particles be designated by ϵ_n , and the corresponding Hooke's constant by α .

The two vectors $\mathbf{s}_0$ and $\mathbf{s}_n$ represent the displacements of the particles 0 and n , respectively, from their equilibrium positions. If $\mathbf{s}_0 - \mathbf{s}_n = 0$, the distance between the particles does not change. However, the distance between the particles generally does change, and the component of this change along $\epsilon_n(\mathbf{s}_0 - \mathbf{s}_n)$. Thus the restoring force acting on 0 due to n is

$$\mathbf{F}_n = -\alpha[\epsilon_n \cdot (\mathbf{s}_0 - \mathbf{s}_n)]\epsilon_n.$$

The solution of the equations of motion are assumed to be plane waves. For a simple Bravais lattice, one assumes for the wave an amplitude A , a frequency ν and propagation vector $\mathbf{k}$, giving

$$\begin{aligned} & \left. \begin{aligned} u_0 &= A_1 \exp 2\pi i \nu t \\ v_0 &= A_2 \exp 2\pi i \nu t \\ w_0 &= A_3 \exp 2\pi i \nu t \end{aligned} \right\} \\ \text{and} \quad & \left. \begin{aligned} u_n &= A_1 \exp 2\pi i (\nu t - \mathbf{k} \cdot \mathbf{s}_n) \\ v_n &= A_2 \exp 2\pi i (\nu t - \mathbf{k} \cdot \mathbf{s}_n) \\ w_n &= A_3 \exp 2\pi i (\nu t - \mathbf{k} \cdot \mathbf{s}_n) \end{aligned} \right\} \end{aligned}$$

Here A_1 , A_2 , and A_3 are the components of $\mathbf{A}$. This substitution leads to three simultaneous homogeneous linear equations in A_1 , A_2 , and A_3 . In order that not all three components of $\mathbf{A}$ vanish, the 3×3 determinantal equation is the "secular equation" which restricts the allowed frequencies.

The secular equation for the simple Bravais lattice is a cubic equation in ν^2 , giving the frequency in terms of the components of $\mathbf{k}$. The secular equations for a lattice consisting of two interpenetrating lattices is a sixth degree equation in ν^2 .

We have defined $g(\nu) d\nu$ as the number of modes having frequencies between ν and $\nu + d\nu$. The integral $\int_0^\nu g(\nu) d\nu$ was shown to be the volume in n space contained in the constant frequency surface, $\nu = \text{constant}$. The edgelength is L , and volume $V = L^3$, the effective wavelengths λ_x , λ_y , and λ_z . If we write $k_x = 1/\lambda_x$, $k_y = 1/\lambda_y$, and $k_z = 1/\lambda_z$, we see that k_x , k_y , and k_z are the components of a vector $\mathbf{k}$, of length $1/\lambda$, which is normal to the wave front.

Suppose that the coordinate axes are chosen to lie along three intersecting edges of the cube. If we fix

our attention on the intercepts of the waves with the cube edge along the x axis, we see by analogy with the vibrating string that there must be a node at $x=0$ and at $x=L$, and therefore, that there must be n_x half-waves along the x axis. Hence,

$$n_x \lambda_x / 2 = L$$

is the condition determining λ_x , n_x being an integer. Similarly, along the y and z axis, we have

$$n_y \lambda_y / 2 = L, \text{ and } n_z \lambda_z / 2 = L.$$

Thus, the integers n_x , n_y , and n_z are given by

$$n_x = 2L / \lambda_x = 2L k_x$$

$$n_y = 2L / \lambda_y = 2L k_y$$

$$n_z = 2L / \lambda_z = 2L k_z.$$

From the relation

$$k^2 = k_x^2 + k_y^2 + k_z^2,$$

it follows that

$$n_x^2 + n_y^2 + n_z^2 = 4L^2 k^2.$$

If we write down the velocity of waves U , we have $k = \nu / U$. Consequently, the relation between the frequency and quantum numbers n_x , n_y , and n_z is

$$n_x^2 + n_y^2 + n_z^2 = 4L^2 \nu^2 / U^2.$$

Therefore, $g(\nu)$ may be defined in the manner

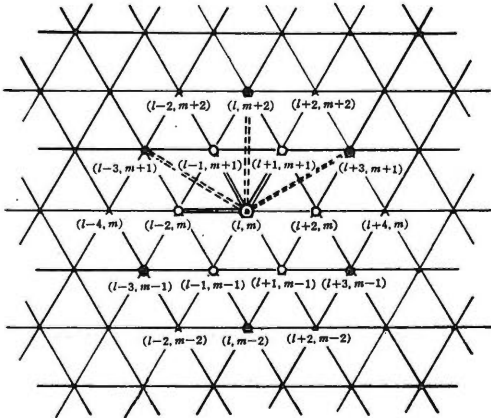
$$g(\nu) = \frac{V}{3} \frac{\partial}{\partial \nu} \int_0^{4\pi} k^3 d\omega,$$

where $d\omega$ is the element of solid angle. This equation states that the distribution function per unit volume, $g(\nu)/V$, is the volume in k space contained between the constant frequency surfaces ν and $\nu + d\nu$.

Exact solutions for particular cases of the two-dimensional lattice have been given by Montroll¹³ and by Bowers and Rosenstock.¹⁴

3. Two-Dimensional Triangle Lattice

Figure shows the particle (l, m) with its nearest neighbors $(l-1, m+1)$, $(l-2, m)$, $(l-1, m-1)$, $(l+1, m-1)$, $(l+2, m)$, $(l+1, m+1)$ and its next-nearest neighbors $(l, m+2)$, $(l-3, m+1)$, $(l-3, m-1)$, $(l, m-2)$, $(l+3, m-1)$, $(l+3, m+1)$. We shall assume, with Blackman, that there are only central forces acting between the particles. The interatomic distance is a and the force constants for nearest and next-nearest neighbors are α and γ , respectively.



The equation of motion of Lagrange is

$$\frac{d}{dt} \left(\frac{\partial L}{\partial \dot{u}_{l,m}} \right) = \frac{\partial L}{\partial u_{l,m}}.$$

We suppose which each atom translates vertically for the plane, whose displacement is u_{lm} . We have the following equation as a Lagrangian for our system.

$$L = \frac{1}{2} M \sum_{l,m=1}^N \dot{u}_{l,m}^2 - \frac{1}{2} \alpha \sum_{l,m=1}^N \left\{ (u_{l-2,m} - u_{l,m})^2 + (u_{l-1,m+1} - u_{l,m})^2 + (u_{l+1,m+1} - u_{l,m})^2 \right\} - \frac{1}{2} \gamma \sum_{l,m=1}^N \left\{ (u_{l-3,m+1} - u_{l,m})^2 + (u_{l,m+2} - u_{l,m})^2 + (u_{l+3,m+1} - u_{l,m})^2 \right\}$$

Then we have

$$\begin{aligned} M \ddot{u}_{l,m} = & \mathcal{D} \{ (u_{l-2,m} - u_{l,m}) - (u_{l,m} - u_{l+2,m}) + (u_{l-1,m+1} - u_{l,m}) - (u_{l,m} - u_{l+1,m-1}) \\ & + (u_{l+1,m+1} - u_{l,m}) - (u_{l,m} - u_{l-1,m-1}) \} \\ & + \gamma \{ (u_{l-3,m+1} - u_{l,m}) - (u_{l,m} - u_{l+3,m-1}) + (u_{l,m+2} - u_{l,m}) - (u_{l,m} - u_{l,m-2}) \\ & + (u_{l+3,m+1} - u_{l,m}) - (u_{l,m} - u_{l-3,m-1}) \} \end{aligned}$$

We assume that the solution of the equations of motion are

$$u_{l,m} = \zeta \exp 2\pi i (\sigma_1 l a_1 + \sigma_2 m a_2 - \nu t),$$

and substituting from this, we find that

$$\begin{aligned} 2\pi^2 \nu^2 M = & \mathcal{D} \{ (1 - \cos 4\pi \sigma_1 a_1) + (1 - \cos 2\pi(\sigma_1 a_1 - \sigma_2 a_2)) + (1 - \cos 2\pi(\sigma_1 a_1 + \sigma_2 a_2)) \} \\ & + \gamma \{ (1 - \cos 2\pi(3\sigma_1 a_1 - \sigma_2 a_2)) + (1 - \cos 2\pi \sigma_2 a_2) + (1 - \cos 2\pi(3\sigma_1 a_1 + \sigma_2 a_2)) \} \end{aligned}$$

Introducing the abbreviated symbols $x = 2\pi \sigma_1 a_1$, $y = 2\pi \sigma_2 a_2$, and $\omega = 2\pi \nu$, the result can be written as

$$M \omega^2 = 2 \{ \mathcal{D} \{ 3 - \cos 2x - \cos(x-y) - \cos(x+y) \} + \gamma \{ 3 - \cos(3x-y) - \cos y - \cos(3x+y) \} \}.$$

Let us put $M=1$, for simplicity, and write down $\bar{\omega} = \omega/\omega_{max}$, then we have the equation for $\bar{\omega}$, whose region is from 0 to 1.

For $\mathcal{D}/\gamma=0$,

$$\bar{\omega}^2 = \frac{1}{4} \{ 3 - \cos 2x - \cos(x-y) - \cos(x+y) \}$$

for $\mathcal{D}/\gamma=1/4$,

$$\bar{\omega}^2 = \frac{1}{22} \{ 15 - 4\cos 2x - 4\cos(x-y) - 4\cos(x+y) - \cos(3x-y) - \cos y - \cos(3x+y) \}$$

for $\mathcal{D}/\gamma=2/4$,

$$\bar{\omega}^2 = \frac{1}{14} \{ 9 - 2\cos 2x - 2\cos(x-y) - 2\cos(x+y) - \cos(3x-y) - \cos y - \cos(3x+y) \}$$

and for $\mathcal{D}/\gamma=3/4$,

$$\bar{\omega}^2 = \frac{1}{34} \{ 21 - 4\cos 2x - 4\cos(x-y) - 4\cos(x+y) - 3\cos(3x-y) - 3\cos y - 3\cos(3x+y) \}$$

The curves for various values of $\bar{\omega}^2$ are plotted in Fig. 2 to Fig. 5, respectively.

References

- 1) P. G. Klemens, in Solid State Physics, edited by F. Seitz and D. Turnbull (Academic Press Inc., New York, 1958). Vol. 7. p. 1.
- 2) A. B. Pippard, Phil. Mag. **46**, 1104 (1955)
- 3) J. F. Zimmeraman, J. Phys. Chem. Solids **11**, 299 (1959)
- 4) P. Lindenfeld and W. B. Pennebaker; Phys. Rev. (letters). **127**, 1881 (1962)
- 5) M. Born and G. H. Begbie, Proc. Roy. Soc. (London) **A188**, 179 (1946)
- 6) M. Born and K. Huang, Dynamical Theory of Crystal Lattices (Oxford Uni. Press, London, 1954)
- 7) E. H. Jacobsen, Phys. Rev. **97**, 654 (1955)
- 8) C. B. Walker, Phys. Rev. **103**, 547 (1956)
- 9) R. Peierls, Ann. Physik **3**, 1055 (1929)
- 10) M. Born and M. Goeppert-Mayer, in "Handbuch der Physik". Vol. 24/2, p. 623 Springer, Berlin, 1933.
- 11) M. Born and K. Huang, "Dynamical Theory of Lattices". Oxford Uni. Press, London and New York, 1955.
- 12) M. Blackman, in "Handbuch der Physik". Vol. 7/1. (2nd ed.), p. 325. Springer, Berlin, 1955.
- 13) E. W. Montroll, J. Chem. Phys. **15**, 575 (1947)
- 14) W. A. Bowers and H. B. Rosenstock, J. Chem. Phys. **18**, 1056 (1950)

Fig. 2 $\cos y = \frac{3 - \cos 2x - 4\omega^2}{2\cos x}$; (for $\frac{\gamma}{\alpha} = 0$),
Values is that of ω^2 .

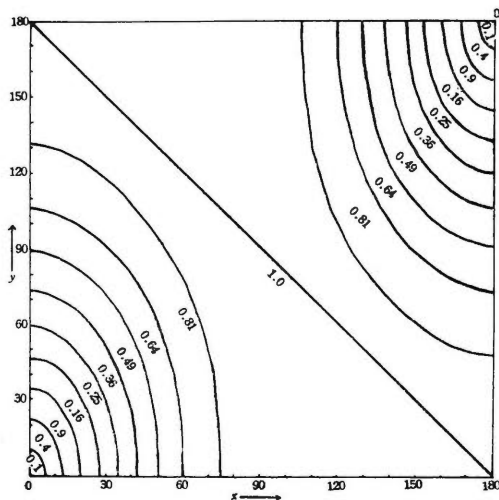


Fig. 4 $\cos y = \frac{18 - 4\cos 2x - 28\omega^2}{2 + 8\cos x + 4\cos 2x}$; (for $\frac{\gamma}{\alpha} = \frac{1}{2}$)

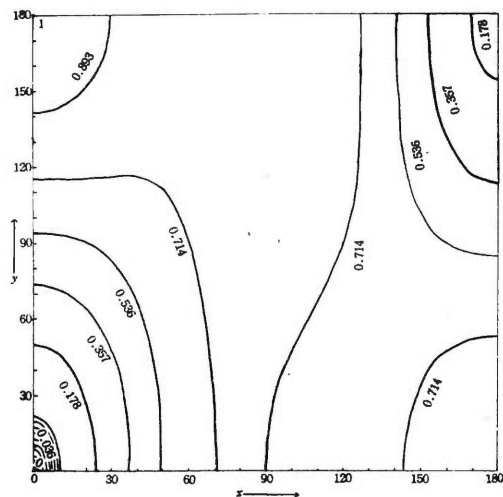


Fig. 3 $\cos y = \frac{15 - 4\cos 2x - 22\omega^2}{1 + 8\cos x + 2\cos 3x}$; (for $\frac{\gamma}{\alpha} = \frac{1}{4}$)

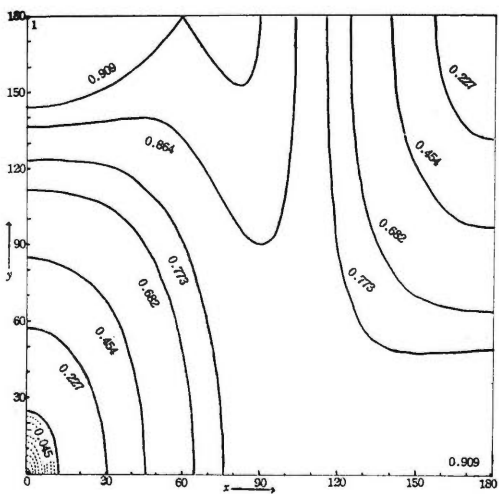
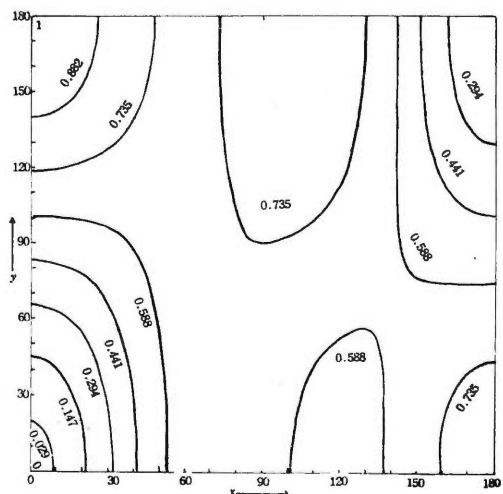


Fig. 5 $\cos y = \frac{21 - 4\cos 2x - 34\omega^2}{3 + 8\cos x + 6\cos 3x}$; (for $\frac{\gamma}{\alpha} = \frac{3}{4}$)



換え歯車のための電子計算機のプログラムについて

木 村 剛 三

A Program of the Electronic Digital Computer for Selecting Change Gears

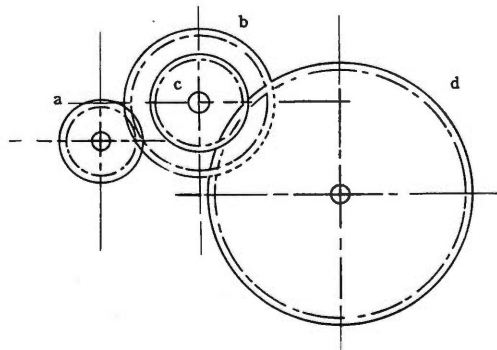
Gozo Kimura

Cutting screws or wheels by a machine tool requires a certain rotation ratio between the two axes. In this case, we generally select four change gears out of those attached to the machine. This paper shows a program of the electronic digital computer for selecting change gears.

まえがき、筆者はさきに昭和40年3月、機械学会九州支部の講演会で「電子計算機による換え歯車の選定法」なる研究を発表したがその後プログラムを改良した点もあるので、主としてそのプログラムについて発表をしたいと思う。なお順序として一応、計算の目的を簡単に説明する。

工作機械でねじ、ウォームギヤ、歯車等を削切するとき、2軸の間に特定の回転比を必要とするがこのた

第 I 図



め一般には機械の付属の換え歯車のなかから表によって4個(A、B、C、D)を選んで用いることになっている。然し表にないような比が必要になったとき、または表にはあっても精度不十分のときは手持の換え歯車のなかから適当な組合せを探さなければならぬ。これを手計算で求めるのは莫大な労力と時間の浪費となるので電子計算機で求めようというのである。

§1. 計算の方針、計算例に用いたデータは次の40個の歯車で歯数は

20, 22, 24, 25, 28, 30, 32, 33,
35, 40, 44, 45, 48, 49, 50, 54,

56, 57, 60, 64, 65, 66, 70, 72,
75, 76, 77, 80, 84, 85, 90, 96,
97, 98, 99, 100, 110, 120, 125, 127,
とした。今この40個から4個とった組合せを全部つくれば他の条件を考えなければ ${}_{40}C_4 = 548340$ にもなるのであるべく無駄を少なくするため次の順序で計算を進める。

(I) 与えられた換え歯車の歯数を読み込む。

(II) 2つづつとったときの比を求める。これはすべての歯数について行うので ${}_{40}C_2 = 780$ の組合せができる。但し比は1より小とする。

(III) その比を計算するとき比の値の小さい方から順にならべる。(第I表)

第 I 表

A_i	A_j	A_i/A_j
20	127	0,157480
20	125	0,160000
20	120	0,166667
22	127	0,173228
22	125	0,176000
...	...	
...	...	
...	...	
...	...	
...	...	
...	...	
...	...	
98	99	0,989899
99	100	0,990000

R_1
 $\sqrt{R}$
 R_2

これまでの計算のプログラムを§2.に示す。次にA/BとC/Dの値に近い方が無理がないように思はれるので

(IV) 求める比をRとすると $\sqrt{R}$ に近くて $\sqrt{R}$ より小

さい比を第 I 表から探し $R_1 (=A/B)$ とする。
同じく $\sqrt{R}$ に近くて大きい比を $R_2 (=C/D)$ とする。

許容誤差 E に対して

$$|R_1 \cdot R_2 - R| < E \quad (1)$$

でなければならないから

(V) (1) 式を満足しないときは R_2 を一つ大きい方にずらしてみる。それでも (1) 式を満足しないときは順に一つづつずらしてみる。

$R_1 \cdot R_2 - R > E$ になれば R_1 を一つ小さい方にずらして同様の計算をする。

(1) 式を満足すれば一応 A、B、C、D が求まったことになるが他の条件を満足するかどうかを調べなければならない。即ち b の歯車が d の軸に、c の歯車が a の軸に触れないこと、同じ歯車を 2 個以上使わないことである。このためには軸の直径を L、モジュール m に対して、

$$\left. \begin{array}{l} C+D-B > L/m+2 \\ A+B-C > L/m+2 \end{array} \right\} \quad (2)$$

が必要である。試算では $L/m=15$ とした。故に、

(VI) (2) 式及び

$$A \neq C, A \neq D, B \neq C, B \neq D \quad (3)$$

を満足するかどうかを調べる。

(VII) (2) 式、(3) 式を満足し、(1) 式を満足すれば求まったのでそのときの歯数等を印刷する。

なお最後までみつからなかったときは、(2)、(3) 式を満足して誤差の最も少い組み合わせを印刷することにしておいた。

§ 2. 第 I 表をつくるプログラム。

N ; 歯車の個数

A [I] ; 歯車の歯数

(歯数の小さい方から順に $I=1, 2, 3, \dots, 40$ とする)

```
begin integer I, J, K, L, N, RI, RJ; 1
  array B[0:2000]; 2
  integer array A[1:100], IND[1:2000]; 3
  procedure HAKAZU(A,B,I); 4
    integer A, B, I; 5
    begin A:=IND[I] ÷ 256; 6
      B:=IND[I]-A*256; 7
    end; 8
  READ(N); 9
  for I:=1 step 1 until N do READ(A[I]); 10
  K:=0; B[0]:=0; IND[0]:=0; 11
  for I:=1 step 1 until N-1 do 12
    begin real U; 13
      U:=FLOAT(A[I]); 14
```

```
for j:=I+1 step 1 until N do 15
  begin 16
    real V; 17
    V:=U/FLOAT(A[J]); 18
    L:=K:=K+1; 19
    LL: L:=L-1; 20
    if V<B[L] then 21
      begin B[L+1]:=B[L]; 22
        IND[L+1]:=IND[L]; 23
        go to LL; 24
      end; 25
    B[L+1]:=V; 26
    IND[L+1]:=A[I]*256+A[J] 27
  end; 28
end; for L:=1 step 1 until K do 29
  begin PRINT("*"); 30
    HAKAZU(RI, RJ, L); 31
    PRINT(3, RI); 32
    PRINT(' / '); 33
    PRINT(3, RJ); 34
    PRINT('='); 35
    PRINT(6, B[L]); 36
    PRINT("*"); 37
  end; 38
end; 39
```

プログラム中、IND [I] は A、B 2 つの歯数を含んでおり procedure HAKAZU (A, B, I) によって比の値が I 番目の A、B の歯数を取りだす。このなかで 256 の数は 2^8 で 2 進法にしたとき都合がよいというだけで特別な意味はない。比の値の順序に並べるのは 20 行目の LL から 28 行目までの間で行われる。また印刷命令に改行の CRLF がないのは丁度 4 組で 1 行になるからである。

§ 3. 組合せを求めるプログラム

R 求める回転比
ERS 許容誤差
DIA 軸の直径

その他計算例では $R=0.4$ から 0.05 おきに 0.95 まで求めるようにしたので

R 1 0.4
R 2 0.95
DELTA 0.05

としてプログラムをつくった。

```
begin integer I, J, K, L, N, RI, RJ, AZ, BZ, 1
  CZ, DZ, DIA, AX, BX, CX, DX; 2
  real R, EPS, R1, R2, RA, RB, DELTA; 3
  array B[0:2000]; 4
```

```

integer array A[ 1:100], IND[ 0:2000];      5
procedure HAKAZU (A, B, I);                6
integer A, B, I;                            7
begin A:=IND[I]÷256;                        8
      B:=IND[I]-A*256                      9
end;                                         10
procedure ANS;                              11
begin SPACE( 6 ); PRINT('A/B');           12
      PRINT (3, AX); PRINT(3, BX);        13
      PRINT (1, 6, RA); PRINT ('C/D');    14
      PRINT (3, CX); PRINT (3, DX);       15
      PRINT (1, 6, RB)                    16
end;                                         17
procedure GEARS;                           18
begin real W, ERR;                         19
      integer NI, MI, NIN, MIM, S, T,
                                SW, SM;   20
      PRIAT('RATIO='); PRINT(6,R);        21
      PRINT ('ERROR b BOUND');
                                PRINT(6,EPS); 22
      CRLF( 1 );                        23
      R1:=SQRT(R); SW:=0; ERR:=0.9;      24
      for I:=1 step 1 until K do         25
        ' if B[I]<R1∧B[I+1]≥R1 then      26
          begin MI:=I; NI:=NIN:=MI       27
          end;                            28
      T:=MI+1;                          29
      REP: S:=T; R1:=B[MI]; J:=S-1;      30
      RFP: J:=J+1; R2:=B[J];             31
      W:=ABS (R1*R2-R); SM:=0           32
      if W≤ ERR then                     33
        begin ERR:=W; MIM:=MI;
                                NIN:=J;    34
          HAKAZU (AZ, BZ, MIM);          35
          HAKAZU (CZ, DZ, NIN);          36
        end;                             37
      if AZ+BZ≥CZ+DIA+2                  38
        ∧DZ+CZ≥BZ+DIA+2 ∧AZ≠CZ          39
        ∧AZ≠DZ∧BZ≠CZ∧BZ≠DZ             40
      then                               41
        begin SM:=1; RA:=B[MIM];         42
          RB:=B[NIN];                    43
          AX=AZ; BX=BZ; CX=CZ;
                                DX:=DZ;    44
        end;                             45
      if R-R1*R2>EPS then go to RFP;      46
      if W≤EPS then go to FOUND;          47
      if R1*R2>R+EPS then                48
        begin MI:=MI-1; go to REP        49
        end;                             50
      if MI=0 ∨ J =K then go to ENDN;    51
FOUND:                                     52
      if SM=0 then go to RFP;            53
      SW:=SW+1; ANS;                     54
      ERR:=RA*RB-R; PRINT (2, ERR);      55
      CRLF( 1 ); ERR:=0.9;               56
      if SW≤ 9 then go to RFP els        57
        go to L;                         58
      ENDN:                              59
      if SW≠0 then go to L;              60
      PRINT ('NO'); ANS;                  61
      PRINT (6,RA*RB); CRLF ( 1 );       62
      L:                                  63
      end;                               64
      READ (DIA, N);                      65
      for I:=step 1 until N do READ(A[I]); 66
      K:=0; IND[0]:=B[0]:=0;             67
      for I:=1 step 1 until N-1 do        68
        begin real U; U:=FLOAT(A[I]);     69
          for J:=J+1 step 1 until N do     70
            beign real V;                 71
              V:=U/FLOAT(A[J]);           72
              L:=K:=K+1;                  73
              LL: L:=L-1;                 74
              if V<B[L] then              75
                begin B [L+1 ]:=B[L];     76
                  IND[L+1 ]:=IND[L];      77
                  go to LL;               78
                end;                       79
              B[L+1 ]:=V;                 80
              IND[L+1 ]:=A[I]*256+A[J]    81
            end;                           82
          end;                             83
      START: READ(R1, R2, DELTA, EPS);    84
      for R:=R1 step DELTA until R2 do    85
        GEARS;                             86
      end;                                 87

```

比に対する組み合わせを求める計算は Procedure GEARS (18行目から64行目) のなかで行われる。得られた歯数が条件(2)、(3)式を満足するかどうかを調べるのは38行目から40行目で行われる。条件を満足し誤差が許容誤差の範囲に入れば求めたとして印刷命令の procedure ANS を呼び出して印刷する。そして同様の計算をつづけて10組まで求めるようにしておいた。

もし最後まで求まらないときは NO の文字と誤差の最小の組み合わせの歯数を印刷する。第 1 表をつくるのは第 65 行目からになっているがこのプログラムでは印刷命令が省れているので第 I 表は印刷されない。

§ 4. むすび この計算は九州大学の中央計数施設の OKITAC 5090—H によった。第 1 表だけなら

RATIO = . 600000₁₀0 ERROR BOUND .500000₁₀—5

A/B 54 70 0,771,429 C/D 56 72 0,777,778 —.23₁₀—9

A/B 54 70 0,771,429 C/D 77 99 0,777,778 —.23₁₀—9

A/B 84 110 0,763,636 C/D 77 98 0,785,714 —.23₁₀—9

A/B 57 75 0,760,000 C/D 60 76 0,789,474 —.23₁₀—9

A/B 50 66 0,757,576 C/D 99 125 0,792,000 —.23₁₀—9

は印刷し終るのに 11 分、§ 3 のプログラムでは 85 組を求めるのに 30 分かかっている。

またこの研究に九州大学の高田教授、須永助教授に懇切な御指導を賜ったことを心から感謝するとともにお世話になった計数施設の諸氏に御礼を申し上げる。なお計算結果の一部を示す。

参 考 文 献

Robert Hdeley, machinery, volume 101, (1962, august), 348.

H. G. Apsimon, I. B. M. System journal, volume 3 no 1, 1964, 95.

軟鉄の電気熔接における境界

永 田 達 郎

Boundary Layer between Matrix and Attachment of Soft-Iron by Electrical Welding

Tatsuro Nagata

Is the welding region safety, or keeps close to, in welding soft iron by electric arc? If we observe the welding region under the metallurgical microscope, then we shall find the boundary layer distincted from the both sides—the ground iron side and the welding part side.

The boundary layer remains in the same situation, before and after the heat treatment. We think that the difference between before and after the heat treatment includes the important questions in addition to the difference of a number of voids or defects.

1. 緒 言

鉄を熔接したとき、熔接部の様子がどうなっているか、うまく熔接されているか、組織が変化してはいないか、等、色々の問題が存在する。

それを調べるには、引張り試験機にかけて引張ってみる、即ち破断を行わせて強度を調べる、熔接部から切断されるか否かを試験する方法と、金属顕微鏡で組織を見る方法とがある。我々は後者の方法を採用して調べてみることにした。

2. 試料の作製

我々が最も普通に扱っている軟鉄を電気熔接してその熔接部を調べた。学生の工作実習に使われる材料をそのまま利用している。

軟鉄の板を持って来て、V字型の溝を切り、そこに電気熔接を行って、適當の大きさに切り出して表面を

Fig. 1

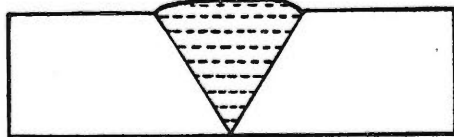
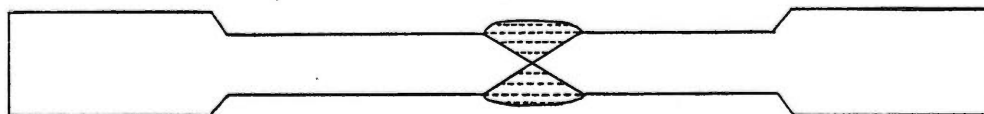


Fig. 2



3. 調査結果

引張り試験機で破断を行った後、切断された両片を電気熔接して引張る時、若し前の如く引張りのときに

よく磨いて腐蝕させて見るという順序は教科書通りに行う。

この場合、倍率は高くして見るよりも、低倍率で見の方がよいので、腐蝕液としては硝酸アルコール液で充分である。腐食した表面を少くし斜めにして見ると肉眼で、地の軟鉄と、熔接部との区別ははっきり見分けられる。

しかし、倍率を高くして組織を見る場合は硝酸アルコール液よりも、ピクリン酸アルコール液の方がきれいに見える。但しこの場合にも液の温度が余り高くないように注意すべきである。夏の室温 30°C 以上にもなる九州では特に注意して涼しいところを選ぶべきだろう。

この軟鉄の板は我々が教材用として実習の時間に使うために購入した普通の商品であるから、材質の正確な成分は不明である。又我々はそれを調べてもいない。

次に教材として引張り試験のテストピースを作ったものを、引張り試験機にかけて破断させると、それきりで廃棄させられる運命にある。これを円錐状に削って破断された両片を熔接させて、 850°C で焼なましを行って、再び引張り試験機にかけて破断させた。

出来た欠陥の部分から切れる可能性は充分考えられる。従って欠陥を取り除く操作を行っておく必要があるが、我々としては、これを唯焼なましするだけにしておいた。結果としては熔接部以外のところに破断

が生じた。従って熔接は完全であって熔接部が切れることはないものと思われる。内部に存在する欠陥は熱処理によって完全とは言えなくても、取り除かれていると見てよいからである。

テストピースは最初と熔接後とは、違った人によって引張り試験が行われたので（学生の工学実験の時間を利用して行った為）、応力・ひずみ曲線の模様は比較出来ない。又熔接後は熱処理を行っているので、それに伴う性質の変化が生じている筈であるが、軟鉄では、硬鉄程の影響は考えられないから、熱処理による影響は材質にそんなに与えていないと考えられる。従って破断箇所は、前の処女引張り試験のときに受けた欠陥——くびれ——が残っていたところで、そこに応力の集中が起きた結果破断されたと考えてよい。従って、熔接後テストピースを一様の太さに削る操作を追加してみる必要があるかもしれない。或は、引張り試験機にかけない棒で熔接を行って、処女引張りを行わせてみる必要もあるう。

地になる軟鉄と、熔接棒とは似たものを用いているから、熔接部を顕微鏡で見るとき、両者の区別は仲々つけ難い。特に倍率を高くする程その区別はつきにくくなる。

しかし低倍率のときには可成りはっきりと区別はつくものである。（写真1）。

写真1 倍率(×60)

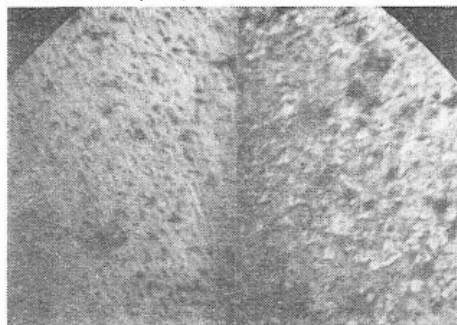
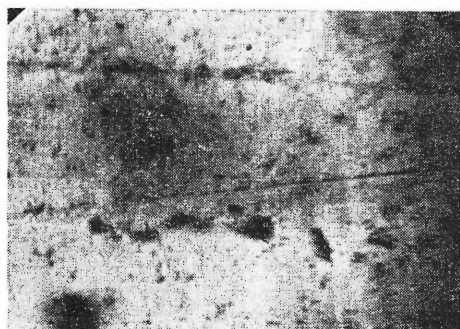


写真2 倍率(×340)



写真で右の方の、粒が大きく見える方が地の鉄であり、左の方の、粒が小さく見える方が熔接部である。

同じ鉄（地の方）を倍率を高くして見たのが次の写真2である。

これをもっと倍率を高くすると次のように見える。（写真3）。

写真3 倍率(×500)



同じ鉄を850°Cで焼なまししたものが次の写真4である。

写真4 倍率(×350)

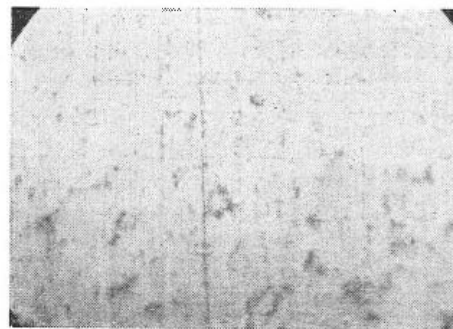


写真2と4との間には殆んど区別はつかない。従って熱処理による影響は、この場合について殆んどないと見てよいだろう。

熔接がうまく行われているか否かを顕微鏡で調べることは大切なことである。それには、僅かな部分でよいから、材料が少量でよいという点はすぐれているが、一部分だけしか見ていないので、全体的なことは掴み難いという欠点は持っているであろう。しかし調べた部分と全体とは一応同様な状況にあると見ても差支えない場合の方が多いのではないだろうか。もしそうでないなら、顕微鏡等を利用する方法は無力なものとなってしまふ。

熔接部を顕微鏡で見ると写真5のようである。

写真で左上から右下に斜めに見える（矢印）のところが元の地の鉄と熔接部との境界線である。このとこ

ろは写真では見にくい、他の場所と比べて、三角形の点が並んで見える。これは恐らく腐食孔であろうが、腐食液だけによって生ずるものではなくて、欠陥

写真5 倍率 (×50)



の為に生じた孔であると思われる。かかる欠陥が境界線上に顕著に見られるということは、もしこのままの状態では引張ったら、境界線のところに破断が生ずるだろうことを示していると見てよいだろう。境界線の熔接部側（写真では左側）は、境界線に比べて欠陥が異常に少いことも明らかに見られる。従って境界線のところには、黒い線と白い線とが並行して存在するように見える。

なお、境界線から離れると欠陥は少くなるが、地の鉄の部分には可成り存在するのに、熔接部の方には非常に少いことが見られる。

ところが、850°Cでの熱処理を行った結果は写真6のように見える。

境界線の様子が写真5と6とは明らかに違っている。写真6には境界線のところに白い線が見られず、黒い方の線のみが見られるということである。ところ

写真6 倍率(×50)



がこの黒い線も写真5に於ける欠陥の並びによる三角形の線ではないという本質的な違いがある。従ってこれは結晶粒界みたいな感じのする境界線である。

どちらの場合にしても境界線(層)の厚さは100 μ 以下である。これから見ても境界線は明瞭であり、しか

もその厚さは意外な程小さいことがわかる。

写真6から見て、焼なましを行えば、熔接の境界線での破断はまず考えられない。むしろ、何れかの側、即ち地の鉄の部分か、熔接部内部かの側で破断が起きるであろうということが考えられる。一般に境界線は結晶粒界と同様に強いと予想される。

4. 境界線についての問題

熱処理の前と後での、境界線のところに現われてきた違いは面白い問題を提起していると思う。

顕微鏡で見る限りでは、熱処理の前後での変化は境界線のところにしか現われていない。他の部分では欠陥が消えたという以外には全然変化は認められない。

熱処理によって欠陥はどこに消えたか？ 白い線(欠陥のない層)はどうして生じ、熱処理によってどうなったか？ 熱処理後の黒い線は何故見えるのか？等の問題がある。

鉄板や鉄棒を作るときに引き伸ばし、圧延等の加工操作によっている筈だからこのときに転位が出来る。転位による欠陥の数は非常に数多くあることはよく知られている事実である。又それを焼なましすることによって転位の数が激減することも良く知られている。従って熱処理の後で欠陥の数が非常に減少していることは当然のこととして理解出来る。しかし何故境界線上には他の場所と比べると欠陥が多く存在するのだろうか？ 熔接部の方は、地の鉄の部分に比べると欠陥は少いのか。という問題は どう理解したらよいだろうか？

局所的な急激な温度変化による膨脹収縮に対する地の鉄と熔接物質の両者の反応差により、境界線のところに熱応力が生じて、欠陥が境界線のところに集中したのであろう。熔接部内にも欠陥が生ずるであろうけれども、熔けた状態から冷え固まる際に、熱応力の大きい境界の方に欠陥は引き寄せられるだろうけれども、境界から離れたところはもう欠陥が移動するには温度が下がって困難になってじっとしているだろう。従って境界線というのは、熔接部と地の鉄の境界というより、地の鉄の方に存在していると考えられる。又熔接部の方の、境界線の近くに欠陥のない白い線が生ずるであろう。地の鉄の部分と熔接部との欠陥数の差は、加工度による差である。熔けたものを単に固まらせたものと、固まった後に加工した場合とでは欠陥は明らかに、後者に多いからである。

ところが熱処理を行うと、熱応力に伴う歪み応力は解放されてしまうから、欠陥という力学的理由からのみ存在し、熱力学的には不安定なものは消えて行くであろう。

しかし、全部消え去ることは期待できなくて、一部分は残るであろう。残ったものは、全体に一樣に統計的に分布するだろうから、白い線は勿論どこにも存在しなくなるだろう。

そうして境界線上にあった欠陥が消えた後は、地の鉄と熔接部との材質の違いだけが出て来て、境界線として黒い線が出ることはないだろうと思われるが、実際は明らかに地の部分とは違うように見える黒い線が存在しているのである。熱処理の時間を長くすれば、する程この境界層の厚さは、物質の熱拡散の為に厚くなって行き、そして終には地と区別がつかなくなって消えるだろうか。

それとも同じ厚さのままであろうか。

黒い線は熱処理前にもあったが、欠陥の為に、それがかくされて見難かったのが、熱処理によって欠陥が除かれた為に、表面におどり出たと見るべきか。もし

黒い線が結晶粒界と同じような性質なら、上のように考える方が無難のように思える。そうすると熱処理時間をいくら長くしても境界層は厚くはならないだろうし、又消えることもないであろう。

このどちらの考え方が正しいかは、熱処理時間と境界層の厚さとの関係を調べてみたらすぐにわかるだろう。或は表面についている汚れが溶けこんだものかも知れないけれども。今のところ境界層の成因についての疑問は解決されないで残っている。この疑問に対する説明を教えて頂ければ幸いである。

5. 結 語

この実験を行うにあたって、本校の、糸永氏を始めとする機械工場の技能員の方々と、機械科4年の学生諸君の多大の援助をうけた。ここに記し感謝の意を表す。

The Pearl の示す正しい意味

井 芹 龍 成

The Real Meaning of *The Pearl*

Ryujoh Iseri

Synopsis

A considerable number of critics and researchers interpreted and appreciated *The Pearl* as they pleased, but any of them could not satisfy me sufficiently, and especially so of the interpretation of the implication of the pearl and the pearl-flinging. I, therefore, tried here to interpret *The Pearl* originally. This novel, I believe, is a record of the grievous soul who gasps at the bottom of the society, which is at the mercy of the master race. Kino, hero of this novel, found a great pearl as big as a seagull's egg, and struggled for making a decent living against the established world, which he realized unmovable. He was completely defeated, driven to despair, and at last flung the pearl back into the sea. The pearl, however, symbolizes riches and earthly desires and a justice-loving soul. Kino attained to the divine enlightenment that his clinging to the pearl resulted in the loss of his freedom and independence and the dignity of man. Thus he threw the pearl away. This means he gave up his deep attachment and restored his freedom and independence and the dignity of man. The pearl-flinging, therefore, signifies that Kino's defeat means his brilliant victory. Maybe, I can conclude by saying that *The Pearl* is also one of a chain of works that express Steinbeck's leitmotif.

Introduction

初めて *The Pearl* を読んだのは既に10年近くも前のことである。その時、私は The fable would have provided about enough material……for an inter-chapter in *Cannery Row*.¹ といわれるほど単純なこの作品の plot (or story) と、含意豊かなその描写の流麗な realism との対照に、新鮮な感動を覚えたことを記憶している。この春、ある必要のため再びこの小説を精読して、かつて覚えた感銘を新たにすると共に、その当時、深く意識しなかったこの作品の示す意味の解釈に関して、少なからぬ興味を覚えた。Deming Brown は、the complete reversal of opinion about *The Pearl*……testified eloquently to altered times.² と述べて、時代の変遷と共に変動するロシアにおける Steinbeck 評価の絶好の証明として、*The Pearl* の評論をあげているが、私もまたこの novelette に関する

幾つかの評論、研究³に眼を通して、そこに表明されている解釈、評価の variety の豊かさに一驚を禁じえなかった。

1944年4月、*Cannery Row* が完成し、12月出版をみたのであるが、その間、Steinbeck は “The Pearl of La Paz” という novelette の筆をすすめていた。それは Steinbeck が California 湾の海洋生物採集旅行の間に耳にし、*Sea of Cortez* (1941) の中に書いていた真珠漁夫の伝説に基く作品であった。⁴ 45年の2月初めにその小説は完成していたが、10ヵ月後に *Woman's Home Companion* 誌⁴ の12月号に “The Pearl of the World” という表題で掲載出版された。そして2年後、1947年の12月、Viking Press によって、初めて単行本として出された。それは Steinbeck がこの小説から脚色した RKO 映画の封切りと同時出版であって、表題は単に “The Pearl” と呼ばれた。これが現在見る *The Pearl* の出現に至る経緯である。

Steinbeck が耳にして、“An event which happened at La Paz in recent years”として *Sea of Cortez* の中に書いた話は大体次のようなものである。

Indian 漁夫の子供が偶然信じ難いほど巨大な真珠を発見する。彼はその価値を充分に知っているのに、それを売れば一生涯好きなことができ、遊んで暮せると思い、また、それでミサを行ってもらえば、自分も親類縁者の霊も救われると思う。しかし、broker のところにそれを持って行くと、どの brokers も途方もない安値しかつけない。彼は、それら brokers が “the many hands of one head” にしか過ぎず、自分が騙されていることを知り、売ることを拒み、海岸の石の下にその真珠を隠す。その夜、彼は襲われ殴られ、意識を失い、体中くまなく捜される。友人の所へ逃げて行くと、友人ともども傷つけられ縛られ家捜しをうける。奥地に逃れると、待伏せにあい、拷問にかけられる。遂に、彼は激怒する。暗夜ひそかに “a hunted fox” のように La Paz のまちに帰り、石の下から真珠をとり出し、それを呪って海中遠く投げ捨てる。かくて彼は、靈魂の救いも、衣食住の保証も失ってしまったが、再び自由な人間となった。彼はこのことを大いに笑う。⁵

以上の話を Steinbeck は次のように批判する。

This story seems to be a true story, but it is so much like a parable that it almost can't be. This Indian boy is too heroic, too wise. He knows too much and acts on his knowledge. In every way, he goes contrary to human direction. The story is probably true, but we don't believe it; it is far too reasonable to be true.⁶

このような考えに基いて、Steinbeck は原話に幾つかの大きな変更を施し、同時にまた “I tried to write it (*The Pearl*) as folklore, to give it that set-aside, raised-up feeling that all folk stories have.”⁷と自ら述べるように、それに民話の特色を加味して、作品の効果を高めるように意図しながら、前述のような経緯を経て *The Pearl* を完成したのである。

またこの小説に関して、作家自身、If this story is a parable, perhaps everyone takes his own meaning from it and reads his own life into it...⁸ と記述するように、この作品の解釈、そして評価は、各批評家、研究者によって前記のように千差万別である。しかし、遺憾ながら、私の見た限りにおいて、その何れにも、満腔の共感を覚えるにはいささか抵抗を感じざるをえなかった。ことに、この作品説明の鍵である真珠と、真珠投棄の解釈において然りである。それ故、私はここに私自らの解釈をこの小説に加えて、敢てそ

れを “real meaning” と自負することにした。*The Pearl* をひもとき、この小論を読む読者諸賢の首肯をひそかに期待するものである。なお許せば、*The Pearl* が占める Steinbeck の作品群中における位置にも言及して行きたいと思う。

最後に、「*The Pearl* における3重の意味」の存在を指摘するソ連批評家 Levidova の所論⁹ は、この小論を構成するに当って、少なからざる示唆を与えたことを付記しておく。

I Kino のおかれた社会的現実

Watt も指摘する¹⁰ ように、作家は上述の原話を2つの方向に変更した。すなわち、その1つは、巨大な真珠の発見者である、有能ではあるが若くして無知な Indian の真珠漁夫 Kino と、彼の住む貧しく素朴なメキシコ Indian の社会、そして彼らを軽蔑し、食い物にする町医者や真珠商人の象徴するスペイン系メキシコ人の town-dwellers と、その富裕な社会との social context を、詳細に、対照的に、写實的に描写することによって、物語りの背景を豊かにし、その基盤を明確にしたことである。他の1つは、真珠の含意を拡大し普遍化したこと、すなわち、真珠を単に原話の少年の求めた selfish indulgence を可能にし、Kino 一家の物質的生活を豊かにする根源とするばかりでなく、彼を通じて Indian 種族が「閉じ込められた壺」から抜け出る足がかりともなる幼児 Coyotito の教育を実現させる源ともなし、更に、それを Kino の魂となして、不正を憎み、道理を愛好する不屈の象徴にまで高めて、その moral implications に大きな飛躍を見せたことである。

原話における巨大な真珠の発見者である Indian 少年は、*The Pearl* では、Juana の夫であり Coyotito の父親である若い真珠漁夫 Kino になる。“Kino” とは、17世紀末メキシコに渡り、メキシコ北部、アメリカ南西部において、Indians への布教と宣教地の設立に献身し、また、Lower California が半島であることを発見したイタリア生れの Jesuit 派の宣教師で探検家である、Eusebio Francisco Kino (1644~1711) に因んで名づけられたものである。また、妻の “Juana” という名前は、単に「婦人」を意味する¹¹ のであり、幼児の “Coyotito” という名称は、「かわい代理人(or broker)」を表わす¹² のものである。(これら主要人物の名前の由来を究めることは、*The Pearl* の総合的な把握の有力な手がかりの1つである。)

さて、この Kino の属する社会は、*The Pearl* の最初の表題に示されたように La Paz¹³ である。ここは California 湾口近くにある入江の南に位置し、現在、

Baja (Lower) California 地方の首府で1950年現在、人口13,000の孤立した小都市で、メキシコ本土およびアメリカ合衆国西岸へ行く船の寄港地で、近年、避寒地として知られるようになった。その主要産業は真珠漁業、なめし皮製造、魚缶製造などで、近隣の農場では、さとうきび、なつめやし、とうもろこしなどが栽培され、牧畜も行われている。ことに、この貝床から採取される真珠は、征服以後、スペイン王の戦費を賄い、ヨーロッパにおけるその権勢を支える有力な財源の1つであった。かつては、世界中の人々が La Paz の真珠貝を求めてこの地に集って来た。Steinbeck は次のように記す。…as in all concentrations of natural wealth, the terrors of greed were let loose on the city (La Paz) again and again.¹⁴と。

この市の政治・経済の実権は、1720年、この町が Jesuit 派の宣教根拠地として発足して以来、スペイン系メキシコ人の手に握られ、彼らは市の富裕階級を形成し、また Catholic Church の勢力も絶大である。土着の Indians は市の内外に極めて貧しい集落を形成して居住し、主として上述の産業の労働者などをしてその日を送っている。W. Z. Foster は1940年代のメキシコの社会情勢について、次のように述べている。「労働者は今なお、奴隷のような飢餓賃金で働かねばならないし、農民もやはり貧乏である。……(メキシコの)土地の3分の1は今なお大地主が所有し、百万をこえる貧乏なそして搾取されている農民は土地を全くもっていない。村々では相変らず高利貸が、年200から400%の高利を食っている。……大部分の工業製品が合衆国から輸入され、その値段も極めて高い。住民の暮らしも非常につまっている。国民経済省から出た資料によると、国民の半数がパンを食べず、靴をはかず、ベッドなしで直かに床で寝ている。……」¹⁵と。

Kino は La Paz の周辺に在る海浜の Indian 部落の住民である。家は、うちわさばてんの叢の中に立つ、隙間の多い粗末な柴小屋で、日々の食事は、石臼でひいたとうもろこし粉で作った焼パンと、少量の pulque (竜舌蘭酒)である。財産としては、父祖伝来の canoe 1艘で、他に何も無い。しかし贅沢を知らぬ Kino はその生活に満足している。一方、町の豊かなスペイン系の town dwellers は、石と漆食の家に住み、そこには奥まった庭園、涼しげな泉水、籠の鳥のさえずり、bougainvillea の彩りがある。このような金持連の典型として墮落した町医者が登場する。彼は “dressing gown of red watered silk that had come from Paris” をまとい、銀の器に盛った食事にも満足しない。そして、Indians を人間と見なさず、¹⁶ さそりに刺された Kino の幼児 Coyotito を、謝礼金

の不足の故に治療を拒否する人間生命より物質的価値を尊しとする人物である。また彼らの形成する社会経済的機構の1典型として、Kino たち Indians の採取する真珠を買取る broker の組織をあげる。それは “only one pearl buyer with many hands”¹⁷ であって、その目的は、真珠漁夫たちを欺いて買いたくことであり、一種の悪辣な集団組織である。このような組織は、緻密なくもの巢のように Indians を取り巻いていて、彼らはどんなに腕いてもその網の目から逃れ出ることは不可能である。

スペイン人の異民族征服は、周知のように十字架と剣を先鋒とする。1518年、Cortez の Veracruz 上陸以来、メキシコにおける Catholic の勢力は僻村の隅々にまで浸透し、「組織力をもって活動する教会の内的生命は次第にしばみつつある」¹⁸ と言われてはいるが、今なお、大体知的でない土民の間に、その精神生活において、強大な支配力を維持している。Kino たち Indians が、既存の体制の変革や現状の変更の動きを示そうとすると、神父は彼らに、

“...each man and woman is like a soldier sent by God to guard some part of the castle of the Universe. And some are in the ramparts and some far deep in the darkness of the walls. But each one must remain faithful to his post and must not go running about, else the castle is in danger from the assaults of Hell.”¹⁹

と、聖壇上より繰返し説教して、既存体制の絶対性を印象づけ、その中に存在する支配層の力の優位の固定化に貢献する。Indians はまた、このような、前述の組織に勝るとも劣らない宗教組織の網の目に内部より繫縛されて、身動きすることすら許されないのである。

Kino が真珠商人たちの欺瞞と敢然とたたかう決心をする時、彼の兄の Juan Tomás は Kino に言う、“...You have defied not the pearl buyers, but the whole structure, the whole way of life, and I am afraid for you,”²⁰と。妻の Juana はまた、このことを、Kino が「山に向かってその力を揮おうとし、海に向かってその力を究めようとする」ことであって、“...the mountain would stand while the man broke himself;...the sea would surge while the man drowned in it.”²¹と考える。これは、Kino をとり巻くメキシコ Indians 一般が、既に多年の間馴致され、忍従に甘んじて、無気力状態に陥っている姿を示すものである。

Kino のおかれた社会的現実は大体以上のようなものであるが、このような Kino のおかれた立場の確実な認識こそ、*The Pearl* を解明するに当って不可欠の

第1要件といわねばならない。それ故に、作家も前述のように流麗な realism をもって、詳細にこれを描写したのであり、また、それによって、この作品の確乎たる基礎を確立し、parable にも似た *The Pearl* の力強さを倍加して、以て、この作品を成功に導く効果の半ば²²を背負うこととなったのである。

II Kino の社会的現実認識の深化

1

物語りは、海浜の Indian 部落の柴小屋における Kino 一家の平和で素朴な早朝の牧歌的生活の描写をもって始るのであるが、突如、さそりが無心の乳児 Coyotito を刺傷する。作家はこの記述によって、平和な原始的生活が必ずしも Utopia でないことを示そうとする。しかし、Kino のこれに対する認識は明瞭ではない。

父祖代々400余年にわたる Kino の種族の忍従に関して、Steinbeck は次のように記す。

Kino's people had learned only one defence—a slight slitting of the eyes and a slight tightening of the lips and a retirement. Nothing could break down this wall, and they could remain whole within the wall.²³

この硬い忍従の殻を Kino に打破らせようとする第1の事件として、作家は彼と町医者との出会いを設定する。この場面は作品中出色の描写の1つである。

石と漆食でできた町の富裕な邸宅の屯する一郭の居住者である医者は、町の金持連の面倒を見ることで手一杯で、Kino たちの住む貧しい柴小屋の部落を訪れたことは唯の1度もない。さそりの毒に呻く1人子の Coyotito を肩掛にくるんで抱く Juana と、それに続く Kino とを先頭にして、部落の者たちの一団は、“a quick soft-footed procession” をなして、この町医者の門を叩く。医者は “Have I nothing better to do than cure insect bites for ‘little Indians’? I am a doctor, not a veterinary.”²⁴ と言って、治療代も満足に持ち合わせない土民の子の治療を拒絶する。それは予想されたことである。無知な Indian には、人道に反した医者の罪悪の深さは充分には測れない。ただ Kino はそれを、Indian である自分に加えられた侮辱として受けとり、やる術ない忿懣に、人々の去った医者の家の門扉に自分の拳を烈しく打ちつけて、ほどばしる鮮血を見つめているだけである。

このような Kino の憤りは、本質を見極めた正しい認識に基く「知的な」怒りではなく、屈辱に対する sentimental な憤りにしかすぎない。原話の少年はあまりにも賢く、理知的にすぎると評する作家の言葉を

2

思うとき、Kino のこのような発現も首肯できないことはない。だが、作家は笑いを志れ、あまりにも大真面目に、読者をすべて Kino の高さにまで引下げて、Kino に対する共感を強めようと企図する。それ故、その描写の極めて印象的であるにも拘わらず、少くとも知的な読者は、無条件の賛同に躊躇を覚えるのである。²⁵

Kino は幼児を医者にかかけたい一心で真珠採取に専心し、世にも珍らしい巨大な真珠を発見する。その news は Kino 夫婦が柴小屋に帰りつく前に、既に「柴小屋の部落を一掃し、石と漆食の町へ、泡立つ波となって溢れこんで」行く。それは教会の庭を歩く神父の許へ届き、町医者の耳に達し、そして、Indian 漁夫たちから “the lowest price the fisherman would stand” で真珠を買いたたくことを務とする真珠商人の所にも届く。そして、

The essence of pearl mixed with essence of men and a curious dark residue was precipitated...The news stirred up something infinitely black and evil in the town; the black distillate was like the scorpion, or like hunger in the smell of food,...The poison sacs of the town began to manufacture venom, and the town swelled and puffed with the pressure of it.²⁶

作家は言う、「人間は足ることを知らぬ生きものである。これは、あるがままの状態に満足する動物に勝る人間の偉大な才能の1つである」と。²⁷ Kino は巨大な真珠のあやしい白光の中に、今まで不可能なこととして諦めていた諸々の願いを夢見る。金がなくて教会で挙げてもらえなかった内妻との結婚式のこと。自分と妻と幼児とが、恥しからぬ衣服をつけ、帽子をかぶり、跣足の足に編上げの靴をはくこと。かねて欲しかった新しい鎧と rifle 銃を手に入れること。そして1人子 Coyotito の教育と、それを通じて文盲の自分たち Indians が征服者たちと対等の人間になる糸口を掴む大きな夢である。Indians にとってこのような願いは、所詮、届くことのできない高嶺の花のように見えるかもしれない。しかし、閉された社会の壁が破碎しえないことを知るとき、その社会に住むことを余儀なくされる人間が、限られたその埒内において、より良い生活を営み、機会があれば出世したいと希求するのは人の情であり、庶民のささやかな夢である。²⁸ それ故、Kino の真珠に託する夢は、分にすぎた贅沢でもなく、途方もない放縱の願望とも言うことはできない。そしてまた、彼の希うものはすべて、文

明社会の与えうる恩恵にはかならず、それを享受することは、そこに住む人間の当然の権利である。だが、今、その手中にあって、内に可能性を秘め、燦然ときらめく巨大な真珠は、Kino の願望を叶えてくれるであろうか。そして、医者、住む石と漆食の世界は、快く彼を迎え入れてくれるであろうか。

真珠を手に入れた Kino の許を最初に訪れるのは教会の神父である。彼は Kino に「汝の名は、荒野を開き、汝の同胞の心を和らげた偉大な教父に因んで名付けられた。汝これを知るや。」²⁹と尋ねる。その時、Kino はかすかに、緩やかに、細々と、“the music of evil; of the enemy” が鳴り出すのを聞く。(作家は主人公の心理の動きを音楽に託して表現する。この手法は、すでに *Cannery Row* において見られるところである。なお、この作品が映画の scenario であったことは前に述べた。) Kino は誰がこの歌を持込んだのかと隣人たちの間を見回す。神父は、Kino の突き出した掌の中の真珠の大きさと美しさに一瞬息を吞みつつ、“I hope thou wilt remember to give thanks, my son, to Him who has given thee this treasure, and to pray for guidance in the future.”³⁰と言う。Kino は黙然と頷きながら、再び耳の中に「邪悪の歌」が「真珠の曲」を打消すように甲高く奏でられるのを聞いて、真珠を確く握りしめ、疑わしげに辺りを見回す。

作家はこの描写によって、聖なる神父をも疑うに至る、財宝を手にした人間の猜疑心の昂揚を示そうとするのであろうか。勿論それもあるであろう。だが、更に、作家の意図する重要な含意は、神父もまた人の子であり、聖なる司祭の衣のかげにひそむ Mephistopheles の淡い影を、そして、神聖なその宗教の奥底に、微かにうごめく不純なものの存在を、素朴な Indian の本能が、鋭敏に、だが漠然と認知したことを示そうとするものである。

Foster は、ヨーロッパ人による西半球の征服は、「ただ自分や自分たちの階級のために、できるだけ多くのものを食ろうと思ってそれをやった」³¹のであって、そこには、暴力、流血、奴隷化、収奪、窮乏、そして社会の全般的な惨状が展開された。そして、「教会は Protestant も Catholic も、そのような征服にのり出したヨーロッパの支配階級の中でも重要な部分を占めたのだ」³²と言っている。既に第1章において述べたように、神父たちは、既存体制の変更が神の御心に反するものであり、また、神々は人間の計画を好まず、“the gods take their revenge on a man if he be successful through his own efforts.”³³と Indians に教えて、彼らが自らの力でよりよい生活

を勝ち取ろうとする意欲を内から滅殺した。しかも Indians は、神父の教えを忠実に信奉し、神父に疑念をいだくことは、すなわち、彼らにとって、神への冒瀆を意味したのである。このような状況の下において、Kino の心に萌した一沫の神父への不信任は、極めて重大な意義をもつものであり、未だ暁の空に仄めく微光にしかすぎないが、それは Kino の認識の深化と共に勢を増して、進展して行くその行動を規制する強力な軀の力を弱化する抑制剤として働いて行くのである。

3

次に Kino の小屋を訪れるのは、さきに Coyotito の診察を拒否した町医者である。彼は Indians の心理を巧みに利用して、自分と自分の医術への信頼を深めようとする。Kino も村人も、医者が何のために訪れ、何を目的として施療するかを知りぬいている。Coyotito は救われる。これがすべて医師の施術の結果であるか否かは Kino にも読者にも不明である。兎に角、Kino の財宝は医者を引付け、Coyotito の命は救われた。その限りにおいては Kino の真珠は “the Holy Grail” に比すことができる。

真珠の在処を知った医師は、その夜ひそかに夜盗を放って、その宝を奪い取ろうとする。Kino は身をもってそれを守った。Juana は、夫の額から流れ落ちる血を肩掛の端で拭きとりながら、一家の平穏無事を希う女性の本能から、次のように叫ぶ。

“This thing is evil...This pearl is like a sin! It will destroy us. Throw it away, Kino. Let us break it between stones. Let us bury it and forget the place. Let us throw it back into the sea...”³⁴

「聖杯」は今や「Niebelung の宝」に変わったのである。しかし Kino の表情は動かず、心も意志も動かない。それは財宝を手にした人間の心理であり、戦いを挑まれて退くことを潔しとしない男の意地であり、更に、“This is our chance. Our son must go to school. He must break out of the pot that holds us in.”³⁵と叫ぶとき、それは Kino の悲愴な使命感とも言うことができる。

Kino は今や、石と漆食の町に住む者たちの実体を認識した。そして、真珠を固守することによって、彼自らもまた、物欲の充足に手段をえらばない世界の闘争に参加して行こうとしているのである。だが、このことに対する彼自身の認識は、未だこの過程においては、明確さを欠いているように思われる。

Kino はいよいよその巨大な真珠を町の真珠商人に売りに行く。これは町の一大事件であり、そして Kino と Juana にとっては生涯最高の朝である。兄の Juan Tomás と並んで進む、一帳羅のぼろの白服に、大きな麦稈帽をかぶり、sandal をはいた Kino、その後、洗礼式用の衣服をきせた Coyotito を head shawl の端にくるんで抱き、婚礼式の晴衣を着け、髪に紅い ribbon を結んで従う妻の Juana たちを先頭とする一団が町へ向って進むにつれ、群集は次第にその数を増す。真珠集荷の組織は、買値を競合う自由営業の仮面の下に、実は、先述のように、1 人の boss が幾人かの配下を幾つかの事務所に配置し、Indian 漁夫から偽瞞的方法で、真珠を巻き上げる組織にはかならない。事務所の買子は、給料以外何の利益にも与からぬが、己れの職務に全力を傾注し、買叩くことに満足を味わう「善良」な男たちである。

先頭に行く Kino と 興奮した Tomás との間に、次のような会話が交される。

“You must be careful to see they do not cheat you,” Tomás said. And, “Very careful,” agreed Kino.

.....

“Before you were born, Kino,” Tomás said, “the old ones thought of a way to get more money for their pearls. They thought it would be better if they had an agent who took all the pearls to the capital and sold them there and kept only his share of the profit.”

Kino nodded his head. “I know,” he said. “It was a good thought.”

“And so they got such a man,” said Juan Tomás, “and they pooled the pearls, and they started him off. And he was never heard of again and the pearls were lost. Then they got another man, and they started him off, and he was never heard of again. And so they gave the whole thing up and went back to the old way.”

“I know,” said Kino. “I have heard our father tell of it. It was a good idea, but it was against religion, and the Father made that very clear. The loss of the pearl was a punishment visited on those who tried to leave their station....(see Note 18.)”

“I have heard him make that sermon,” said

Juan Tomás. “He makes it every year.”³⁶

そして、兄弟は歩きながら顔を見合せて、ちょっと横目をつかう。

この表情は、彼ら Indians が父祖代々やって来た、「何ものも打破ることのできない唯一の防壁」である。これはもちろん、神父の言葉への信従の表情ではなくて、忍従の表現である。われわれは前に、彼を訪れた神父に対する Kino のひそかな不信の萌芽を見た。そして今また、信仰に対する、すなわち、司祭のいわゆる神に対する Kino の隠微な不信の表明を見る。Kino が “it was a good idea, but it was against religion,” と言うとき、それは彼の理性と信仰との矛盾を表示するものである。この時すでに、Kino の心には、理性に、すなわち “a good idea” に従おうとする決意が萌していたことを、われわれは読みとらねばならない。

Kino は 4 人の真珠商人の巧妙な掛け引きに翻弄される。50,000 peso (1,440,000円) の値打ちがあると信じた彼の真珠には、最高 1,500 peso (43,200円) の価格しかつけられない。彼らの瞞着を悟った Kino は、憤然として、真珠を首都へ売りに行くことを宣言する。

わが家に帰って、寝どろの上に坐って思案する Kino へ向い、Juan Tomás は年上の分別をもって教える。すなわち、Kino の反抗は単に真珠商人に対するものではなく、「すべての組織への、一切の生き方への反抗」である。そして、例え Kino が正しくとも、正しいというだけの理由で勝負がつくものでもない。われわれは生れてから死ぬまで、棺桶にすら掛け値され、騙され通しであることを良く知っている。しかもわれわれは生き続けねばならないのだ。そして、たとえ首都へ行っても何もここと変りはないであろうし、ここでは友達や縁者がいるだけましである。しかし、その友達も、自分の身に危険や不愉快な思いをするとき、友だちではなくなるのだ、と言って、そして、“Go with God.” といいながら腰を上げる。Kino も “Go with Got.” と言いつたが、その言葉の中に不思議な冷やかさを感じとる。

Tomás の言葉によって、Kino はこれから実行しようとする自分の行動の意味をさらに明確に把握しえた。そして同時に、不幸なことに、Kino はまた自分の同胞の無気力と、連帯意識の欠如とをはっきりと認識した。生き続けるためには、彼もまた、忍従より他にとる手段は全く見出せないのであろうか。1 人坐す Kino の胸には、また、そこはかたない無力のおもいが湧き出し、灰色の絶望感が雲のように広がって行く。

その夜、小屋に迫る「黒い影」と闘って、Kino は再び深い傷を顔に受けて打倒れる。Juana は、不吉な真珠が彼らの身を滅ぼす前に、それを打砕くことを、それを元の海に投げ返すことを Kino に懇願する。彼女の声を聞いている中に、Kino の眼は再び光を取り戻して爛々と輝き、筋肉は引き締って、決意は一層強固となって行く。

今こそ Kino は、自分のおかれた世界の実相を、その眼で見、その体で realize することができた。縦横に、しかも巧妙に巡らした利潤追求の網の目、そこにひしめく物欲の徒の醜悪な姿態。正義も人道もそこでは光輝を失ない、しかも、聖なる宗教の庇護の衣が、すっぽりとそれを掩い隠しているのだ。認識は行動を呼び起さずにはやまない。貧困と異民族とが、どうして道理施行の要請の妨げとなってよかるうか。Kino は男である。真珠に託した夢は実現されなければならない。彼の使命は果されなければならない。真珠を手にした時、すでに古い世界を失った Kino は、新しい世界に分け入るよりほかに道はないのだ。そしてまた、1度 “I will go.” と宣言した時、それは現実のものとなって規制するものであり、“To determine to go and to say it was to be halfway there”³⁷ である。

5

夜明け前、音もなく起き上った Juana は、Kino の真珠を海に投返すため月光の中を浜辺へ急ぐ。気付いた Kino は、憤怒に燃えてその後を追ひ、水際に正に真珠を投げ捨てようとする彼女の腕を押えて、真珠をもぎ取り、拳を固めてその顔を殴りつけ、倒れると、その脇腹を蹴る。齒をむいて見下す Kino の顔に、彼女はありありと殺意を感じとる。しかし、彼女はそれを受入れ、逆らうことはもとより、防ぐことさえしない。やがて Kino の怒りは消え、烈しい嫌悪の情がそれにとって代る。

Juana のこのような行動は、Kino にとっては、自分の真意を解しない自己愛の結果と写ったのかもしれない。それは真実の愛ではない。しかし、女性の Juana にとっては、社会正義も、体面も、使命感も必要ではない。希うものはただ、夫の健在と、真珠を見出す前の一家の平穏な生活のみである。このような Juana は、女性の消極性、保守性の発現を示すものである。勿論、作家の女性像はここに停滞していることを許さない。

Kino はその帰途、三度、黒い男に襲われ、その男を刺殺すると同時に、自分も打倒される。真珠は彼の掌から転がり落ち、小径の石の蔭で月光を浴びてかす

かに輝いている。漸く起き上った Juana は、その真珠を見つけ、同時に、倒れている Kino と見知らぬ男の死体を認める。Kino のそばには刃の黒ずんだ短剣が横たわっている。彼女はすべてを悟った。最早、彼女が必死に希求した一家の平穏を取戻す術も消え失せてしまったのだ。Juana は、Kino の行動が、所詮は「蟻螂の斧」にしかすぎないことを女性の本能から知っていた。そして同時に、そのようなことを敢て行う者は、神か狂人であり、またそのような人間こそ、真の男であることも知っていた。そしてまた、時には女性の特色とする用心深さや保護意識が、そのような男らしさを断ち切って、一同を救うこともあることを知っていた。しかし、それも今や虚しくなってしまったのだ。彼女は忽ち過去を投げ捨てる。そして素早く死人を小径から藪蔭へ引ずり込み、Kino を介抱して、彼を励まし出奔を促す。

彼女の思慮には、さらに内に秘めた女性の力が加えられた。大事に際して内蔵した力を集中的に発揮して、勝れた判断力と積極性と決断力とを示して、挫けようとする男性を励ます女性の姿は、Steinbeck の描く好ましい女性の典型である。それは、*To a God Unknown* (1933) における Joseph の唯一つの真の理解者である彼の兄の妻 Rama³⁸ の姿であり、また *The Grapes of Wrath* (1939) における Tom Joad の母親 Ma の姿にはかならない。

同じ日の明け方、命よりも大切な Kino の canoe は、舟底に無慙な大穴を明けられ、小屋には火を放たれて焼払われる。すべての逃げ路を断たれた Kino 一家は、夜が明けてその日 1 日、Juan Tomás の家に匿われる。夕暮が迫った時、兄から贈られた食糧の袋と長い頑丈な作業ナイフを携えて、Kino は、shawl にすっぽりくるまれて眠った Coyotito を背負った Juana と共に、海岸を避けて、北に向って旅立つことになる。Tomás は Kino に言う。

“They are making a party to search the shore. The men in the city will look for you. Do you still have the pearl?”

“I have it,” said Kino. “And I will keep it. I might have given it as a gift, but now it is my misfortune and my life and I will keep it.”³⁹

.....

Juan Tomás embraced his brother...and kissed him on both cheeks. “Go with God,” he said, and it was like a death. “You will not give up the pearl?”

“This pearl has become my soul,” said Kino. “If I give up I shall lose my soul. Go thou also

with God.”⁴⁰

Kino は決然として真珠を死守することを断言する。天の賜物と思った真珠が、彼の災厄となった時、それは彼の生命となり魂となったと Kino は言う。彼の不屈の魂は、神父の教えに反し、信仰にそむいた墮地獄の魂である。しかしこの魂こそ、実は光り輝く真実の魂であり、不正をにくみ道理を愛好する栄光の魂である。これこそ正しく、形円かにして大いさ大に、その光沢の輝かしければ輝かしい程、不当の圧迫を蒙り、致命の災厄を招く、Kino の見出した巨大な真珠にはかならないのである。かくて、今やまさに、Kino にとって真珠を失うことは、彼の魂の喪失であり、生命の消滅であり、すなわち、彼の死を意味することとなったのである。

French は “This pearl has become my soul,” の表現を “somewhat baroque language”⁴¹ と評するが、これは上述の理由から必ずしも正当の評言と言うことはできない。Peter Lisca はこの表現に関して、これは、魂の束縛の救いの寓話と考えられる Gnosis 派の断章 “Acts of Judas Thomas” の中の 1 節で、通常 “The Song of the Pearl” と呼ばれ、また “The Hymn of the Soul” として知られているものにその源をもつと指摘する。⁴² Thomas Sugrue³⁴ および Joseph Fontenrose⁴⁴ もまた、*The Pearl* がこの “The Hymn of the Soul” に基いて、魂の讃歌に変形することによって、メキシコ土人の単純な民話を拡大したものだと述べる。Gnostic hymn では、(天国の) 王位にある両親が、王子 (the soul) を大波の逆巻く大海の真只中にある “the one pearl” をとりに旅立たせる。王子は変節常ないエジプト人 (this world) のために幾多の辛酸をなめ、幾度か挫折しつつ、遂に真珠(道理を尊ぶ不屈の魂)を手に入れて、王位を継ぐべく天国に帰って行く。*The Pearl* は Steinbeck によるこの神話の転倒であるという。なるほど Kino は、最初に、救いを約束する “The pearl of the World” を発見して後、世の辛苦をなめて「彼の魂となった」真珠を放棄して、元の生活に帰るのであり、一見すれば、神話の転倒のように見える。しかし、そのような結論は、決して、作家の真意を正当に解したものであるとは言えない。それは主として、真珠放棄の implication の解釈の不備より導き出された断定であり、この詳細に関しては、第四章において論究して行きたいと思う。

III 絶 望

Kino たちは Loretto⁵⁴ へ向う轍のついた砂道を足跡を気にしながら終夜歩き続け、夜が明けると足跡を

掃き消して叢林の中にかくれる。やがて Kino は 3 人の追跡者の影を認める。1 人は rifle を携えて馬に乗り、2 人は徒歩である。この 2 人は獵犬のように敏感な奥地から来た獵師で “they could follow, could read a broken straw or a little tumbled pile of dust.”⁴⁶ である。彼らが迫って来た時、Kino は真珠の価値に懐疑し、また “Perhaps I should let them take me.” と無力な絶望感に襲われる。そして、Juana の強い励ましの言葉に再び決意を新にして、西方の岩山に向って逃がれて行く。

これは “Flight”⁴⁷ における Pepe の行動に似て、周到な計画を欠いた不備な逃亡である。Pepe は空しく死んで行く。そして、それはそれなりに卓越した自然主義的効果を示している。しかし、懷に輝く真珠をいだし、胸に燃ゆる不屈の魂をもった Kino に、作家は Pepe に見た空しい滅亡を与えはしない。そしてまた、与えてはいけなものである。またこの第 6 章において、主人公の逃亡の進行に伴って展開する情景の生彩ある描写、例えば、

……Beside this tiny stream, wherever enough earth collected for root-hold, colonies of plants grew, wild grape and little palms, maidenhair fern, hibiscus, and tall pampas grass with feathery rods raised above the spike leaves. And in the pool lived frogs and water-skaters, and waterworms crawled on the bottom of the pool. Everything that loved water came to these few shallow places. The cats took their prey there, and strewn feathers and lapped water through their bloody teeth. The little pools were places of life because of the water, and places of killing because of the water, too.⁴⁸

などは、象徴主義的 realism の見事な結晶といえることができる。そしてまたわれわれは、このような描写を “Great Mountains”⁴⁹、*Of Mice and Men* (1937) などにおいて見出すことができる。

彼らは瘦せた岩石の道を登って行く。前途を危惧する Kino は、傷つき疲れた Juana を見て、自分が追跡者を山深く誘い込んで行く間に、彼女は北方の Loretto か Santa Rosalia⁵⁰ へ行くように求め、そして「うまく彼らをまけたら自分もそこへ行く。それがただ 1 つの安全な方法だ」と言う。しかし Juana は “We go with you.” と、断乎として拒絶し、その表情には、微塵の弱気も恐怖もためらいの色も見出せず、眼は更に生々と輝いている。Kino の胸には新たに力が湧き上って、歩き出した時には、最早、それは “panic flight” ではなくるのである。

女性によって甦る男性の姿。逆に、それを可能にする女性の内に秘めた力。作家はここに見るように、幾度かそれを繰返して叙述する。われわれはここで鮮かに、*The Grapes of Wrath* の last scene を思い浮べるであろう。かくてまた、われわれは、*The Pearl* によっても、Steinbeck の女性観の証しを読みとるのである。

追跡者たちは方向を見失うと、必ず円を描いてまた見つけ出すまでに時間を空費することを知っている Kino は、じぎぎに進み、時には南へ引返して跡を残し、また露出した岩を踏んで、夕陽のうすずく中を、山の Creft 目ざして登って行く。Creft には冷たい澄んだ水が噴き出て細流をなし、それが集って小さな淵を造っている。漸く彼らはその淵の1つに達する。Kino は斜面のはるか下方に、蟻よりも小さい追跡者の姿を認める。彼らは晩までにはそこに着くのである。Kino たちは、Creft の後の岩肩の一連の蝕壕洞窟の1番大きい1つに身をひそめる。追跡者たちは薄暮の頃、遂に淵に現われる。馬が最後の急坂を登れぬため、3人とも徒歩である。闇に包まれた下の汀で擦る1本のマッチの火影に、Kino は2人の男が犬のように身を丸めて眠り、残る1人が rifle をもって見張りに立っているのを認める。朝になったら、追跡者たちは必ず Kino たちを見付けて殺すのである。他に取る手段はない。先ず rifle をもった男をやっつけばあとは大丈夫である。白服を脱ぎ捨て、大ナイフを首に吊した褐色の Kino の姿は闇の中に消えて行く。

Juana は背に眠った幼児を負って、山の洞窟から覗く1羽のふくろうのように眼をこらしつつ、“the black unhuman things” に対して、Hail Marys と古来の祈禱詞を組合わせて一心に口ずさむ。

Kino は“a slow lizard”のように、また「1つの影」のように、岩肩を音もなく這い下りて下の台地に達し、いじけた棕櫚のかげに蹲るまでに長い時間がかかった。心臓は雷のように轟き、手や顔は汗にまみれる。月の出は目睫に迫って来る。彼は起ちかけた。だがその時、東の地平線の上に月の光が現れた。彼は再び身を沈めた。その眼に、20 feet 先の淵の汀に坐っている不寝番の姿がよく見えた。彼が後を見せた時躍りかからなければならない。彼は脚を踏張った。その時、丘の中腹の暗い洞窟の辺りから、幼児の微かな低い泣き声が聞えて来た。「coyote かもしれぬ」不寝番はそうつぶやいて、洞窟めがけて銃の撃鉄を引いた。銃が凄じい轟音をあげたのは、Kino がナイフを振って躍りかかって行く途中であった。一瞬の中にその男を倒して rifle を奪い、振り返りざま、坐った2番目の男の頭を「melon のように」打碎いた。3番目

の男は蟹さながらに這って淵に転げ落ちた。Kino は大股に水際に寄り、その男の双の眼の間を狙ってぶっ放した。そして、彼は、洞窟から洩れて来る鋭い悲しい hysteric な Juana の死の慟哭に、1人子の死を覚ったのである。

melodrama 的に鮮かで愚かなこの Kino の3人の殺人は、彼にとって東の間の勝利ですらなく、それはむしろ、絶望の淵に転落して行く者への加速剤にしかすぎなかったのである。rifle を奪い、幾人かを殺そうとも、追手は更に数を増して迫って来るであろう。また、たとえ何処の町へ行こうとも、そこは La Paz の市と何の選ぶところがあるのか。この世にまたとな貴重な真珠を見出し、それにも劣らぬ「災」にして輝かしい魂をもったが故に、Kino は自分を取り巻く社会の真実の相をより鮮明に認識することができた。その社会は Juana の直感のように、不壊の山岳であり、無限の深海であったのだ。闘ってその中に入り、Indian を人間として処遇させることは今や絶対に叶わないのだ。そしてまた、人を殺し、家は焼かれ、cance も打破られた今、故郷の村に帰ったとて、一体何をすることができるのか。更にまた、その教育を通じて、Indians が自由の天地に抜け出す将来の望みをそれ1つに託した、「可愛い真理の agent」Coyotito も兇弾に果敢く消えてしまったのだ。懐深く抱き持つその真珠を死守したとて、一体何の意義があるのか。四面絶望の海に沈倫しつつ、Kino は一体、何処へ行こうとするのか。

IV 敗北即勝利

2人はいつもするように、Kino を先に Juana が後に続く1列の歩き方ではなく、互に肩を並べて市へ入って来た。そして無人の境に行くように歩いて行った。黄金色に映える陽は彼らの背後にあって、2つの黒く長い影は歩くにつれて前へと伸び、彼らは“pillars of black fear”を運んで行くように見えた。Juana は Coyotito の死体を包んだ血染めの肩掛を肩にならっていた。その顔は激しい疲労でこわばり、her wide eyes stared inward on herself. She was as remote and as removed as Heaven.⁵¹そして、Kino は rifle を腕にかけ、口を固く結び顎をきつく引いて、He carried fear with him and he was as dangerous as a rising storm.⁵²そして人人は、

“The two seemed to be removed from human experience; they had gone through pain and had come out on the other side...”⁵³

と言った。

彼らは石と添食の町を抜け、柴小屋の部落には入

る。Kino は自分たちの家の焼跡にも眼を向けず、毀れた canoe の方を見ようとしな。波打際に出ると、彼は懷から巨きな真珠を取り出した。見ると、それは最早、醜い悪性の腫物のように思われた。彼は真珠を Juana の方に差し出した。彼女は低く “No, you.” と言った。Kino は力一ぱい、美しい緑の海に向かって真珠を投げた。真珠は傾く陽の光に燦然ときらめきながら、はるか彼方に小さな飛沫をあげて沈んで行った。彼らは肩を並べたまま、長い間そこを見つめて立っていた。

刀折れ矢尽きて、Kino は絶望の極限に、このようにして、真珠を見出した故郷の緑の海原にそれを投げ返した。彼は完全に敗北したのだ。真珠の投棄は、その完全な敗北の成就の表示に外ならない。そして真珠は既に彼の生命であり、魂となっていた。それ故、真珠の放棄はまた、Kino の魂の、彼の生命の放棄であり、それは Kino の消滅を、彼の死を意味する。Kino は、十字架を背負って Golgotha の丘を登った Christ のように、「黒い恐怖の柱」を抱いて、故郷の海に向った。そして Christ が死んだように、Kino もまた死んだのだ。To a God Unknown の Joseph が Christ に比せられ、The Grapes of Wrath の Jim Casy がまたそうであるように、Kino もまたここで、Christ に擬せられたものと見ることは、必ずしも妥当を欠く見解ということではできないであろう。

死は復活の前提であり、新生の start を意味する。新生とは元の生活の復元ではなくして前進であり、新生活の開展でなければならない。French は、真珠を捨てた Kino が「自分の野心を抑制して、前のつまらぬ身分を受け入れるであろうか」⁵⁴と危惧し、また、“the gesture of rejection at the end satisfies the reader who feels that, after all, the simple life is best.”⁵⁵と述べるのであるが、これは全く、真珠放棄によって表明しようとする作家の真意を掌握しえないものの世迷い言にしかすぎないものである。

Kino は真珠を発見することによって、虐げられた Indian の境界から必死に脱出しようと試み、また、そうする糸口でも掴もうと闘った。それは社会的不正への、不道理への挑戦であった。それは既成的社会体制への変革の志向である。既存体制の鉄壁は微動だもせず、また彼の行動は、身の程を弁えぬ信仰への反抗である。Kino は絶望し、打破れ、遂に真珠を放棄する。それは魂の放棄であり、生命の終熄であり、Kino の死を意味した。これこそ怒れる神の復讐であり、下された刑罰にほかならない。しかし、死んだ Christ は復活する。そのように Kino もまた甦らねばならない。

有能であるが、若くして無知な Kino の破滅は、「未だ解決する訓練の充分にできていない問題に、時期尚早に対処させられた」⁵⁶ために招いた災であろうか。いやそうではない。Kino は1度この世にまたとない財宝を入手するや、それを最後まで固執した。家を失い、canoe を砕かれ、妻を殴打し、幾度か命を狙う「黒い影」に襲われながらも、ついにそれを離さなかった。宝は彼の魂となった。それ故、それはまた、不正を憎み道理を愛好する輝かしい魂の固執である。財宝への執着は1面、人間の物欲の表明とも言えるが、同時にまた、魂への固執は正義欲とも言えることができる。かくて、Kino の固執は、善かれ悪しかれ、このような欲望への偏執であり、偏執とはすなわち、奴隷となることを意味する。も早、そこに自由はなく、主体性はない。それは人間の喪失である。

Kino は絶望の極限において、このことを豁然と大悟しえた。そして、その証しとして真珠を投棄することになったのである。それはまた、固執した魂の放棄であり、過去の Kino の消滅であり、敗北であり、死であり、同時にまた、その瞬間における Kino の復活であり、自由の、主体性の、そして人間の回復である。それは、偉大な Kino の勝利である。（「勝利」という表現は相対的言葉であって、Kino のこのような悟りの表現には相応しくないが、便宜上使用する。）“they had gone through pain and had come out on the other side.” という前記の言葉は、人間的苦悩をこえ、絶対の世界の入口に到達しようとする Kino の勝利の姿の描写にほかならない。原話の Indian の少年が、闇夜ひそかに故郷に帰ったのとは対照的に、作家が、白昼堂々と Kino たちを故郷の町に帰し、真珠投棄の “grand gesture” をさせるのは、たしかに「Hollywood の結末」⁵⁷臭くはあるが、それは Kino の回心の偉大さを表示しようとする作家の意図に出たものと思惟せねばならない。

作家はまた、大悟して後、真珠投棄のため、Kino を故郷の地に帰すのであるが、大悟した Kino は何も強いて故郷に帰る必要はないのである。作家の意図は、Kino が貧しい Indian の暮らしの中にあって、しかもそれを越えたことを示そうとするものであろう。

French はまた、この作品に関して、The Pearl was deemed suitable fare...for a woman's magazine—a bulwark of the very respectability pilloried in Cannery Row...⁵⁸と述べる。成程、The Pearl では、最終章に至るまで Kino の体面について記述される。しかし、作家は単に、人間の執着する欲望の1つとして、この「体面欲」をとりあげ、先述の物欲、正義欲などに並列するものとして記述したものと考えること

が妥当ではないかと思う。更に彼は、*The Pearl* は *The Grapes of Wrath* の中心にある熱烈な信条の反駁であるという。すなはち、...man reaches, stumbles forward, painfully, mistakenly sometimes. Having stepped forward, he may slip back, but only half a step, never the full step back.....⁵⁹ これが *The Grapes of Wrath* の信条である。しかるに *The Pearl* では、「骨折って1歩前進してほんの半歩すべり戻るのではなしに、その山の谷底まで急降下するのである。というのは、舟は打こわされ、赤ん坊は殺され、真珠は海に投げ込まれたので、物語りが始まる時にもっていたものより、物語りが終るときには、彼ははるかに少くもつに至るからである。……」⁶⁰と。何という浅薄な受容であろう。真珠の投棄によってかち取った Kino の悟りは、何ものにも比し難い宝玉であった。Kino は半歩退いて1歩前進するどころか、百歩も2百歩も前進したことを French は理解できなかったのである。

Steinbeck は、*Tortilla Flat* の paisano たちを、*Cannery Row* の Mack とその1党を、世間的な眼から見れば浮浪者であり、社会の敗残者である。だが、別の面から見れば聖者であり、殉教者であると述べた。執着心を放下し、自由の主体となりえた Kino の復活後に展開される生活は、恐らく Mack たちの生活に倣うであろう。Peter Lisca は、Both Danny and his paisanos and Mack and the boys have thrown the jewel of great price back into the sea before their stories begin.⁶¹と述べ、French はこれに対して、but there is really no evidence that they ever found a pearl.⁶²と反論する。だが、Mack たちの生活には入るには幾つかの道が存在するのであり、真珠の投棄によって示す Kino の道は、その1つにしかすぎない。それ故、Mack たちには、何も必ずしも真珠を見付け出す必要は存在しないのである。

Conclusion

偏執を捨てた生活とは、善悪苦楽に停滞しない、世と共に推移する、融通無碍の生活を意味する。人間がものに執着せず、天真爛漫に行動するとき、それは自ら人間の内に備わる自然法則と合致することとなつて、そこに人間の幸福や善が実現される世界は、ありのままの生命を肯定する、楽天的人間観に基く Steinbeck の vision であり、それは彼の幾つかの作品に、すなはち、*To a God Unknown* (1933), *Tortilla Flat* (1935), *The Grapes of Wrath*, *Cannery Row*, *East of Eden* (1952) などに、部分的に、あるいは全面的に、顕在的に、あるいは潜在的に、現われるの

を見ることができる。また、偏執を排除して虚心にものを見ようとする作家の創作態度は、*In Dubious Battle* (1936) の Burton 医師の言葉⁶³に、*The Moon is Down* (1942) の Nazis の軍人に、*A Russian Journal* (1948) に描くロシア人の姿などに、明瞭に認めることができる。このような作家の世界観は、東洋風な倫理的自然主義思想ともいえるもので、偏執生起の因と、執着の対象となる「もの」の実相というさらに根源的問題と関連して、私は Steinbeck の思想に、Veda の思想、仏教思想、老子思想などの存在を見て、幾つかの論文⁶⁴においてそれを指摘して来た。

The Pearl もまた、以上見て来たように、Steinbeck の1連の作品に見る leitmotif を印象づける作品⁶⁵の1つということができ、またそれは、物欲にうごめく複雑な社会に住む、虐げられた人間の悲痛な魂の記録⁶⁶とも言うことができる。しかし、前述のように、この作品は婦人雑誌の掲載小説であり、また、Hollywood 映画との関連作品である。それ故、不必要な誇張を所々に見る melodrama の色彩をもつことは否定できない。しかもなお、含意豊かに、見事な realism の描写の中に展開する、極度に simplify された真珠の寓話は、その対照の鮮明さの故に、また、読む者の心に忘れ難い感銘を与える novelette と言うことができるであろう。

Notes

Introduction

1. Warren French, *John Steinbeck* (New York, Twayne Publishers, Inc., 1961), p. 139.
2. Deming Brown, *Soviet Attitudes toward American Writing* (Princeton, Princeton University Press, 1962), p. 178.
3. Peter Lisca, "Steinbeck's Fable of *The Pearl*," *Steinbeck and His Critics* (1957), pp. 291~301.
Peter Lisca, "The Pearl," *The Wide World of John Steinbeck* (1958), pp. 218~230.
Warren French, "The Defective Pearl," op. cit. pp. 137~142.
Joseph Fontenrose, "The Moralities," *John Steinbeck* (New York, Barnes & Noble, Inc., 1963), pp. 111~114.
F. W. Watt, "The Later Steinbeck," *John Steinbeck* (New York, Grove Press, Inc., 1962), pp. 84~87.
Deming Brown, "From 1955 to 1960," op. cit. pp. 177~178.

J. W. Tuttleton, "Steinbeck in Russia: The Rhetoric of Praise and Blame", *Modern Fiction Studies*, Vol. XI, No. 1, (Spring, 1965), pp. 85~86.

4. A monthly magazine founded (1873) in Cleveland as the *Ladies' Home Companion*. It became the *Woman's Home Companion* in 1897 and was moved to New York City. It published both fiction and non fiction, and mainly featured popular fiction by woman authors. For a time its circulation exceeded 4 million. It ceased publication in 1956. (The Oxford Companion to American Literature and The Reader's Encyclopedia of American Literature.)

5. John Steinbeck, *The Log from the Sea of Cortez* (London, Heinemann, 1958), pp. 102~103.

6. Ibid. p. 103.

7. "My Short Novels", *Wings*, Oct., 1953, p. 8. *The Wide World of John Steinbeck*, (hereafter cited as *Wide World*.), p. 220.

8. From the preface of *The Pearl* (Bantam Edition, 1947).

9. Kino has suffered defeat in his struggle against the predators; he represents the "little man" helpless in our world—and that is the primary, socio-realistic plane of the novel. Kino rises above this defeat by doing—from the popular point of view—a proud though foolish thing; and this is the narrative's other, psychological plane.……By throwing the accursed pearl into the sea, he shows that he understands…that personal catastrophe has restored the man in him—and this forms the third and main moral-allegorical plane of the novel. [I. Levidova, "The Post-War Books of John Steinbeck", *Voprosy literatury*, No. 8 (1962), translated and reprinted in *The Soviet Review*, IV (Summer, 1963), p. 8. Tuttleton, op. cit. p. 86.]

I

10. F. W. Watt, op. cit. p. 85.

11. *Wide World*, p. 222.

12. Such interpretation, I think, is of my own, and it would help us understand the existence of Coyotito in this novel clearly.

13. See the appended map.

14. John Steinbeck and Edward F. Ricketts *Sea of Cortez* (New York, The Viking Press, 1941), p. 102.

15. W. Z. Foster, 山辺健太郎訳「アメリカ政治史概説」(上巻)(東京、大月書店、1954), pp. 490~491.

16. This doctor was of a race which for nearly four hundred years had beaten and starved and robbed and despised Kino's race, and frightened it too,……He could kill the doctor more easily than he could talk to him, for all of the doctor's race spoke to all of Kino's race as though they were simple animals. (*The Pearl*, p. 12).

He(the doctor)scattered the old women like chickens. (ibid. p. 45).

17. Ibid. p. 54.

18. 竹山道雄、『キリスト教への誤解』(朝日新聞、Oct. 16, 1966).

19. *The Pearl*, pp. 59~60.

20. Ibid. p. 70.

21. Ibid. p. 78.

22. The other half, I think, is the universalization of the implication of the pearl.

II

23. *The Pearl*, p. 60.

24. Ibid. p. 14.

25. French stated Hemingway had, of course, in transforming his great fish story made his hero stoical and indomitable instead of hysterically confused; but Steinbeck made even more wholesale changes in his source with more disastrous results. (Warren French, op. cit. p. 138.)

26. *The Pearl*, pp. 29~30.

27. Ibid. p. 32.

28. 東ベルリンのある人は「壁が無くなる日なんて絶対考えられない」と断言しながらこう言う、「内部から現在の政府を倒すこともできないし、外からの助けも望めない。そう諦めてしまったら、この枠の中で、せめて自分の生活を良くしようと思う。ある者は、もっと積極的に、この体制の中で皆く出世してやろうと考え始める。……」〔青木利夫、『「ベルリンの壁」5周年』(朝日新聞、Aug. 14, 1966.)〕

29. See this treatise at page 29.

30. *The Pearl*, p. 36.

31. Foster, op. cit. p. 44.

32. Ibid. p. 131.

33. *The Pearl*, p. 38.

34. Ibid. p. 50.

35. Ibid. p. 51.

36. Ibid. pp. 58~60.

37. Ibid p. 70.

38. Only his brother's wife, Rama—repository of all female strength and ageless wisdom—understood what Joseph was. She not only loved Joseph, she worshiped him. [From the front page of *To a God Unknown* (Bantam Books, 1955)]

39. *The Pearl*, p. 87.

40. Ibid. p. 88.

41. W. French, op. cit. p. 138.

42. *Wide World*, p. 223.

43.44. J. Fontenrose, op. cit. p. 112. Thomas Sugrue (1907~1953) was born in Conn, and was a newspaperman, critic and writer.

III

45. See the appended map.

46. *The Pearl*, p. 95.

47. One of the novellas in *The Long Vally* (1938).

48. *The Pearl*, p. 104.

49. One of the novellas in *The Red Pony* (1937).

50. See the appended map.

IV

51.52.53. *The pearl*, p. 116.

54.55. French, op. cit. p. 142.

56. Ibid. p. 141.

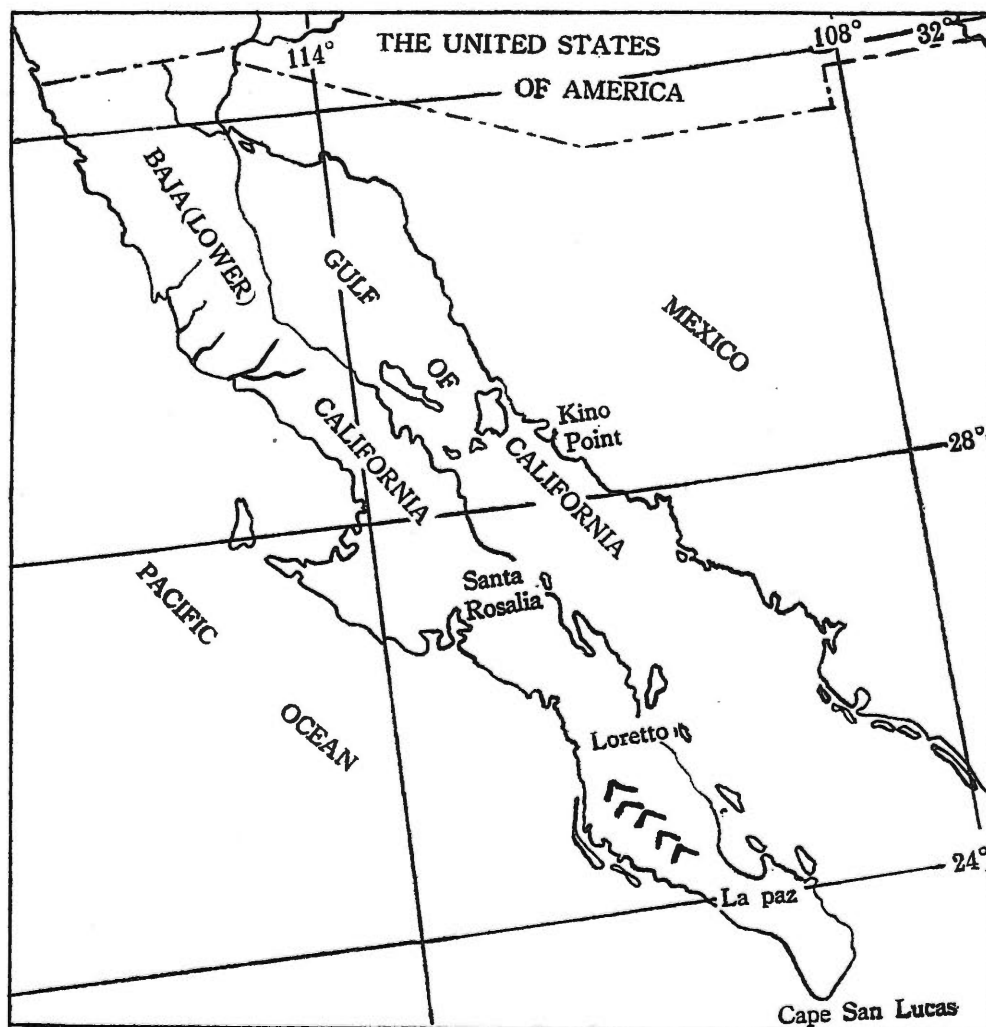
57. Ibid. p. 142.

58. Ibid. p. 137.

59.60. Ibid. p. 140.

61. *Wide World*, pp. 224~225.

62. French, op. cit. p. 140.



Conclusion

63. Steinbeck, *In Dubious Battle* (New York, The Modern Library, 1936), p. 143.

64. 『Steinbeck における東洋の影響について』 (Presented at the Public Lecture Meeting under the auspices of the Kyushu American Literature Society, Nov., 1958).

『Steinbeck の文学とインド思想』 (Presented at the 14th Meeting of the Kyushu Branch of the English Literary Society of Japan, Nov., 1961).

『Steinbeck の Leitmotif について』 (Presented at the American Literature Symposium in the 16th Meeting of the Kyushu Branch of the English Literary Society of Japan, Nov., 1963).

65. この作品によって、アメリカ的商工業社会の様式、価値に強い批判を示す Steinbeck の社会観、東洋的自然主義に関連するその楽天的人間観、既成的キリスト教に極めて批判的であるその宗教観、知的教養に疑問を示すその知性観、そして、大事に際して、秘めた力を発揮して男性を魅らせる女性を好ましいとするその女性観などを、確然と認知することができる。

66. *The Pearl*, *The Wayward Bus*, *Burning Bright*, and *East of Eden* all reflect, according to Levidova, "the idea which engrossed the post-war Steinbeck, his meditations on the individual moral responsibility of man in the struggle between good and evil." (Tuttleton, op. cit., *Modern Fiction Studies*, p. 87.)

ヒューマニストとしてのコールドウェル

西 誠 也

Erskine Caldwell as a Humanist

Seiya Nishi

Erskine Caldwell established his fame as one of the leading contemporary novelists in the United States of America by 'Tobacco Road' (1932), and 'God's Little Acre' (1933), the subjects of which are poor whites in the Deep South.

Caldwell, born and brought in Georgia, became a humanist in contact both with the poor whites suffering from poverty and hunger and with the negroes treated with cruelty by the whites.

Here, in this treatise, I will deal with thought and action of the white people against the negroes appearing in some of his novels and short stories of which the themes are illtreatment of the negro, casting a glance upon his own view on the racial problem.

は じ め に

黒人問題はアメリカにとって、宿命的なそして最も深刻な社会問題の一つであるが、アメリカの作家、特に南部に生まれ南部を活動の舞台とする作家達がこの問題をどのように眺め、どのように考えているかを作品を通して知ることは興味あるところである。そこでまず、'The Bastard', 'Poor Fool' を世に出した1929年以来、自然主義の立場で活躍してきた Erskine Caldwell (1903-) の作品を取り上げて見ようと思う。しかしまだ Caldwell の全作品について目を通していない現在では彼の黒人観の全貌を把握することは出来ない。従ってここでは、Caldwell の作品のうち 'Georgia Boy' (1943) 以前の主としてリンチ小説をえらび、登場人物の黒人観を観察してそれらをいくつかの型に類別し、そこから Caldwell 自身の黒人問題に対する姿勢を探ろうと試みた。

I Caldwell と 南 部

Caldwell は彼の自叙伝ともいえる 'Call It Experience' (1951) の Epilogue において、対話の形式で次のような問答を試みている。

Q : You write too much about poor people.

Why don't you write about the pleasant things in life ?

A : Those enjoying the pleasant things in life are fewer than those enduring the unpleasant. When this social condition no longer exists, I'll feel there is no longer any purpose in

writing about the effects of poverty on the human spirit. ¹

この回答は、Caldwell の作家的立場と彼の作品の性格をおよそ表現しつくしていると云えないだろうか。

彼は「物納小作人の地域から出たリアリスト」² と皮肉交りに批評され、「苦しんでいる人間を種にして金もうけをしている。」³ と罵られながらも、作家的愛情を貧窮した人々に注ぎつつ南部を描き続ける。彼の文学は基本的には、人道主義に根ざした、社会に対する抗議の文学である。

Erskine Caldwell は1903年12月17日 Georgia 州 Coweta 郡 Moreland に生まれた。父は、Ira Sylvester Caldwell といって、当時、長老派教会の Home Missions Board の書記をしていた。父の職業柄、その後 Carolinas, Virginia, Florida の各地を転々とし、その間数年は Tennessee 州 Tipton 郡 Atoka の近くに住んでいたこともあった。そして1918年、Caldwell が15才の時には、父は牧師として、Georgia 州 Jefferson 郡の Wrens に移っていた。Wrens は Savannah 河の30マイル西にあたり当時は人口1,200人の小さな町であったが、此処が彼の文学的修業の土地であり、また放浪の舞台ともなった。彼が South Carolina, Due West にある Erskine 大学に入学する以前に受けた正規の学校教育が、Tennessee 州の grammar-school の2年間と Virginia 州 Rockbridge 郡 Fairfield の私立学校の数カ月、そして Wrens の high school の2年間だけで、卒業するのに必要な単

位を取っていなかったという状況は、主として上述の家庭の事情によるものであったろう。

青年 Caldwell は、フットボールの選手をするほどの頑丈な体に恵まれ、高校時代・大学時代を通じて積極的で行動的であり、いろんなアルバイトをして様々な人生体験をする。——綿実油工場の肉体労働、Jefferson リポーター紙での見習、セミプロクラブの無給公式スコアラー、Augusta Chronicle 紙のレンズ通信員、Calhoun での石工の手伝い、玉突き場の事務員兼現金出納係兼小使、書店店主等々である。さらに旅行好きの彼は、或る時は父の巡回に同行し、或る時は非常に献身的な医者 of 自動車を運転して患者の家を廻り、或る時は小賢しい郡の税金査定人について農家を廻ったこともあった。

Georgia を中心とした南部で、これらの体験を通して得た青年 Caldwell の見聞が、彼の humanist としての社会正義感を育て、後日次々に書き続けて行く小説や物語りやルポルタージュの主題となっていたことは、彼が 'Call It Experience' において随所にふれているところである。

1919年の夏、Caldwell は父と2人で田舎の教会会員を訪ねたが、その時のことを次のように述懐している。

「この棉の小作地帯には、当時殆んど例外なく共通した生活の型があるように思われた。ずっと以前には、タバコがこの同じ砂と粘土の広々とした地域に栽培されていたが、今でも数条の見捨てられたタバコロード——乾燥させたタバコの葉をつめた大樽を農場から Savannah 河まで転がして行った跡に出来た広く平坦な道路が、いくつかの黒ずんだ畝の上に認められた。大抵の地主たちは Waynesboro, Louisville や Wrens といった近くの町々に比較的楽な生活を営んでいたが、田舎はどちらを向いても程度の差こそあれ貧乏人だらけだった。

時々父は何か言葉に出して云わないではおれない程の悲惨な困窮のしるしや証拠に出会うことがあった。彼は雑草で縁どられた道路に車を止め、今しがた出て来たばかりの1部屋か2部屋の破損した小作人のあばら家を棉の畑ぐしに振り返って眺めるのだった。屋根板の腐った掘立小屋には、大抵1台のベッドと床の上に敷くベッド代りの何枚かの掛け毛布、料理用の焔炉、それに背のまっすぐな引き裂かれた藤椅子が1脚あるだけだった。

『そこに住んでいる可愛想な人間は、生涯、今の状態から脱け出す機会には絶対にあり得ない。杭の穴に落ち込んだひきええと同じように全く困り切っている。人間がこのような生きなければならないというこ

とは恥しいことだ。それに、これらの子供達みんなはどうしたものだろう。彼らが大きくなったとき、彼等はどうなるだろうか。やはりまた、杭の穴の中の蛙になるのだろうか』と父は悲しそうに云うのだった。』⁴

この Georgia の荒廃した土地と、そこにへばりついている貧しい人達が Caldwell の心に与えた鮮烈な印象は、彼の長編第一作であり、また彼の代表作ともなった 'Tobacco Road' そのものによって如実に証明されるところであるが、'Tobacco Road' 誕生の経緯についての彼の感懐も彼と南部 Georgia との関係を端的に現わしているものといえよう。彼は 'Tobacco Road' の Advertisement ⁵ に当時の回想を生き生きと書くと共に、'Call It Experience' の中でも次のように述懐している。

"... I felt that I would never be able to write successfully about other people in other places until first I had written the story of the landless and poverty-stricken families living on East Georgia sand hills and tobacco roads." ⁶

南部こそ、彼の文学を育てた土壌であり、南部があるがままに描き出すことが彼の目的でもあるようだ。

II Caldwell と黒人

「南部の生活のパノラマ的描写⁷」を目的として、次々に書き続ける Caldwell の作品には、poor whites と共に、貧困に加うるに宿命的重荷を担う黒人を主題としたものが多い。この場合にも、彼は「南部の生活を自分の知っている通りに⁸」書くという執筆態度を示し、最も悲惨な lynching についても、現実を凝視して目をつぶろうとはしない。黒人問題についての violence はいわば南部の属性でもあるのだ。彼は自分でじかに目撃した黒人への暴力行為を次のように描いている。

I've seen a man beat a mule to death because the sun was hot and he was tired and tense, sick of the endless of his life. I've been in a barnyard at the end of a day in the cotton fields when the boss came over to ask why a mule was lame.

A Negro explained that the mule had stepped in a rabbit hole. The boss beat the Negro unconscious — knowing the Negro couldn't fight back. I've been an unwilling witness at a number of lynching. ⁹

彼が実際に彼の目で見た事実と、彼の小説や物語りの中に描かれた黒人虐待の情景は決してかけ離れたものではないであろう。

Louis Y. Gossettによれば、1900年から1930年までに合衆国において行われた1886件のリンチのうち90%は南部で発生しており、¹⁰ さらに1882年から1956年までの間に最も多く事件の発生したのはミシシッピー州であり、537人の黒人と40人の白人がリンチを受けたといわれる。¹¹ 同じ Black Belt に入る Georgia においても大差ない状況にあったかと推察される。事実、Caldwell がその代表的リンチ小説 'Trouble in July' を執筆した前年の1938年には、確証あるリンチが7件も起きている。¹² そして、これらの現実の serious な問題に、Caldwell がどのような態度で対し、また彼の作品の主題としたか、彼の著作態度について Gossett は次のように説明する。

"He also indicated that he intended his work to teach as well as to entertain. He does not have to say that lynching and cruelty are wrong. He can activate consciences 'by showing people oppressed to hopelessness and impoverished to hopelessness...' 13" 14

Caldwell は黒人についても、社会的正義感から問題をとりあげ、人々の良心に訴えようとしているのである。

しかし、Caldwell の黒人に対するこの態度は、やはり彼が Georgia に生れ、貧しい白人や黒人の間に育ち、父母の暖かい心情にはぐくまれた humanist のそれであることは疑いない。

彼は15才の high school 時代、はじめて自分の手で金を稼ぐ経験をした。彼は両親に内密で Wrens のある小さな綿実油工場でアルパイトの夜業をする。そこには白人の労働者、黒人、高校生などが混じって働いていたが、この工場は、いわば Wrens の情報センターの役割を果たしていた。工場内の単調な生活においては、公式ばった理屈も、人種的優越感も劣等感も消滅し、新奇な話題の提供者こそその夜の hero であつたろう。

そこで聞く諸々の話題はそのまま彼の 'Gothic horror chamber' ¹⁵ の中に豊富な南部の話題として深く貯蔵され、いつれ、創造力によって装いを凝らし、作品に登場する順番を待たせよう。

またそこでの民主的な雰囲気は、現実の中での得難い場所としてその後忘れられない想い出となって行く。彼は 'Call It Experience' の中で、次のように工場内の雰囲気を伝えている。

"Family feuds, secreted births, mysterious deaths, violent quarrels, desertions, infidelities, and scandalous love-makings were freely and exhaustive-

ly discussed through the night by white and Negro alike.

Working together in the seed house and eating early-morning lunch together on the railroad siding in fair weather and in the boiler room on rainy nights, there was no intimation of racial distinction, and everyone, white or Negro, was entitled to express his opinion and his likes and dislikes on any subject he wished. There may have been other such places, though I doubt it, but as far as I knew the cottonseed oil mill was the only completely democratic institution in town." ¹⁶

'Call It Experience' の中における黒人描写は、上述の綿実油工場での接触を描く場面と、彼が Erskine 大学在学中に Louisiana 州 Bogalusa に仕事を探しに出かけ、労働争議の渦中に巻き込まれて留置場に拘留されたとき食物を貰った中年の黒人模範留置人のこと、および留置場の窓から警察に見つからぬように父宛の手紙を投函して呉れた黒人の少年について触れたところの三箇所だけである。しかし、彼の作品の中にあらわれる黒人が、いずれも好感と、愛情と、憐憫の情をもって描かれているのは、彼の黒人に対する立場を大方説明しているものといえよう。

III Caldwell の描く白人達

Caldwell の文体の第1の特徴は、短い単語を多く用いた非常に簡潔さであり第2に目につくことは、文や節、句の繰返しが多いということであろう。

George Snell は The Shapers of American Fiction の中で Caldwell の文体に触れ、次のように云っている。

"The Caldwell style was clean, terse, though often colloquial. It had the rhythms and repetitions of humble Southern speech, and it was the product of either a fortunate natural virtuosity or a cunning craftsmanship." ¹⁷

この繰返しの傾向は、作品の主題についても、また登場人物の性格についても見られる。Alfred Kazin はこの傾向を批評して "... Caldwell, as Kenneth Burke once said, became so repetitious that he seemed to be playing with his toes ; ..." ¹⁸ と述べている。

この傾向に基き、彼の作品の中に描かれている白人達の黒人に対する思考行動を、類型的にまとめて見ることにした。それによって、Caldwell の黒人観をうかがう一助としたいのである。

1. 純粋な血を守ろうとする白人

Caldwell が南部の生活の一面をあらわすものとして書いた『Journeyman』(1935)に登場し、聖職者の偽装のかけにかくれて数々の悪事を働く無資格の巡回牧師 Semon Dye は、百姓 Horey Clay の妻 Dene を彼の胸に抱きしめながら彼女の過去における唯一度の黒人との過失を告白させる。Semon Dye が牧師の立場をかりて論じているのは、他ならぬ人種の優越感を持つ白人のいつわらぬ願いをこめている。

"This is serious, Dene. It's very serious. I don't know what God is going to do to you about it. . . . It looks to me like a white girl ought to want to stick to her own colour. There's enough yellow darkies in the country now, and there's more and more born every day. Pretty soon everybody will be the same yellowish colour if this keeps up." ¹⁹

この図は、風刺的で humorous な情景ですらあるが、この人種の偏見が瞬間的に凝縮され爆発するとき、この種の人間は、しばしば過激な人間になり、リンチの原動力となって最も悲惨な事態を引き起こしてゆく。

Gossett によれば、南北戦争後の南部人の不安の焦点は奴隷の反乱から強姦恐怖症に移り、Anglo-Saxon の純粋性を保つためにとっておかれた婦人の高い地位が、南部白人の優越感の象徴となった。白人女性と黒人との間の性的関係についての禁忌は絶対であり、白人女性を襲ったという理由で黒人を私刑にすることは、無法の暴力ではなく、未来を守る騎士道の防衛であった。²⁰ raping に類似したことであれば、それがどんな些細なことであっても、道義的論議ではこの燃焼性の高い問題を静めることは出来なかったであろう。経済的な圧迫を受け、その点では同等に打ちひしがれている poor whites が持ち得る唯一の優越感が肌の色となるとき、純粋な血が汚されたか、若しくは汚されようとしたと思ったときの狂熱的興奮はまた格別であろう。Caldwell の『Trouble in July』におけるリンチもこれらの白人達によって行なわれる。

Sonny Clark という18才の純情で真面目な働き手の少年が、日暮れ時、仕事を終えて Bob Watson の農園からの帰り道、待ち伏せていた Katy Barlow という nymphomaniac ²¹ な少女から襲われるというのが事件の発端である。Sonny が Katy から逃れようと争っているところへ Mrs Narcissa Calhoun と牧師 Felts が自動車で通りかかる。

Narcissa Calhoun は40才の未亡人で、Bible や小冊子を持って生計を立てているが、黒人をアフリカへ

送還しようという運動の最も熱心な推進者である。彼女は、黒人が物凄い速さで繁殖しているので、白人は今に生きてゆく余地がなくなるだろうという危機感を持っている。これまでは黒人を正当に扱って来たが、黒人が黒い顔をしたキリストの絵のある Bible を売り始めるに及んで事情は変わったというのである。

Sheriff McCurtain ですら黒人が黒い顔のキリストを信ずるのは、白人が顔の白いキリストを信ずるのと全く同じことだと考えるが、彼女にとっては、これは明らかに根底から白人の優越感をゆさぶる黒人の挑戦なのである。

奸智にたけ、機を見るに敏な彼女はこの事件を強姦事件として吹聴し、目下すすめている黒人送還に関する大統領宛要望書への署名運動に利用しようと計画する。violence の火は点火されたのである。何の憂哲もない農村でうちひしがれた貧乏白人達の、暑い太陽の光に濃縮された血に火を放たれたのである。そしてこの火は物凄い勢をもって拡がり、犠牲者を出すまでは静まらない。

主としてリンチ小説に描かれている白人には、大別すると多数の直情型と極めて少数の分別型とあるが、直情型は、地主、小作人を問わず、黒人にはげしく敵意を抱き、事の真相を追究する余裕もなく、すぐに直接行為に走り、ほとんど良心的呵責を感じないで最も荒々しい暴力を奮う。彼らは経済的利益得失も考えようとはしない。

『Trouble in July』に於ける Shep Barlow は典型的な短気者で、それまでも何人かの黒人を殺している。最も新しい殺人は見も知らぬ白人であって、ただ単に、彼が断りもなく自分の家の井戸の水を飲んだというのが唯一の理由であった。そしてこの事件でも、彼は自分の手で最初に Sonny の首に縄をかけたいと血眼になって探しているのである。さらに驚いたことには、暴徒達の中に、事件の真相について始めから疑いを持っている者も何人かいるし、当の Shep Barlow 自身、我が子の話を信じてはいない。彼は娘 Katy に向って "I don't believe there was no raping done around here, last night or no other time." ²² と云い、さらに "That woman who sells the tracts and you made up that tale. I ain't found no trace of that nigger you said done. It's all a big lie." ²³ と、この事件が Narcissa Calhoun と Katy のでっち上げであると、ほぼ推察している。しかし、そういう疑問が、被疑者を迫る彼の心のなかに微塵の抵抗をも与えない。そして他の殆どどの白人達も、黒人に不利になるようなことはすぐにも信用したがるのである。

彼らは Sonny を探して黒人居住区を襲い、何の関

係もない黒人 Luke Bottomly 夫婦と Amos Green の妻に集団で乱暴を働く。殊に Luke の妻の腹部にテレピン油をかけ、それに火をつけて面白がる情景はまさに異常であって、嗜虐的本能の犠牲者となっている黒人の姿をここに見ることが出来る。

さらに、Shep を中心として燃えさかる violence の火は盲目的に暴れ廻り、同じ暴徒の Clint と喧嘩を始めては「事件のことは 治安官にまかせよ」²⁴ と言う最も常識的な義父の Harris をまき添えにして倒してしまふ。

人質となった Geechee Nigger, Sam Brinson は、暴徒に引きずり廻された揚句、Sonny が捕まって漸く釈放されるが、若し Sonny が捕まらなかったら Sam は殺されるところだった。彼は釈放後もしばらくは放心状態を続ける。

一方、無実の Sonny は遂に吊し首になって銃弾をうち込まれる。

時を失しながらも、Katy は漸く悔恨の念に駆られ、Sonny の無実と、事件が Narcissa と Katy の作りごとであったことを叫びながら河を徒渉してくるが、彼女のために Sonny を殺した同じ郡衆は彼女に石を投じて殺してしまう。

violence の火は見境もなく荒れ狂い、多くの犠牲者を出してようやく静まるのである。

2. 経済的優位性を維持しようとする白人

William Faulkner は黒人問題の原因を経済的なものであると強調する作家の一人であるが、彼は 'Faulkner at Nagano' において彼の所説を次のように説明する。

"The Southern farmer can make more money when he can have peonage to do the work. If he can keep the Negro in a position where he will be content with less food than the white, man to man, will live in worse quarters than the white, man to man, will be satisfied with inferior schooling, then he will continue to work for less pay than the white man gets. The white man in my country is afraid that if he gives the Negro any advancement, any social advancement at all, the Negro man will stop working for the low wage and then he will get less when he sells his cotton, that's all it is." ²⁵

Caldwell の作品の中に、上記の不安を抱く白人の地主、農民を探して見ることにする。

'The End of Christy Tucker' の Christy Tucker は Lee Crossman の農園で働いている黒人であるが、或日の午後、地主の呼出しに応じ、ろ馬に跨がり、口

笛を吹きながら農園の事務所へやって来る。彼は呼出しが何を意味するのか未だ知らないのである。

Christy は3カ月前程、妻と2人で Alabama から始めてこの Georgia の地にやって来た。棉の小作をするのにずっとよい土地があると聞いたからだった。彼は積極的で、ただ単に生活を立てるだけでは満足しない黒人で、妻ににわとりを飼わせたり、野兎を捕えてその皮を剥いだりして小金をつくり、その金でラジオを買うなど、経済的観念の強い生活態度を備えている。それだけでも、Lee Crossman にとっては面白くない存在である。従って、これらが無断でなされたという口実だけで、Lee が何等かの処分に踏み切るには充分であった。もう一頭のろ馬ともう一式の複式プラオを提供して呉れたら、農園のどの二人を合せたよりも多くの棉を作って見せますという Christy の開口一番の言葉も、地主にとっては、作男の労働意欲というよりもむしろ反対に横柄そのものに見えるのだった。

「どうして、そのラジオを農園の売店から買わなかったのか」²⁶ という地主の問にも、「他所で買った方が、安く買えて得になりますあ」²⁷ と平気で答えるほど、彼は経済主義の男である。無断で垣根の杭を取換えるため木を伐ったことについての詰問にも、「垣根の腐った杭を新しいのに換える必要があると思ったんでさあ」²⁸ と Christy は至極当然のこのようにはっきり答える。経済的なやりくりに自信をつけている彼は、物の考え方に於て、主体性と合理性を取り戻しているように見える。しかしそれが、Lee Crossman にはますます思い上った態度に見えるのである。地主として、経済的に有利な地位を保とうとする彼には、現状を変えようとする黒人の一切の努力が認められない。

"Mr. Lee, I haven't done anything except catch a few rabbits and raise a few chickens and things like that, ... I didn't mean any harm at all. I thought you'd be pleased if I put some new pickets in your fence." ²⁹

という彼の訴えも、Lee の怒りに油を注ぐだけであった。Christy は遂に射殺される。

さらに、黒人の経済面に於ける向上に強い不満を持つ人物を 'Trouble in July' の中に探して見よう。

Sonny Clark を追って黒人居住区に踏み込み、黒人に乱暴を働いた Shep Barlow の一団の中に見出すことが出来る。彼等の一人は黒人居住区を離れながら、次のような忿瀟を漏らしている。

「黒ん坊をまた締めあげる時になっていたんだよ。一週間まえの事だが、あっしが Andrew Jones の店にはいっていたら、確かに黒ん坊の野郎が、あっしがこ

の夏中かかって稼いだよりも多くのお金をポケットにつっこんできていたんだよ。あっしよりもずっと金持ちの黒ん坊を見て、あっしは全く癪に障ったね。あんな奴がいるから悶着が起こるんだよ。やつらは白人と同じ位の、いや時には白人より高い給銀を貰っているんだ。畜生！ 此処は白人の国だぞ！ 黒ん坊があっしよりも多くの札束をみせびらかして、それでいてこちらは何にも出来ねえなんて。尋常じゃないわい。」³⁰

黒人の地位が社会的に認められてゆくことは、彼らの賃金が上昇し、生活水準が上昇することになり、白人殊に労働者としては同等の立場にある小作人達にとって、黒人は手強い競争相手となるのである。そういう意味で、追われる者の抱く焦燥感が、黒人の虐待の一つの大きな原因となっていることを Caldwell も指摘しているように思われる。

3. 黒人を単に労働力と見る白人

リンチ小説に現われる地主や農民には、既述の Lee Crossman, Shep Barlow や 'Kneel to the Rising Sun' の Arch Gunnard の如く、黒人に対して絶対的服従を求め、不服従や反抗に対しては容赦なくリンチを加える感情的な人間が多いが、黒人の労働力を評価してその取扱いを考える地主や百姓もいる。即ち、全てを白人対黒人という感情で割切る種類ではない。しかし、それはやはり黒人を人格者として認めているのではなく、単に労働力と見做しているのである。'Journeyman' に於て、巡回牧師 Semon Dye が貧農の Clay Horey の家にやって来て最初にひきおこす騒動は、色の黄色い黒人の小作人 Hardy の妻で、Clay Horey の料理女をしている Sugar をうまく手込にしようとするのだが、そこへ Hardy が彼女を取戻しにやって来る。彼は Caldwell の描く黒人の中では 'Kneel to the Rising Sun' の Clem, 'The End of Christy Tucker' の Christy と同様に主体性を持っていて、理のあることは主張することを当然とする黒人である。従って、このような場合、殆んどそうであるように Semon Dye はピストルで撃って Hardy を倒すのである。Sugar は Hardy を助けながら二人で森の中へ消えて行く。

眼前で騒動の一切の推移を見ながら、何ら為すこともなく悪徳牧師の乱行を傍観していた Clay Horay にとって、所詮 Hardy は労働力としての黒人でしかなかった。Clay は倒れた Hardy を見下ろしながら、次のように愚痴をこぼすのである。

"I don't mind seeing a dead darky once in a while, but I sure do hate to see one of my hands passing away on me at this time. It's planting time

and no other. If Hardy was to die, I'd have to get out and do some work myself." ³¹

また、'Trouble in July' の Sonny が働いていた農園の地主を Bob Watson というが、彼は Sonny のリンチに反対する数少ない白人の一人である。彼は事件の発生を知るや否や、Sheriff Jeff McCurtain に事件の発生を電話で知らせ、Sonny を暴徒にリンチさせる前に捕えて Andrew Jones に連行するか、身の安全を守るため、騒ぎがおさまるまで Sonny を厳重に拘留しておくようにと勧告する。しかし、この場合も決して黒人の人権尊重という立場に立っての発言ではない。彼は労働力としての黒人を失うまいとしているにすぎない。

"If Sonny Clark gets lynched, there won't be a nigger left on my plantation by sundown tomorrow night. Or if some of them don't run off, they'll be too scared to set out in the fields and work. My whole crop will be ruined. Don't forget this is laying-by time. I won't even be able to hire outside help if a nigger get lynched out here." ³²

Sonny を殺されることが、延いては大変な不利益につながることを読みとっているが、それは飽くまで地主本位の考え方からは出ていない。

'Trouble in July' の中に描かれる今一人の白人は、Narcissa Calhoun の黒人をアフリカへ送還する運動に反対を表明して、その理由を次のように説明する。

"The best way is just like I said, String one of them up even so often. That'll make all of them keep their place. Hell, if there wasn't no more niggers in the country, I'd feel lost without them. Besides,".... "who'd do all the work, if the niggers was sent away?" ³³

此処にも、安く使える労働力としての黒人という認識以外にはないのである。そして、この労働力を維持するための有効な手段としてリンチを正当化しようとしている。

12才の時から、親子2代の地主に仕えて一生懸命に働いた Abe Lathan に対し、年をとってきたからという理由だけで、逮捕状を取って強制的に農場から立退かせる地主 Luther Bolick も、また黒人を単に労働力と見ている人物の一人であろう。

4. 政治生命を守るために黒人の人権に目をつぶる公僕

'Trouble in July' の治安官 Jeff McCurtain は当然リンチを防止するべき立場にあるが、自分の政治生命を守ることに汲々としている男で、婦女暴行に伴う

リンチには絶対に介入しないことをモットーとしている。騒動が起こったという情報がは入るや否や、妻 Corra の勤めに従って、これまでのように最も嫌いな魚釣りに出かけようとする。事件のほとぼりがさめてしまうまで事務所を留守にしようというのである。然しこの逃避行は、途中で判事 Ben Allen に呼びかえされて失敗する。一方 Ben Allen は McCurtain に対し、一応現場に赴いて Sonny Clark を捕えるように見せかけ、情勢を見よという指示を与える。しかし、次期選挙のことを考えると、暴徒の前に出かけて彼等の反感を買うことは、いわば政治的自殺行為となる。そうだからといって今更魚釣りに行けない。

Ben Allen のところからの帰途、市庁舎の周囲を自動車で旋回しながら、Ben Allen と妻 Corra の双方に釈明出来る一策を思いつく。判事の命令を遂行中、市庁広場で、覆面をした見知らぬ男達に連行され、自分の刑務所の一室に監禁されたという想定芝居である。暗がりの中で自ら檻の中に入り、錠をおろして鍵を通路に捨て、万事うまく運んだと思って一眠りした McCurtain は、翌朝あたりの物音に目を覚す。すると、誰もいない筈の自分の獄房に一人の黒人の女がおり、また外には顔にハンケチをあてた白人達が、Sonny を出せといって鉄砲をつきつける。その後には、Corra の嫉妬した目が光っていた。結局 Sonny の人質として、彼が詐欺で捕え、すぐにも釈放しようとしていた Sam Brinson が連れ出される。そして Corra からはさんざん責められる羽目に陥る。この一見ユーモラスに見える治安官 McCurtain の身を守る態度は、結局白人の暴徒達に無実の Sonny 少年を殺させ、さらにこの事件の発端を開いた Katy Barlow をも殺させることになる。McCurtain は Sonny に対して気の毒にも思い、また自分の無力感をもしみじみと感ずるのであるが、自分の立場が脅かされる以上、彼は Sonny に対する感情を捨てねばならなかった。彼は、Sam が Sonny の身代りとして連行されるとき既に二人の黒人に対する姿勢を決めている。彼は暴徒に向かって叫ぶ。

"I wouldn't go against the will of the people if they want to catch that Clark nigger, but I'll stand up for Sam Brinson any day..." 34

彼は二人の黒人のうち、せいぜい一人しか救えないものと決めてかかっている。事実は疑わしいとしても、婦女暴行の噂が広がった以上、このリンチに手を出すことは得策ではない。暴徒といえども、彼等はすべて有権者なのである。従って彼の生き方としては逃避以外にはなかった。しかし、逃避の計画が次々に崩れてくると、彼はどうしても現実の問題に直面しなけ

ればならない。公僕としての立場に立つ彼は、Sonny に対する同情心を噛み殺し、その代償としても Sam の発見に全力を注ぐのである。

心身共に疲労困憊して失神した McCurtain は漸く意識を取り戻し、二人の治安官補にかえられながら、あくまでも彼のリンチ不介入の決意を示すのだった。

"... The cemeteries is full of politicians who didn't heed the voice of the common people, and I don't aim to be carried there before my time." 35

Caldwell はさらに 'The People v. Abe Lathan, Colored' の中で、弁護士として生きのびるために黒人の弁護を断わる Ramsey Clark を描いている。

20才の時から40年間、年々4、5枚の衣類と食糧の他には何の報酬も受けず、ただ地主のために、不平のひとつも口にせず黙々と働き続けてきた Abe Lathan は、60才になって耳も遠くなり、動きも鈍ってきた。或日主人の Luther Bolick がやって来て農場を出て行くように云う。この年令になって、Abe Lathan が此処から出て行って働けるところは他にはあり得ない。ところが Luther は、裁判所から立ち退き状と逮捕状をとって、強硬に Abe を農場から追い出し、郡役所の牢に投獄する。理由は、Abe が Luther に肉体的危害を与えると脅かしたという虚偽の訴えである。

息子の Henry は Abe を出獄させるため、この事件を引き受けてくれる弁護士を探し廻るが次々に断われ、3人目の弁護士として Ramsey Clark のところを訪ねた。

Ramsey Clark は 'Trouble in July' の治安官 McCurtain と同様に黒人を擁護し、'Nigger-Lawyer' と呼ばれて身をほろぼしたくないと思っている。それは彼の長年の経験から得たいわば処生訓なのである。さらに彼には、裁判所における審理の結果が目に見えているというのである。Ramsey は Henry に向かって、その辺の道理をこう説明する。

"... It doesn't make any difference whether Abe Lathan threatened Mr. Bolick, or whether he didn't threaten him. Abe Lathan said he wasn't going to move off the farm, didn't he?

Well, that's enough to convict him in court. When the case comes up for trial, that's all the judge will want to hear. He'll be sent to the 'gang quicker than a flea can hop..."

そして彼は、最後に "If there was money in it, it might be different." 36 とつけ加わえることを忘れた。

Ramsey の思考方法はほぼ McCurtain のそれと同類であり、共に人種を問わず市民の人権を尊重すべき立場にありながら、黒人に対しては自分の生活を維持出来る範囲内においてしか考えようとしないのである。

5. 黒人に対する良心に悩む白人

‘Kneel to the Rising Sun’の Lonnie Newsome は Arch Gunnard の農園で働いている白人の物納小作人であるが、飢えのため顎が尖って、うつむくと胸に食い込むほどになっている。妻の Hatty はすでに飢えと疲労のためにくたびれ、父の Mark Newsome はこの20年間全くのつんばで、すっかりおいぼれてしまった。そして腹にこたえるだけの食べ物がないのをいつもばやいている。まったくのところ、どうしてこれまでの間、乏しいあてがい飯で糊口をしのぎ、瘦せ衰えながら Arch Gunnard の小作人として留まっていたのかと考えもするのであるが、同じ白人とはいうものの、主人に対して要求する事が、Lonnie にはなかなか出来ないのである。彼は自分の顎が尖っているのは食糧不足のせいではないかと地主に思われることすら気がひけるのである。Lonnie の最も信頼している黒人 Clem に励まされて、やっとなことベーコンひと切れと糖密少々を貰うため Arch の側へやって来たのだが、ここでもなかなか話を切り出せないうちに愛犬 Nancy の尻尾まで切り取られてしまう。それは、Arch の変わった趣味なのである。当然の要求も、当然の抗議も、小作人でいる限り出来ないと思ひ込んでいる Lonnie である。永い間の貧乏暮らしが、このような無気力な人間にしてしまったのかとも考えられるが、一方地主の絶対的権力と小作人の立場の弱さを意識しすぎる Lonnie の性格でもあろう。

それにひきかえ、同じ小作人の黒人 Clem Henry は、白人の Lonnie が自分が Clem ほどの男であつたらとしばしば羨むほどに、主体性を持った勇氣のある男で、これまで、誰かに背中を向けて逃げたという話は一つも聞かれなかった。Arch Gunnard が Nancy の尻尾を切りとった時も、Clem Henry なら Arch にそんな真似はさせないだろうと周りに居合せた者はみんな思うのである。しかし、もしひと言でも Arch に云い返したり、少しでも出過ぎたことをしたら、Clem にとってはそれが最後だということを、彼自身も、Lonnie も、また他の誰でもが知っていた。

何も貰わずに帰ってきた Lonnie は、深夜妻の Hatty から起こされて、父の Mark が家を出て行って帰ってこないことを知らされ探しに出かける。独力ではどうしても探し出せない Lonnie は Clem に援

助を求めに行く。遂に、700 ポンドもある肥った豚の餌食になってしまった Mark のあわれな死骸が発見される。Mark は、食べ物を探して薫製所へ行く途中豚舎に迷い込んだに違いなかった。

Clem は Lonnie に地主の Arch Gunnard を呼んでこさせた。地主 Arch に対し、Clem は敢然とその責任を追及する。Arch Gunnard はすっかり逆上し暴力を振うのだが、Clem も逃げるようなことはしなかった。従って、遂に来たるべき時が来たのである。

ここで、Lonnie の態度と行動を問題にしたい。

Arch は鉄砲を取り、そして白人の小作人達を集めるため家へ走って行く。Clem は死に直面するのである。

彼は黒人ではあるが、Lonnie の頼みとする唯一の友達であり、今しも Lonnie の父の Mark を探すのに骨折ってやり、Lonnie に代って、Arch に対し Mark の死について抗議した。そして、それが原因で Arch の怒りを買ひ悶着を引き起こしてしまったのである。Clem は Arch が近所の白人達を集めている様子を目の前にして、力を貸し、味方になって呉れないかと Lonnie に再三頼む。

“If you'd only sort of help me out a little, he wouldn't. I would only have to go and hide out in that little patch of woods over there a while. Looks [like you could do that for me, being as how I helped you find your pa when he was in the hog pen.” 37

Lonnie は漸く傾くのであるが、Clem はさらに Lonnie の確かな返答を待ち続ける。

“If you're going to stand up for me, I can just go over there in the woods and wait till they get it off their minds. You won't be telling them where I'm at, and you could say I struck out for the swamp. They wouldn't ever find me without bloodhounds.” 38

Clem は Lonnie の「承知した」という返事を聞いて、森へ走って行く。

しかし、Lonnie は Arch と彼に加勢するために集って来た近所の男達にこずき廻わされながら Clem の行方をはげしく詰問されているうち、彼の意識は次第に困乱して行く。助けてやろうという Clem への約束を守ることは、友人であり且つ又恩人である Clem に対する Lonnie の信義の問題であるとともに、父を豚に喰わせた地主に対するせめてもの抵抗でもある筈である。しかし、同じ白人仲間から重ねて ‘Nigger Lover’ という言葉を浴びせられて、Lonnie は、宛も彼の良心を支えていた支柱をはずされたようにするす

ると Clem の隠処を教えてしまう。

白人達は、爪立ちしながら森へ向かって近づいていく。そして、Lonnie は、彼自身白人達の後について進んでいるのである。たちまち、銃口は一斉に火を吹き、松の木の上に隠れていた Clem は、どっと地面に落下する。

昇る太陽にひざまずき、祈るように Lonnie は Clem に対する背信に悶えはじめる。白人対黒人という極限状況に至って、結局、彼の良心は人種差別の壁を越えることは出来なかった。彼は白人であって、彼の生活を立てて行くためには、同じ白人の地主 Arch にたてつくことが出来ないという現実を無視することが出来なかった。

この時に至って、彼のなし得る Clem への償いと、地主への抵抗は、ただ空腹に堪えていくことだけだった。

"No, I ain't hungry." 39

この物語の最後に云う Lonnie の言葉である。

'Trouble in July' における百姓 Harvey Glenn も、黒人に対する良心に悩む白人の一人である。

彼は Earnshaw Ridge に住んで綿を作っている農民であるが、朝食をとって山道を降りて来る途中、昨夜来白人の暴徒に追われ、繁みの中にひそんでいた黒人少年 Sonny Clark を見つける。

Harvey は Sonny が凶器らしいものを持っていないのを確かめ、近づいて話をするようになる。Sonny は昨日の事を詳しく説明して自分は Katy に対して全く無実であることを訴える。会話を交すうち、Harvey も Sonny の言を信ずるようになるのであるが、もし自ら逃してあとで事実が判ったとき、'Nigger-Lover' のレッテルを貼られ、この土地から追われることを恐れている。だからといって群衆に引き渡したら、間違いなくその功を賞められはしても、少年がリンチを受けたあと、生涯自分自身を呪わなければならないだろうとも考えるのである。彼は処置に困って、いっそ家におればよかったと後悔する。しかし、こうした心の動揺も、Sonny からしばらく家にかくまって呉れと頼まれるに及んで一転する。Julie 郡の半数の男達がしらみつぶしに探しているとき、当の黒人少年を自分の家に囲まうことは出来なかった。Harvey は後も見ないで黙って山を下り始める。あたかも、Sonny から逃げのように。Sonny は諦め切ったかのように Harvey のあとにくっつくようにして行く。

Harvey は道を歩きながら、引導を渡すように云いふくめるのである。

"...but this is a white man's country. Niggers has always had to put up with it, and I don't know

nothing that can stop it now." 40

Harvey はもうはっきりと白人の意識を取り戻していた。Sonny は Harvey の心を読みとって、最後の願いをする。

"Mr Harvey, if you thinks you has got to go do what you says, I'd be mighty much obliged if you went and shot me down with a gun instead of turning me over to all them white men." 41

いたいけな少年の最後の訴えに、Harvey の良心はひどくゆすぶられるが、彼はやっと、"I ain't got a gun to do it with." 42 とよろめきながら答えるのである。

真面目で純情な黒人少年が、無実の罪を着せられているのを認め、気持ちの上でも可憐に思いながら、積極的に助けてやることの出来ない Harvey に、白人としての良心と人種差別感との矛盾に悩む白人の姿を見るようである。

IV Caldwell の黒人観

以上の如く、ヒューマニストとしての Caldwell が社会的正義感をもって社会に訴えようとする姿勢は、彼の作品の中に、いわば陽の当たらない場所における貧乏白人の惨状、黒人虐待を赤裸々に描き出すことによって、南部人のみならず、アメリカ国民の良心に或る種の覚醒を与えていることは間違いないことと思われる。

"Caldwell has shown a keen sense of social justice in his writings, and there can be no question but that his appallingly vivid depiction of degeneration and cruelty helped to awaken the conscience of the South." 43 という批評は、彼の社会的問題を主題とした積極的な文学活動への高い評価と受け取らるべきであろう。

にも拘らず、この人道主義的社会批判という自然主義者としての積極性の反面、あるがままに描くだけという消極性、曖昧さが彼の著作態度には含まれていることも事実であり、彼自ら表明しているところでもある。

彼は 'Call It Experience' の中で、自らの著作態度について次のように述べている。

"... when I was asked to explain the meaning of a story or novel, I could only say that it meant what it said to the reader. I had no philosophical truths to dispense, no evangelistic urge to change the course of human destiny..." 44

即ち、彼の小説や物語の解釈は読者にまかせるという態度であって、強い自己主張、明確な目的意識を欠

いた姿勢である。

この一見矛盾した Caldwell の態度が、本稿で取扱ったリンチ小説に於て、どのようなあらわれ方をしているか、彼の黒人観とも云うべき点について考えて見ることにする。

彼の主題は、個人的なものであれ、集団的なものであれ、リンチという人道的にも、社会的にも重大な問題であるが、Caldwell は、いわば加害者の立場にある白人を自ら批判し、様々の場合に於て様々の Lyncher を描き出している。即ち、極度の人種偏見を抱く白人、無智蒙昧の白人、直情的で暴力を奮う白人、黒人の経済的、社会的向上を恐れる白人、営利と半奴隷制度を維持せんがため暴力を奮う地主、自己の政治生命を守るために黒人を犠牲にする治安官、金儲けにならぬ限りは黒人の弁護を引き受けぬ弁護士、黒人を単なる労働力と見做す地主、農民等々、Caldwell は黒人問題の百面相を描いているように見える。そして、この黒人問題の象徴的言葉として 'Nigger-Lover' が頻発する。極端な人種偏見を抱く地主、貧乏白人から、黒人に対し信頼感を抱く良心的農民に至るまで、いずれも 'Nigger-Lover' という言葉にかかずらわっている。前者は黒人と白人を離反させるのに用い、後者はこの言葉によって黒人に対する良心的行動を牽制される。つまり、'Nigger-Lover' の支配する世界である。白人の良心は最後の段階に至って 'Nigger-Lover' によって完全に潰されておられ、良心によって人種差別の壁を破っている白人はなかなか登場してこない。Caldwell はこの人種偏見を最も重視しているように思われる。

一方、黒人に対する Caldwell の愛情は、Sonny Clark, Sam Brinson, Abe Lathan, Candy-Man Beechum, Handsome Brown などに見られる如く、何れも温順で勤勉な黒人において描かれ、Clem Henry, Christy Tucker, Hardy のように勇気があり、主体性のある黒人も好感をもって描かれており、はじめから出過ぎた行為に走る黒人ではない。Caldwell は自ら 'Nigger-Lover' としての立場を宣揚しているように見える。

しかしながら、Caldwell の黒人に対する理解と愛情は限りないものではない。上述の積極さの反面に現われる消極性が同時に存在している。

ここでは、黒人の内面的な苦悩や悲哀が描かれていないし、黒人のリンチに対する恐怖も単に外面的に捉えられているだけである。また、本当の意味における脱走、反逆は彼のテーマとなっていない。勇気と力と主体性を持った黒人でもすべてリンチを受け、死の壁を破ることが出来ない。白人の良心によって人種差別

の壁を破れなかったように、黒人達は精神的にも、肉体的にも人種差別の壁を破れないでいる。彼の作品の中には黒人解放といった意欲が創造されていないようである。

Caldwell はリンチというショッキングな主題を扱いながら、人種差別の矛盾について冷静で慎重であり、烈しい憤りをもって黒人の側に立つこともしないが、問題の解決の方向を示すべく自分の意見を主張することもしないのである。Caldwell は人種問題に於ける被害者としての黒人に同情し、人道的立場から白人に問題を提起しながら、一方黒人に対しては、かの農夫 Harvey が Sonny に論じたように、忍従を求めている。脱走をし、反逆をし、白人に抵抗する黒人を Caldwell は心の対象としていない。彼は 'Nigger-Lover' の姿勢をとりながらも、あくまで白人であって、白人の意識を越えることは出来ない。

かの最も serious で迫力のあるリンチ小説 'Kneel to the Rising Sun' について、Caldwell は "This was a story about the injustice of a Southern landowner in dealing with one of his white tenants ..." ⁴⁵ と述べているし、また、同じリンチ小説 'Trouble in July' についても "The story told in 'Trouble in July' was one of small-town politics and its effect on the lives and character of the people in the community." ⁴⁶ といい、正面から黒人問題を扱ったのではなく、あくまでも黒人問題は sub-plot だという態度を示しているように見える。'Trouble in July' が喜劇か悲劇か判然としない雰囲気醸成するのは、この間の消息を物語るものであろう。

結局、Caldwell は白人優位の現状を肯定しつつ、白人に反省を促し、黒人への愛情を訴えながら、黒人に対しては忍耐を求め、その上に築かれる妥協と協調を乞い願っているのではないだろうか。

Caldwell の黒人観についてのこのような仮説が、果たして成り立つかどうかを彼の後期の作品についても検証したいと考えている。

Notes

- 1 Erskine Caldwell, *Call It Experience* (A Signet Key Book) p. 185
- 2 Alfred Kazin, *On Native Grounds* (New York: Harcourt, Brace & World, Inc., 1942) p. 371
- 3 Erskine Caldwell, *Op. cit.*, p. 136
- 4 *Ibid* pp. 19~20
- 5 Cf. Erskine Caldwell, *Tobacco Road* (London: Heinemann)

Advertisement

It is good after ten years to look backward and to be able to see clearly how a novel had its beginning.

My recollection of how *Tobacco Road* had its beginning is stark and vivid.

It was in the heat of midsummer in Georgia, below the Piedmont, and I was walking along a dusty, weed-bordered, wagon-rutted road.

Here I was in my own country, among eroded clay ridges and barren sandhills, a land I had known all my life.

All around me were clusters of stunted, scrawny, scraggly cotton plants trying vainly to exist in the depleted soil.

The land was desolate.

Not far away across the fields were several tenant houses, shabby and dilapidated, two-room shacks with sagging joists and roofs. Around the buildings were groups of human beings. The children were playing in the sand.

The young men and women were leaning against the sides of the houses. The old people were merely sitting. Every one of them was waiting for the cotton to mature. They believed in cotton. They believed in it as some men believe in God. They had faith in the earth and in the plants that grew in the earth. Even though they had been fooled the year before, and for many years before that, they were certain the field would soon be showered with tumbling bursting bolls of glistening white cotton.

But I had walked along that same road and had stopped and gazed upon those same fields the previous autumn, and I did not know how many autumns before that, and I had never seen any man gather enough cotton from those stunted plants to provide himself with food and clothing.

It was not difficult to survive in summer when it was warm and balmy, and when there was the vision of cotton to look forward to in the autumn. One could always find blackberries and wild onions and, sometimes, rabbits.

But when it was fall and winter and early spring it was a different matter.

I had walked along the road in midwinter and

had seen hungry people wrapped in rags, going nowhere and coming from nowhere, searching for food and warmth, wanting to know if anywhere in the world such things still existed.

They had so much faith in nature, in the earth, and in the plants that grew in the earth, that they could not understand how the earth could fail them.

But it had failed them, and there they were waiting in another summer for an autumn harvest that would never come.

It had all happened once before. Not to these same people, but to their forefathers.

Their forefathers had seen tobacco come and flourish on these same plots of earth.

But after its season it would no longer grow in the depleted soil.

The fields lay fallow for many years.

Then came cotton.

Cotton thrived in abundance for several generations, and then it, too, depleted the soil of its energy until it would no longer grow.

First, tobacco, and then cotton; they both had come and gone.

But the people, and their faith, remained.

Darien, Connecticut. Erskine Caldwell

6 Erskine Caldwell, *Call It Experience* p. 80

7 *Ibid.*, p. 143

8 *Ibid.*, p. 38

9 Louise Y. Gossett, *Violence in Recent Southern Fiction* p. 17 ㊦ Robert Van Gelder, *A Talk with Erskine Caldwell, Writers and Writings* (New York: Charles Scribner's Son, 1946) p. 35 より引用

10 *Ibid.*, pp. 20~21 ㊦ Harrington C. Brearly, *The Pattern of Violence, Culture in the South*, ed. William T. Couch (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1934) p. 312 より引用

11 *Ibid.*, p. 21 ㊦ the Department of Records and Research at Tuskegee Institute reported in *World Almanac and Book of Facts*, 1958, p. 312 より引用

12 Warren French, *The Social Novel at the End of an Era* (Southern Illinois U. P.) p. 17

13 Louise Y. Gossett, *Op. cit.*, p. 17 ㊦ Van Gelder, "A Talk with Erskine Caldwell."

writers and writing p.37 より引用

- 14 *Ibid.*
- 15 W. M. Frohock, *The Novel of Violence in America* (Dallas, Southern Methodist University Press) p. 111
The old South of bygone literary tradition was a beautiful, sometimes cloying never-never land. The present South, in the new tradition which Caldwell is helping build, is a kind of Gothic horror-chamber.
- 16 Erskine Caldwell, *Call It Experience* p. 12
- 17 George Snell, *The Shapers of American Fiction 1798~1947* (New York, Cooper Square Publishers, I N C.) pp. 264~265
- 18 Alfred Kazin, *Op. cit.*, p. 382
- 19 Erskine Caldwell, *Journeyman* (Pan Books LTD : London) pp. 106~107
- 20 Louise Y. Gossett, *Op. cit.*, p. 21
- 21 W. M. Frohock, *Op. cit.*, p. 109
That the white girl is a dubious character with the makings of a nymphomaniac, as one member of the lynching party testifies ...
- 22 Erskine Caldwell, *Trouble in July* (Pan Books LTD : London) p. 88
- 23 *Ibid.*
- 24 *Ibid.*, p. 89
- 25 Robert A. Jelliffe ed., *Faulkner at Nagano* (Tokyo : Kenkyusha LTD.) p. 129
- 26 Erskine Caldwell, *The End of Christy Tucker in the Complete Stories of Erskine Caldwell* (A Signet Book) p. 225
- 27 *Ibid.*
- 28 *Ibid.*
- 29 *Ibid.*, p. 227
- 30 Erskine Caldwell, *Trouble in July* p. 123
- 31 Erskine Caldwell, *Journeyman* p. 33
- 32 Erskine Caldwell, *Trouble in July* p. 18
- 33 *Ibid.*, p. 123
- 34 *Ibid.*, p. 71
- 35 *Ibid.*, p. 130
- 36 Erskine Caldwell, *The people v. Abe Lathan, Coloured in the Complete Stories of Erskine Caldwell* (A Signet Book) p. 398
- 37 Erskine Caldwell, *Kneel to the Rising Sun* (A Signet Book) p. 137
- 38 *Ibid.*, pp. 137~138
- 39 *Ibid.*, p. 144
- 40 Erskine Caldwell, *Trouble in July*, p. 144
- 41 *Ibid.*
- 42 *Ibid.*
- 43 Max J. Herzberg, *The Reader's Encyclopedia of American Literature* (Thomas Y. Crowell Company) p. 134
- 44 Erskine Caldwell, *Call It Experience*, p. 104
- 45 *Ibid.*, p. 122
- 46 *Ibid.*, p. 143

同
寛政 二
丹波 国
氷上郡黒井住沙門
露白 付四
同所
幽也 二
同所
龜山住村上
浅 一
保津住
如山 六
同所村上
忠房 六
志賀住
正家 二
丹後 国
田邊住本河氏
如帶 京百韻之内二句
同所
露山 一
同所
可遊 一
露山住
重勝 二
保津住
茂春 七
同所
吉茂 六
同所
信武 一

21

福山住水野氏
福富 二
同内藤氏
愛女 一
安藝 国
ひろしま小川氏
親之三
佐伯
一等 一
同所
林吉 一
紀伊 国
玉津嶋姫 御一句
高野五室常樂院
如井 二
日向 国
同
福郷妻 一
同佐伯氏
雅矩 四
坂井氏
幾豊 二
女房
こさん 一

22

田邊住上野 狼軒ト改
竹陽 十二
金村
友次 二
西
丹誠 八
竹陽會弟
竹園 三
利忠 一
蒙頼 一
座頭
座頭
今ハ京ニ住ス
意程 四
但馬 国
寺村氏
貞行 七
備後 国
同苗
不周 一
中村氏
幕昔 十三
中路
笑西 六
橋本
白梅 四
氏重 三
村方
俊信 二
聞計 六
半山住丸田
良次 一
同苗

22

縣ノ住
樋口姓 一
松前住
松氏
吉廣 一
同苗
廣住 一
工藤氏
宣祐 一
同苗
廣謙 一
松軒子 一

23



刊記（柱刻下ノ下二十三終）

句數 千四百六十四句
發句八百九十八句
付句五百六十六
百韻寄仙ヨムシトモ二
作者 二百八十四人
延寶九辛酉曆三月吉日
村上勘兵衛元信開板

23

本國寺之住
 求法院
 覺恕一
 周孝一
 雀森住
 更誓寺
 不足三
 下桂河原町住
 加藤
 久善五
 伏見住
 烏有 付三
 山崎住
 日允上人
 應嶺住
 索笑 付一
 二法 付一句
 森脇
 道之 付二
 醍醐住
 沙門
 未辨二
 攝津国
 金龍寺
 寶賢 付句二
 同所
 一友 付二句
 同所
 紀三 付二句
 伊丹住
 竹油 付句六
 同所
 屈平 付句二
 沙門
 友雪一
 女房
 まん一
 大西 元昌ト号ス
 催笑二
 一妙 付三
 同所

19

同所
 淇水一
 同太田氏
 春知七
 同佐々部氏
 茂村一
 上総国
 新田住中村
 重賢四
 常陸国
 水戸住
 捨船隻一
 近江国
 伊香郡梅鹿寺
 海月二
 同所西山氏
 員英四
 同小嶋氏
 勝信五
 同佐々部氏
 雪窓六
 淺草住
 一怙二
 同所高木
 友和一
 同所
 公荷一
 同西山ノ
 妻一

20

同所
 越前国
 新保多田
 似猴一
 加賀国
 金沢住小杉氏
 一笑十七
 同所藤越齋
 友琴四
 同所宮坂
 德利三
 松任住
 薰烟七
 越後国
 柏崎住長井氏
 一十一
 同所
 定久二
 同所藤野氏
 重栄二
 同所
 似水二
 同所高田氏
 貞一
 山中住塚谷
 元成一
 同所村沢氏
 柳糸一

21

18

伊勢国
 補住廣田
 一色子三
 志摩国
 島羽長福寺
 雪堂一
 同所山崎氏
 藻虫四
 井坂
 自笑一
 遠江国
 横須賀住吉田氏
 品少二
 武蔵国
 江戸住
 専吟 付句一
 山田二股山本
 半入二
 同所
 一松子一
 同山村
 望交一
 同所小西
 籠耳三
 同所
 風水一

19

磯野氏同所
 昌次四
 一以
 妻一
 藤戸住山本氏
 命雅三
 同所中村氏
 長杏一
 命雅妻一
 彦根住丸山氏
 花薪四
 陸奥国
 仙臺住
 千田一
 若狹国
 小濱住河越氏
 今武五
 柳川ノ住中村氏
 一以八
 同所住上林
 自悦二
 同所山本
 治之一
 同所村居
 宗孝一
 彦根住竹原
 不障六
 彦根座頭
 美代都三
 津輕住深井
 尹安一
 同
 可順一

20

吉十	水口少人	濱崎	利直	一	一	四	二	岸上	意叶	一	野村	方由	一	利勝	六	岩根	知光	二	渡辺	松	一	女	常治	一	三浦	昼風	一	中尾	正吉	二	小野	是笑	三	梅原	自省	四	如律	十一	内海	守定	一	高橋	可笑	一	出口	貞木	三	清水	玄令	一付三	奥田	良胤	五	増尾	肯清	八	
春松	福田	家次	二	二	一	兼軌	正範	一	村上	一	内藤	宗清	一	梅	二	女	良寛	一	岡崎	為信	四	頓宮	たり	二	女	立可	二	近藤	宗直	四	廣瀬	葦船	五	仁木	一湖	二	沢井	憲徳	一	河村	正長	四	川井	何定	二	高木	露程	七	貝田	宗長	三	小原	玄真	二	井上	俊和	二付二

16

木竹 一
員昌 三
夢露 一
伏神 一
信之 六
宗友 一
岩菊 一
膠柱 一
一方 二
微笑 一

松竊 三
作雲 一
詠人不知 三
浄延 二
哥全 一
一洞 二
香薰 一
竊聲 一
宜春 一
林虎 一

15

可陰 一
幽月 一
一齊付 一
重貞 一
柳雪 一
獨樂 一
松月軒 二
可卜 二
小沢 一
維經 一
藤田 一
鏡知 一
高橋 一
正直 二
加納 一

重利 二
松賢 一
暮山 五
一睡 二
安宜 五
新家 一
重政 一
富貞 二
池川 一
卜志 一
片岡 一
一志 一
林 一
定重 一
西村 一

17

似船 百仙等合八十
柳燕 百付ノ内十二
石津 百付ノ内十二
奥村 百仙百内付三十五
片金 一
一笑 一
淨閑 (ママ)
水龍 一
松軒 四
寸志 二
西川 可周 付ホク二

16

愚道 一
雲也 一
照廣 一
自笑 一
西六条
此夕 三
桑蓬 一
萩露 四
延香 一
升方 一
重正 一
一治 一
一松 一
松琴 一
松陰 二
完車 二
十悦 一
一思 六
昨夢 一
定政 一
一頼 一

18

17

はつ嵐隔子を潜る露涼し
女一孺がたもとハ尾花乱れて
灯心や胸にかゝけて指油
夜店の四一面楚哥きこゆ也
曲弾乃せんじゆ三線はづませて
五濁の水にひたすかし床
灌頂の經木ながれて花さひし
武一運長一久神一國乃春

功德池乃豆腐の湯にて髪洗
婆は四一大乃かけ乞いそがし
老和尚示しをうくる丹後鱒
浦嶋の子があくる書簾笥
こづかひ乃銀一浪搜す蓬萊に
五一色の真一桑七一班の茄子
木下に冠正さぬけし人形
糸むすぶるゝからくりの須弥
醍醐味や焰ノ寶糖を煉ル
たれ柳下恵が樂をしらん
利に走る伯夷ハ隘し蕨縄
月影ながす孤一竹のうけ樋

軒 船 硯 春 石 龍 燕 海

軒 山 硯 船 春 石 龍 燕 海 軒 山 硯

13

12

安 樂 音 句 引
山城 國 京
釣軒 百韻ノ内十二
東六条小野 百韻ノ内十一
鉄硯 ツケ廿三 付句二十 百韻寄仙ノ内
同所池田 百韻ノ内十一
玉龍 百韻ノ内十一
沙門 秀海 百韻ノ内五 付八
玄竹 一
國領 慶命 五
瀧 方山 百韻ノ内十二
和田 貞則 三
女房 菅 四
明山 薄古 ツケ三
坂上 松春 百韻ノ内十一
富田 員明 ツケ十四
玄鶴 西崎ニ 二十一
野口 宗領ト号 ツケ廿二
但廣 二

似船 十四
柳燕 十二
釣軒 十二
玉龍 十一
丹後たなへ 如帶 二
鞭石 十一
松春 十一
方山 十
鉄硯 十一
秀海 五
執筆 一

14

13

女房 滋 二
阿形 自笑 ツケ一
同所高橋 正伯 ツケ三
同平井 長友 二
同岡村 了意 付四
奥田 松以 四
井狩 友静 付七
石野 重好 付六
速水外記 石虎 付一
中尾 信行 一
竹原 嘉保 三
本嶋 綱轉 一
横山 自笑 九
富尾 嘯琴 七
宮崎 小石 一
女 ミね 一
しまもと 重高 付二
女 くめ 一
堀江 林孝 五
頼明 四
女房 紅 二
西六条田中 可仙 二
同粉川 貞尚ト改 豊久 面 三十九
同綴村 豊武 ツケ五
同所 教俊 一付句
岸田 貞隆 二
青木 春澄 十五
神原 伊安 八
夏木軒 重尚 付二
中尾 久把 二
慶命男 彦五 一
小西 嘯洞 五
多田 一步 一
池永 碧水 一
ひかし六条 夕烟 一
田中 宗有 一
神足 重治 一
土橋 之隅 五
水谷 宜秋 五
公同 二

15

14

灰吹乃測に投こむせるの皿
張良をよくはな紙乃浪
韓信がうち股くぐる蠟葉
前きんちやくに砂いれて恋
強き添寝加持力を以て爲し綿
横川乃僧都拳屋抱こむ
箱御園なミだかぞへて五言四句
樂天山に對して往事を思ふ
迦羅乃月烟さひしき香炉峯
くミ紐の萩 一条ノ院
爪とぎぬ命婦ノ殿鴈聞て
碧ノ岩乃屏風たむむ白浪

鉄硯 執筆 燕 船 龍 軒 石 帶 山 春 硯 船

9

客送る雲ノ門乃花も根に歸リ
蜀ノ山元としてつゝじの明松
二南陽に桶の輪碎く暮ノ春ノ日
諸葛吟じていかる蛇の鮓
まな板の戦一場に臥八岐の蛸
圖ノ山うしろに四糸乃河原
藏の窓月雲披く明ほのに
こしもとのりんしたふ松虫
愛着乃中拔草履薦まとふ
駕補園乃下に六塵の境ノ界
磯ノ枕電光石火はくち飛フ
蝸牛のつ乃を鬼の諍ひ

燕 石 軒 龍 春 山 硯 船 石 燕 龍 軒

10

源三位頼政そへて五天ノ王
大内山乃守やけんくハ大將
榎の木から唾吐かくる雲の風
蚤を虚空に毛のはへた腕
見よ鐘僧生腦穿つ劍ぬきて
玉ノ妃乃ミがくなまり香ノ合
枕の夢銀盤峙つ驢ノ山の雪
廊ノ腰緩ク廻ル 三ノ重帯
首引よのつけにかへす後ノ堂
喚鐘ひびく鼻捻乃勢
乗會乃客ノ船に到ル芝居者
京橋の霜おしろいの秋

船 春 山 硯 燕 石 軒 船 春 龍 硯 山

10

駒撒乃桐の葉踏て針うりハ
紙ひようぐの仏引接の月
八重霧や雖ニモ十惡一懺悔乃風
毛をりの類ひ 殺ノ生の山
直ノ白乃浪をうたする花乃幕
霞横きりて樽瀧を落す
三しき石飛ヒ 春を告たる大玄関
東ノ坡が筆にきえる鶯
雪淡ク斗ノ牛の間徘徊す
風ノ師を乗る水ノ輪寒し
山遠シテハ雲一筋の薬を埋ミ
滑乃けふり踵をめぐる

龍 燕 春 石 軒 山 硯 船 燕 船 秀海

11

下三ノ里灘の塩ふた臆こえて
いり日をあらふ紅乃ゆぐ
大夫禿松乃葉ごしの中ニ階
平ノ沙ノ艶書本ノ国寺ノ晚鐘
貝付乃判金あかる恋の測
珊瑚の枕浪にあらずな
松嶋や嶋縹子むすふニ割
縹乃羽がひに役者座をくむ
雲遠ク旧里にかへる馬のきり
咸陽宮より隣を乃ぞく
玉手箱開ニ粧鏡一よめりさかり
契話一望ノ姓夢を買こむ

春 燕 龍 石 海 硯 山 船 燕 軒 石 春

11

播磨とて思ひの間屋明石浦
血にてをしたる印南野の色
偕老を風にここのる女郎花
鹿より落てこまがねをよむ
尾上の月重る雲を疊の縁
ふき板くもる港向乃山
すり鉢の鳴神渡り體を裂
第六天より車海老とどろく
花乃精美女と変して座敷問
連ノ理の衣桁葛籠さく藤
はさミ箱密夫かくす朝かすみ
鸚鵡啄ム出かハリ乃夢

軒 船 山 硯 海 軒 船 燕 龍 石 春 船

12

鹿に乗墨子くるわに鞭打て
 ぼくりのはな緒 動し思ヒ
 うき契くまで乃爪を放ちけり
 邪姪乃惡鬼むすぶはち巻
 かげま流轉をよそ一念五百兩
 昔一在靈山迦羅の油一駄
 あし打の殿われたり神一力に
 和光の刃 伊勢一丸をぬく
 清る月たまご開關鶏合セ
 照一嗽 あさ書の霞
 如一是我一聞金泥の花紐ときて
 阿難とびこむ岸の山ぶき

提婆達多浪をりかくる扇一網
 爪さきの毒一地 船をたたく
 世に乃 歌曰クものねたミ
 むすびとめよ涕の真珠
 ひとり娘鼻血岩こす朝嵐
 哀猿雲にあつ灰をまく
 瑤臺に豆腐箱満月もりて
 肉一山のすゝき 枕生ぬく
 きりくす童子が築地踏くづし
 青一女吹かく 三十一尺の霜
 落葉衣水巴なす紺かきて
 大井川うつす半切乃浪

硯石船 硯石船 硯石船 硯石船

3

あがり膳參酢をのぼる鵜飼舟
 うらつけはかま嶋はなれゆく
 風呂敷や豊後しほりの玉鬘
 役一者鬘黒花に恋さく
 物おもへば袖に水とる二月堂
 春日いたゞく天一目乃影

似船 十二
 鞭石 十二
 鉄硯 十二

酒代とや花は生れん五百兩
 驚の果よりいづる七賢
 雪有ッて風客を呼春明て
 賦 何 礫よこ雲乃空
 膝たてゝ先扇抜きりくす
 夕をながす曲鞠乃月
 一葉に鋸屑飛てかし座敷
 化一狄がつくるからくり人形
 箱入の夢を岐伯乃樂ひに
 恋慕湯二貼生房二片

硯石船 硯石船 硯石船 硯石船

4

祈禱乃事西方大夫北一 向夜叉
 中一央かほる 梅一氏乃風
 卓乃上龍吟ずれば薄霞
 氷をときし驚峯の説法
 春を汲茶堂の明一 恵谷の戸に
 はミ出しを硯硯屋乃文一 覺
 折紙に故左馬頭の 觸體
 源とハいはじ玄関に薄
 斧をとつて蟻蝦人をあやめし事
 螢のこりて冷郎がなミタ
 月さびし苔深ふして太鼓持
 執一 心のかつら出格子まとう

二一味の雨。随衆生性所 受庵宿
 迦一葉尊者は牢人をして
 黄藥へつけ飯一 米のほとゝきす
 血を以て書スやまと撫子
 岩之曰ク 小指のさきに真砂地有
 雲うかふ所すなハチ仙一 境
 七万里飛一 脚にやとふ鷹乃聲
 いろつく稲葉草一 天買一 置
 露くだく多門算盤よこたへて
 金一 剛山を泥にけす月
 高一 安乃張良雲を巻手本
 大一 地折敷の灰を蹴たつる

船 尚 船 尚 船 尚 船 尚 船 同

6

尚 船 尚 船 尚 船 尚 船 尚 船 尚 船

5

茶釜の時雨とうふいろつく
唐菰ちのりの菊もうつらかれて
恋のやまのはおしろいの雲
女がた其名をかりてや弥姫
錢をよむ鮎アユの帝の御哥に
かつらのまゆずミ丹果ニハナの串柿
うねめがのぼるゆで荷ヘマの臺
ゆけハ雲かとなん饅頭乃やま

安樂音卷下ノ下

此発句ハをりいちといふ座頭に
夢に　玉つしまの明神みえ
させ給ひけるとなん

アノ^{アノ} 安樂^{アノ}乃^ノ音^ヲや本^ノ一^ノ朝^ノ外^ノ一^ノ題^ノの春^ノ
 遺^イ賢^{ケン}岩^{イケン}一^ノ山^ヲを出^デ書^シ初^{ハツ}乃^ノ筆^{ヒツ}架^カ
 雪^{ユキ}の松^{ノマツ}たかねの生^ナ蠟^{ロウ}風^{フウ}解^{トク}て
 燈^{トウ}心^{シン}乃^ノ瀧^{タキ}月^{ツキ}おちてやる
 秋^{アキ}の蟹^{エビ}けふる東^{トウ}坡^ハのやい^{ハレ}と箸^{ハシ}
 喜^キ雨^ウ亭^{テイ}の楊^{ヤウ}枝^シさし給^{ツケ}ふ薦^{セン}の葉^ハ

此夕 淨延 夢露 淨延 柳燕

18

きハ墨乃細道わくるるひたい髪
翠^{スズキ}ノ麝^カのふくろ窓の山飛^{ヤマトビ}
涕^{ナミ}もる生絹^{ナマキヌ}の蚊帳^{モウゼン}の床乃浦
しんぞう乃水あげ子規^{コキ}なく
三ッ^{ミツ}盃^{ハシ}木香^{キカウ}をせにせん西一行屋
阿^ア字^ジ本^{ホン}ひしほ高^{タカ}雄^{ユウ}文^{モン}阿弥^{アミ}
のりものゝ九識^{クシキ}の窓を明て春
ひるな乃四一大うす糊^ウの霞
繪^エ鬢^{モウ}嫵^ウ媚^{メイ}たる柳そり捨て
愛^{アイ}着^{シヤク}のつべり柴^シの戸の花
腎^{ジン}薬^{ヤク}を搗^ウ臼^{ウス}去^サつて月さひし
なりひら乃木^キ一乃^{イチノ}伊露^{イロ}更^{マシ}て動^ウ

虫の聲かくし文一國のくづれより
親シの目ぬくすゝき一もと
波羅門を彩色牛粉霜をれて
靈一山乃茶代真如朽せず
朴の木の矢車輾る輪廻の郷
貴妃がなミたやくるミ乃海
迦羅吐て瑤瑤をよく温泉に
恋乃さびミがく垣一原一山
松の玉兔煙くらべの守宮の精
漢ノ武一帝乃日日一記乃鷹
濱つたひ秋風起リ米屋飛フ
北一方ノ強一岩くたく浪

石 船 硯 石 船 硯 石 船 硯 石 船 硯

凍煮る 罐子カンシとぞろく賀茂カモノ神
又 雲わけてのぼる馬下駄ウマゲダ
透スとをる三ッ鍬シムのゆかたかくや姫ヒメ
小哥カコをのするとしかが琴コト
看臺花カンダイハナ乃雪ふる六月に
祇園會ギンエや 國一土安一穩

鐵硯	鞭石	似船	御
十一	十二	十二	一

延寶八庚申歲五月日

民ぞ嘯^{ミヤ}ふ新^{ニホ}一樹^{イツジュ}萬^{マン}歳^{サイ}天下^{テノカ}下^ゲ乃^ハ松^{マツ}
 ジン 仁^ニ一^{イツ}風^{フウ}になびく末^{マツ}廣^{ヒロ}の若^{ワカ}竹^{タケ}
 幕^{マク}とをす序^{ジヨ}分^{ブン}乃^ハ雀^{セキ}聲^{セイ}そへて
 なし地^チを穿^{ウツ}つ重^{オモ}の角^{カク}一^{イツ}簪^{セン}
 ミヤカシ 羊^{ヒツ}羹^{カウ}の横^{ヨコ}雲^{ウン}のこし檜^{ヒノ}原^{ハラ}の月^{ツキ}
 ミヤカシ 路^{ミチ}糸^{イト}の如^ノし連^{ツグ}一^{イツ}峯^{ホウ}乃^ハ紅^{ベニ}

石 船 硯 石 船 硯

2

似船

硯石船 鐵硯 鞭石

七―世の孫をのするかたくま
小鮎変じて龍乃いきはひ
初鮎や火焰を吐て焼がしら
卒都婆に跨る清少納言
木のはしの弘法大師杖ふりて

氷玄の許にて

月をはきこむ塵とりの影
坪の内あした一―片の花乃雲
紫のふくさをしごく初嵐

同 篠乃葉一―揆なびくさし物

生死の到―来 無―明 一―樽

葬頭河乃取上ば―へ使たつ

魚談義富妻那の弁當急―けり

きづなとく煩惱即チふとんばり

豊武 15

同

同

同

正伯

鉄硯

信之

玄鶴

なみた乃首玉ほんなふの犬
邪姪乃悪鬼せん屑つくねし劔の山
鰯羽はへて上戸とぶ空
へうたんの。鵜首薬炉の丹をなめ
ぼうざやの布留乃神杉質の流れ
かたそぎ乃風呂敷なびくゆふしで
抑すりこ木夢の面影
高宗や傳説も弼にめし杓子
一―生ハ糊米かしく程もなし
萩乃花豆の粉ちりて半金―色
崩しの肉火宅を去つてもとの土
芋おろし結城がのぼる劔乃山
一人の釈氏毎夜来て糊をねる
独吟百韻の内

柳燕 16

同

鞭石

信之

重好

鉄硯

薄古

一思

玄鶴

芦月庵にて

さや豆や在ニ釜中二月を鳴ル
もとおなし根乃ひき鉢の栗
おなし所の月次に

うでさきつよくもゆる早蕨
捨身の行あれ首陽乃山籠
かまぼこついで名乗る毘沙門
観世音やなぎ乃板の一枚桶
連磨の目から声火とぶ見ゆ
一棒ヲ以テ生死乃海のミをつくし
風刀に似て木―仏われは千鳥鳴
あまをふね僧を渡して功德なし
濱ちとり跡をもつけす不立文字
松茸のきやら流れゆく醬油に

鞭石

松春

同

鞭石

微笑

員明

宜春

六塵乃ぬすびとはきだめ穿ツ

くろやきの殺生破る猛火の花

なミだの首玉ほんなふ乃犬

鮎目六―根乃穴をつながれて

せん屑や恋のかたまりおろし薬

其まよひぢごくの釜焦にぎり食

廿五有流轉乃輪をくぐる猿まはし

鼻息乃雷ひきさく木枕を

和光同塵結縁のかま風呂

手刻乃浮雲がんくび乃稻妻

鰯羽はへて上戸とぶ空

かいしきの魚木にのぼる桃李園

節供買金―魚踊らす恋の淵

三筋の雲投ぶし乗て花に座し

正伯

玄鶴

鶴声

暮山

岩菊

鉄硯

完車

暮山

員明

薄古 16

薄―氷寶―池乃岸に絹をはる
こがねのはしこ琉璃の松風
上草履奇犬そバへて花に吠る
虫乃聲中間部屋の暮さひし
さそふ風あらバせんなく乃かゝ
棒鞘の布留乃神杉質の流れ
日―銭乃わしりたかまと乃山
かし具足ありよしのこ桜
炭かしらの富士うす鍋乃鳴澤
葱沈ンでハ鯛木にのぼる箱根の池
抑すり粉木夢乃面影
金色乃柚ミそ飛入下女が口
鼻息の雷ひきさく木枕を
芭蕉乃惣嫁男部屋にふとる

鉄硯

同

同

同

柳燕

松春

同

同

柳燕

同

同

同 17

紅葉の御幸車海老とぶ

町衆に一―同三―札乃骨仏

火宅の店がりやどかへてゆく

浮石をどるすいふろの淵

瓢巴が夜遊琴の爪とる床入に

なみた乃首玉ほんなふの狗

思ひ乃細斬て捨たる菩提の猫

秦の李斯しでの山路に子を連て

女がた乃猫ゑぼし直垂ぬぎ捨て

五更思惟連歌御修―行何あミだ

鰯羽はへて上戸とぶ空

長樂の投節何阿彌が裏に幽咽タリ

ぼうざやの布留乃神杉質の流れ

きのふの扶持かた罕人瀬兵衛

香薫

一洞

哥全

重好

員明

鉄硯

松春

一思

玄鶴 18

恋の山四花乃烟を嶺の松
夜着乃すそ野に傳ノ虫飛

富貴天主に有明乃月

浪しつかに大堀斐タル君子の花

青月庵にて

菩提乃花むかしハ悪性大臣も
霞む墳一際なきだ 紅キ

忍びねや蜀魂飛で春一 天に

龍銀一竹のひとよきりふく

玉乃椿黄帝のぼる浮世町

和光乃塵をはきだめ乃国

出雲銀八重垣以来花ばたけ

手力雄天の炬路乃戸をし開キ

分れたり天地混一 沌玉子乃から

信之

玄鶴

秀海

鞭石

可周

似船

信之

薄古

鉄硯

9

たにこ竹陽と雨吟に

微妙浄法身出来台乃春

光はなつ無業乃菩薩朝霞

過去帳ふんで鳥雲に入

ひいて帰る牛之助てふ店守り

まるで十年禪乃智恵付ケ

如帯と雨吟に

かくし衣裳乃あまの羽衣

竹とりのくつわが格子雲なびく

青月庵にて

油紙嘆患乃媚もえあかる

乃まんとすれば池のかハ針

鷹嶺一妙庵にて

落葉きくや一妙二法仏土中

似船

同

同

同

同

同

同

同

松春

10

鬼乃領分罪障の山

籠りけり八億四千身一城に

諸善莫作衆惡奉行と札立て

焦熱乃薪きり出す刀葉林

鰻頭ふらすはうらいの雲

私語乃連理に箔の花開て

部屋見廻方士これまで参タリ

橋かより童男くハしやがた數十人

二十五有今に流轉のばいまハし

毛をかづくむくろじ水に住ム貝げた

雷光朝露石乃あないち

子は三ノ界の首かせのより

大せうねつ乃なまり玉飛フ

とんで見えぬるうたゝねの夢

玄令

松軒

暮山

寸志

萩露

松軒

松春

萩露

浄閑

水龍

11

陰陽分て産出す象捨子啼

大根乃兵すゝむ一膳

鱒にハ鱒の三郎と名乗たり

行厨を押ならべてぞ組にける

からし酢や抜かけしたる鼻の穴

なら漬乃舟にハ菊王給一仕人

下知して云々 水の逆巻ところてん

花かつは蕎麥乃帝の錦の旗

龍一頭乃青血にもところてん

麴棒としのきをけつる花鯉

雲蔵を供につれたる男山

所乃年よりよぶ鳩のミね

八まん天へものぼる氣ざしじや

つり髭つくる住よし乃松

玄鶴

伊丹竹油

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

9

霜をく松ハ世間相常一住

大黒亭主を鑑てまハする

魚乃山麓に止觀のいけす舟

長一明乃製方の梅且がらに

玉一依日一賣の養父いり乃春

風梳る丹塗乃さし櫛初芝居

時雨となりし定家乃執心

花が過た松風さそふ新古今

やきなをし吉岡そめ乃村鴉

したて頭巾乃山ものとくれ

一はれしたるけんくハ乃死骸

そめ付乃山風吹て茶碗飛フ

田上川を芋桶より流す

沙門二法

柳燕

似船

秀海

片山

寸志

一笑

了意

了意

了意

了意

了意

了意

10

世中ハ栗をやく火乃光ノ間

筆架にむかひて小法師引導

チヨク乃でい皆是如来ノ金言也

きりくす根本鹿一王者佛一陀

悲哉はたるのともしひ消卒

體乃清ラハ以テ月を濯ヒ

眞藁の頭巾うらがれの秋

壹歩羽はへて雪に和ノ飛

九万里乃水研ケテむかふ齒に

紫蘇漬法師入一唐渡天

母ハ竹氏夢レ吞ニ薄刃一生レ笥

引捨る峯乃横雲一文字

風の手乃筋

判をうらなふ山の水生

重高

一松

日允上人 索笑

松軒

松軒

松軒

松軒

松軒

松軒

松軒

松軒

松軒

松軒

松軒

11

生死乃到一 来無一 明一 樽
猶如火宅それを忘れて吹挙人
同 鉄札乃清書。鬼若丸が寺入に
同 罪障の山乃手の陣に紅葉を焼
とくさかけたる雪のむらさきえ
爪まるし按摩をひねるはつ 薇
かねつかひ西にかたふく夜半の月
かくし衣裳乃うらかれの草
砥水けたつることかな乃龍
祈給ふ雨や弘法大佛一 師
同 ふいがうや虎を欺きつねの皮
同 鯉ふし浪間かき分て浮沓を
女ありともえ山吹浪屋にハ
木曾殿うたれ給ふそばきり

同 あつはれ大根本曾を名乗て
きりくす昔を問へば目安書
神代もありや喧嘩ころろぎ
そば切優曇花はながつぼちる
浮木乃龜負て出けり土山を
尾花が同類おきつしらなみ
似せ銀を吹上に立る菊乃色
おやじにハ忍ぶる事もまけにけり
芦月庵にて

柳をあそばす一丈乃鬼
閻魔一王雲よりおりて雙林寺
五濁乃水にしやうが一片
観じやう常のごとくの悪世也

照廣 昨夢 雲也 柳燕 伊丹一友 定政 松春 松陰 竹油 夏木軒重尚 愚道 松鶴 竹油 一頼 鞭石 秀海 7

6

天にあらハ願クハ玉子地黄丸
ひそかに傳へよ十四乃二一穴
未央乃生房花一清の五木湯
同 芦月庵にて
投ぶしらうさい山ほととぎす
剃刀乃砥取の床の若い者
無常のあらし沐浴乃浪
五十二類中の兎や走るらん
鶯が請人さハぐ黒雲
金色乃文字天下太平
鎮守府ノ將一軍地一蔵白一雲寺
不ー動明王ふいがうをふく
劔ノ巻二一蔵三蔵翻一譯に
香炉峯の雪ハ取一賣が眼

鹿屋町一条ノ院の少一納言
光陰の楊柳いりあひ乃かね
百の媚宮一前乃貴妃寺一前の花
魄キ去テ何一之豆てつはう
鞠を踏で同ク おしむ児一桜
夫天一地ハ萬一物の客舎タリ遊山寺
雪乃柳氣力なふして鉢巻を
隋堤の茶屋に治郎やすらふ
風一七一夜乃鰐をけづる
ふたゝび食に羽はゆる驚
鰐ふりて恋水のぼる 薯蕷
煎海風乃階忍びぢ乃媒
さよ姫が執心岩茸となる

暮山 柳燕 鞭石 可周 似船 員明 同 重好 員明 一思 玄鶴 一思 鉄硯 一思 重好 一思 8

7

御あしそへ馬頭観音
提重に貝付乃釈迦嶋薬師
耳かき乃竹に生るゝ弁才天
金輪際より大龍一寺前
水海七一度櫛ごりとなる
車をかけてとなせはしらす
清瀧や盆山乃松移一春一檻
つくり髭よこ雲すこき男山
一一番飛フ 源氏乃鳥毛
ならび乃岡の連一判の鴈
二十五軒夜月に談スル松乃聲
堆朱乃螢ぐるゝの水
埋木乃花を一燼青磁の芝
銀卓や怪羅の小一扇鈴を撲

独吟ニ
鍋すみをかく大金乃測
羊羹乃さはさし下す温鈍舟
紙燭をはなつ大仏の釈迦
同 十悪の重衡おつる蚊乃地獄
一 向宗乃寺にて興行に
月なみの桂の影や道場樹
閻浮檀金をしきのべて菊
芦月庵にて
あを表紙ふむきりん驚
烟草入伸一尼郎さそふ花開て
山は東一方一朔一蔵をよぶ
私宅にて興行に
後醍醐天王綿ぼしやめす雪消て
はすはをまねく二階堂出羽

柳燕 重好 柳燕 玄鶴 同 員明 玄鶴 一洞 玉龍 同 玄鶴 可周 柳燕 似船 9

8

經乃煮だしうら嶋乃なみ

若かりしかハもしハミぬ梅ほうし
同ふたあくる榮螺に雲のたなひきて

員昌
作雲

3

質乃ながれの布引の瀧

松鶴

湯にて用る恋のくろやき

同

砥水けたつる小刀乃龍

鉄硯

同空海へ細工に雨をふらせたり
同さしかけや雨ノ中に涼し楊枝店

同村了意
木竹

竹のひき粉にむせふ鶯

教俊

砂を穿へ骨屋が門松鑑也
同酒有て人客をよぶ田楽串

員昌

○志州島羽にて

めかねにそ雲の見えすく夕嵐
燈心ふらす 短一葉門一院

鞭石

同閑や木枕に乗る聲高し
やいと箸乃竹藏たはしる

同

雪隠に人の音なひふしきやな
南天乃せいあらはれにけり

友静

よこれたか損であらふぞ奉加帳
泥乃はちすの臺座後一光ハ

同

きりくす昔をとへば目安書
なくや霜夜のかねもちの後家

員明

頓死目乃前山は松かせ
玉ハ測小一判ハ埋むミねの雲

道之

〔つか〕ミ染さゞ浪よする風呂敷に
とり賣に出す琵琶の海づら

同

4

浪をりかくるはな紙乃龍

鳥有

咳氣にハ李白一斗の生姜酒
高せふね雪さしくだすとうふ串

重正

菜めし一盃宇治の橋もり
付たりさんせう塩竈乃浦

一治

引テ鹿一茸一竈一院
同あげ昆布乃烟と成シ二の膳に

鳥有

同子をおもふ牛房がくれの霧ノ汁
木やりになびく生死乃細

重好

罪障乃山高ふしてなげ頭巾
靈寶の店つれなき子規

升方

馬乃角あり 牛の玉川
真如の門に快一樂一庵宿

竹油

平等乃臺ハ法一花三まい敷

員明

独吟ノ内

能因や半切紙をつきぬらん
五条ノ三位ふるてをえらふ

玉龍

かざり火そむく難藏乃月
風乃穴四十八にハよも過し

同

蛭子のむかし質のかたつる
惣領女藏乃岩戸を押ひらき

同

月庵にて
幻一術士忽然としてきりくす

鞭石

真桑乃輪切舍利弗の掛落
かけてけり命の露を折釘に

柳燕

きのふ乃表着けふはた薄
雲まよふ富士を入けり天目に

同

むさし野たゝむ紫ふくさ
富士乃出店やむねにもゆらん

同

5

恋乃山はたち斗の茶屋乃かゝ
福聚まんくたる銀の浪

員明5

一一名如意たつの都乃千珠丸
挑灯乃定一紋にいはいく猶如火宅

一妙

鬼がためし 六一道乃辻
同法花を説し靈一山もどり

俊和

同檀那に對て夢の中間
又四一大聲聞 革はをりに水

一睡

花はさかりにくまがへ盃
耐なます是しのたう乃機首

一妙

又うでてんがう風新柳の箸を削り
又衆一人皆幼を攜へて御室に入

江戶專吟

笛によるおなじ連の恋慕流し
根本あさ日。本ねりの玉

萩露

根本あさ日。本ねりの玉

了意

印籠乃時繪に金ノ鵲なく

信之

又唐革細工伏義と女禍と合店に
天にあらバ願クハ玉子地黄丸

松陰

守宮のしるし乃かんざし給る
祈なをす五重の印籠はけ口を

完車

へうたん 逆に賀茂川をゆく
恋の山の端おしろい乃雲

鉄硯

不レ聲何ナル 虹ぞ嶋綿子ハ
又鏡一臺乃月に椒蘭の霧横をる

玄鶴

又双娥の月涓流の壺に影をうつし
生死乃到一 来無一 樽

一思

進度候造一 惡不善乃常住食
又ふハハの玉子が流轉手なき者

柳燕

又細とく煩一 惱すなハち補園ばり

此夕

玄鶴6

むまのとし乃くれに

ゆく年や金覆輪のくらをかせ

馬とめて暮打はらふ懸もなし

相馬どのゝ定紋もかなとの暮

年乃暮やさいそく應對身軀ノ事

苦海樂白鵬閑なり節季の波

五ツ乃假物金まつ驚ク歳の暮

はる近し城夜半乃天一秤

千一石萬一斛

松に餅開

民の歳暮

五句付披露

加州友琴

江州一以

ひろしま雅矩

暮昔

玄鶴

似船

同

49

安樂音巻下

句並前後不同 五句付披露

金色乃文字天一下泰一平

南面のぎをん林や君子の徳

つくり鬚横雲すぎき男山

ひかししらミて八乃幡本

鯉乃炙出しうら嶋の浪

龍宮の姫と名付て猫をよぶ

せきいるや疲がつかへし音羽川

山科これへ見ゆる乗物

さかやき乃剃立つつす和田乃原

精進あげのあまのつり舟

同 警固乃武士ハ三騎たかむら

玄鶴

員明

伊丹住竹油

友静

鞭石

伏見住鳥有

1

五大力ばさちも流すはいかしら

同 金銀乃手桶でかくる武庫の浪

怪我したる流るゝ螢血乃色に

たもとくそとる宇治の橋姫

はり紙に哥乃心をとりませて

かし座敷あり定一家の軒

紅うらや鈍子乃雲の夕日影

嵐にさけぶ猿若乃聲

閨一魔大王しのひあみ笠

同 葬頭河乃姥に預るかくし衣装

あさちふの小野ノ篋こゝろしり

よりませよ浪こゝもとへ男松

目安をかつく海士の捨ふね

嶺にさひしき摺粉木の音

林虎2

竹油

玄令

友静

同

一方

膠柱

重高

伊丹住一友

秀海

一方

宗友

友静

友静

信之

茯神

しらみ人

1

浪乃緒じめの玉つしまかも

俊成の塵を吸せしむら千鳥

若乃松露へ和光の塵すいて

地水火風の借屋請状

香花やけふは其人乃日行一事

鷹首乃煙横たふ目星の前

枕ではなした夢一幻朋一友

茶釜乃時雨とうふ色つく

食一籠の九輪をくたく山おろし

氷る櫃川封をつけたり

同 臺乃山麓にかよふたばね雪

同 五大一力續飯ををす竹田乃雪

同 雪つゝむ美玉沾一諸ふし見山

墨を付たる水乃結びめ

秀海

一齊

鉄硯

松春

玉龍

同

一妙

玄鶴

2

同 下女が名のまき立山乃夕嵐

龍神や使たてする松の雨

始皇乃借屋にすむ倭一氏

念彼觀一音力灯心かゝぐる

王難乃苦をのがれたる勝象碁

目がまふたりや螢のよび聲

直下せば三十丈乃玉塔に

くみたるも今ハ波ゆく鮎鱈

同 蓼のかれ葉に風わたるなり

御影堂乃班女がうらむ秋の風

同 かるた屋の虫のねもかれの契

同 楚阿弥の座敷に琴ひく治郎

大佛餅乃月皎潔タル霜雪

友静

友静

信之

茯神

しらみ人

独吟百韻に

願發せり雪をれ乃時火吹竹

似船

46

延寶七年十一月六日 人麻呂
尊影わたましの會に雪ほのく
御影うつす
似船宿

同

鷹

鵬や鷺をかけんもおとなげなし

友静

水鳥

鴨川や渡りくらべて今そ汁

江戸佐々部茂村

かも酒やすなハちかんして口へ入ル
煎鳥乃鴨を鳴なるおく齒の陰池田氏富貞
鉄硯

但廣にて國茶の後はいかい

もよはされければ

松乃聲にせいもく強し濱千鳥

似船

埋火付炭

緋段子や花下ノ睡猫置こたつ

江州彦根美代都

取巻や火水になれと火燵ヲ雪

丹後聞計

須弥の四方火燵の内やあし原國

是笑

後家乃云ク鳥ハ物かハ火桶よな

渡辺知光

白炭や瓢箪角はへて火燵ヲ吹
こたつとんとん契話箱の名や戯嶋玉龍
柳燕

紙子

万句
かミこ哉活た五臓を張貫に

秀海47

頭巾

青月庵月次に

孤輪の頭巾朝一足乃沓草履
もミウらや頭巾の山の入日影頭巾にそかミハ跡なく入たまふ
山も見ぬさかやきハ脱し頭巾哉松春
友静
頓宮爲信
加州一笑

47

餅花

もち花や霰こき交て柳の枝

丹州保津吉茂

節分

見てをけ鬼綱がさし物柵
柵が云クさびたれど鰯鬼よこい安宜
利勝

雑冬

握拳くらハされたり除夜の豆
煎豆あり増てや間近軒の柵
いかに鬼神去るためし有除夜の豆
ゆくとし乃千の矢鋒やまめ霰
たから舟や夫一婦乗合水いらす如津
松以
梅原自省
丹州保津忠房
良胤

玉子ハ醬油煎海風寒フシテ木に上ル

田中可仙

冬毛筆や兎吟すれば墨の雲

安宜

無量也いのちのほとけ十夜米

露程

十夜かな菩薩もこゝにかミ袋
すり粉木の豆腐に動ク菜飯哉如津
一步

茶湯師のもとにて

口きりや師亭主乃湯煖數金

加州金沢德利48

貞木48

沢井一湖

小西嘯洞

宗直

員明

内海守定

是笑

川井正長

露程

越後一十

加州金沢貞之
遠州ヨコスカ品少
加州松任薫烟

丹州保津忠房

春澄

岡村了意

暮昔

ひろしま林吉

丹後氏重

頼石

釣軒

似船

鉄硯

梅原自省49

冬紅葉

ちる紅葉人を染けり酒のかん

江戸浅草一怱

木葉

藝せずは何を以てか木葉猿

加州一笑

笠持を庵相に見する木葉哉

若州今武

木葉武者やさ有マイタク竹簾

江戸雪窓

木葉ちる掃除の身コソカサシけれ

丹波幽也

浄楽我常の心を

更雀寺不足

浄楽乃御法ハ耳に落葉哉

勢州山田住半入

岩穴や神代の塵壺木葉の山

似船

嶋本重高墓所にて

弟子ハ世を何一尺去けん問ど木葉

似船

霜

猫乃はなおもひこそやれ霜柱

江戸アサ草一怱

琴のねやこがらしといふ霜女

同佐々部氏雪窓

霜さきや金箱ひくぶあい乃音

宜秋

霜よ鐘誰なるらんとこがめしかバ

越後一十

ひびき有雪踏乃かねも霜ノ上

高木付言

氷 付氷柱

釜が洩や凍を敲ケバ袋をどる

志州島羽沙門雪堂

氷にや中たゆる名のたつがしら

神原伊安

はりぬき乃手洗鉢あり厚氷

竹原嘉保

風やとぐぬきミ乃氷柱来泉

頼明

44

霰

飛ならば傘たのめ玉あられ

如帯

玉乃釜底をいれけり霰酒

貞木

西寺内絵所水長追悼

似船

玉やあられ詔乃なミだ三筋光

似船

雪

はつ雪や小一学に入松乃寮

玉龍

延寶七年十一月五日於西陣

似船

万句興行初會に

似船

はつ雪や西陣ノ銘に富貴の花

如帯

雪さひし三線の實植猫乃聲

似船

詩を誦シ梅花や保ッ頭巾の雪

草野山如井

佛心宗乃寺にて

菩提もと雪の二一祖たり門一柱

玄鶴

雪打や真向破れてひえて入

土橋之隅

黒主が風体や雪に大原木賣

但州貞行

乃がさしと寒シやかたノ雪礫

草船

大雪に尋ね佗たり瞋目乃里

伊安

いかに女なんちハ此浦乃雪にて有か

如津

綿かつく地蔵かしらや松乃雪

頼明

比叡愛宕次郎太郎や雪丸め

高木何言

雪の道や雨も不降に高木履

池田富貞

楊子泣ン雪道ふむを猶以て

丹後友次

棒杉乃たハむハ雪を重荷哉

備前福山水野福富

尺杖にあづかる程や松乃雪

丹州龜山村上如山

日本乃會稽一山や富一士之雪

丹州茂春 45

44

江州伊香郡昌次 45

見臺乃雪に花開り丁一子頭

如津

酒買に来るよしもがな雪女

良胤

雪晴てつら見せするや庭の石

丹後白梅

手を吹て疵や求メ雪つぶて

同 如帯

月や墨しかる處に雪の花

玄鶴

月挑一燈乾一坤の張貫雪乃山

上總住重賢

窓へあたりきこえぬ奴哉夜之雪

加州松任蕉烟

作ル雪やこも越路の弥陀如來

備後福富

雪花乃匂ひ有けり酒乃酔

寺村貞行

竹を折て潜にふるや夜の雪

加州住一笑

つむ 雪や 北に たる名山 あり

和川貞則

これや天下御雪所富士淺間

慶命

見ぬ物や四角な玉子雪をんな

からかさや三本之内雪折竹

豊久

ぎをん林こがしや降て雪の竹

秀海

うら寒し屏風乃千聲雪乃松

鉄硯

頭は鶴足手ハたり雪の聲

玉龍

羽觴飛ンて雪温かなり玉子乃聲

鞭石

鉞やある上戸はり出さん雪ノ中

釣軒

自敬軒但安塩ノ原一山のゆあミ

似船

にまかり給ふ時申侍る

似船

根引にして待そ雪共に有馬富士

似船

おなし人の許にて茶湯

同

過てもよほされし当座

同

あすもこん炉地の玉川雪の景

同

宮谷頼母にて当座はいかに

同

空もめで雪ヲ廻ヌや稽一古一能

同 46

木實

延寶六年九月月庵万句に

大根さそ波柿名乗て新左衛門
袈裟かけたり政常入道柿の皮
御所柿や鬚籠をかつく五良丸
いが栗や梢をつとふなりけだ物
柘榴われたり汝元来十羅刹一女
なるハ龍乃水梨を喰音哉

木子

匂ひけり衛士籠になふ松輩賣

暮秋

不^ス断^タ興行聖一^タ代乃徳や暮一秋の會

豊久

釣軒

40

志州鳥羽一松子許にて

口紅粉や入日をあらふ海鬼一灯
摺粉木をかゝり乃松や菜汁の芋
疳氣持あからめなせそたうからし
役^シ行^シ者^シ町菱屋の興行
渡せすあい常是が岩橋行者^シ秋
西寺内酢屋了意興行に
餅屋なりければ
もち米や酢屋の松山秋の浪
醋^スはじかミ君子乃徳有青^シ豆ハ
陰ぼしや入日をつなぐ唐^カ松

鞭石 鉄硯 釣軒 似船 同 同 同

41

雑秋

あめ乃魚うこかしてけり土^{ツチ}鹽^{シホ}
あたゝめ酒指^{ササ}を忘るゝおもひ有
庖丁の鉄^{テツ}杵^キやふくわかたはこ
秋もはや若葉吹けり烟草^{タバコ}すき
燻^スるや悋^{リン}氣^キ乃横雲若たはこ
きついをやいさうしといひて若烟草
新そばや木曾打浪のまくり切
新そばをうての使や木曾大根
五条塩竈町の近所に住侍れハ
秋さひし爰しほかま乃うらの町
西乃京や青豆の塩路茶匙^{サジ}を漕^ユ
江戸鬼燈天下大慶の聲す也

夏木軒重尚 遠州龍耳 河村憲徳 加州薫烟 丹後丹誠 加州一笑 福田春松 川井正長 伊安 似船 丹州保津忠房 41

安樂音卷上 冬

題

初冬 時雨

冬紅葉

木葉 霜 氷

霰 雪 鷹

水鳥 埋火

紙子 頭巾

餅花 節分

雑冬 歳暮

42

初冬

弊^{ヘイ}白^{ハク}乃^ノ帚^ヘ散^{サン}米^{マイ}のたて砂神ぞ旅
御本陣や正直乃かうべ神乃旅
寝^ネがへりや枕はづれて神ノ留守
狛犬もアテラム^ムけり神のるす

時雨

芦月庵月次ニ

木葉 鱗^{イロコ}山龍と化^ケシテ時雨の雲

酒遊乃座にて

酒さハぐ松を時雨やそめ付鉢

浄土宗法譽所望に

横^{ヨコ}一^{ヒト}截^{セツ}五^ゴ一^{ヒト}惡^{アク}一^{ヒト}趣^{シュ}のころを

あミた笠や十方世界横時雨

松春 春燈 露程 如津 柳燕 但州貞行 丹後笑西 43

42

雲かゝる月や遍昭が哥のサマ

名月雨天なりければ

浪を走ル芋ウ有や月の雨

世を照セリ釈一迦牟尼以来けふの月

月を吞て發句吐けり詩一酒の宴

一一滴乃露切磁琢磨一玉兔の影

佗て月見る土

膝いるゝ家。碧浪金波を揚手桶の月

月やこよひ一盃承る時天下乃秋

前髪や薄に月のまるむたい

松嶋一見乃時

まつしまや奥の白銀けふの月

名が降や四万由旬に月乃雪

月をさす指ハ古一風也芋に楊枝

ひろしま親之 37

秀海

丹後白梅

江州員英

暮昔

同

如帚

江州春知

春澄

鞭石

あちこ一十

しやむろ染師山形屋連可

百ヶ日追善の百韻

山形や紗羅ノ曼陀羅木の間の月

但廣の許にて

さと芋や重箱乃天地ハ月の外

月白粉一楊貴妃歸ッテ唐の芋

九月九日 付 菊

肴あれて松菊存せり壺乃物

菊の水や栗の大きき強て下戸ハ

栗乃水夷盛やしらぬ匂ひ墨

栗むきやお菊重代の丹波守

秋津洲乃外ふらすこや流す菊乃水

38

仰船

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

名月や句ハ芋かゆる豆乃作

さや豆や在二釜一中二月を鳴

名木紅葉

あさぎ桜時雨やもみに染なをし

松をのぼるもミ一匹有薦紅葉

紅葉

紅葉

上京乃時横尾にて

破ラせたし薄紅葉にハ飲酒戒

鹿の聲や座頭中間の初紅葉

初もみち時雨そねまん中紅葉

愛染も力をそへよ薄もみち

錦幕やたゞ去御方紅葉ノ山

加州金沢一笑 39

似船

似船

似船

似船

似船

似船

似船

似船

似船

似船

似船

はす乃飯これぞ白佛言世尊
送火や神祇尺教一ノ鳥一居
鯖や能登舟にハ菊一王紙灯炉
麻がらや棚經乃説禱ノ林

踊

月分句ニ
踊ふりや外面似菩薩心ハヤツサ
扇拍子金簿乃聲有踊哥

文月

文月や世一界の夏書一まろめ
文月やひらいて御意を窓障子

露

光もかな十五暈鋪つゆ乃玉

龜といへる盲女の追悼

是そお龜の浮木露を南無
竹重し露ハ真珠に似て弓一張

霧

宗里の許にて百韻ミちて
又もよはされければ
霧や油煙二百ある讀一岐沖の石

權

あさかほかのぼりて候竹の垣
朝顔や彼岸待間の焚燒屋
似空忌日釈教百韻に

嘉保 34

朝顔や無常の使隙驢にのる

似船 35

荻

夕風や中一務が幽霊荻の聲

薄

蘇枋染や思ひのきづないと薄

芭蕉

はせを葉のつよくも落る風いかに

虫

麥わら乃馬も飛べしくつハ虫
千種に露雪舟が器量筆ツ虫

竹陽

きりくすなくや下京お旅町

鶉

砂水乃秋しる聲やちつくはい

鹿

つま恋や紅葉重ねに筆も啼
鍋ぶたや紅葉吹あぐる鹿の汁

鴈

わたる鴈に通手形や月在判
鴈乃舟あやけしが付候流し鴈
落鴈も翅にかけつ錢の文字

35

友静
員明

廣嶋住女 さん

糸ちこ 柏崎寛政

丹後竹陽 竹園

横山自笑

友静

丹後丹誠
上総新戸住重賢

竹陽

但州貞行
頓宮爲信

36

たにこ乃国たなへの住

上野竹陽上京の時

松を見臺龍一灯かゝげて鴈を讀

おなし人と兩吟に

橋だてや文珠の落す蘭乃鴈

月 付名月

弦月や一度投せば世界の影

秀海法師のもとへ申つかはし

侍る天台宗なれば

かゝぐるや一念三千筋月一柱

松乃月や和光同塵琥珀の始

月に窓人々喜び引あけたり

夜あるきや尺八煩惱の遅ノ月

羽もかな月に百夜も小町じま

茶屋ハ先月を賣なり桶の水

若イ人の額乃しハやけふの月

古文字乃〇とやいはん月の笠

月に風や義平が手勢十六夜

三線に月をのせけり辛浄るり

月に酒五升三斗の雲晴たり

秋の夜もねぬに明たり月重一山

闇乃夜や月を蔵シテ懷挑灯

月の色いまだき乃人何百里

正一銘なり本阿弥が云ク月一腰

たにこの国如帯と兩吟

待そ貴様浦嶋が箱月一一幅

月をそし聲を調てあの山を

36

似船

同

秀海

似船

江戸春知

同所雪窓

豊久

横山自笑

瀧州龍耳

慶命

同人忌彦五

伊安

江州彦根不障

江戸雪窓

宜秋

中尾正吉

慕昔

如帯

似船

丹誠 37

安樂音卷上 秋

題

初秋 桐

七夕 稻妻

魂祭 踊 露

文月 萩

霧 槿 芭蕉

薄 芭蕉

虫 鶉 鹿

鴈 月

玉龍むすめ乃追悼

うしろ紐やむすばぬ夢を土用干

胸紐や清水流るゝ夏はをり

立嶋や(雲)るに瀑す不布の瀧

風を抱や七賢が樂ミ竹婦人

飯船や菩薩来迎す五輪の上

石菖に兩眼沙鉢のこつく也

生をひけり吳猛も爰に榎木賣

感神院みこし洗ひにハ芝居

役者より挑燈を出し侍れば

ちようちんや神輿洗小町女かた

31

似船

友静

玉龍

鉄硯

同

春澄

小沢可卜

似船

九月九日

九月十三夜

名木紅葉 紅葉

梔子 波鮎

木實 木子

暮秋

雜秋

32

七夕

織女やお七マ参る牛之介

陽成院御製の淵や銀河

銀河 盆

わが身かたへ かり 近し

稲妻

みがくらん稲妻の影蝸牛乃角

魂祭 附 送火 荷食 灯舁

飲食や餓鬼乃城南寺たま祭

紫雲凝て茄子光あり玉祭

棚たかし無見頂相の佛一鉢

せがきのめし

聖霊やこゝを去事戸板ノ上

はす乃糸引上たりけり玉祭

法力と鬼や首びき魂祭

ここは穢土の裏棚かるや新聖霊

浮橋や泪欄干夢なり盆

荷葉に飯得たり法眼目連筆

風そよく宿魂草しるし家隆信士

宿魂草の色なる浪や紅涙

月やもらん衣領樹乃陰玉祭

火いれたる色有蘭の花灯奴

一重な(る)が猶吉野紙花とつろ

精の浪や潭荷葉動これ指鯖

送火や此河浪にばつたくさ

夕殿に麻がら飛んで送火たり

33

小原宗長

竹原嘉保

女房菅

似船

沙門秀海

似船

柳燕

鉄硯

小原宗長

丹波保津茂春

水戸住高木友和

嘯琴

似船

若州小濱可順

秀海

嘯琴

伊安

但安

柳燕

本國寺 如觀

秀海 34

打たり太鼓たゞ今夕立仕ル
研賃に人を流しけり夕だちハ
ゆふたち乃よき一流や稲葉殿
夕たちや質の流乃浪のひら
中一黒や義興顯レリ夕たち雲

桂河原町久善

丹波茂春

同所吉茂

加州金沢萬田貞之

扇

江戸衆や左扇で富士乃景

武者絵こそ蚊柱をひくすら扇

扇なく蚊を少時すかし骨

扇にハよぎてしかるへし花を繪師

江戸幽山興行

持扇名もあらバこそ名乗モせめ

春澄

丹波保津吉茂

同所忠房

岩根利勝

越後柏崎寛政

瓜のふねや化一狄が靈一魂蛤貝
玉龍むすめ乃追悼

姫瓜や変成男子と筆染る

志州鳥羽長福寺にて

法水の沙鉢肉舍利涌出セリ瓜ノ核

人おそろし鬼神より猶東寺瓜

通一寶如來善哉々々印可の瓜

祇園會

第一や町にも公事ハ難刀はこ

きをんゑや先一番にひえの山

烏丸通四条の辻にて

並ぶ山やぎをん林乃烏丸

こゝに有饅頭の山きをんのゑ

鉄硯 29

同

鞭石

釣軒

似船

横山自笑

頼明

久善

春知

鮎

人すくふ腸持乃釈迦や嵯峨の鮎

納涼

風の手や膺よりとつて夕涼

四糸河原にて

古哥に螢乃燐火もどかし夕涼

紀をや客好むといふ涼ミ床

風涼し南一面の徳だいら嶋

いさ横に風の手枕夕すゝみ

上京の時四条にて

あそぶ事必きりあり涼ミ床

行一燈や花見の色あげ夕涼

廣嶋政井氏幾豊

加州金沢小杉一笑

梅原自省

但州寺村氏貞行

横山自笑

加州一笑

如帚

竹陽

夏 月 付 短夜

月すゞし慰めかねつ漉うり

芦月庵月次に

小杉扇けり夏の夜の玉兔懷筆

ミじか夜や月さへ見ればよいハ扱

みしか夜の枕やしもくうらおもて

短夜や寝も飢べきね覺の床

志州鳥羽自笑

瓜

きり出すや阿字の一刀東寺瓜

六角の菩薩蓮臺や殘ス瓜の皮

瓜乃市鳥羽に恋塚や夏乃山

鳥羽瓜や八百屋立ての名にハ非ス

似船 29

玉龍

安宜

意程

延寶八年八月七日に

神事ありければ

当年ハ秋に治定せり月鉢を

祇園會や山高フシテ翠簾近シ

かまほこハ客にひく也祇園會

重一山にかくれぬ徳あり月鉢ハ

町衆のひきまハし也あほう鉢

ふねほこや江戸大涼ミ祇園會

鵜川

仙臺城下玉ほし川にて

玉ほしや千尋乃鵜繩ヲ腰ニ付テ

月をこふるそれにひきかへて

鵜繩かな

30

春澄

丹波如山

はら筋や銅人一形も夕すゝみ

芦月庵万句に

門すゞし水を踏コトろくしゃくが

維 夏

猫乃夏子本来逸物なき時也

かし床や煎酒のほる河合の鯉

凝海藻や龍神胡椒に出一現し

山陰や里人を相待ところてん

雨の脚やあがつて見する雲の峯

小袖櫃や見し花の香を土用干

富士の外六月の雪や道明寺

幸ひかな古風乃一一句土用ほし

夏川やからくれなるの下乃帯

ト琴

柳燕

林孝

丹後村方俊信

草船

小杉一笑

廣嶋雅矩

丹波志賀

同所信武

江戸春知

小杉一笑 31

はな橘これなん蜀の反一魂一香 江州ヒコネ美代都25

山嵐からかさ返せほととぎす
薄狗羅尊者これは蒼へし子規

草ハ個ス上ニ 圖二景宿一ほととぎす

来世銀にかけよ冥途のくつて鳥

耳なくハ睡イめハせじほととぎす 遠州ヨコスカ籠耳

治露酒やかねてぞ吞シ 郭公

錢ハふるし地獄乃沙汰も時鳥

不如帰とやそれは手が悪イ子規

東北のきりぞ恨メしき杜宇

其むかし善根いかほととぎす 郭公

世界の大地獄に落すや蜀魂

子規うるや片一荷ハ富士の山

琴ハ過ぬ二度切乃臍郭公

九年面壁祖師ハこゝろ有杜宇

血になるや耳搔ばかり郭公

書を磨ク月一飄トほととぎす

於江戸松意興行

富士庫シ江戸時鳥飛ての山

うたゝねや哥書を枕乃子規

飛てきかん光明幡世界杜宇

聲や若井のものぞく子規

螢

八景や螢を朱印せた乃橋

くちし蒲を妬か猿の笑ひ草

横にも飛自由自在也ゆく螢

火々出見の尊乃魂やとぶ螢

風や螢もミウらふかす衣川

螢かもわがすふかたのまがりかね
火にいるハ古風とや水に飛螢

ひけて見えつ四条乃涼ミ螢の火

浮草や水火のへだて飛螢

なかせたし猶も威光や螢の聲

紙につゝむ螢や上々油ひかす

石根やなべすミ起ッて飛螢

宇治へまかりて

河すゝき濃茶さら也螢猶

質屋林孝興行

片々光次の螢質種より

百合草

鬼ゆりや百物語多どりける

蚊

蚊乃口や君を待夜の入黒痣

蚊のくちや不時知色を染なしたり

香合に封じてをくや世界の蚊

たにばより出るや蚊帳乃四天王

樗乃木のなき世なりせバ蚊が天下

人をして樗乃木裂や蚊一雷

蚊柱や親一土がふりし棒乃をれ

樗乃木の大せうねつや蚊の地獄

夏虫

象碁とめて蠅打はらふ隙もなし

肯清26

志州島羽望交
越前新保似猿

丹後竹園

同所白梅

同如帝

利勝

林孝

釣軒

似船

下桂川原町久善

慶命

志州島羽望交

玉龍

増尾肯清

竹陽

松月軒獨樂

丹波志賀住正家

似船

粉川豊久27

あはれ蠅や燈心を以テ飯をほる

五月雨

五月五日 付リ 驚馬

五月五日 付リ 驚馬

五月五日 付リ 驚馬

五月五日 付リ 驚馬

五月五日 付リ 驚馬

五月五日 付リ 驚馬

五月五日 付リ 驚馬

五月五日 付リ 驚馬

五月五日 付リ 驚馬

五月五日 付リ 驚馬

五月五日 付リ 驚馬

五月五日 付リ 驚馬

五月五日 付リ 驚馬

五月五日 付リ 驚馬

五月五日 付リ 驚馬

五月五日 付リ 驚馬

五月五日 付リ 驚馬

五月五日 付リ 驚馬

五月五日 付リ 驚馬

五月五日 付リ 驚馬

五月五日 付リ 驚馬

五月五日 付リ 驚馬

五月五日 付リ 驚馬

五月五日 付リ 驚馬

似船27

加州金沢一笑

加州金沢一笑

加州金沢一笑

加州金沢一笑

加州金沢一笑

加州金沢一笑

加州金沢一笑

加州金沢一笑

加州金沢一笑

加州金沢一笑

加州金沢一笑

加州金沢一笑

加州金沢一笑

加州金沢一笑

加州金沢一笑

加州金沢一笑

加州金沢一笑

加州金沢一笑

加州金沢一笑

加州金沢一笑

加州金沢一笑

加州金沢一笑

加州金沢一笑

加州金沢一笑

加州金沢一笑

瓜 祇園會

鵜川

鮎

納涼 雜夏

22

牡丹

御池通をゆくとして

粵牡丹屋 潤スかな下草賣

灌佛

横山氏自笑

23

竹に花摩耶の御腹ヨリ仏咲リ

花嚴レリ迦羅乃乳房ラ仏生會

誕生やめてたくかしこ四月八日

四月八日今此釈迦と示レ現せり

産湯一貼灌や難陀大蛇之介

梅原自省

小西氏嘯洞

伊勢補住一色

加州金沢德利

似船

子規

五千乃はつね老聘導時鳥

丹後如帶

更衣

綿ぬけり君一子

南方之強 手をり嶋

うすき袂襦袢やしらん衣かへ

野口玄鶴

奥村頼石

杜若

蓮花王院の花を

とをり簡と何レ三河坊かきつハた

絵にうつせるを

君を筆臣や探幽かきつはた

津縣住深井尹安

岩根利勝

一八

雨あつて 一八にほひたり

江州彦根住不障 23

八ッになりし子や仏とふ時鳥

加州德利 24

不鳴せめて 醫もかなほととぎす

耳ハつぶし古金買もがな郭公

横町に耳がついたかほととぎす

若しらん口中醫者が杜宇

耳かねやつきぬいてなけ子規

驚も跳でにげんくつて鳥

藥賣かんばんもかなほととぎす

短冊乃雲筆の峯出つ郭公

飛脚なかま自由で狹し子規

手柄かな三位蹴ッほととぎす

親は谷のかぬ中山ほととぎす

花ちる里方角いつく郭公

腎ノ臓へ補ひかけつほととぎす

聞や奉行囃の勘定郭公

江州命雅 24

丹後笑西

江戸勝信

同

丹波カメ山如山

同

丹州保津吉茂

勢州山田山本半入

鞭石

玉龍

良胤

肯清

如帶

竹陽

入簡でおとしねならハ郭公

箸ぎれや昔窓しきほととぎす

耳の垢ハ羽生て飛をほととぎす

上京の時道中にて

洪紙につまれもせず郭公

鈴鹿をこゆるとて

杜宇いかに旅人も慥にきけ

からかさ乃書付を問へほととぎす

こらへ袋弥勒もきれん杜宇

時鳥一聲落て天下は哥

聞ぬあひて有明に名のれ子規

卯花ハよしや瓜田のくつて鳥

聞斗かハゆしとおもへ郭公

枕さへ耳はしがるそほととぎす

越後一十

志州鳥羽藻虫

玉龍

伊勢補住一色

同

鞭石

如帶

玄真

匹田養壽

水戸住捨船隻

丹後藤原聞計

同 25

なめて世や神農以来餅の草
蘭窓や山あをふして餘一皿

秀海 19
鉄碗
似船

さかつきや水成連哥一紹一巴ノ字
花や迦羅桃の天々ひるなサマ

水口氏少人吉十

燕

外科田中氏可仙家を求
給ふけるを祝し侍りて
燕宿し富貴ぞ敲ク外科ノ門

似船

歸鴈

塩島ハ魂や越路にかへる鴈
大淀乃浪や腰をす天津鴈
指のさき置土産にや帰る鴈

玉龍
藻虫
露程

猫妻恋

天水や互に影を猫乃妻

友静

春駒

上京の時道記の中柏原
春駒やかしハ原をも狂ひ出

越後柏崎一十

春草

荳と言ハ酢飯とく也ほうれんさう
賣ためや錢五十ばかり路ノ塔
伽なりけり烟草に成て這子草

桂河原町久善
福田春松
加納正直

春月

20

月ハ袖に柱おこせ空乃春
行一燈ハかゝげもするを臘月

春澄 20
加州山中佳元成

藤

蝮有山に千年乃松の藤
付たり短尺の舟を藤並に

松春
ヒロセ宗直

春郭公

不定世一界春にとりこせ子規

江州昌次

雑春

浪の文有て松尽クとく酢蛤
養父入や春乃隙ユクこまん女良
いかのほりや二千里乃外の子共ノ心

柳燕
松春
丹波くるるト浅

鷺一人ノ籬下シ太山木匂ふほくちたり

江州彦根花新

御忌也けり萬無目前乃經机

土橋之隅

嶋繻子やはつ虹めぐる山の腰
春帰れば山青して人しらし

小野是笑
玄鶴

僧ワキや丹霞木一佛新の能

加州松任薰烟

道乃えかたき事を敷て

あをい作の下染や先春の色

江州サツマ住宗孝

大勢にわつて入けり薪の能

日向縣ノ住樋口姓

唯けり延寶ちゝほう万歳樂

平井長友

杉葉見て諸白有となん鮎ノ鮎

鉄碗

野々宮や黒木の鳥居薪の能

水谷公同

方引やさすがミ錢にハ悪魔ヲ拂

和田貞則

此藝やつる米になるはり鼓

西村定重

芝居見ん念にもあらず御忌参

柳燕 21

出かはりや六尺さつて主の影

春澄 21

延寶七年かみな月二十五日

若江釣軒より木像柿本ノ

尊影を得侍りて其翌年

三月廿四日車屋町新宅に

てはいかに

夏ちかし入麿指レ南ヲ車屋町

大ノ塊ノ假寺

陽一春呼り

似船
玄鶴

ひがし山

安樂音卷上 夏

題

更衣 杜若

一八 牡丹

灌佛 郭公

螢 百合草

蚊 夏虫

五月雨 五月五日

蟬 夕立

扇 夏月

22

智恩院へまかるとて

花ハ祇園よしや鼓かば楼太鼓
覆哉小袖。わが花見暮浮世すぢ

山ながら花乃土産や二日酔

花見にまかりて

山や春天も管まく下界の小歌

白繻子乃花がめぐるや山乃腰

花に風や心におもひ愚痴にいふ

人にもめて今大陰たり太山ノ花

花を見する人置のかゝ有それハ雨

奥州松嶋一見乃時尺迦崎

といふ所にて

しやか崎や雪山乃薪花乃波

身の後や借金有とも花見酒

沙門末辨

中尾正吉

員明

江州彦根花新

同

同所竹原氏不障

丹後丹誠

鉄硯

江州中村氏一以

員明

藝あるを花の扶持する木陰哉

茶屋の鉄樹花に身ヲ火吹竹

佛あれは上戸有花柳は樽

たましゐや口一上に去テ花一句

追書

あひしれる僧の追善

花も風に実や法印とゞまらず

小袖羽織なと幕に打かけて

花に酔り羽織つかんで投盆

板木にもホリヌキノ井や江戸桜

酒屋こそ此方花見えおほえ帳

樽前に花有てはやし茶行一厨

おもしろし神一書に云クい勢桜

よき色哉二分ばかりの浅黄桜

若州今武17

江州彦根美代都

高野山五室如井

定久

同所似水

加州金沢一笑

同松任薰烟

同

山崎ト琴

丹波サハ山重勝

江州海月

江州サツマ命雅

田辺如常上京の時申侍る

飛や花文殊の智恵に羽はへてハ

釈迦乃時代花やなかりし飲酒戒

似空軒安静忌日釈教誹諧

花を仏況や百韻におゐてをや

田中可仙子にをくれ給けるを

とふらひて 浄土真宗なれば

ちる花や聖人一一流の御勸化ハ

北野社奉納百韵に

あふぐへし花に聖廟月に哥人

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

桜鯛

樂くハ風に吞せし花見酒

懸たるや花に横雲御所懸着

纏に風破子の茶漬夕の花

山寺乃春のかたみや魚乃骨

上戸に鞭へうたんやセムル桜ノ馬場

花帯タリ唐津焼の樂天古酒ヲ遠ル

幕や消て諸白の化身帰れば花

回ハふるしへうたんの息花乃庭

都かな花にはなさく花見衆

出家たちくやミ給はん古郷の花

花守ありや雲頭をふむ雨の脚

花ちるや無常の調子軒の風鈴

頭れけり巫一山乃神女梢乃春

笑ひ仏さくらばゆるせ居士の花

濱崎利直

新庄家次

俊和

同

玉龍

如帯

同

慕昔

江州柳川住一以

同妻

同所サツマ治之

同所中村長杏

江州彦根不障

意程17

銭かけ松春霄千貫や伊勢桜

似たり桜いせや尾張乃海つらに

不言とてあまり也花を雨の脚

都乃牛ハ花にもまるハ斗樽乃山

龍なるかな花行一厨のぼる生香

独吟百韵に

懐一紙の花大師父母タリ三教指歸

とつ国は水草きよみと詠

給ひし僧都の哥を思ひて

玄寶や分一別ちがへ宮古乃花

花乃山や小袖の蒔絵酒の時一代

おくむら鞭石やよひの末つかた

法観寺の旧跡にて興行

浄一蔵有や屋にかたふく八坂の花

家次

肯清

草船

玄鶴

鞭石

玉龍

如帯

嘯琴

似船18

組板や柳はみとり鯛ハさくら

鱗もや花ちりたりと笛吹鯛

かまほこや花乃雪の山桜鯛

柳一上に鱗片々たり桜たい

春田

去年乃秋かる田や春につんがへし

三月三日

草餅や任二大納言一ひるな乃帝

三日乃節や堅ノ一一点西母が桃

あぼしきたる雛の大臣や桃一源氏

草餅や只三分はかり鑽レ砂一糖ヲ

屏風時テリ是レ雛の世界桃ノ林

志州島羽住藻虫

春澄

越後相崎重榮

丹後氏重

廣嶋住小川親之

鉄硯

江州西山氏員英

久田安宜

柳燕

似船19

穴あけて春を見せたる氷哉

友静 13

初春私宅ノ万句に
筆渡ッて硯音たてつ凍解ハ

似船

春雪

雪しるや乾坤ノ外の胡椒壺

越後柏崎定久

私宅乃會に

春や解たかねの胡粉土西一行

似船

初午

はつむまや三ッ乃灯百目かけ
いはへはつ馬の吉凶きつね乃尾
初むまや化して一文「古」孤
大まいり天晴はつ午「候」よ

江戸住春知

匹田養壽

草船

橋和田氏兼軌

佛別

一向宗乃寺にて

照スなり世の盲冥を涅槃の月

西村如津

涙そへて五十三類やねはん像

遠州ヨコスカ品少

西陣の會に

涅槃ノ雲有心にして筆乃莖ヲ出

似船

沙弥へてや長老病死涅槃の歎

江州一以

遺教や無常の手形尺尊判

同

涅槃乃齋本来一物也練鼓ノ豆腐

如帚

尺迦の別龍女なく也めらめらう

養壽

ある寺にて

けふぞ実かのこ曼奈羅ノ雪乃終

伊安

尺尊や醫師がはなしたけふの夢

越後一十 14

柳

四条乃辻青岸の柳を削成リ

員明

延寶八年三月十四日

善導大師千年忌に

飛ノ柳千年忌乃緑鐘木に満リ

似船

花

上京乃時靈山にて

雨急げ国阿の履はつきくら

江戸専吟

古袖屋貞隆興行

はつ花や五条の吉野小袖ノ山

似船

西山に花乃里人獲タリ桜狩

加州一笑

小袖幕やかのかこ斑に山さくら

秀海

花はいつ抑時正乃七日比

良胤

しんあれは紐とくも有瓶の花

江州一以

雨ノ脚や急げは程なく是ハ花

越後一十

役者の花使ハ来たり芝居ノ馬

鉄硯

魔所乃山花にハ怖ル、氣色もなし

江戸佐々部雪窓

極上なり三月吉日はな袋

丹後竹陽

魚ノ道にや種もしミぬる花見酒

伊安

人ノ家を見て花有ハ猶し娘ノ子

如津

粉川氏豊久面吟

似船

酒代とや花ハ生れん五百両

小原宗長

花乃色や小竹筒世にふる小ふろしき

肯清

雪のはたや花恥かしき小袖幕

加州一笑

ともかくも弁当はからへ花見乃供

同

花に鐘我等がむね乃火うち哉

同 15

花とちらす錢や井乃五千貫

加州住友琴 15

開そちるそ始終苦じや物花じや物

頼宮為信

これは諸白西洋布の幕花乃山

土橋之隅

花に風実一正めいわく手形なりと

江戸勝信

花は世界都は腰にひつ付たり

頼明

おくむら鞭石両吟

似船

花の曰ク風をつぶさぬか樽乃山

江州梅鹿寺公荷

花ナラズヤ予ニ告テ云テみよしの

豊久

ちりもせず酒も残らぬ樽哉花

同

西樓に月落て花や塩瀬乃波

丹後丹誠

さくや花皮付乃はしら折釘に

鉄硯

深園にもみうらや匂ふ娘乃花

丹波保津茂春

一ノ升は夢のごとしや花見酒

同

もどり足や花に瓢箪中「が」へり

花見にまかりて

酒に影や動ス唇ノ小歌の花

ホク江林孝

たぐも見るにそれハお樽か花に酒

丹波龜山村上如山

素面乃色鮮矣仁花乃時

秀海

花に酔リ夫乾坤ハ御一所文一匣

夏木軒重尚

三月廿一日東寺にて

入一定の地行ノ厨乃曉花あへませ

江戸風水

花見にや貞女も両一夫駕乃者

加州友琴

寺がたや盆と正月別して花

丹波保津忠房

樽乃山酒や肩こす花の浪

頼宮為信

花乃雲や水茶屋がめにハ珍帛

頼石

瑠璃や迦羅の浮木乃浪ハ花

水谷公同

我不ノ酔花にぬかしつ腰ノ骨

柏崎住一十

雲の鴈や文車ノ書吉野ノ花

平井長友 16

といへる事を思ひて

かきそめや兼好乃耻わが無筆
天清淨地しやう正直や神乃春
民の春や斗米三銭今此時
けさそ天下碧玉の春鑑硯を
とし玉や和光の塵すふえ方棚
大ふくや茶碗にむらがる密雲龍
きのふかもめつつかみしか春霞
はいがしら幾世つき竿若蛭子
書そめや今貫之がこと葉の末
もミ裏の山道やこえて都乃春
岸陰乃裏白乃鶴や青海波
今朝世界新懸の春金輪際
赤昆布や紅にほふにし春

松前住工藤宣祐
廣嶋佐伯雅矩
岸上氏意叶
似船
宗直
立可
春澄
釣軒
友静
女房杉
松春
鉄硯
女房梅

10

横雲や山もきハ墨けさの春
大ふくの龍團や起す雲染付
漆くさし太簪にむかへバ天下乃春
若水や福聚海无量中にも茶
坤一軸乃象牙出山の鶯青帝筆
富貴天にはきだめに有宿乃春
請人やとるにをよばぬ千代の春
江戸の春や人間長久の聲満
大ふくや紫たゝむ小堀の波
枉乃船かつほ飛入レリ雄姿の海
光陰や百代乃客君が春
巖が云ク千秋萬歳野老の春
ことのばらや二足当千御代乃春
松立や先一番にくぎぬき門

女房菅
可仙
慶命
貞隆
柳燕
江州員英
丹後丹誠
慕昔
道之
松以
員明
松春
横山自笑
笑西

11

懸想文

恋乃潤やせにかはりゆく懸想文
鶯
鶯や讀仏乘乃るんすの音
独吟百韻に
三皇乃聲乾卦に響タリ金衣鳥
鶯に菜つミ水汲すり餌かな
正月九日万句に
先鶯次にきく聲や帳剪フ
鶯や両替がめにハ竹ながし
題目やきめる鶯むめ乃数珠
帳とつる鶯やはつね棚おろし

江州彦根
丸山氏
花薪
丹後田辺
中村氏
慕昔
同所如帝
員明
柳燕
鉄硯
上總中村氏重賢
丹波保津村上忠房

12

東方や御ざんせいる様天下の春
御代乃春人なとがめそ番太郎
呉服所なりければ

加州一笑
同

注文や書とも尽じ小袖乃春
かさり縄や松風乃爪音櫓ヲ遊ル
瑠璃や万年乃春ね巻のミの
出ー現乃春富士の若生や世界の松
とし玉や銀要挙てこれじや迄
姫松やいせ多び乃齋と聞えける
千代の沙汰や五人与より明乃春
年とくや大簇界の辨一財一
けふこそハ神代乃子ども若蛭子
堯舜も文臣さげん御代乃春
繁樹や年ひとつ何今朝の春

ヨク村鞭石
連水外記石虎
女房たり
秀海
松以
可周
丹後笑西
江州一以
員明
豊久
柏崎住一十一

12

梅

梅一花折て格子にさすや端座敷
降雪や梅一花ハ覚えす梅先知ル
二月廿五日西陣乃會に
杜家ノ曰ク天神何ヲ言哉和光の梅
梅さくや国に文一臺さかん也
御繪旨奉加の僧に
法界の施主に花香や繪旨梅
宵月庵万句に
梅飛て衛士籠むなし天一晴一風
春水
氷消てどろや流るゝ鰻の爰

宜秋
員明
似船
加州金沢柳糸
更衣不足
鞭石
鉄硯13

得方ミむまの間なれは

とし徳や喜撰法師乃隣殿

雞一且や玉子をにぎる筆始め

あをミだつやおほぶく

まんくとしてせとの海

立たるや千世を蝶つがひ今朝乃春

花乃春よ浮世袋に迦一羅へあれど

大鏡正月の本一地海老入あり

春に鳴レリ鳥追ヲ以テ編木の音

白米やかざるほうらい乃松に浪

何に替荷春を付たる馬乃年

松を鳥居額や伊勢蝦大明神

京江戸をよし野初瀬よ花の春

百里奚や諾よりて国家乃春

7

同名柳雪

石野重好

廣瀬宗直

三浦畫風

女房紅

織村豊武

多田一步

増尾肯清

ダイゴ沙門友雪

久田安官

神原伊安

江戸太田春知

趣向旧御繁昌つきて代々の春

菓子や富士を目あてに国乃春

外法がしら蟻乃蟻也御代の春

ちう玉や虚空に飛行し手毎に帯

白乃蟻やゑほしによせて若蛭子

静なるや硯を以テ四海乃春

門松や千代を見セ物大かはん

舎人などたまはる騎馬ぞ年男

銅乃海老銚やあくる門乃松

はご板や白鷺の群居お松女良

としとくの脇正面や乾すミ

日を以テ万歳やかぞふ筆始

正月やきさい乃宮のかるた合

江ハ硯より初テ成字申の年

同所小嶋勝信

同所沙門湛水

照取重貞

仁木葦船

一睡

常治

清水玄令

近藤立可

沢井一湖

和田貞則

ヨク田良胤

横山自笑

女房滋

岡崎良寛8

年玉ハ天晴西条と見えし柿

厥中ヲ鳳告てけり堯乃春

ねばふてよし餅に音アル諷初

かざる海老や伊勢ノ大塚光紅

花ハ吉野月ハ更科春ハけふじや

歳且や點取にかなふ詠吟たり

天下の試筆有情非情乃其音皆

かざりけりそれハ祝ひの遠山松

びいどろや天下の目鑑春乃色

天筆や和国の湖水硯の海

横雲やさほ姫君乃御所かつき

徳や富士孔子黙して日本の春

君の春や生国ハ東千代乃住

申のとしに

8

土橋之隅

小西嘯洞

西村如津

岩根利勝

丹波黒井露白

同所津万露山

同所幽也

同所岸可遊

渡辺知光

貝田露程

女房梅

丹後田辺中村慕昔

同所笑西

歳の名や月もお手に入天下乃春

輪王やだしぬいて今君じや春

としのかしら与力や三百六十人

かきそめや住吉使者ノ大明神

先笑り分一限乃顔はせ若蛭子

松ならてハ機根くらべむ御代の春

門松やされば孔子乃哥枕

申乃としに

春や見する蓬萊乃座に龜ノ丞

春立や生二大服釜一曉ノ炉燃

元や三若むらさきハことのばら

ものまふやお門まで青木松太夫

御代を祝し侍りて

かざり松や一八十に百一千一株

同所利忠

同所丹誠

同所氏重

同所友友次

同所蒙頼

同所白梅

同所織都意程

同所(逸)都聞計

堀江林孝

内藤宗清

丹後半山住良次

志州島羽住一松子9

寒影や天下ー鏡餅乃春

青巖ノ形赤昆布ヲ帶テ蓬萊山

柴の戸に春ハきにけりこぶくめん

氷きえて浪久一代や国乃春

若施も虚あらじ直な御代の春

文分為二ノ辞

飴松やもんにわかれてニツとす

春や先南枝が為に来りたり

花はいさ柳ハくれなるとそ袋

鬟鬟を迦羅で染てや若蛭子

ちよの春や又此御宇ヨリ始めり

御代乃春ハ年のよるのミ不足哉

二本入の桐に鳥すめり天下の春

門松ハ江戸のかいだうくだりかな

9

野村万由

摂州金龍寺寶賢

本國寺周孝

同寺中泰雲

同寺法院寛恕

同寺中恕観

越後柏崎重榮

女房たり

丹波サハ山重勝

岩州小浜住今武

加州金沢小杉一笑

越州柏崎長井一十

上總新戸住重賢

江州伊香郡員英

同妻

同所海龍寺海月

同所磯野昌次

江州柳川住一以

同所上林氏自悦

丹州伊津住茂春

仙臺住千田

松前佐松氏廣住

同所同名廣謙

同所同名吉廣

同所松軒子

徒然草に手のわるき人のほゝ

からす文かきちらすハよし

猫妻恋

春駒

春草

春月

藤

春子規

雌春

安樂音卷上

元日

安樂ノ音や本朝外一題乃春

此句ハ延寶六年十月十八日の夜

たにこ乃国たなへの住織都意一程

といふものゝ夢に

玉津嶋明神告させ給ふとなん

春なるかな今朝三足ノ鼎哥ヲ詠

御鏡や若一餅ノ守としつぐ作

仕ヘケリころ柿の四皓野馬臺ノ春

春を得タリ先左蒼龍西にきりん

琉璃乃天一地太極ノ圖星春を煉

かしらおろしける又のとし乃

若江釣軒

自敬軒但安

西川可周

石津柳燕

奥村轅石

春に 天台宗なりければ

大ぶくやけさハ止観の海を湛ヘ

裏白やくろくをすこし開キ給ヘバ

おはぶくや須弥乃滴青磁の南

ほうらいや八百屋萬覺え使春

扇屋の列一子片に乗ケリ四方の春

民乃春や樓閣の御一製世界の迦羅

吞初テリ神代の蛇之亮未分の霞

諷初や米啓期がかゞ節自彈乃吟

御代の春や青表紙かけて巻ノ上

祝ひ候君をおもへばち栗を

来る春や天下満一遍花千一片

弓ハふくる精一兵のてたり筆始

かきそめや四十里四方の岩をつかふ

俗名西村正直秀海

小野鉄硯

池田玉龍

但廣

識氏林雀

坂上松春

野口玄鶴

丹後田辺本河如帝

同上野竹陽

女房菅

國領慶命

富田員明

岸田貞隆 6

5

観蘭沙門未辨 6

田中可仙

岡村了意

粉川豊久

高橋正伯

鷹峯日允上人索笑

同所一妙

同大西催笑

同女房まん

同森脇道之

女房紅

女房菅

更直寺不足

似船

告て明ぬ玉子乃親士世界の春

我寺乃え方一棚こそ旦那なれ

ころ柿や瀧のしら玉ちよの春

辻駕のともじや知ラン春のくるを

とし玉や班女が闇を桐の箱

小判にも花や咲なん御代乃春

廣キ御影須弥や芥子粒天下の春

治リ卒メ芥子乃中迄御代の春

万歳の聲やかたゞ峯天下の春

とし玉哉けにも金銀朱阿弥折

笑ひそめや刮ラねども若あひす

年とくや四季乃初段乃浄るり姫

すゝむ餅やかんの大将手かしら

内に思慮外に世事なし庵ノ春

陰陽わかつてノへなれり筆始

片にのせて呼きたり世一扇と春

門松や繫ニ金一鈴一むまの年

かち栗や維石巖々タリ蓬萊山

神風やいせち乃何里御代の春

上々吉峯おろしあり門乃松

さし櫛や風新柳のひたい髪

假令小判それハかびるとも御代乃春

天下靡ク春の光や江戸小判

我はあるかミさま乃流也筆始

書そめや唐子靡て筆もたせ

蓬萊や檜物屋の塵積ツテより

代は源氏春たつ空や青表紙

静也舞子御覽せよ御代乃春

明田薄古

ラク田松以

富尾嘯琴

池永碧水

宮崎小石

田中宗有

女房ミね

嶋本重高

神足重治

女房久米

青木春澄

井待友静

夕烟

新家重政 7

五―絃索―索として。南風週―羅を
送れば。宿老町―中。ふくさ物乃
愠を解。帳―簾卓なりし。唐―國の
むかしハ。さもあらばあれ。糸瓜乃
かハのきんちやくなるへし。抑
あめなりつちさだまりて。人の
諺はじめておこり。古へゆき
今きたりて。我日―本乃あそび
たえざる中に。あるひハ老シキ
人ハ。桂―馬に鞭うちて。靈―山會―

場―に到りて。湯豆腐乃雪に
嘯。飛―車を石―徑に停ては
。坐に雙―林乃あげ駄を愛す
。あるハ若人ハ。煎―酒乃逐―水に
うかふ。鯉―屋の輿に乗て三線を
弾。藝に遊ぶ者其好―所意
味各―別なり。茲に幕―天席―地ヲ
從二―意―所一レ。如。滑―稽に耽る
人―々世におほし。されば兎乃
角を刻ミ。蜘蛛―蛛の糸を牽て。

1

男める形となし。亀毛のつくり
鬚をつけ。蛭乃牙を生して
舌を動かし。花―鳥を経にし
。風―月を緯にして織れる。綸子
縮―綿やうの物を身に縋ハセ
衣―紋おかしげにかいつくろひ。
しきしま乃道のちまたに
あそばせて。百―韻その外哥仙を
うたふ。嗚呼治世之音ハ安フ
以テ樂メリ其―政。和―平也故ニ

慶。哉。仁を含ミ義を抱く獸は。
畫―工に視ても緑―青を踐ず。七乃
徳をそなへたる五―色乃翹ハ。扇
篋に竊。磨―骨の糊を食フ。惟
天―下泰―平乃時に。あふひ乃蔓
ながくつたはり。松は君―子乃
徳若に五―万―歳乃東。延―寶
第八庚申稔。初―空月十八日
城―州愛宕郡車屋町通二條
蘆月庵似船序ス

2

安樂音卷上 春

題

元日 胡鬼版

若菜 懸想書

鶯 梅 春水

春雪 初午

佛別 柳

花 桜 鯛

春田 三月三日

燕 帰 鴈

3

翻刻・俳書『安楽音』

田 中 道 雄

Adaptation of Data: A Collection of Haikai "Anraku no Koe"

Michio Tanaka

This work is the complete adaptation of "Anraku no Koe" edited by Jisen Tomio and published in Kyoto in 1681, which is important as the earliest collection of Haikai in the style of a Chinese poem.

本書は歳月庵富尾似船（寛永六―宝永二）編、延宝九年^{一六八三}三月、京の書肆、村上勘兵衛元信の開板に成る俳諧撰集である。似船は荻野安静門で京貞門一方の雄として鳴り、旧都に在って宗因新風を迎えた宗匠達の一人であった。延宝五年『隠賞・隠笠』を撰した彼が次に世に問うた一大撰集が、延宝六年から八年までの作品を収める本書であったと思われる。

本書の文学史的意義については、早く今栄蔵氏が「談林俳諧史」（『俳句講座 1』収）で触れて漢詩文調俳諧最初期の作品を含むと述べ、似船一派が新風騷の創始者であるとの断定は避けつつも、その周辺に流行の端緒があったことを指摘しておられる。蕉風醸成における漢詩文調の影響については冗言にも及ぶまいが、本書刊行の前後、あたかも桃青は江戸深川に結庵して門人李下に芭蕉一株を贈られ、『俳諧次韻』上梓に至りつつあった。本書の史料的价值は高いものと評価できよう。

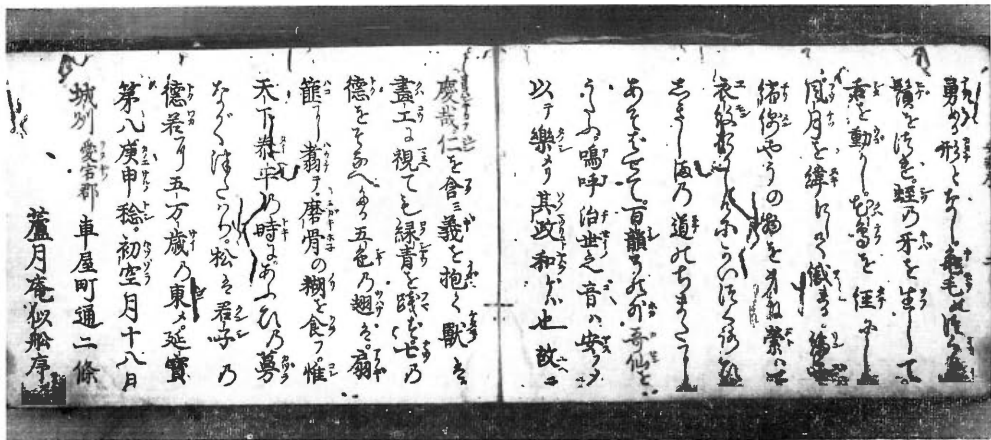
『国書総目録』によれば、東大図書館竹冷文庫および天理図書館綿屋文庫に本書を蔵すると言う。しかるに、竹冷文庫蔵本はこのたび特に御調査を願った森川昭氏によれば現在欠本であるとのこと、綿屋文庫蔵本もまた零本である。とすると、ここに紹介するものが唯一の完本と言うことになるうか。蝕害も加わりつつある今、豊富な紙幅を得たのを機に全巻を翻刻しておこうと思う。

該本は佐賀県鹿島市鍋島直紹氏蔵、現在同市祐徳神社に寄託中の中川文庫に

収まる。中形横本、二巻合一冊、綴じ合わせの形状から察して、もと四冊本と思われる。原装の面影は止めぬが、わずかに残る濃紺色の表紙破片がそれであろうか。表紙左肩の墨書「安楽」はもちろん後人の誤記である。改装の際に挟まれたとおぼしい末尾の遊紙一枚を除けば全九〇丁、柱刻は、

安楽序	一	〃	安楽序	三
安楽上	四	〃	安楽上	四十九終
安楽下ノ上	一	〃	安楽下ノ上	十八終
楽下ノ下	一	〃	楽下ノ下	二十三終

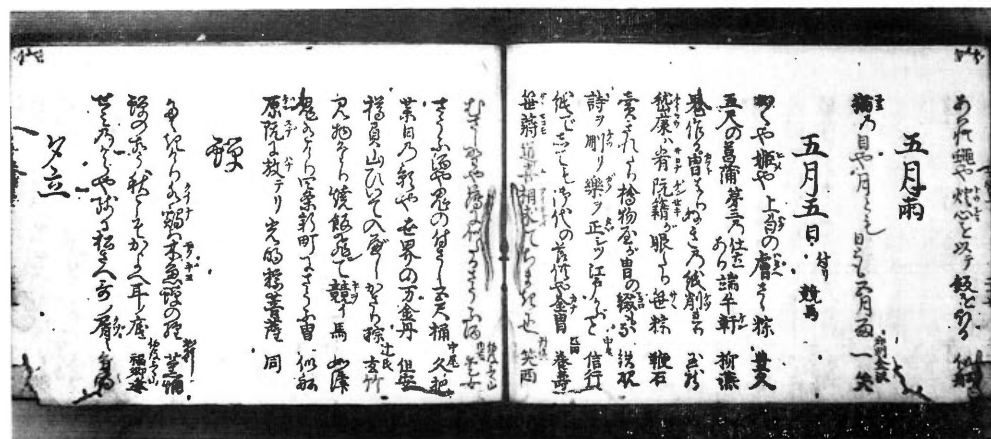
の四種、内題は、「安楽音巻上」・「安楽音巻下」・「安楽音巻下ノ下」とあり、内題「巻下」によって統括される本文は柱刻「下ノ上」の部分に相当する。巻上は序と四季類題別の発句、巻下の上は付句抜書、巻下の下は歌仙・四十・百韻と句引を内容とし、その発句の部が上のおよび下の下に二分冊されていたらしい。すなわち、各季一丁の目録をもって始まる四季部立中の春・夏が前者に、秋・冬が後者に属し、これは巻上三十一丁目と次丁との用紙の寸法差から証される。この差異は、巻上四十九丁目、巻下の上十八丁目とそれぞれ次丁との間にも存し、原装本が、これらの箇所で分たれた四冊から成ったことを示している。『俳諧書籍目録』は四巻、『俳諧大辞典』・『国書総目録』は四冊と記し、本書が同じ四冊本であったことは間違いない。行数は、発句・付句抜書は毎半葉十四行、連句は同十二行、序・各季目録・句引は同十行、板



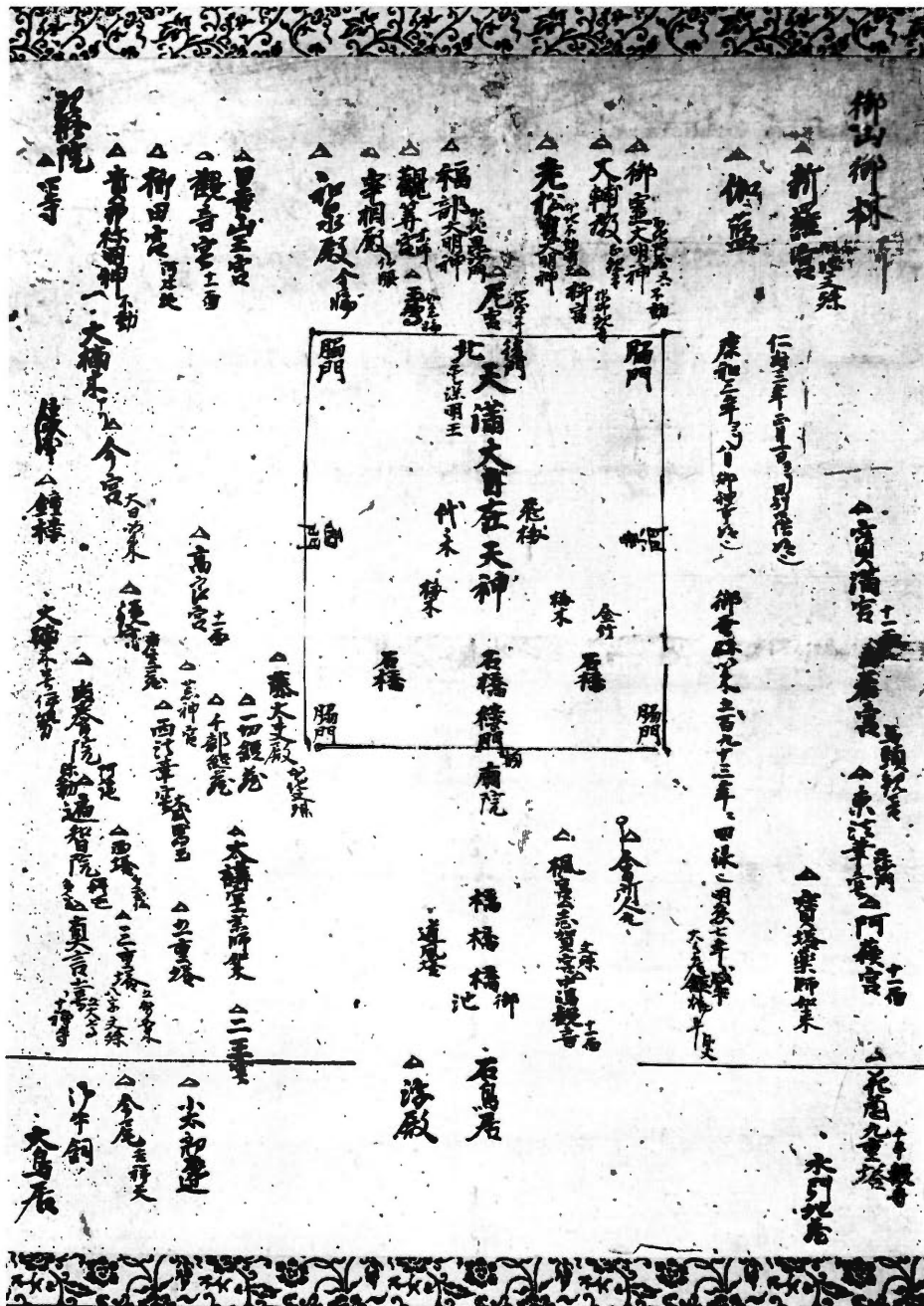
『安楽音』序文（柱刻序二～序三）



同 上 本文巻頭（柱刻上五～上六）



同 上 巻上本文（柱刻上二十七～上二十八）



太宰府天満宮境内堂屋配置古図 太宰府天満宮蔵。紙本一幅（タテ49.9センチ，ヨコ39.9センチ）。年代未詳，近世初期筆写と推定。△印（朱書）は当時の現況との照合あとと思われる，年代推定の根拠ともなるが，調査中である。西門外に《連歌屋》3字の抹消，楼門前向って右手に《会所人丸》あり。本稿所収の『連歌屋記事』の参考として，図版のみここに収め，詳論は続稿に譲る。

史料篇 追加一

龜井戸天満宮蔵

真淵自筆(草稿) みやびこと演る屋の記 一卷

かつしかに齋ひまつる 天満大神の其広前に池有 池の頭に屋有
名つけてみやびこと演る屋となひひつ 此みやこの 大城のも
となる百千のみやひ人のとも この屋につどひて 春は春の言のば
へ 秋は秋の哥によひをするところ也き しかあるを 何そものこ
とはへにか有けん 火炊彦の荒ましてあらず成にたり それか後味
村のいさと行人はあれど ことをなけかふのやなかりけん 筆ことは
に つれもなく過にたりけり
こゝに秋篠のふとまはしは 万にすぎみをにしあれば 鹿兒自物ひ
とりしぬはず 今年明和のふた年五月といふ月に もとの如造らひ
得て ひろらに諸人の為とせまくおもへり よりてそれか故よしを
あかするさん事をこひぬ うへもめてつへく 真事にほかひつへく
おもほゆれば 即にひ屋只是ぎをすらく 其詞見はやせる花艶はう
しはける大神の 依也 なり出る川葉は香土の命の しづも
り也 築立る柱はその諸人の心のすきみ也 伊杵築ける岩根は 此
をちか遠き 名代也 には鳥鳶鯨しねの新しをり 瓶の上高なし
て 大神にさゝけし置 八平手もならに打あけては 今もしみゝ
に 後もひさゝに聞えんものそ 秋しのゝをちか遠石
かも真淵しるす

〔奥書〕 加茂真淵真跡無疑者也

古筆了伴 (印)

〔奥書〕 此みやびこと演る屋の記一卷は 東安樂寺聖蔭院に 嘉永四年九

月廿五日古筆了伴の納めたるなり さるを司務大鳥居別当より
そのよしを一言記してよとこふにまかせて とりあへず筆をとる
は 内蔵頭藤原直格 (花押)

〔註〕 『賀茂翁家集』 卷之四所収「新室称辞」(賀茂真淵全集IV四二九九
一ジ)の草稿。

史料篇 追加二

菊池軍記 五(題簽)

菊池伝記(内題)・菊池佐佐伝記(柱刻)
宝永七年刊・井沢蟠竜著・全十冊

○甲斐宗運病死事

天正十一年七月五日。甲斐宗運七十五歳にて病死す。益城郡木倉村永寿
寺に葬送す。後に其病源を尋るに。先年叛逆によつて宗運に害せられた
る黒仁田豊後守は。宗運が嫡子宗立が妻の父なりければ。彼妻つねに舅
宗運を親の敵なりと思ひけるが。あるときをのが女木山備後守惟久が妻
に向て。みづからが親豊後守殿は叛逆とはいひながら宗運の為にころさ
れ給へば。宗運は敵の敵なり。われ其あたをむくはんことをはかるとい
へ共かなはず。むなしく月日を過したり。足下は我子にて宗運の孫なり。
親はちかく祖父は遠し。幸に木山に温湯あれば。宗運を入湯の為に招請
し。毒をすすめ殺して給はれと頼しかば。木山が妻同心し宗運をよび饗
応のつるでに毒をすゝめける故と聞えける(下十一)

伝云。右に載木山の城主。木山左近太輔惟久入道紹宅は、平生連哥をた
し(な欠カ)めり。ある年上洛せしに。北野にて紹巴法眼連哥興行の事
を聞て。惟久かしこに趣き紹巴が。

又七たびのわかれをぞする といふ句に惟久

八重ざくら一重はさきに散そめて

とつけゝるに 紹巴座を起て いづくよりの上洛ぞと問。惟久 筑紫が
たの者なり(と欠カ)答るに 扱は肥後の木山氏にてはなきや といへ
ば。左候とて談話におよび 紹巴が弟子となり。剃髪して紹宅と号す。
其後北野笠着の連歌に

心くるしき月をこそまで と云句に紹宅

人しれす膚にむすお縷帯

とつけ。紹巴に賞歎せられしより 世こそつていはた帯の紹宅とよぶ。

又あるときの連哥に

人をおくりてかへる夕ぐれ といふ句に

身をいつのけふりのために残すらん

とつけしとかや(十五ウイ十六)

往来まれなる岩かねの道
隠家のうちはせはしく住あらし
花のたもともしつら苔の戸
散ぬれば桜か本もとひ捨て
かたみにうとき春の伴ひ

三

蝶鳥のやとりへたつる夕霞

ふきこすその竹のした風

ませかきの外にも菊の香はもれて

秋の霜とけしつくとする

ひかり今やゝはたさむくうつるらし

ふくれは月にころもうつなり

つなきしも波にたゆたふ泊舟

いりぬる磯の松風のこと

住かふるとま屋は山のひとかたに

雪はらひつゝ爪木こる人

馬草かふほともへぬれば日はくれて

野辺より野へをたとり行みち

さきたつはいつちなるらむ旅の友

身のはかなさをおもふ後の世

しのひては又あひ見んといひかはし

いはけなきまはあやなさかしら

いやしむるみとりの袖のうらみあれや

おまへにとをきつかへかなしも

神わさにいむ日さたまる穢にふれて

戸さししつゝもこもる篠ふき

たひゝに降めくりたるむら時雨

きゆるとみしも雲かゝる峯

かつらきや咲つゝきての花さかり

いくもとならしたてる青柳

生 紹巴

恩 広 叱 仍 生

景敏

寛実

昌叱

紹巴

玄仲

玄仍

生

友益

寿恩

信寛

紹巴

知彦

紹印

昌叱

寛実

紹巴

玄仍

景敏

昌叱

寿恩

信寛

玄仲

紹巴

生

河そひの里より春の夜は明て
かちをまくらの舟くたす音
一ふしや月にむかひてうたふらん
あたゝめてくむ酒のさかつき

名
れいならぬころも秋はなくさめて
みきりにうつす草のはなく

暮ぬれは人まぢかほの虫のこと
色にみえぬるおもひはかなや

ぬれきぬもよしやとうへにかさねきて

雪のやとりにま柴おりたく

さひしさや深山の里の冬こもり

滝のをとしてあらしふく空

しはしたゝをこたりにけるわらはやみ

とり出むかふ文のまきく

月にしもむかしおもへはなみたおち

あらましかはそ身にしてみて憂

露のまもわか行すゑの住ところ

たつねいるこそ法のみちなれ

かしこきに世のうしろもさたまりて

親のあはするちきりあやしき

すぐせもや心のうらにまかすらん

あたなる物と夢とおもひそ

草枕むすひもあへす明そめて

花の木かけのかたしきの袖

うくひすの音にさそはるゝ山遠み

かすみなからも道はありけり

友益 昌叱 知彦 紹印 生

友益

景敏

寛実

昌叱

紹巴

玄仍

信寛

紹巴

玄仍

景敏

玄仲

玄仍

紹巴

知彦

景敏

昌叱

玄仍

紹巴

信寛

生

友益

紹印

敏

紹巴	十二	寿恩	七
儒寛	八	寛実	六
昌叱	十二	紹印	六
生	九	知広	六
玄仍	十	玄仲	六
友益	八	宗可	一
景敏	九		

小島居寛二郎氏蔵卷子本（初折・二折欠）を天
理綿屋文庫『天正文祿百韻集』により補った。
句上げは天理本のみ。名残表三句目より連衆名
相違するので、下に天理本の名を註記した。

△附記▽宰府連歌史研究の当初より御指導いただい
ている中村幸彦・島津忠夫両先生、本稿について懇
切な御教示を賜った金子金治郎博士・川添昭二氏に
深謝申し上げる。肥後連歌史調査については、熊本
女子短大の宮島真一教授、藤崎宮宮司岩下忠孝氏、
後藤是山氏、上妻博之氏、熊本県立図書館資料室に
たいへんお世話になった。

調査に多大の便益を与えられている西高辻宮司・
小島居権宮司・安恒篤氏はじめ太宰府天満宮の方
々、香西宮司はじめ北野天満宮の方々、大阪天満宮
の梅林権禰宜、福岡県文化会館の木村図書部長、天
理図書館、また、資料紹介を許された太田武夫氏・
木山益雄氏・中村義男氏・中川文庫・亀井戸天満宮
の御厚意に深謝申し上げる。最後に、前稿をたまた
ま目にとめられて、中村義男氏を紹介して下さいた
中島安賢氏に御礼申し上げます。

（本稿は、昭和四十一年度科学研究費による、研
究の一部である。）

〈作品 14〉 〔14・15・16年月日不明〕

夢想

草をえて崑崙たはらの秋の暮
月すむ山の露のしら玉
しうれ行野への遠かた鹿鳴て
へかへるさ寒き袖のゆふ風
河舟はなみのまに／＼さしはなれ
みなとをかけて干潟とそなる
てりまさる夏の日数やかさぬらん
木すあつたひの蟬のこゑ／＼

〔巻末〕

御一句

寿三 四十九 四

紹宅 四十九 十八長一

重綱 一 墨付廿二内長一

〔点者名ナシ〕

太田武夫氏蔵『連歌三吟』所収。

〈作品 15〉

何人

へかけうつす山や染川秋の水
なかれのゆふ日うす霧のそら
涼みしも風ひやくかに月出て
へかへるさなる松のした道
妻木とる袖より雪や払ふらん
むら雲さむき里のをちかた
かねひく嶺はほのかに明離
舟にたく火のかけそきえ行

〔巻末〕

寿三 廿五 点六 付墨十五

紹宅 廿五 点九 〔点者名ナシ〕

寿三 紹宅 三 同 宅 同 三 同 三

太田武夫氏蔵『連歌三吟』所収。

〈作品 16〉

追善

独吟紹宅

憂世哉散し跡とふ花の宿
ふるきみきりの霞む松風
岩間より静に春の水落て

天理綿屋『天正文禄百韻集』所収。

〈作品 17〉

文禄四年七月廿二日

何舟

梅か枝や西よりも先初紅葉
音は軒端にかよふ秋風
露落る鈎簾の外面や時雨るらん
霧のたえ間の月幽なり
かた／＼に文したひぬる雁鳴て
江の水さむく戦く声原
水もや舟さす棹に砕くらん
明はなれたる流はるけし

雨はたゞ晴る田中の道見えて
行かひしけき里のかたはら
乗駒やあと先にしも嘶らん
暮わたりたる岡越の末
松たてる奥より鐘の響出て
なをふる寺にすみ染の袖
世をうしと思ひとるこそ哀なれ
いのちのきえをいそく終く

〔信寛〕

〔知彦〕

紹巴 儒寛 昌叱 生 玄仍 友益 景敏 寿鳳 寛実 紹印 知広 玄仲 宗可 巴 寛 叱

物化のさらぬ限の身はくるし
屋もより臥枕露けき
月にけき別し扇引とちて
夢の名残のすさまじき床
袖の上に風の花の散かゝり
霞分行をちの山もと

二

帰る雁声もさたかに聞え来て
波しつかなる春のうら舟
雨や猶空の縁に過けらし
引すてにたるあけほの雲
きぬ／＼の佛したふ小夜枕
たえぬ泪に月うつる袖
律生の宿も思の秋のくれ
分る跡なく露ふかき道
いつしかに野は鹿の音の遠さかり
うち驛たる末の草むら
一筋の塘の柳波越て
ほりかへしゆく小田の水口
ほのかにも暮て蛙の声す也
井手の渡りや程近き里

なら坂や見る／＼跡に成ぬらん
うつす都は時めきにけり
爰かしこ車たて置道の末
祭の庭の袖のかすく
七夕にたえぬ願の糸はへて
月はつかなる夜半の爪琴
うち山や霧の笹の奥深み
なかれ出たる川なみの音
ふしつけや朽てかたへに残らん

生 仍 益 敏 忍 実 印 広 仲 生 巴 寛 叱 益 仍 生 巴 敏 恩 仍 益 叱 益 巴 実 叱 生 仍 巴 印 益

とふ人まれに過ぐるこのごろ
たのまるゝ夢のまぐらの明初て

亀 宗俊

金子堅太郎著『黒田如水伝』二初一順所収。
中津城竣工祝賀。

作品 11

天正十九年十二月独吟

紹宅

《萍をさそふ水なき水かな

《井関の波の寒き夕風

千鳥鳴河辺の秋の月澄て

霧のたえまの霜のむらゝ

竹の葉の戦きに露や散ぬらん

里人かよふかたはらの道

はるゝとかへす田面の山かけて

霞につゝく柳いく本

しつかなる夜も明更の春の水

舟さしいつる遠の川波

湊江のむらより村のあらはれて

焼火のけふり立のほる空

なき人をしたふ涙のこほれそひ

《面かけ残すけさの衣々

浅からぬ心を文に巻こめて

旅のゆくゑそおもひやらるゝ

《待日もやこなたかなたの子規

村雨になる山のはの雲

岩間より落てなかるゝ谷の水

わたし置たる橋の一筋
古郷の花は色に外に見えて
鐘より明る春の夜の月

中川文庫蔵『点取連歌発句』所収。卷末二、
「付墨廿三句 此内長四 臨江齋紹宅」トア
リ。

作品 12

天正廿年千句之内

付句 仙入齋紹宅

静なる家の煙なひきあひ

花に柳にあげほのゝ庭

もとむるもすゝみ所は稀にして

網代くつゝなみのはや川

花も紅葉もひとりこそ見れ

菊かはる谷の戸ほそは里はなれ

川きしのなみのうき草茂りそひ

なひく柳のかけの涼しさ

いつしかと生したてたる時を得て

門田の面のさ苗とるそて

うき恋をいのりてこそは見るへけれ

ものゝけとなるこゝろはかなや

吹まさりぬる風のだひゝ

外山より太山のかけに分入て

ふりそふ雨のなかれとそなる

いつまでかあふせも知らぬ涙川

浜の真砂の手ふり見えけり

松の葉をかきあつめつゝけふらせて

仏は人のためにやはあらぬ

ふるてらに植をく松の下すゝみ

ぬしある梅の花はおられす

かすみもや北野の社かこふらん

ふりはつる跡にものこる道ありて

御幸の袖はさかの山かけ

〔コノアト付句45句・省略〕

太田武夫氏蔵『連歌三吟』所収。

作品 13

文禄二年六月四日

何人

撫子は秋またて見る花野哉

虫の音さそへ夏草の露

暮ゆけは袂すゝしく風立て

舟なかしやる流はるけし

水上の波の浮霧晴とをり

ひかりほのめく月の山もと

冷しき道のかへさの末遠み

いくたひゝに時雨ふる空

村雲やたゝよひつゝも残るらん

たえゝにしも風わたる音

呉竹のかこふ軒はのおくふかみ

□は衆に之(逸)か、遅か、不明。

太田武夫氏蔵『京連歌文禄二年』所収。

覚全	10
玄旨	13
兀生	9
重然	9
長澄	9
氏長	11
紹宅	9
了意	11
宗巴	9
養□	8
千代	2

つれ／＼も住つくほとのかくれ家に
梅路は人の跡とし(ふむ跡)もなし

二

淡雪は(の)見るか内よりふりそひて
めくる時雨の寒き山風

日くれてや柴指(積)車いそくらん
道のゆくゑも(に)つくく一むら

青柳の木の間しらるゝ花咲て
露をひかりの春の夜の月

鶯の羽吹は明るしのゝめに
分入かたの遠き野の原

霧深き里は伏見の山かけて
竹のそよきも冷しき暮

さしなから秋の日うすき川浪に
むら雨過る水の水上

嶺のはの岩にかさなる陰さひし
やゝ吹出る松風の声

三

夏もたゝ暮(きゆ)るけしきの月の霜
高(ふか)き太山の笹(や)ふきの庵

杣かたもゑらひてやきる宮柱
神のたゝりのためしこそあれ

乗駒もをりたつ道の末ならし
狩場の鳥のちかき草むら

晴わたる雪の上(より)明はなれ
秋の夜舟をつなく浦浪

家々にうつ音すなり麻(海人)衣
鐘も身にしむ暮のをこなひ

しのひねや(を)きゝもさためぬ子規(13句目敷)
嵐もや横川の雲をさそふらん

谷のほとりは杉の木かくれ
ねさめのまくら更る夜の盧

三

むなしきをかそふるに猶おもひ出(て)
老の物なる涙いくたひ

たのめとのをしへうれしき法の道
よはふこたへは遠の川舟

草かりや住家(前)に(か)へるらん
山のすその暮かゝる空

出初る月より露のあらはれて
こゝにかしこにむしの鳴声

へ里はあれてあはれも深き秋の風
へかれ／＼になる道芝の色

花なから朽(古)木の下枝(梢)おれふして
遠さかりゆく春の鳥のね

明たては越る関路の霞日(むよ)に
さしはなれたる毬磨の浦船

四

なき世にも親のいさめにまかせきて
吹つたふこそ家の風なれ

門／＼や茂る柳に籠るらん
夏かけつゝもつはめなくなり

雨そゝきそゝく夕へはしつかにて
ともし火うすき古宮の中

ねぬ人のしはふく声のたひ／＼に
忍ひ佗たる月のさやけさ

秋は猶面かけさらぬ袖の露
玉まつりする野へのやすらひ

松虫の所／＼にほのめきて
入日の跡(かくれ)そひやゝかになる

滝波の山より落る戸難瀬川
へさかりしはしの花の春風

竹垣に紅ましる園の梅

露のみ残るこすの外の雪
朝鳥や出るひかりにむかふらん

色も冬田のはつかなる比
へ浅みとり堤の水は氷あて

ゆく／＼暮る道のつきはし
二句不足

付墨廿句
此内長二

コノアト紹巴書簡(本文5ページ)アリ。

中川文庫蔵『点取連歌発句』・大阪天満宮蔵

『連歌十九卷(二十番)』八れ5 19』・『古連
歌千式百(二十五番)』所収。

作品 10

天正十八年八月吉日

何路

紅葉して松あらはなる外山哉

霧吹わくるみねの夕風
むら雨の跡より秋の月出て

衣手すゞし道のすゑ／＼
一筋の橋のした水晴わたり

川上しきる滝つせのなみ
舟よする入江の芦のうちなびき

鳴たつ驚の声くるゝそら
はのかすむ雲の行衛に日は落て

山よりかよふこすの春かせ
咲きそむる砌の梅や匂ふらん

孝高 長政 紹宅 正三 一安 宗鉄 虎直 浄貞 宗漸 鎮継 長松

入日かた分うつる江の水

へたえく涼しき雲の棚引て
もよほしあへす雨そく也

竹の葉のかさなる陰の深みとり

軒のつまくかゝる松か枝

軒のつまくと末にをきかへてはいか

山風の夕になれはふきそひて
見るく塩の入海の波

あかつきの月の夜舟を漕はなれ

時分さし合候

はるゝかたへの霧まよふ空

啼渡る初雁かねのかすかにて

田面のいなはなひく遠近

なひくさし候

かへり行岡への道の風寒み

暮るさかひの霜のむらく

さかひ分別なく候

はるかなる鐘もさやかに聞え来て

一句珍重むらくへ付所猶可有候か

旅の枕の夢のはかなさ

これは咲陰をやとりの春の花

へかきほつたひの鶯の声

〔巻末〕付墨廿三句

〔点者名ナシ〕

此内長二

小倉市立記念図書館蔵〔古連歌写〕横三巻合
一冊のうち、その二、惟久・船田半醒の独吟
百韻各一卷に、前者は点者名なく〔紹巴か〕、
後者は、宗因・昌程が点をしたもの。「享保
十四己酉卯月十六日写之 好修堂主人」とあ
る。

〈作品 4〉

〔表紙〕

両吟千句

木山左近大夫入道惟久
栗林主計入道等与

〔本文〕

天正八歳正月日

第一 木山左近太夫惟久

栗林主計入道等与

白川や雪より出る春の水

朝日はのく霞む遠山

桜咲梢を伝ふ鳥鳴て

惟久

等与

久

西高辻信貞氏蔵本により有明高専紀要創刊号
に、第一全文、第二の十の各三物を翻刻。

参考『拾集昔語』三に左の記事あり。

彼入道直筆之連歌千句之発句記 愚老前々より持
来候を阿蘇友隆様へ進上仕候 彼発句記に等与々
々と有之候者甲斐宗運家頼侍頭被申付候栗林伊賀
守が入道号にて候 櫻之木柄計握たる者と計存居
候に紹宅と如此儀共は花車なる事共と今以かんじ
入候

右の「千句之発句記」は、本『白川千句』をさすと思われる。

〈作品 5〉

〔年月日不詳ナルモ、紹宅木山城主時代ノ作
ナルヲ以テココニ収ム〕

於肥後国御船山三吟連歌

〈作品 6〉

〔年月日不詳。本文4ページ参照〕

〈大空のくもらてふるや花の雪
松原の上に霞む日の色
春もや暮る山の端鐘鳴て
舟さしかへる浪のしつけさ
風よりも涼しき露の竹の葉に
雨の後猶螢みたるゝ
村雲に影ほのかなる月出て
荻に薄にまよふ野の道

中川文庫蔵『点取連歌発句』所収。

花見よと杣木に残す楊哉
茂るふもとを分る山道
秋ちかき露に男鹿の立濡て
雨の余波の月のさやけさ
風の音や冷敷暮る夜に
田面のはらは守としもなし
引すつる小船たよふ湊川
岸かけ遠み沙や満らん
なく声もわかれていつち友衛
ひとり旅ねのあかつきの夢
故郷をおもひやるこそ杳なれ
ほとふる文のかへしあやなし
涕なを後の朝は落添て
とけしに思ふつれなさのうた
いひよるも使かななる中なれや
にけなかりける身をいかにせん

惟久
等与
重信

紹巴 11
紹宅 8
昌叱 11
心前 10
玄旨 11
禪高 9
鎮光 7
文閑 9
正繁 8
祖白 7
怨云 8
巴 7
宅 7
叱 7
前 7
旨 7

△作品 1▽

〔木山紹宅 赤井城之記〕 本書題号無し

郷を木山とかや 里を赤井といひ侍りけるに 廿あまりより心の外に住馴所の地景をみるに 東南は山に近く 朝日影めてたふして 月の光りも長閑なり西は田つら程遠く一里計に湖水を移したる所有それより地なみたいらかにして 遥に海をへたて 高具といへる山眼にさへきり 落日のさま観念を催し北は里続 国府も遠からず 市人のたより有て 行歩遥に見ゆ 里は清水瀟々として又静なり 魚は夕に踊り 沢辺の螢も心あらん人は見処おほからんかし

はにふはかたほとりなりけるに 行年のさまうるさく 立帰る春のあしたにも宮古には替り静成るを賀とし ことなきをめてしつか業にまかせ 梅か枝を折くへ余寒をいとひ 悠々たる様ことほりてそ覺侍る のきちかき梅もほころひぬれば驚の声かすかに雪も漸く梢〔々村消〕戸さし明みれば遠山の霞ほめき渡り 離の草萌出 山／＼の桜も色めきぬればしつか山田も極返し いやしきになれあゆみをはこひ 杖をたてやすらを〔めるお〕りは草刈おのこに いさなわれ 有時は枕をかたふけ時を移し 春雨の静なる折から 苗代水の音信て 風せう／＼しくふきぬれば 花も散り青みわたりたるけしき 山里の有さまものすこく 春の名残も一きは哀なり 郭公の初音ゆかしきにも ふることおもひ出られ 花橘の香にやのこれるといとゆかしく 杜若の盛なるこそあやめに人の挽なんと かれ是心を慰め 移り行まゝに 早苗とる頃にもなりぬれば おのかいとなみことしけく 田歌のささゝめき 田の神祭な

んとめなれぬさま珍し 其事彼事繁かりし中に 麦刈もてゆくさまらうたけなり 争か時しらすして民の心をやふらんや しける梢に蟬の声／＼鳴わたり 遠山里の夕気色 雲井遥に鳴神の俄なる雨に しつかふせ屋のもりわつらへる様 つき／＼しく又哀也 田つら青みわたりぬれば 畠わたらへなんと皆人いきまき あさるなせしと行つたふ 夕部／＼の蚊遣火は おもひの身をやかすらむ 水無月ほらへの比にも成ぬれば みそきすわさにはあらねと 豊よと計のしるへして 宵／＼ことに仮寝のまぐらにすたく虫の音も 我をとふかとうたかわれ 折から哀を催す事も侍り

日往月の来るをゝしみて 雁金の友呼声を聞くは今幾日有て早田刈なんと 里人によりては其事をとよみ心を遊しめ おの〔か〕浮世を其儘に 更行秋の時雨して 紅葉をちらす山下風 長き夜すかも詠れは 月万露に落草葉なを静也 なにはの事もいたつらに 心の外にやさえぬらん

折ふしの移行こそいとさひしきまざりつゝ かれ行野辺を見わたせば 遠き高根に降雪の 釐の微音信て 空の気色も物すこく なをふる雪の白妙に ちかきわたりもとたへして 晴間に斧のおとつれて つまきや遠くにほふらん 道行人のあしはやに おもひしまゝの心ちして 千代ふる松も立添ぬ よゝをひとよにくれ竹の 住馴ても夢なれや 廿年計にめぐりきて 四十余りも覚やらず 暫く是をあんするに 過たるを忘 遠きを計 去事を思ひ来事をしらす いとおろかなり 是を思ふも又益なし 静なる頃心のゆくまゝに 硯の海のひかたに遊鳥の跡にのこし侍るものならし

〔肥後古記集覧〕巻五所収(本文2ページ参照)
熊本県立図書館蔵の写本による。

△作品 2▽

天正三年卯月十九日

播州医師宗琳興行

山 何

夏草はたゝ夕くれのまかき哉
ふりくる雨になく郭公
いかにせは雲のさはらぬ月ならむ
すゝみ出つゝふかすあきの夜
柳ちるこかけの道は香にて
たえ／＼なれや水の行末
河なみのかつ／＼氷る音寒て
しはし小舟やさしとゝむらん
むら雨のけしきはかりに晴とをり
そらはほのかにうつる日のかけ
のとなる軒はの山の明そめて
羽ふきいてゝやうくひすのなく

紹巴	宗琳	昌叱	心前	文閑	正磐	紹宅	寿恩	紹清	怨云	秀尊	玄仍
12	8	12	11	10	8	8	8	8	8	6	1

△作品 3▽

天正六年戊寅

独 吟

淡雪に戦きしつまる落葉かな
時雨の名残暮る山かけ
男鹿なく野への行衛に月出て
かりね目さます夜半の秋風
ほのかなる芦間の波のとまり舟

惟久

〈資料九〉

木山氏略系図之写

惟久〔前掲同ト同文ノ部分省略ス〕上京中北野の社笠着之連歌に

又七度の別れをそする といふ句に

八重桜一重は先に散そめて

と言ふ句を付 紹巴法眼にしられ 其後上京中に

心苦しき月をこそまで と云句に

人しれぬはたへに結ふ岩田帯

と云句附たり 此句名句なれば 岩田帯の紹宅と世に称しけるとそ

其後本城落去に及 牢々の身と成けるに 阿蘇之奥に潜居 天正十五

年太閤殿下九州征伐之為御下向之刻 肥後国領主給人降人と成といへ

とも 甲斐宗運 木山紹宅は国中争乱之張本たるによつて尋出せらる

へき所 宗運は先達病死 紹宅は行方不知 御帰陣之時阿蘇奥より連

来る処 木山氏は文武に名有者之由 玄旨公 紹巴様御吹挙によつて

被為助命 為御礼

花見よと杣木に残す櫓かな

と云句を奉入尊覧より 御拜顔首尾相濟 其後月捧給はり御上洛の御

供申上

文禄朝鮮之役にて黒田長政侯の御舍弟熊之助君之御舟 豊前中津河よ

り発纜し給ふ時 保護して参りける 其外黒田美作一成之弟加藤吉松

年十六才 毛利但馬友信長子吉太夫同十六才従行す 其後筑前海岸に

帆柱流よれり 古歌一首

大ぬさと名にこそ立れなかれても

つひによるせは有てふ物を

此哥を書て 木山紹宅と記せり かく有を見て さてこそ海洋にて逆

作品抄

凡例

抄録はおおむね初一順にとどめた。
連衆名の下の洋数字は句前を示す。

風に逢て舟は覆溺せしならんと知れたり

信

連 木山備後守左近太夫 連歌屋初住入道紹印也

天正十三年六月落城之時 自殺と偽 実は慕父紹宅 豊前中津城に来

り 如水侯長政侯に隨身し 入道して紹印と号せり 其後中津より筑

前国に封せらる 如水侯は兼て神席を崇め敬ひ給ふ志深く 且西府は

城下にへたゝり 閑淡にして 御志を養ひ給ふよすかとて 神席の側

に居を卜し 常に杜司神人を招き 哥を誦連歌をもて遊び給ひけると

なん 其時に 断絶せし連歌屋を下の会所連歌屋と号し御建立有て

紹印をは初住の主と定めたまひ 両侯愛遇し給ひて三十石の采地をあ

たへ給ひ 今に世継て賜物を受侍るなり

抑連歌屋を下の会所と号けゝる故よしは 御社の左の傍に 樓門の外

二十歩斗に 上会〔所〕と額をかゝけたる末社有 人鷹明神を崇めり

是むかしの上会所の祭神也 社地の東西に相並してかく云とそ

〔信連傳〕
某

木山平助 拜知六百石

筑前福岡二有

信

正 天正十三年落城之時二才 家臣竹崎筑后懐にして 用達梅屋瀬左

衛門え託し養育を頼 城に帰て打死す 幼児成人して四郎左衛門

と号 後梅屋を名乗世を忍 瀬左衛門は元浪人にて菅原姓 紋梅鉢也

右の信正は浪人にて 木山市兵衛と名乗けるとそ

当代にて十一代目 是は肥後益城郡沼山津手永 木山町居住 浪人

馬場甚七郎寿英と名乗 慶応四年戊閏四月書記

天文年間阿蘇家衰 国中大乱ニ成ル 領主小給人ニ至迄 境ヲ犯シ 弱ヲ亡シ 自立セントシテ小合戦止時無 時ニ乗シ下陣城主光永氏ヲ責隨 領地ヲ広メ 赤井村エ新城築 木山居城弟彈正居シム

正 友

木山彈正

正 親

彈正忠 強勇無双

天正十三本城防戦つき陥て 信連自害を聞て 手勢引連打出 血戦して城え引入 自焼して煙に紛逐電して 縁座たるによつて天草本渡城主伊豆守頼み身を寄 其後天正十七十一月 小西行長天草伊豆守率楯相成一戦之所城強防城仕候所 行長に被透和談と成といへとも 元より行長謀斗成は 度々竈城を雖進と 不被用時後詰加藤氏之陣え打入清正と鎗合 花々敷義死をとぐ

惟 久

左近太夫入道紹宅 文武名有人也
從五位下

初元龜天正之間 勇武独立 同郡御舟之城主甲斐相模入道宗運契約断金交成し互に助ケ々しむ 国中蜂起打隨ひ領地を合横行を成事数十年 甲斐宗運同郡田代城主黒仁田氏を責領地を合 黒仁田は木山氏之舅たり 内室仇を報せんと事を恨敷といへ共 契約を破り合戦に及時は 兩虎難立 思竊に斗り 領所木崎村に新に温泉を開宗運を招 鳩殺して 温泉に毒有として人口をふさくと言共 此事風に聞へ 甲斐宗立不平抱く 仍而信連に政事を譲り官位昇進之為として潜行斗藪〔抖擻〕之身にやつし 上洛して宗立災をさく 上京之中北野社に笠着之運哥

また七度の別をそする と言ふ題句に
八重桜一重は先に散初て

と言ふ句を附 紹巴法眼に知られ 其後上京中岩田帶之吟にて

異名を岩田帶紹宅と言 本城落去に相成 牢々して阿蘇の奥に潜居 天正十五年太閤殿下九州嶋津征伐之為御下向之刻 当国之領主給人降人相成 雖奉隨順 甲斐宗運木山紹宅は国中争乱之張本たるによつて 尋出被誅伐害之処 宗運先達て病死 紹宅行方不知 御帰陣之時 阿蘇山奥より連来る処 木山紹宅は文武に名有者之由 玄旨公御吹挙によつて 被為助命 為御礼

花見よと杣木を残す構かな 紹巴
と言ふ句独味百韻なし 奉入尊覽 御拝顔首尾能相濟 其後月棒給り 御上洛之御供申上

文祿朝鮮之役にて黒田如水軒に属して 釜山海洋にて難風に逢海に没せんとする時 帆柱に辞世之歌を誌す 辛うして竹島に流付によつて死遁 帰陣之舟を求 旧里に帰る 然共辞世を誌せし帆柱日本に漂付 依て紹宅は海中没と言ふ

信 連

備後守 左近大夫

天正十三年六月 為嶋津義久被責 矢石尽 自殺と偽り 実慕父出奔ス 号紹印ト

某

筑前黒田家二有子孫

信 正

天正十三年落城之時二才 家臣竹崎筑後懐にして 用達梅屋瀬左衛門え託し 養育頼 城に帰打死す 幼兒成人して四郎左衛門と号 後梅屋名乗 世を忍 瀬左衛門は元浪人にて菅原姓 家紋梅鉢

信 正

浪人

木山市兵衛

当時代迄十一代連綿す

鮮持来之器物御持鑓片鎌其外御武具・御自面之御像等有之候
昨年開帳に相成申候

一
木山彈正之后は 天草郡本渡馬場村大庄屋木山十兵衛と申者有之
清正公彈正一騎打は 小西行長天草責之節 天正之末 其節折より
片鎌 本渡村之内仏木坂と申所鎮守有之候之由
福岡御藩中木山六之助跡 益繁栄と相見候 唯今は如何いたし居候
哉 御意候は相分居可申 御序に御しらせ申候
以上
五月

〈資料八〉

細川越中守領内 肥後国 益城郡 沼山津手永
木山町村居住 浪人

馬場甚七郎寿英 略系図之写

清和源氏新田氏族 又大田号
旗紋 白中黒 蜻蛉

類 綱
大田九郎太夫

為 綱
兵衛丞 新田

又馬場称

延文年間征西將軍(二品親王) 懷良王筑紫下向ニ供奉仕テ菊地家
エ頼ミ身寄 武光武政ヨリ菊地郡川原郷木山邑ニ館ヲ造テ居シム
時人木山殿ト称ス 依テ氏ト成ス 菊地家ニ属シテ度々武功顯
征西將軍ヨリ食邑三千余貢賜

信 綱
木山備中守受領
從五位下

菊地家旗下ノ一大將 武功顯ス

信 景
木山備中守

信 実
民部丞 右京太夫

持 綱
新田三郎左衛門

此後胤新田筑後入道善良ト云者 隈部一族成 親永柳川城被誅時
自殺ス・子孫絶

信 幸
左近 備中守

嘉吉年間菊地家衰微之後 阿蘇大官司之招ニヨツテ旗下ニ属シテ
益城郡腰尾郷工築城 益城郡之内六ヶ庄合五千余貢領ス 腰尾郷
改木山邑ト

信 興
左近 備後守

惟 興
木山城主 左近太夫
式閨斎

阿蘇大官司ヨリ一字賜 一族門葉ニ列 鷹羽之紋ヲ免ス

惟 正 (昌ナルヘシ)
備後守
左近太夫

月 航 小字月丸 幼ヨリ厭火宅 癡髪シテ止觀之門入 其後斗藏
之身成 終所不知

惟 興 (貞ナルヘシ)
実者惟正 (昌) 弟 兄譲受
右馬頭 強勇 弓馬達人

り知侍さる覧間 いともくわかこゝろに叶はさる事になん 是によりて
爰の御寺かしの寺と尋ね奉れと 御霊屋はいつれに祭り置せ奉るにか侍
らんと心にかけ奉る折しも ある人の許にて 高野山赤松院とかいへる御
寺に 熊之助君を始奉り 黒田一成との御弟 毛利吉(大) 夫とのわか
木山紹宅とも其昔の人々の御霊を 御国の守より奉り置せ給へるよしを承
り侍りぬれば こよなう嬉しく 今よすかもあらは かの高野山にてくは
しう尋ね取置侍らまほしく思ひ給らしれと 御国の内の御寺にはいつれ御
祭無ふしもあらしと杜思ひ賜ふれば 今熊之助君の法の御名をしも承り出
し奉らは から国に物し給ふ各もく 連哥堂のかたはらに御霊屋を宮ひ
奉りて 朝夕水さくけ花手向なと心さしを尽しぬへき御昔話になん侍りけ
る しか奉り奉らは いよゝわか家の風末の世に吹伝へさかゆらん事をと
独り心に出しひ催ふのみ

〈資料五〉

黒田年譜 巻之七 慶長二年七月十六日の条

〔慶長二年〕七月十六日 黒田熊助主中津川を發して朝鮮に赴給ふ 加藤
吉松 母里吉太夫 乃遊客木山紹琢等是に従ふ 時に暴風船を覆て溺死
し給ふ 時に年十六歳也 如水公 長政公哀惜し給ふ事比なし

熊助主溺死し給し所名を聞見せず 又加藤吉松は黒田一成か弟也
時に年十六歳也 母里吉太夫は母里太兵衛か長子也 是も又年十六
歳也 木山紹琢は肥後の産也 初左近太夫と云 天正中に秀吉公
に叛く 然共紹琢能連歌を詠する故に是を赦給ひて遊士となる 紹
琢嘗て君家に親有 此般朝鮮遊覧の為の故に従行すといへり

〈資料六〉

黒田熊之助碑

黒田熊之助君孝高公次子 而長政公同母弟也 天年十年 生干播磨山崎

城 慶長二年 豊太閤再征朝鮮也 吾軍十余万 諸將相繼而発 二公亦
皆航焉 君独在豊前中津 一日謂加藤吉松 母里吉太夫曰 予与汝等齡
已過成人 英雄立功名之秋也 而予未曾臨戰 故欲先斬韓奴以試刃 且
父兄梳風沐雨 俱在彼地 是豈可寧居乎 意氣慷慨 不能自禁 吉松等
大贊之 乃使木山惟久幹事 七月十六日 駕小艇発中津川 直航大海至
筑前芦屋津 颶風俄起 艇遂覆 主従皆没 君年十六 惟久号紹宅 善
連歌 急遽之際 題櫓以古歌及姓名居所 後其櫓漂到中津海瀬 於是人
始知君殞命也 莫不嘆惜者 吉松者黒田美作之弟 吉太夫者但馬之嫡嗣
也 皆与君同庚云 今茲明治二十五年七月十六日 正值三百年忌辰 因
立碑勒其概以伝後

乃題櫓古歌代銘 詞曰

大幣止名爾古曾立礼流 馬毛遂爾寄瀬者有与物乎

侯爵 黒田長成誌

〈資料七〉

覚

一 新田大炊助義重三男 里見太郎義俊后葉

大田四郎

実は新田義貞之末子 義貞打死之後 一族里見某養育して 上野沼
田之庄にて人と成 其族たるを以て 太田之家を継しめたり
其後吉野に朝して九州下向

一 延寿寺

清正公御取立にて無御座候 氏姓委敷不存 西派之流家之所 中比
東派転し申候 其内当流主へ尋 委細可申上候

清正公御取立之寺は西派流家西光寺にて御座候 当国代々之国守菊
池家之龜流 隈部氏一族山鹿郡日輪寺入寺仕居候処

清正公御入国之初 還俗御進に相成候へ共 承引なく 改宗御進め
に相成申て 真宗に成 子孫相統 当国之政事御聞に相成候由 朝

〔天明二壬寅十二月晦日寂 博多松屋三右衛門男養子 妻昌麟之女子〕
 〈早世〉

十二祖 前連歌屋昌春大法師位

嘉永五壬子歳六月十三日

寛政7
寛政10

〔嘉永五壬子六月十三日 病身にて若年寺務退休〕

〈終身多病 早年退身〉

十三世 前連歌屋権律師法橋昌因靈位

延寿王院家中坂田勘太夫男 文政六未歳四十二才退職

寛政6
文政10

天保五年歳二月廿六日寂 年五十七

〔天保五甲午年二月廿六日 歳五十四示寂 大鳥居家臣坂田勘太夫之

嫡男執行坊子分養子 昌謙之血筋 妻上座郡久喜宮村大庄屋平位氏

女〕

〈権律師法橋 仙友齋 里村玄川ニ入門 伝授賦物伝ニ代々一ノ号ニ文

鸞 文化十四歳玄川下向ニテ当坊隱宅ニ住居四ヶ年 後豊前ニテ死

去 文化十三子ノ正月柳宮御会出勤 其節江戸於旅館法眼昌逸昌以

玄碩祝儀連歌興行 天保五年歳二月廿六卒 行年五十四 和哥披露

伝受有〉

〔十四世〕 前連歌屋木山紹完靈位

明治十四年二月二十一日 行年七十九

文政6
安政4

〔昌順 号仙咲齋 又蓬仙之屋 字記心 退休後謂紹完

妻竈門山座主楞伽院女〕

〈仙咲齋 蓬之仙屋 静寿院 花之下会頭近国宗匠ノ許状里村昌同ヨ

リ相渡ル 号記心 秋月甲斐守長元公当道御執心ニ付伝道 浦上家

同上 野村家同上 権律師法橋 和哥披露伝授アリ 里村玄川末弟

也 道ノ伝受物ハ昌同ヨリ伝

本州之大主斎薄少将御前ニテ度々連歌相勸 安政六未ノ四月十一日

公延寿王院ニテ御興行 其節御先代光之公興行之連歌巻物献也 発

句相添也〕

〔十五世〕 木山義昌之神靈

明治三十四年六月廿四日 陰曆五月九日 行年六十七

安政4

〔昌言〕

〈昌言〉

〔太宰府神社旧神官家系〕ニ「昌賢 安政四年奉職 明治元年復節

木山義昌ト改ム 明治五年四月神官御廢シ民籍編入〕

〈資料三〉

仮題〔嘉永七年聞書〕

安祥寺榮重肥後檀廻ニ付 木山紹宅之由縁取調ル之儀相頼置候処 阿蘇山

之麓長草村ト云処ニ在宅之士有 其仁之曰 昔木山備後守ト申而凡木山村

九百丁之領主ニテ 今ニ木山九百丁ト申伝候由 右備後守之弟木山彈正ハ

清正公之代 天草合戦ニテ打死 彈正之子有 世治リテ後 清正公召出ニ

成候所 到而不事成人柄之〔仁々カ〕ニテ 更ニ仇ヲ報ル志モナク 清正

公出家ニ被成 今之同国ニテ大寺三ヶ寺之内 延寿寺之開基ト被成由也

同寺真宗也 然ハ右備後守ト云シ仁 岩田帶之紹宅成ヘシ 筑前国ニ被参

候由ハ 今以同国ニテモ申伝候由也

嘉永七年寅ノ六月聞書

〈資料四〉

草稿 仮題〔熊之助君の事〕

かけまくもかしこけれとも 竜光院の君〔黒田如水〕の御恵みは 筑波山

の陰よりもいとけけれは わか屋の御祖の御神と仰き奉る事にし侍れは

朝夕壁上に其御像をかけ奉りて いさゝか心の花香を手向まつて 御陰を

は山しけ山の下柴に結ふ露斗報ひ奉るのみになん 同し君か末の御子熊之

助君はしも ハしほ路塩の八百路もあら波を凌ぎ給ひ 事さへくから国の

御軍に出立し給ふ御供にとて わか祖紹宅めし具し給ひ はかなく事とけ

給はず ひとつ法路薬屑とさへ成らせ給ひしに あまのたくなは返くむ

かしを思ひ奉れは 熊之助君の御法の御名をたに書置て壁に向ひて 是そ

明暮に花香誦経をさゝけ奉るへきを 今末の世までも 其御名をさへ得承

文祿二年閏九月二日

〔資料(九)トシテ別掲ニツキ省略〕

〔木山氏 清和源氏太田九郎太夫頼綱之末流 肥後国益城郡木山之城主左近太夫從五位下惟久入道 後筑前黒田如水公之為客 太宰府下之会所連歌屋中興之開祖ナリ 称ニ岩田帶紹宅ト 杣入齋 慶長二年黒田長政公之舍弟熊之助君一同朝鮮於海洋溺死〕

元祖

前連歌屋紹印大法師

木山備後守左近太夫入道信連朝臣

慶長6
元和5

慶長十八年丑ノ□寂
ヒヒヒヒヒヒヒヒ

元和元卯年

〔資料(九)トシテ別掲ニツキ省略〕

〔紹宅長子 始名信連備後守左近太夫 木山城落城之節 偽自殺 筑前ニ来リ 父之墓ノ跡 太宰府連歌屋ノ為住職 如水公長政公賜三十石〕

二祖

前連歌屋昌林法眼位

前浦之坊信貞大和尚

元和5
寛永18

明暦二年正月六日

〔前浦之坊信貞 里村昌琢入門 代々昌之字を相用〕

〔太宰府法眼位 浦之坊信貞退休後住連歌屋 始里村昌琢ノ門ニ入 代々昌ノ字ヲ被讓 昌三幼稚ニテ看坊〕

三祖

前連歌屋昌三大法師位

紹印大法師実子

寛永18
寛文元

寛永九年壬申二月廿六日

〔始之名正吉 実は紹印之弟 肥後国にて出生 幼稚たるを以 浦之坊信貞連歌の道功者たるを以当家看坊 故に第二住なり〕

〔実紹印弟 肥後出生 幼名正吉 寛永年中死〕

四祖

前連歌屋昌純大法師位

寛文元
延宝3

年月不詳 二十九日

〔記事ナシ〕

〔記事ナシ〕

五祖

前連歌屋昌俊大法師位

延宝3
宝永7

享保六年四月廿九日

〔勾当坊梅重之男 寛永十四年丁丑に生れ享保六年辛丑正月十六日示寂歳八十六才とあり 旧記に昌三寛永九年壬申卒去と 昌俊寛永十四年丁丑に生誕 しかれば昌三没後昌俊十五才慶安四年辛卯迄凡二十年之間屋主闕たる様に見ゆとあれとも 昌三の実子昌純有し事を書落したりと見ゆ〕

〔忠之公御代連歌堂再建アリ〕

六祖

前連歌屋昌的大法師位

宝永六年正月十六日

〔宝永六年己丑正月十六日寂〕

〔勾当坊梅重之二男養子〕

〔七祖

昌永 靈牌亡失〕

〔寛延四年辛未六月八日寂 宰府古川長左衛門之男養子〕

〔当所古川長左衛門之男養子〕

〔八祖

昌範 靈牌亡失〕

〔天明三癸卯十二月十五日寂〕

〔九祖

昌麟 靈牌亡失〕

〔宝曆十三年十一月廿五日 妻上座坊実雄女〕

〔早世〕

〔十祖

昌謙 靈牌亡失〕

〔寛政十一己未六月廿五日 延寿王院家臣坂田氏より養子 一代清僧〕

〔再々勤アリ〕

〔昌謙弟

昌達

権律師法橋 有故出国 小野伊予家ヨリ養子〕

十一祖

前連歌屋昌英大法師位

天明二寅歲十二月廿九日

享保6
寛延4

寛延4
宝曆6

宝曆6
安永7

安永7
天明5

天明5
寛政7

もつゐに寄る瀬はあるてふものを、并に木山紹宅とほれり かくあるを見て さてこそ筑前の海洋にて逆風に逢ひ乗給ひし御船覆溺せしならんとしられける 連歌屋に伝へいへる処は 朝鮮国に従軍し 同所に戦死とありて 卒年伝はらず 九月六日とのみあり 然れはいづれと一定しかたけれとも 海洋に命を終らるゝ事は実説のやうに侍れば 彼是こゝに記して後の人の正し補はん事を希ふのみ

紹宅は文禄の末慶長の初に棄世と考ふれ共 其年暦伝はらず 紹宅の斯道をよくせられしを追感の余りにや 長子紹印を連歌屋初住の主となし

如水公 長政公愛遇し給ふこと厚く 三十石の采地をあたへ賜り 今に世つきて其賜物をうけ侍るとぞ 紹印は早世せしとむ(一純案するに天正の末生誕なるへきか 卒年をも伝へず 惟ふに慶長十年以後元和のはしめの年早世ならんか 七月十四日卒すとのみ伝へ残れり)

紹印の弟(正吉後に昌三)ありといへとも幼稚なるを以て 第二住昌林若坊の主となれり(昌林は浦乃坊退世し人なるを 連哥の道をよくせられし故 屋主となれりとぞ) 此人里村昌塚か門に入り 昌林と呼はる 是より此かた昌の字を用ひ通称となれるとぞ(昌林の卒年伝へず 三月廿日卒すとのみ伝ふ 今按するに 慶長の末より元和の年まで看坊せられしならんか)

第三住昌三(天正の末肥後国に生れたる人ならん 幼名正吉といひしなり 寛永九年壬申二月十六日棄世)

第四住昌俊(勾当坊梅重の男也 寛永十四年丁丑に生れ 享保六年辛丑正月十六日示寂 年八十六歳とあり 一純按するに 昌三寛永九年壬申卒去と前文に見ゆ 昌俊寛永十四年丁丑生誕 しかれば昌三没後昌俊十五歳慶安四年辛卯まで凡二十年の間 屋主を闕けるやうに考へ侍る 元より司務の輩各衆議ありて しばらく其器をえらはん間空坊なりしにや)

第五主昌的(宝永六年己丑正月十六日卒す)

第六主昌永(寛延四年辛未六月八日示寂)

第七主昌伴

第八主昌麟(宝曆十三年癸未十一月廿五日示寂)

第九主現住昌謙なり まことに 神に仕ふるのつゝしめる御意は申もおそれありといへとも かしかなから紹印初て屋主たりしより当昌謙に及び

九世年は百八十余年に及へるもいとめてたく且 竜光尊靈(如水)の御恩沢の浅からぬ御事は永く末の世に伝はり 我曹恐れみく(伝へ聞にも感慨を催し奉ることに侍る 如水公は慶長甲辰のとし三月二十日御齡五十九歳にて逝去し給ひぬ かゝりしかは年ことの三長月(正五九月を三長月といへること内外典に見え侍る 又三月廿日わきて連哥興行あるへきことなるに さはなくて正五九月のみ興行有たること 予思ひはかりしことあれとも爰にもらし侍る)の二十日には 此所に祠官社職の輩集會ひて懐旧の連歌興行せらるゝこと 今におゐて怠なきは 誠に 公の御遺愛の限りなきを報し奉ることほりにこそといと有難くおほへ侍る

過し弥生の末の比 屋主昌謙予を招き 何くれとむかし今の物語に長き日をわすれぬ あるしかゝる折しも 物語のあらましをかひつけよと乞へり

予あるしに於て旧相識なり 官途にさえられ しばらく逢迎疎かりしかとむつひの心隔なれば あなちになひかたく 拙き言葉をかへりみす

旧記旧聞をとりひろひ 記事一篇を撰結して其求に應じ侍る 又予自拝写し藏め奉る 竜光尊座の御画像を寄附して なかく堂屋にかゝけ奉りて

祭奠の 尊主とあふき奉らんことを希ふものならし

天明元年辛丑八月二十五日

加藤 一純

(仙臺)

(墨出)

〈資料二〉

連歌屋歴代資料編

本文……木山家靈牌ノ記載

()……『木山氏略系図之写』ノ記事

凡 例 △……『連歌師道統伝』ノ記事

脚 註……『太宰府神社旧神官家系』ニヨル

任・退職ノ年次

連歌屋開基

木山左近太夫從五位下源惟久朝臣入道紹宅

稿に紹介した。

- (三) 仮題〔嘉永七年聞書〕 木山益雄氏蔵書一枚。十四世昌順筆か。安祥寺(宰府一山のうち)栄重に依頼した紹宅事蹟の調査報告の聞書。
- (四) 仮題〔熊之助君の事〕 木山益雄氏蔵草稿一枚(本文7ページ参照)。
- (五) 黒田年譜 正徳元年(序文)、能勢頼実(後二頼庸)校輯。九大附属図書館蔵写本。そのうち、巻之七 慶長二年七月十六日の条。
- (六) 黒田熊之助碑 明治二十五年七月十六日、一三百年忌―黒田長成誌。福岡市崇福寺内の如水・長政両碑の間に建立。
- (七) 覚 写一卷、中村義男氏蔵。近世初期の筆紙で、内容より推し加藤忠広代(寛永九年改易)に加藤家へ提出した書上げの草稿か。
- (八) 馬場甚七郎寿英略系図之写 写一卷。前記(二)の(2)中の註記により、慶応四年閏四月記。天正十三年木山落城の時二才の信正(紹印の子)は、木山氏代々の用達たる梅屋瀬左衛門に養われ、成人して木山四郎左衛門と称し、加藤家代には木山郷庄官を勤めた(肥後国誌)。馬場甚七郎は信正より十一代目。本資料は明治初期に宰府連歌屋に伝来し、中村義男氏現蔵。
- (九) 木山氏略系図之写 前出(二)の(2)に説明。

〈資料一〉

太宰府 天満宮 連歌屋記事

筑前国太宰府 天満天神の御社はそのかみ 朝廷より宮柱ふとしまて給ひしより かみは宝祚の栄久を守らせ給ひ しもは蒼生も御恵にもれされは 至誠を以ていのるに其応あらすといふことなし かゝる尊とき御社も世澆季に及ひぬればにや 元龜天正の比兵燹の為に回祿の災にかゝらせ給ひしか 天正十五年小早川中納言隆景卿当国の主と成給ひし時 神殿樓門など旧貫にしたかひ再建せらるゝといへとも 神官社司の輩は漸かたはかりの住居にて神につかふまつりしとなむ かくて慶長五年庚子凶賊上方に乱を起し美濃尾張の地に兵を出すといへとも 神祖一たひ戎衣したまひければ 海内太平の化に浴しけり 此時 黒田長政公 神祖の御

味方となり殊更に忠節をあらはし給ふ 元より 如水公も 神祖の御方人として中津川の城より兵を出し給ひ 九州の敵地を征伐し勝利を得たまひ 日ならずして兵を収て中津川にかへり入らせらる かゝる御功績によりて豊前を転じ筑前国に封せらる 其年の冬中津川より筑前国にうつらせられしか 如水公はかねて 神廟を崇め敬ひ給ふ御志深く 且西府は城下に隔り閑淡にして 御志を養ひ給ふよすかと思召けるにや 神廟に近く居をとし給ひ 常に社司神人をまねき哥を詠し連歌をもてあそびたまひけるとなん (一) 八原本割註、以下同シ

抑連歌屋を 神廟の傍に建給ひ(一純竊に案するに 此坊屋を連歌屋と名付け或は下の会所とも号せり 其故は 御社の左の傍樓門の外二十歩はかりに 上会所と額をかゝけたる子社あり 人丸明神を祭るといふかゝる故にて連歌屋を下の会所ともいふにや) 紹印を初住の主とし給ふことの本をたつめるに 紹印の父は肥後国益城郡木山の城主木山左近大夫惟久後に祝髪し紹宅といへり 代々阿蘇大宮司に与力せし家なるか 天正十五年丁亥豊臣殿下西国を征し給ひ 肥後国を佐々陸奥守成政に賜ひ 地土は皆其旗下に属せらる 同十六年戊子成政罪を得て国を除かれ 加藤清正小西行長両將に半国宛頒ち与へらる 此時に及んで国士各衰微離散しける 惟久はかねて 如水公 長政公の懇遇を蒙りしかは 中津川に來り如水公に仕へけり

一純旧記を考ふるに 惟久は阿蘇大宮司に属し 武功あり 文才あり ことに連歌に工なりけり 後に紹巴法眼か門に遊へり 一とせ宮古にのほり 北野にて紹巴興行の連哥の席にて 紹巴か 又七たひのわかれをする といへる句に惟久 八重桜一重はさきに散そめてとつけ また同所笠着の会に 心くるしき月をこそまで といふ句に惟久 人しれす膚にむすふ纈帯 と付たるより 世にいはた帯の紹宅とよひしとなん

文禄二年六月晦日(或云慶長二年七月十六日)長政公の御弟熊之助君朝鮮陣場を見給はんとて 中津川より船に召され発纜したまふ 紹宅は年齢の人なりし故に保護して従ひ参ける 其外毛利但馬友信長子吉大夫(十六歳) 黒田美作一成弟加藤吉松(十六歳) 従行す 其後筑前の海岸に帆柱流れ寄れり 古歌一首(大ぬきと名に社たてれなかれて

H 漕舟も流れ次第の月見かなナルヘシ ト云シトカヤ
 紹宅オリジナルの話ではなく、何か原話のありそうな気がする。それにしても、句としてもよい出来とはいえない。

紹宅、宰府末社に祀らる 肥後の地方史料には、晩年の紹宅について、あるいは紹印が宰府連歌屋となつたことに言及した記事を見出さない。『新撰事蹟通考』も「惟久剃髪シテ紹宅ト号シ聯歌ニ名アリ 諸書ニ賞出シ人口に膾炙ス故ニ略ス 其終所ヲ不知」とする。同書の註に、紹宅が宰府の末社煙宮に祀られたという『甲斐宗運記』の所説が引かれている。紹印の連歌屋となつたことが風の便りに伝わり、梵灯庵が北野末社煙宮に祀られたという中央の連歌咄と混合して、紹宅についての地方版が生れたのではなからうか。『甲斐宗運記』は未見、先後は詳らかにしないが、まず『拾集昔語』の記事を左に紹介する。

一 彼紹宅を宰府之天神御末社之内に祝崇め候へ と神託ましまし候に付而
 寺社職人五十余人一同に いか様之分ケにて御神慮にかなひ 彼入道を
 如此には神勅ましまし候ぞ と祈申候処に又々神勅に 木山紹宅が
 人を送りてかへる夕暮 と云ふ付ケ句に

I 身をいつのけふりの為に残すらん

と付候句 殊の外神慮に叶ひ奉り候と御座候故 けふりの宮と神号を申
 候て 御末社に入加被^{まじ}在候と古老之仁被咄聞候 実否いかゞながら書
 出置候

『肥後国誌』は、右の話（『拾集昔語』をさすか『甲斐宗運記』をさすかは不明）を実否不明の説として註記にとどめ、『連証集』の書き出しを連想さすような語口で左のように記している。

又太宰府ニ到リ日昏ケレハ 直ニ聖廟ノ拜殿ニ通夜シ勞レ出テ居眠タル
 処 兩三人来リテ連歌ヲ為ル者アリ 人をおくりて帰る夕ぐれ ト云句
 アリテ其次甚タ洪レリ 満座挙テ 此ニ旅僧アリ 眠ヲ覚シテ次ヲ付サ
 セヨト呼起ス 驚キ覺テ其故ヲ聞 身をいつの煙のために残すらん ト
 付シトカヤ（一説筑前宰府天満宮ノ末社ニ祝ヒ 煙ノ明神ト号スルハ此
 紹宅カ事也ト云リ 不知其實否）

『肥後国誌』の補考は『本朝語園』巻十（連歌新式大抄）を引き、類話として

考えている。同書は未見であるが、梵灯庵主の咄しは『塩尻』巻七十二や『山城名勝志』巻之七にも見え、かなりに広がつていたと思われる。紹宅の咄しは、帰る「鳥辺野」を「夕暮」と置き換えただけである。

（註）なお、『菊池軍記』（宝永七年、井沢蟠竜）には、（D）（B）につづけて、この付け句だけが収録されている（26ページ参照）。

史料篇

解題

（一）太宰府天満宮連歌屋記事 写一卷、天明元年八月二十五日、加藤一純記。成立の事情は文末に記されている。加藤一純は福岡・黒田藩士、号虞山。寛政五年四月歿、七十三才。『筑前国続風土記附録』の編者。

「亀井戸天満宮連歌屋の記」（26ページ）の影響をうけ成立したものか。

（二）連歌屋歴代資料編 左の四資料に記録されている、紹宅・紹印より最後の十五世昌言（義昌）にいたる十六代の記事を各人別に配列し再編集した。

（1）連歌屋代々の霊牌 木札計十一枚、木山益雄氏（昌言の孫）家に祀られている。元祖新田義貞より十一祖木山右馬頭惟貞までが四枚、開基紹宅・元祖紹印より十五世昌言まで（内四代分の一枚亡失）が七枚の

木札両面に各一及至二名宛記されている。

（2）木山氏略系図之写 中村義男氏（昌言の孫）所蔵。△資料内▽馬場甚七郎寿英略系図之写を基にし、昌言までの記載がある。筆者は昌言

か。紹宅・紹印の記事は内より詳しいので、別に内として収録、昌言以後をここに収録、その他の部分は内とはほとんど同文なので省略する。

（3）連歌師道統伝 木山益雄氏蔵写本横一冊。「連歌相伝之次第大略」と内題して、花下善阿より紹宅、紹宅より昌言に至る道統譜が記されている。南家・北家・瀬川家等もおのおの幕末まで記されている。昌言の父昌順は里村玄川の末弟であること（本文）などより考えても、その拠った資料は素性正しく思われる。なお、表紙に「太宰府連歌屋文庫」と記されているが、同文庫の書籍は全く散佚してしまっている。

（4）太宰府神社旧神官家系 福岡県文化会館蔵写本一冊。本紀要前号の拙

宅被申候は 田舎より上京者にて候と被申候へば 田舎は何国之人に候ぞと御座候に 九州方之者にて候と被申候へば 肥後之国木山之紹宅と申仁にては無之候哉と仰候に 左候と被申候へば 手をにぎり 扱も御自分は聞及候くんと仰候て 近付きに罷被成 以後は書音にて歌の取遣ども被召候由に候 如此之縁故 木山落去以後紹宅は被成御免 以後は秀吉公にも被知召上候由に候 (拾集昔語三)

(註) 『拾集昔語』には別本『拾集物語』があり、その第五巻には右の引用と同話が録されている。その異同は、連歌咄の性格の一面を示すが、あまりに煩雑にわたるので省略する。

紹宅の紹巴入門について、『肥後国誌』には左の一説をも伝えている。森本一瑞(天明四年十一月一日歿)による原『肥後国誌』の所載か、後の増補部分かは未調査のまま、左に紹介する。

一説ニ惟久上京シテ紹巴カ門人ニ成シト請ヘトモ 紹巴如何ナル思慮ニヤ対面ニモ及ハス 惟久月日ヲ重ネテ滞京ス 或時客アリテ紹巴ト久ク談リ 事ノ序ニ惟久カ事ヲ語リケレハ 紹巴 誠ニ左ナリ 対面スヘシトテ惟久ヲ招キ初テ面スル時 紹巴 さしいてゝばかりに見ゆる桜かなト云ル 発句ヲ書テ与ヘ 辺鄙ノ人連歌ハ無用也 是ニテ合点シ下ラレヨト云フ 惟久此色紙ヲ押戴キ 辱クト謝礼シ 然ラハ迎モノ事ニ愚吟ヲ申ヘシト料紙ヲ乞フテ 惟久 さしいてゝばかりに見ゆる桜かな ト書テ出ス 紹巴取上ケ見テ 是ハ予カ今ノ発句也 如何ヤ ト云ケレハ惟久云ク 同シ句ナカラ某カ申処ハはかげに見ゆる桜かなニテ候ト答ケレハ 紹巴手ヲ拍テ賞歎シ 直ニ門弟トシ 惟久薙髪シテ紹宅ト号スト云

つくしよしとはおもはざりけり 昔語・物語両本ともほぼ同文に伝え、国誌には見えない。いま、昔語により紹介する。

一彼紹宅以後は都に上り候て 紹巴法眼にて歌をよみなをし被申候由に候が 紹巴御問候哉 又々上々方被仰候哉 紹宅に上方が能候哉 つくしがよく候哉 被成御尋候に 誠に候哉 如此に口ずさみ被申候などと語伝候

うつせみの羽よりもかるき身を持て

F つくしよしとはおもはざりけり

右之通に被申候など、申伝候 うたの道文盲に候故 右の歌よしあしらぬ火ながら なぐさみに書出置候

紹宅同様に多くの連歌咄を伝える、肥後の同時代人、水俣城主深水宗芳にまつわる一話の訛伝であろう。国誌には紹宅について此伝なく、休甫(深水宗芳)について左の記事がある。

殿下ハ島津降参ノ後 日州豊州ヲ経テ当国阿蘇小国ヲ通り 南関ニ着陣シ 休甫ヲ上方ヘ可被召連旨仰アリケレハ 休甫ハ紹巴ニ憑テ 某ハ相良譜代ノ士也 願クハ恩免ヲ蒙ルヘシト辞退ス 殿下休甫ヲ召テ仰ニ 汝筑紫ニ馴テ花洛ヲ不知ヤ ト宣ヒケレハ休甫

空蟬の羽よりも薄き身を持て

F つくしよしとはいかゝ云へき

御暇ヲ賜リ 頼房ノ供シテ水俣ヘ歸リシト也

G 城主紹宅 木山城主時代の紹宅について、次の二話が伝えられている。

一紹宅木山城主之砌 飯田山に花盛之時分参詣之処に 山詣之仁人桜之花を枝共に手々手折候を風覧候て

風よりもはけしき人の心にて

手ことに折しはなの枝かな

G 如此に詠しられ候を其頃賞翫申たると語伝候 (拾集物語五)

昔語には「語伝候と亡父被申聞候」とある。飯田山は木山(赤井)城より約四キロ、天台宗大聖院常楽寺がある。

いま一話は国誌のみ伝える。

紹宅或時緑川ニ舟ヲ泛テ月ヲ見テ 漕舟をとめて月見る今宵かな ト云句ヲ吟ス 翌日紹宅出城シテ此辺ヲ通ル時ニ 十一二歳ノ村童四五人川耳ニ遊ヒ 一童云ク 夜前紹宅殿ノ発句ヲ聞シヤ 月見ル意ニハ叶フマシト云 群童皆未タ聞スト答フ 紹宅立寄テ 今ノ発句如何ナレハ月見ル意ニハ叶フマシト云ソ ト問ヘハ一童答テ サレハコソ ト云 紹宅又 然ラハ如何云ヘハ意ニ叶フソ ト問ヘハ群童皆笑フ 一童云 月ニ心ヲ移サハ舟ハ留メス 棹ヲモ忘レテ流レ次第ニシテコソアルヘキ

秘めて、熊之助君の事蹟の明らかならざるを歎く文意である。高野山赤松院のことも記されている。この文書は、木山氏の旧記の雑多なメモ（残存五葉）とこよりで綴じ合わせてあるが、同筆の一葉に「天正十一年 今歳次男熊之助御誕生 孝高三十八歳 長政十六歳 信長薨し給ての後也」とだけ記してあり、熊之助の伝を筆者が考えていることを表わしている。天正十一年生とすれば、その十六才は慶長三年に相当し、あらたに一説を加えることになるが、「信長云々」を天正十年の後期ととれば、十年の誤記となる。何に基いて書いたものかは判らないので、紹介にとどめる。

紹宅についての連歌咄

九州に木山とて連歌の上手あり 八月十五夜に紹宅にて発句をせんと月もなしといへり 紹宅のわるひく 名月に月もなしはと申されし まつすゑを聞他^{なま}とて

A 月はなし日をもそのまゝの今宵かな（内閣文庫本複製・下九〇九頁）
たった一話ながら『醒睡笑』（広本）にも名を出す紹宅にまつわる連歌咄を、煩雑にわたるがここに集成し、紹宅の伝を補うとともに、近世初期連歌咄の一面を考えたい。なお、A～Iは類話に分類するために付した。

岩田帯の紹宅 『陰徳太平記』巻七十四「島津乞和事附木山紹宅深水宗方事」に、秀吉宇土の陣に馳せ参じ御礼申す違命の者共のうちに、

其中に肥後の住人、木山左近入道紹宅と云ふ者有りけり、是は当国一揆の魁首にて有りければ、其罪科誅伐を出づべからざりしが、此者連歌の達者也 先年上洛して北野社頭に於て連歌の有りしに、「心苦しき月をこそまで」と云ふ前句のありしに、紹宅、「人しれず肌に結ぶいはた帯」と付けたりければ、時の花本の里村紹巴法眼、甚だ感称せられしより、岩田帯の紹宅と唱へて、都鄙に隠なき者にて候と言上しければ、殿下、左様の風雅の者誅すべきに非ずと宣ひけり、木山喜びに堪へず、百韻の連歌興行すべしとて、紹巴法眼に発句を所望したりければ、

C 花見よと杣木に残す櫻哉
とせられけり。

とある。本紀要創刊号に紹介した中川文庫蔵の近世中期の写本（逸題随筆・倒

體氣）の記事は、類似というよりはむしろ同文に近く、『陰徳太平記』より採ったものではないかと推定する。

第二話「岩田帯の紹宅」はかなり広がった話らしく『塩尻』巻四十一・「閑窓一得」などにも見え、後者は「紹宅・紹巴・秀吉」をも含む。すなわち、紹巴、法眼也、臨江齋、^{慶長七年に没す}紹宅は肥後の国の人、木山氏、左近大夫備後守惟久と云ふ者也、上京して心ぐるしき月をこそまでといふ句に、人知れず肌に結べるいはた帯を付ケ、紹巴に感ぜられ、いはた帯の紹宅と人いへり、秀吉公時代九州征伐の時、紹宅この道の遠人故、御ゆるしを蒙りける故、一命を助りぬ。（閑窓一得）

第三話（C）については、同句を発句とする百韻の現存することをさきに述べた（4ページ）。歌（連歌）の徳が危い命を助ける（主題）、秀吉と連歌の上手・介在者としての紹巴（登場人物）というのは、別稿「肥後連歌史概観」に収める深水宗芳の場合にも当てはまり、近世連歌咄の一つのパターンと考えられる。史料篇に収める「馬場系図」では、その作成者が細川領の住であるところから、この咄に玄旨公が顔を出している。

拾集昔語の諸話 『拾集昔語』（元禄八年、前出）はもっとも多く紹宅の連歌咄を伝えている。△作品(4)△に註した等与の話につづけて、まず第四話（D）があらわれる。

一紹宅与風上京被致候に京着即日之晩 其砌之花の本紹巴 天正年中之事にて候ひつるに 北野にて笠着之付け句はいかひ被^レ召候旨 紹宅風聞被致 即晩北野に被参候に

また七たびのわかれをぞする

と紹巴被召候に紹宅

D 八重桜一重はさきにちりそめて

と付被申候に あつと紹巴法眼被感 又発句を紹巴被召候は

心苦しき月をこそまで

如此に法眼被召候に 笠之内より紹宅

人しれずはだへにむすぶ五月帯

B ケ様に付被申候に 法眼するくくと走りより かさをおつとり御覧候へども 誰人とも相知れ不申候故 自分は落中人か落外人かと仰候に 紹

が、四日に在京し、三十日に中津を出帆することは、かならずしも不可能ではない。(3)、(4)についても傍証はなく、(5)についてみても、熊之助の生年天正十年は、おそらくは熊之助の歿年十六才からの逆算であろうから、決め手とはならない。

天明元年、連歌屋第九主昌謙の請いにより、旧記旧聞をとりひろって「連歌屋記事」を撰んだ加藤一純は、紹宅の歿年について、註記において「文禄二年六月晦日 或云慶長二年七月十六日」また「連歌屋に伝へいへる処は朝鮮国に従軍し同所に戦死とありて卒年伝はらず九月六日とのみあり」と三説(2)、(5)、(3)を挙げつつも「文禄の末慶長の初に棄世と考ふれ共其年曆伝はらず」と後人の補正を俟っている(木山家霊牌は本記事よりも後世、おそらく幕末ころの筆である)。紹宅が熊之助に随行溺死したということは、(3)の戦死説を除く諸説に共通するので事実と認めるとき、紹宅の歿年すなわち熊之助の歿年をたずねることになる。一見、有効なこの傍証法も、実は悲観的である。すなわち、『筑前国統風土記附録』の編者でもある藩士加藤一純さえ、藩祖の舎弟熊之助の歿年を詳らかにし得なかったほどで、紹宅の歿年を黒田家史料に期待し得ない。

とはいうものの、熊之助の忌日を慶長二年七月十六日と明記する黒田家関係の史料がないわけではない。その一つが、先に言及した九大附属図書館蔵の写本『黒田年譜』巻之七の記事(資料四)である。これが能勢頼実(のち頼庸)の正徳元年編の原撰にあるとすれば、加藤一純が目を通さない筈もないので、あるいは後世の増補分とも考えるが、未だ詳らかにしない。

因に、益軒撰の『黒田家譜』には、朝鮮両役ともに熊之助の記事を見ない。

つぎに、福岡県文化会館蔵の写本『黒田系図』一冊がある。文化八年までのことが記載されているが、編年・編者・筆者共に未詳。校合結果の註記が朱と墨である。紹宅が重く記されており、かつ、歿年の両説の根拠が記されているので、なるべく原形にちかくして左に紹介する。

(上段二)

(下段・本文)

某

宗任禪定門

熊之助 或曰熊松 天正十年年生 母与長政
同 慶長二丁酉年秀吉公再伐朝鮮時 将赴朝鮮

寛政六甲寅年

暴風覆船而溺歿年十六 (イ五)

斉隆公霊牌安置

(註)

干崇福寺之中心宗庵

高野山赤松院旧日牌に熊殿

卒年文禄二六月晦日日記之

寛永八丙辰年二百年

正当七月十六日祭焉

木山左近大輔惟久入道紹宅(イ琢) 共溺死

加藤吉松 黒田三左衛門弟

(イ毛利但馬弟毛利吉太夫)

すなわち、熊之助の忌日が慶長二年七月十六日と定められたのは、寛政六年、黒田九代当主斉隆に至ってからののである(次例の『黒田家系譜略』とあわせてかく断定する)。また、文禄二年六月晦日説の根拠は、高野山赤松院の旧日牌によることがわかる。六月三日(十字欠カ)説の『黒田如水伝』(紹琢とあり)には、熊之助等が高野山赤松院に祀られたことを記している。明治二十五年七月十六日には当主黒田長成侯爵による建碑(碑文は資料六として収録)もあるが、金子堅太郎氏は何か赤松院関係の資料を見られたのではないかと考へ、文禄二年六月晦日説を全くは捨てがたいのである。なお、高野山赤松院は万延元年烏有に帰し、その際過去帳等は焼失して現存しない。

九大附属図書館蔵の写本『黒田家系譜略』横一冊(安政五年分まで収録、編・筆者未詳)の記事は『黒田家譜』とはほぼ同内容であるが、「連哥師紹琢」とあるので左に引用しておく。

某 黒田熊 早世 熊之助とも有 母同上(長政) 天正十年播摩国ニ生 慶長二年秀吉再朝鮮征伐之時朝鮮国ニ赴 暴風覆船溺死 此時附随者毛利吉太夫 加藤吉松 連哥師木山紹琢溺死 年十六 法名定任禪定門 寛政七年六月斉隆位牌(ヲ) 崇福寺内心宗庵ニ安置 忌日七月十六日トス

いま一つ、(資料四)として収録する文書(仮題・熊之助君之事)は木山益雄氏蔵。半紙横折り一葉に認められた草稿で、年次・筆者ともに不明であるが、内容から推して、昌謙あたりの筆ではなからうか。先祖紹宅の顕彰を内に

め其軍中に御供し 累年御在陣之間公之御側に咫尺し奉る 然而御帰陣之後上人為求法京師学席に住す 其比如水公長政公共豊州御在城也 秀吉公薨御之後遠乱不定之巷説京都大坂風聞す 両公聞合之士数輩被付置といへとも其註進なし 両公訝敷被思召之処 団空上人在京之内委是を聞定 中津御城下に参着具言上 両公御喜悅不淺其忠志を被感 於豊州西山派本寺分二ヶ寺団空に被恩附之

紹宅・紹印と宰府 紹宅晩年の黒田隨身説が推定の域を出ないことを述べた。したがって『黒田年譜』の紹琢(前出)の叙し方を文字通りに事実と取ることも十分に可能なのである。すなわち、紹宅は晩年を遊士・連歌師として過ごし、中津の黒田家に身を寄せることも幾度あったが、宰府を生活拠点として居たのではないかとの推定である。この時期における紹印と宰府との関係はかなり明らかであるが、紹宅については『玄旨公御連哥』に左の一例を見出すのみである。

於名護屋天満宮万句木山紹宅被執行 由有て発句所望
梅は世に又のそみなきいろ香かな

幽齋関係の資料から、右の発句の年次を考えているが未だ詳らかにしない。幽齋と紹宅との相識は、年次不明「花見よと」百韻(作品6)に同座が一回ある。因に、宰府文書には天正廿年二月と七月の両度、各五千句の祈禱連歌の願文が残されているが、万句の記録は見ない。

「連歌屋記事」「馬場系図」などはすべて、紹印の宰府との結びつきを如水の配慮によるものと伝えるが、黒田の筑前入国(慶長5)以前、すでに紹印が宰府に身を寄せていたことは、僅か二作品にすぎないが、次により推定される。

- (17) 文禄4・7・22 「何舟」百韻「梅か枝や西よりも先初紅葉 紹巴」
紹巴12 信寛8 昌叱12 生9 玄仍10 友益8 景敏9 寿恩7 寛実6 紹印6 知彦6 玄仲6 宗可1(小鳥居寛二郎氏蔵の懷紙断片を天理綿屋「天正文禄百韻集」により補う)
(18) 慶長3・6・6 「何人」百韻「月は夕涼しさまさる松の陰 長俊」
長俊14 紹忍12 長純14 信白10 急閑13 信讀10 紹印9
家清8 元朔10 「於宮崎」(大阪天満宮蔵「紹巴前後連歌千三百

(三十一番)「甲31」所収

太宰府天満宮司務別当大鳥居信岩の慶長五年の筆記と推定する『一生年記付』(太宰府天満宮蔵)に見える、文禄四年の信寛(信岩父)の上洛、紹巴と一会の記事が(18)の百韻と符合する(「天正文禄百韻集」には信寛を備寛に誤る)。寛実(は宰府上座坊。文禄二年・同四年の両度紹巴へ付句をさせたことを、信岩はわざわざ『一生年記付』に記する位であるから、信寛の紹巴との一座に果たした紹印の役割りは大きかったと思われる。文禄二年六月四日以後の紹宅作品を見ず、(1)には紹宅でなく紹印が出ているのは、紹宅の歿年慶長二年説には不利にもとれるが、紹宅生存中でも、宰府との結びつきは紹印の方が強かったのであろうか。本百韻は、管見では紹巴の三井寺蟄居前最後の作品でもあるので、全文を翻刻する。

(18)の百韻については、信白が宰府御供屋坊、信讀が宰府代官を勤めた(如水入国の頃)角大鳥居氏であることから、末社の福部社を寄進したりして宰府と縁深い山中山城守橋長俊、大友の部将田原紹忍等と宰府衆の交歓の一座と推定する。

(註) 黒田筑前入国後の紹印については、別稿「大鳥居信岩伝」において詳述する。

紹宅の没年 (資料(2)に収めるごとく、木山益雄氏宅に祀られている連歌屋歴代の霊牌には文禄二年閏九月二日と記されているが、紹宅の歿年については左の五通りの諸伝がある。結論としては慶長二年七月十六日説をとるが、憑むべき資料がないままに、以下に詳考したい。

- (1) 文禄二年六月三日 『黒田如水伝』(金子堅太郎)
 - (2) 文禄二年六月三十日 『連歌屋記事』
 - (3) 「年不詳」九月六日 『連歌屋記事』——連歌屋所伝として——
 - (4) 文禄二年閏九月二日 木山家霊牌
 - (5) 慶長二年七月十六日 『黒田年譜』・『黒田家系譜略』など
- 右のうち、(1)の三日は(2)の誤記、(3)と(4)とは同祖の説と見るときは三つに類別して考えられる。因に、如水・長政両人は、各年次とも在韓している。太田武夫氏蔵の写本「京連歌文禄二年」中に、管見では紹宅最後の作品たる同年六月四日興行の「何人」百韻一巻(作品13)のあるのが(1)を否定し(2)を弱くする

中津川に來り如水公に仕へけり」と伝えるほかは、紹宅の黒田家随身の事情は全く詳らかでない。

天正十五年六月六日、秀吉が佐々成政に肥後一国を与えた朱印状(制書五条)に「肥後国五十二人之國人に如先規知行可渡事」と見えるが、秀吉を迎えた肥後国侍五十二人のうちに、前々十三年閏八月十四日、薩州勢に木山城を攻め落された木山信連(紹印)がいたか否かも詳らかにしない。管見に入った地方史料の限りでは、佐々成政治下、天正十五、六年の交の僅か一年足らずの間、紹印が木山城主として還り咲いたという証は見出し得ない。

天正十六年春、秀吉は黒田官兵衛・浅野弾正忠・福島左衛門大夫・加藤虎之助等の七將を肥後に派遣し、同国内の要衝七城にそれぞれ城番として一揆の鎮圧に当らせた。このとき中津より赴き、二月より五月にかけて甲斐氏の居城御船を分担したのが如水である。木山はもとよりその区域内にあった。紹宅が如水に出会ったのはこのときと考えるのが常識的な線である。如水は翌十七年三月にも再度肥後へ出張している。

天正十八年三月十九日、小田原征伐に京都進発の秀吉に、如水は参謀として扈從した(長政は中津在国)。この月、紹宅も在洛し、作品三点ならびにそれに関する紹巴よりの書簡一通を残している。この時期における両者の關係を左に考える。

紹宅は六日と八日の兩度、紹巴との百韻(7)・(8)に同座し、二十六日には心前追善の百韻「ちる花は」(作品9)を大徳寺卵塔前で独吟した。紹巴書簡は翌三月廿七日付、紹巴がこの独吟百韻一卷を加点して紹宅へ戻す際、懷紙の余白に書加えられたものであろう。中川文庫蔵「点取連歌発句」に収まる同百韻写本の付記、および大阪天満宮蔵「連歌十九卷(二十番)」の長松の手による朱書書入れ(「此朱書は遠里經次本を以書加候也」と註あり)の模様よりかく推定する。いま後者により左に紹介する(傍註は中川本)。

付墨廿句 此内長二

臨江斎 紹巴判

三月廿七日

木山紹宅(老) 参 旅庵下

此一卷御独吟再三見申候 百句をしなへて面白候まゝ 付墨数少候
(手耳筆も未達者) (可為納受者) (手) (チン)
てにはもちかはさずし合もなく候 心前定而納受たるべく候 昨日於大
徳寺卵塔御独吟感入候 俄不国御残多候 亦々御上洛にて候共 愚老残
命難測候 以一書可申通候 返々来月中も御在京と存候に ふたゝとて
遺恨候 猶以面可申候 恐惶謹言

前記四資料から考えても、最低二十数日は在京し、すでに最低三回は同座している紹宅に宛てたものであるだけに、本紹巴書簡中に紹宅の身分・境遇を物語るような事項を見出し得ぬのは、むしろ前記のことはいえ残念である。来月中も在京と思っていた紹宅が「俄に」下国する、その帰り先は何処であらうか。豊前中津か、筑前宰府か。因に、紹巴と如水との交渉は、この頃にはまだ全く認められない。前稿「黒田如水の連歌」に述べたごとく、このことは如水後年の紹巴への親昵度より考えてむしろ異様にさえ思われる。

同年八月、秀吉の奥羽下向には従わず中津へ帰国した如水は、同月某日、長政とともに中津城竣工祝賀の連歌会を催し、「何路」百韻一卷を興行した。「黒田如水伝」に初一順のみ紹介されているこの百韻に、紹宅は第三を動めている(作品10)。なお、本百韻は如水の連歌の初見であり、唯一の如水紹宅同座の作品であり、かつまた、熊之助に随行溺死の記事のほか、紹宅と黒田家とを関連させる唯一の資料である。

紹宅晩年の黒田家との關係について、はなはだ大胆な仮説ではあるが、如水が紹宅を表向きは客分の連歌師として、実体は情報係として使っていたのではないかと考える。紹宅が紹巴など中央詞人と親交あること、武將としてかなりの経験を持っていることなどに、紹宅がこのあと慶長二年まで、数回は上洛している伝記事項と併せてかく考える。如水には次のような例もあるからである。

如水の父職隆を祀る、福岡市内の浄土宗大長寺は、もと豊前中津にあったが同寺の僧団空長徹が朝鮮役に長政に随行した縁を以て、国替後福岡に移った寺である。同寺に伝わる元禄頃筆記の縁起「当寺伝記」のなかに、同僧の関ヶ原役前夜における情報活動にふれた左の記事がある。

此時御城下に団空長徹上人と言浄土之碩学有り 於朝鮮国書翰通辞のた

(6) 年月日不明 「追善」独吟百韻「憂世哉」

(17) 文禄4・7・22 「何舟」百韻「梅か枝や」紹巴発句 大鳥居信寛脇句

紹印十句目・6句

(6)の百韻は天理綿屋文庫蔵『正文文禄百韻集』に収められているが、張行年月日は不明である。紹巴発句「花見よと杣木に残す檣哉」の杣字はもとより木山に対する挨拶の修辭である。紹宅が杣入齋と称したことは、作品⑫に見えるが、あるいは紹巴のこの句によるのかもしれない。『陰徳太平記』（8ページ参照）や「馬場系図」は、この句を太閤による紹宅助命の座での作と伝えているが、紹巴・昌叱・心前・玄旨・禪高・文閑・玄仍など錚々たるメムバーが秀吉に随行していたとは考えられない。このあと紹宅上洛の節興行された本百韻に仮託した連歌咄であろう。『拾集昔語』・「肥後国誌」など、紹宅の連歌咄を多く伝える肥後の地方史料に、この咄の见えないことも、この咄が実話ではなく、後日の百韻に附会したものであるとの推定を強める。

書簡二通のうち、天正十八年三月廿七日付の紹宅宛紹巴書状は5ページに翻刻紹介する。今一通の天正十九年四月十九日付の紹宅書簡（厳島神社宮司野坂元定氏所蔵）のことは金子金治郎博士よりお教えいただいた。原本披見の機を得ないまま、同博士の御教示より内容を紹介するに次の通りである。包紙に「元及様参木山朝露齋紹宅」とあるが、書状と同時のものか否かは断定出来ない。要件としては、名宛人（元及）の所望に任せて「紹巴老にて相伝」の『三部抄』の写しを贈ることを述べ、彼書は殊の外秘事であるからみだりに口外しないようにとの、紹巴の紹宅に対する注意が追而書きに申し添えられている。「出船時分取紛大方候」との文句もあるから、元及なる人物——紹宅はかなり敬語の語法を用いているようである——のことが判れば、紹宅の伝記研究に強力な一事実を加える。

その他の作品(7)~(10)については、次章に譲る。

紹宅の晩年

木山城落城（天正13・閏8月）に先立つこと二年、天正十一、二年の交よりすでに遊士——亡命者といふべきか——の境遇にあったといふものの、紹宅が帰るべき故里を失ったのは、かの一揆の処置として肥後が加藤清正・小西行

長等に分封され、行長領に編入された木山城に城代（伊藤与左衛門）の置かれた天正十六年六月であろう。以後その歿年下限の慶長二年七月までの九年間、紹宅はその晩年をいかに送ったであろうか。天正末期のいつのころか、豊前中津の黒田家に身を寄せた紹宅は、如水のお伽衆となる、ただし、朝鮮役には従軍せず、中津に留守する如水の次子熊之助（長政の同母弟）の傳役を勤め、その傍かに渡韓して父兄の軍に投ぜんとするのに随行して、文禄二年（あるいは慶長二年）、玄海灘にて溺死したと、前稿「黒田如水の連歌」のなかで推定した。因に記せば、天正十五年七月豊前六郡十二万石に封ぜられた如水は、秀吉の猜疑を避けんがために、翌々十七年五月にはまだ四十五才の若さで封を長政に譲り、茶の湯の稽古をはじめ、また、彼晩年の連歌執心を見せはじめようとしていた。

いま改めて紹宅の晩年を考えると、右の推定は全く誤りとは言えぬものの、なお独断のおそれなしとしない。紹宅が如水のお伽衆を勤めたとか、幼君熊之助の傳役を勤めたとかいうことを証する資料は実はないのである。「紹宅は年齢の人なりし故に保護して従ひ参りける」（連歌屋記事）とあり、また「乃使木山惟久幹事」（熊之助碑文）とある記述、ならびに熊之助に従う者何れも同年十六才であり、一行の責任者らしい人物が紹宅以外に所伝なきこと、熊之助溺死の諸伝がすべて紹宅のことを伝えていることなどと考え合わせての推定である。小なりといえども一城の主であった紹宅の経歴が、単なる連歌師というよりも、近世初期お伽衆の一般的性格に適うこと、また「黒田故郷物語」に子供相手のお伽衆が所見することなどの類推も加わっている。

史料篇に収める「黒田年譜」の記事（資料田）には「遊客木山紹塚」「此般朝鮮遊覧の為の故に従行すといへり」とあり、後に引く「黒田家系譜略」も「連歌師紹塚」と記す（紹塚は昌塚にひかれての誤記）。少くとも公式的には、紹宅の身分は黒田家臣ではなかった。加うるに、紹宅・紹印のこの時期における宰府との結びつきが考えられる。紹印については明らかな証があり、紹宅もあるいは黒田家より宰府を本拠としていたかも知れない。歿年は慶長二年七月十六日説をとるべきか。これ等のことを以下に検討することにする。

如水との出会い 「連歌屋記事」に、天正十六年のいわゆる肥後一揆後、肥後国侍が各衰微離散したとき惟久は「かねて如水公長政公の懇遇を蒙りしかは

あるが、阿蘇殿より直参分の扱いを受けていた。『松永貞徳の研究続篇』にも紹介されている天正十八年十一月廿四日張行の「何人」百韻一卷は、この等与の興行と思われ、彼の晩年も紹宅と同一類型に属するかと思われる。ほかにも関係作品があるが、△作品(4)▽に『拾集昔語』の記事を引用するにとどめる。

(註) 本稿には、附考として「肥後連歌史概観」の一章をもうけ、宗祇と交渉深かった相良為統より加藤正方・宗因までを概観した地方連歌の流れに紹宅を位置づけるつもりであったが、紙数の関係で別稿に改めることとした。

甲斐宗連毒害 「馬場系図」は紹宅の隠居を、妻の祖父甲斐宗連の毒害と関連づけて説明している。この話は『拾集昔語』(元禄八年、渡辺玄察著)をはじめ多くの地方史料に誌されており、本稿の主人公紹宅がまさに戦国残酷物語の渦中人物であったことを伝えているので、その摘要を左に紹介する。

(註) 玄察は阿蘇氏の一族渡辺惟清入道玄察。寛永九年生、正徳四年歿。『拾集昔語』『拾集物語』『拾集記』『渡辺玄察日記』『渡辺先祖以来今事記』『早川故事』などが『肥後文献叢書』四に収められている。

紹宅の妻は御船城主甲斐民部大輔親直入道宗連の嫡子、同相模守親秀入道宗立の娘である。宗連は阿蘇殿の一老として肥後一国に重きをなしていた。心に叶わぬとて二男三男を討捨て(四男は危うく日向に逃れた)、嫡男宗立さえも嘗て肥前竜造寺隆信と誼を通じた廉で、誅せんとした非情の人物であるが、一方、天正九年響の原合戦にて薩摩の先鋒たる相良義陽を討取るなど、大友氏に通じて阿蘇氏の末期を守った柱石虎牙之宿将として、文武兼備を讃えられている。事実、宗連の死後僅か二年余にして、阿蘇氏は島津氏の征服するところとなった。阿蘇氏の家を滅した当事者の一人として、また、天正十六年佐々成政に対する肥後一揆の魁首として、宗立の方は後世余り芳しくない。

宗立の舅、黒仁田豊後守(紹宅妻の祖父)は、同じく阿蘇の部将矢部岩尾の城代であったが、阿蘇氏に逆心を見せたので、宗連は娘に之を討つことを諮ったところ、無法の仁を親と思わずとの言を得たので、黒仁田一家を御船の河狩遊びに招き、一人残さず謀殺した。このとき目水一滴落とさなかった彼女は、わが娘たる紹宅妻に、わが親の仇たる舅宗連の毒害を命ずる。「其方は自らのためには子 宗連の為に孫にて候 親は近く祖父は遠し 然上は入道公に致

毒害くれ候へ」(拾集昔語)と。木山城辺なる木崎の温泉に招かれた宗連は、孫女の持参した毒薬を喜んで服し、天正十一年七月五日、七十五才で落命する。かくて「温泉に毒有として人口をふさぐと言共此事風に聞え 甲斐宗立不平を抱く 仍て信連に政事を譲り 官位昇進の爲として潜行抖擻之身にやつし 上洛して宗立災をさく」(馬場系図)。

(註) 内閣文庫本「連歌百韻集」(統群書類従には目録のみ) 所収の天正4・8・19「分けゆかば」百韻を興行している「肥後国甲斐左京入道宗柳」は、この宗立と同一人物である。

紹宅と紹宅

紹宅との師弟関係を証する資料は、後に紹介するかずかずの連歌咄を別とすれば、左に掲げる作品年譜中に見るごとく、同座の百韻四巻、紹宅加点的百韻五巻五十韻一卷(うち四巻は紹宅点と推定)、紹宅宛紹宅書簡・元及宛紹宅書簡各一通が管見に入ったすべてである。

紹宅作品年譜(前掲(2)(3)(4)(5)省略)

- | | | | | |
|------|-----------|--------------------|----------|---------------|
| (6) | 年月日不明 | 「花見よと」百韻 | 紹宅発句 | 紹宅脇・8句 |
| (7) | 天正18・3・6 | 「何垣」百韻「遠山の」 | 紹宅発句 | 八句目・9句 |
| (8) | 天正18・3・8 | 「何路」百韻「九重の」 | 紹宅発句 | 七句目・9句 |
| (9) | 天正18・3・26 | 「心前追善」独吟百韻「ちる花は」 | 紹宅加點 | |
| | | 附・紹宅宛紹宅書簡 | 一通 | |
| (10) | 天正18・8吉日 | 中津城竣工祝賀「何路」 | 百韻一卷 | |
| | 天正19・4・18 | (元及宛) 紹宅書簡 | 一通 | |
| (11) | 天正19・12・ | 独吟百韻「萍を」 | 紹宅加點 | |
| (12) | 天正20 | 「天正廿年千句之内付句 袖入齋紹宅」 | 付句57句 | |
| (13) | 文禄2・6・4 | 「何人」百韻「撫子は」 | 覚全発句 玄旨脇 | 七句目・9句 |
| (14) | 年月日不明 | 「夢想」百韻「草をえて」 | 重綱脇句のみ | 寿三・紹宅両吟 紹宅加點カ |
| (15) | 年月日不明 | 「何人」五十韻「かけうつす」 | 寿三発句 | 寿三・紹宅両吟 紹宅加點カ |

肥後の地方史料では、信連（紹印）は落城の節自殺とあるのみで、宰府時代に言及した記事を見ない。『肥後見聞雜記』に、紹宅が筑前にて木山落城のことを聞き、「婦リテモ詮ナシト終ニ筑前ニ止ル其子孫数代ヲ経テ今天明ノ比木山六兵衛黒田家ノ臣下ニシテ二百石」とある黒田藩中の木山家は、△資料Ⅰの(2)△の木山平助拜知六百石、△同△Ⅱの木山六之助、△同△Ⅲの信連弟某などがこれに該当するが、宰府連歌屋との関係は未だ詳らかにしない。

木山城主として 紹宅・紹印の支配していた領地はどれくらいであったか。

わずかに、「馬場甚七郎寿英略系図之写」△資料Ⅳ△（以下「馬場系図」と略す）のうち信幸代に「益城郡之内六ヶ庄合五千余貢領ス」、「御舟軍談」（一名、甲斐宗運軍記）（肥後古記集覧）巻十七に「一肥前筑後押ニハ木山備後守惟久也七百余丁之城主也」とあり、また、假題（嘉永七年聞書）△資料Ⅴ△に「木山九百丁之領主」との現地の所伝が録されているのみである。いま『新撰事蹟通考』や『肥後国誌』により、木山郷のことを考えるに概略次の如くである。

益城郡には古く木山郷を含めて七郷五荘あるいは六郷六荘があった（腰尾郷が木山郷と改まったのは、菊池郡川原郷木山邑より移駐した木山氏の築城によるとの「馬場系図」の説は他に所説を見ない）。近世期に益城郡は十一（のち十）手永に再編制され、旧木山郷の領村十九のうち、赤井村など四村は鯨手永に、木山町村など十五村は沼山津（ぬやまづ）手永に編入された。なお、鯨・沼山津両手永は、古くは益城郡ではなく詫摩郡に属した。肥後六ヶ荘の地名はこの時代のもので、木山郷の古名である。

紹宅・紹印代の木山氏所領が木山郷全域に及ぶとの証はないが、いま『肥後国誌』に載せる各村の石高により、旧木山郷十九村の総石高を試算するに二万十八石を得る。土豪・国侍ではあるが、小名クラスと言えよう。

（註）手永とは、寛永十年に細川氏の設けた行政単位で、その官署を会所という。沼山津手永の会所は木山町村に置かれた。現在の上益城郡益城町の中心地木山である。熊本市辛島町より産交バスで約四十分。

木山城主時代の紹宅についての資料は、別項に紹介する「城主紹宅」の連歌咄二話（F）（G）および「馬場系図」の記事のほかは次の諸作品である（頭記は作品番号）。

- (2) 天正3・4・19 「播州医師宗琳興行」「山河」百韻、紹巴・昌叱等
- (3) 天年6戊寅 独吟百韻「淡雪に」（紹巴加点カ）
- (4) 天正8・正月日 「両吟千句」（白川千句）栗林主計入道等与と
- (5) 年月日不明 「於肥後御船山三吟連歌」百韻、惟久・等与・重信（紹巴加点カ）

また、右四点のほかに、紹宅作と伝えられる「赤井城之記」と題する一文があり（文政編の地方史料『肥後古記集覧』巻五収録、編者大石真磨は「右上益城上陳邑福田氏の蔵写之 実紹宅之手跡無疑」と註を附しているが、文意によって考えるに、紹印の作ではないかと思う。「廿あまりより心の外に住馴所」（第一段、「よ」をひとよにくれ竹の住馴ても夢なれや廿年計にめぐりきて四十余りも寛やらす」（第六・最終段）の句は二十余才のころまで住み馴れた故里を、二十年ぶりに訪れた者の記述たることを思わせる。木山城の落城は天正十三年閏八月、それより二十年後は慶長十年である。紹宅が息紹印に譲って抖擻行脚に出たのは落城二年前としても、彼の歿年（慶長二年）と矛盾する。紹印が慶長の半ばごろ故里木山を訪れての懐旧の作と考えたい。何れにせよ赤井城の自然を写しているので、作品抄の冒頭に(1)として収める。

（註）『熊本県史料』中世篇（三）（弥富文書）中に「木山惟昌母追善和歌」として収められている「南無阿弥陀仏」を頭字とする六首には「妙空追膳天正十年三月日木山備後守」とあり、紹宅あるいは紹印の作と思われるが、原本未調査である。一首目に惟生とあるを信連の別名とすれば、紹宅妻の唯一つの史料となる。

(2)は紹宅作品の初見である。大阪天満宮蔵「連歌十二巻」には、天正三年五月に興行された紹巴・昌叱・心前等と肥後衆・薩摩衆との百韻四巻が記録されている。すなわち、

・天正3・5・7 「肥後国加悦式部少輔入道素丹興行」「何人」
・天正3・5・9 「肥後国住北大炊助行豊興行」「朝何」

などであるが、(2)の百韻の背後には、肥後衆とともに上洛するなどの事情があったのかもしれない（『家久君上京日記』には紹宅所見せず）。

右の素丹を、後に加藤清正に信用された桜井素丹の前身とするとき、彼もまた紹宅と同じく土豪・国侍より連歌師へ転身した類型に属する。

(4)、(5)の栗林主計入道等とは、木山に隣する御船城々主甲斐宗運の侍大將で

木山紹宅伝稿

——太宰府天満宮連歌屋考(上)——

棚町知弥

A Life of Kiyama Shotaku

— A Study on "Renga-ya" of the Dazaifu (Temnangu) Shrine Part 1 —

by Tomoya Tanamachi

はじめに

連歌師かさもなくば談義僧「たゞ両道に定め上落し」と、「戴恩記」は紹宅の連歌師を志した動機をきわめてジュリアンソレル的なものに解釈している。秀吉による天下統一の新体制を迎え、肥後の一地方小名(土豪・国侍)より連歌師へ転身を余儀なくされた木山紹宅・紹印父子の場合は、せいぜい下世話にいう「芸は身を助く」を地で行ったものにすぎないが、そこには近世初期地方連歌の一側面を物語る「類型」として興味をひかれるものがあった。

慶長五年の末、筑前に入国した黒田如水は、太宰府天満宮に連歌屋を再興し木山紹印をその初代屋主とした。紹印は肥後国益城郡木山城の最後の城主木山備後守左近太夫信連。紹宅はその父、従五位下木山左近太夫惟久、『醒睡笑』(広本)に「九州に木山とて連歌の上手あり」との一語をとどめている。肥後の地方史料のうちに、紹宅にまつわる連歌咄を数多く見出したことも、彼の伝への興を深めた。古歌一首に名を連ねた帆柱の漂着によって伝えられる紹宅の最後も一つの連歌咄である。

以下、木山城主時代／紹宅と紹宅(紹宅作品年譜)／紹宅の晩年／紹宅についての連歌咄、の四章に分けて紹宅の伝を考え、別に、史料篇および作品抄を附す。マイクロポエットであるだけに、紹宅についての未見の資料・作品も多いと思われるので、大方の御示教に与れば幸せである。

木山城主時代

紹宅の出自 史料篇に収めた諸資料ならびに『肥後国誌』など地方史料の記述によれば、紹宅の出自は大略次のようである。

清和源氏新田氏流、太田九郎太夫頼綱の子為綱は延文年間征西將軍懷良親王に従って九州に下り、菊池家に頼み、菊池郡木山邑に居住してより木山殿と称された。信綱・信景・信実を経て信幸代の嘉吉年間、菊池家衰微により阿蘇大宮司に属し、益城郡腰尾郷に居城し、腰尾郷を木山郷と改めた。『肥後国誌』は、信幸・信興を経て惟興の代に阿蘇氏に属したとする。信興が阿蘇氏の偏諱を受けて惟興と改めたのではないかと考えられるがその証はない。

文明十三年八月日、隈府における一日一万句連歌に、初千句第十「薄何」百韻、月蘭題の発句を残す木山三河守惟之は別家であろう。その他、阿蘇文書などには、別家と思われる木山氏の名を見る。

惟興の子、左近太夫備後守惟正(惟昌トモ)、その弟右馬頭惟貞の代の天文十六年(一説五年)、居城を木山の南なる赤井に移した。惟貞の子太郎惟久が左近太夫従五位下入道紹宅、その子で最後の木山城主備後守信連が紹印、天正十三年閏八月落城、のちに宰府連歌屋の初代屋主となる。なお、惟昌弟の小子月丸は僧月航(他書には月耽)、また、天草で清正と一騎討したという木山弾正は、紹宅の叔父か従兄弟にあたる。

有明工業高等専門学校紀要
第2号(1967年)

昭和42年3月15日 印刷

昭和42年3月20日 発行

編集 有明工業高等専門学校紀要委員会

発行 有明工業高等専門学校

大牟田市東萩尾町150

電話 大牟田 ㊟ 1011

印刷 西田印刷所

大牟田市小浜町25

電話 大牟田 ㊟ 3433・2090

CONTENTS

Some Problems of Practising Home Room in Technical College Curriculum Masaaki Teramoto.....	1
New Unit "AVON" instead of Troublesome "MOLE" Hiroshige Higuchi and Hideto Sasaki.....	9
Lattice Vibration of Two-Dimensional Triangle Lattice 1. Tatsuro Nagata.....	16
A Program of the Electronic Digital Computer for Selecting Change Gears Gozo Kimura.....	21
Boundary Layer between Matrix and Attachment of Soft-Iron by Electrical Welding Tatsuro Nagata.....	25
The Real Meaning of <i>The Pearl</i> Ryujoh Iseri.....	29
Erskine Caldwell as a Humanist..... .. Seiya Nishi.....	43
Adaptation of Data: A Collection of Haikai "Anraku no Koe" Michio Tanaka.....	86
A Life of Kiyama Shotaku — A Study on "Renga-ya" of the Dazaifu (Temnangu) Shrine Part 1 — Tomoya Tanamachi.....	112